

逆艦逐駆

レイプ合戦2

再犯



DOJIN
R18
成人向け

▲18歳未満の
閲覧は禁止です

レイプ被害報告書目録 2 冊目

イラスト・漫画

表紙. にくしよ

P4. wa (イラスト)

P5. 月猫 (イラスト)

P6. クールナイツ (イラスト)

P7.maktak (イラスト)

P8. ゆのか雅愁 (イラスト)

P9. ししゃもじろう (イラスト)

P10. 木ノ下ツユキ (イラスト)

P11. ラリアット (イラスト)

P12. つかさすすむ (イラスト)

P13. 安田かつのり (イラスト)

P14. 瑠璃ららこ (漫画)

P18. 丑 (イラスト)

P19. しなま (漫画)

P25. リリスラウダ (漫画)

P29. めんていやくな (イラスト)

P30. 浜原義雄 (漫画)

P32. ゆのか雅愁 (イラスト)

P33. 月猫 (漫画)

P37. イエクオ (漫画)

P41. ヒダカメダカH型 (漫画)

P49. 零狸 (漫画)

P54. ラリアット (漫画)

P60. まゆら。(イラスト)

P61. しゅま (漫画)

P65. とわみん (漫画)

P68. 白海山 (イラスト)

P69. つかさすすむ (漫画)

P73. まてつ (漫画)

P77. 安田かつのり (漫画)

P81. ししゃもじろう (漫画)

P85. 一条和城 (漫画)

P89. ておどーる (漫画)

容疑者:天津風, 夕立改二, 荒潮

容疑者:夕立改二

容疑者:春風

容疑者:夕立改二

容疑者:深雪

容疑者:叢雲

容疑者:Z3 (マックス・シュルツ)

容疑者:磯風

容疑者:吹雪, 叢雲

容疑者:黒潮

容疑者:神風, 春風

容疑者:春雨

容疑者:子曰

容疑者:初春

容疑者:響

容疑者:雪風, 時津風

容疑者:霞

容疑者:Верный

容疑者:春風, 朝風

容疑者:曙

容疑者:島風

容疑者:萩風

容疑者:吹雪, 叢雲

容疑者:白露, 夕立, 時雨, 村雨

容疑者:天津風

容疑者:吹雪

容疑者:黒潮

容疑者:霞

容疑者:第11 駆逐隊 (吹雪・白雪・初雪・深雪)

容疑者:神風, 春風

容疑者:Z3 (マックス・シュルツ)

容疑者:大潮

容疑者:響

小説

P100. シミヤ

P110. 烏丸蒼一 挿絵:まてつ

P120. 初瀬川みそら 挿絵:結城私心

P131. 灰鉄蝸 挿絵:ラリアット

P141. 伊川清三

P152. ターレットファイター 挿絵:浜原義雄

P156. 白金桜花 挿絵:瑠璃ららこ

P170. かさぎ修羅

P180. 大渡鴉 挿絵:白海山

P204. いくた☆なお 挿絵:まゆら。

P209. 小薮譲治/MIB 挿絵:ヒダカメダカH型

P218. ちょこらーた 挿絵:ヒダカメダカH型

P228. 奇くらげ 挿絵:ししゃもじろう

P238. 辰田信彦

P248. 高坂流 挿絵:結城私心

容疑者:朝潮

容疑者:綾波

容疑者:夕雲

容疑者:初月

容疑者:神風

容疑者:五月雨

容疑者:陽炎

容疑者:夕雲 朝霜 清霜 沖波 藤波

容疑者:初春(その他多数)

容疑者:Z3+Z1(+ 島風くん)

容疑者:睦月, 如月

容疑者:神風, ???

容疑者:松風

容疑者:荒潮

容疑者:皐月

巻末まんが

P255. 結城私心 (漫画)

容疑者: ???

P259. あとがき







そうやって
夕立の事をいつも
子供扱いする
提督さんが悪いっぽい！

夕立、これは
マズイんだって！
憲兵さんが……ウツ



提督は深雪の肉臙装になりました

かんぱいー



叢雲のぐら寝羊
ゆのか班







スパッツ直穿きの股間を
顔に押し付けられて
チ○コをこない大きくなるなんて
提督はんホンマ変態やなあゝ





司令官!
洗いっこ洗いっこ
ハメっこハメっこです!

楽しいお風呂
しちゃいましょうね♡

司令官の
お風呂タイムに
つい乱入しちゃいました♡



司令官、春雨の家族になつてくれるんですよね？
だから春雨、今から司令官のはじめて、
奪っちゃいます♡

春雨の家族になれて、嬉しいですよね？
記念写真も撮ってますよ♡ はいピース♡

ニヤ♡

ニヤ♡

にち♡

にち♡

にち♡



司令官♡ 司令官♡
駆逐艦に大切な童貞を奪われちゃって♡
ねえ、今どんな気持ちですか♡
これで♡ 司令官さんは♡
今日から春雨の家族ですね♡



司令官の子種、たっぷりもらっちゃいました♡
司令官も、パバになっちゃいましたね♡
まだまだ確実性に欠けますね、司令官♡
もつともつと春雨に子種をくださいね♡



きょうは
何の日？

子供がママに
なる日だよ♡





うむ！
予想通りのサイズと
長さじゃの！

こら…初春…
よしなさい！

んふふふ…
こんなにチ○ポを
硬くしては
いくら制止しても
説得力皆無と
いうもの

ザクザク

ザクザク

巨砲慣熟作戦

しなま



これならば
わらわの貫通式の
苦痛も

おとなしく
わらわの処女を
食らうがよいわ

なに
他の艦娘には
見られぬよう
配慮してある

その点は安心
するがよいぞ

最小限で済もう
というものじゃ

ズンズン

ズンズン

ズンズン
ズンズン
ズンズン



なにせ
駆逐艦である
わらわでは
戦艦の姉様方の
巨砲の受け入れは
大変でう

まずは一般サイズ
である貴様のチ○ポで
慣らし運転をせねば
とても持たぬ



さ…
おとなしく
開通と拡張の
手伝いをせい

ましてや
未通女では
命の危険すら
あろうという
もの



その目で
しかと確かめよ

初春…

ふふふ…
真正正銘の
処女である



わらわの…
純潔の証…

見えるかの…?

16mb



こ…これが…
愛することの…
痛み…か…

ああっ…

覚悟しておっても…
かように…ううっ…



今…

あ…



捧げ…

う…あ…



初春…
おまえ…は…

バカ者…
愛なくして…
このような
行為に及ぶ
ものか

半分は…ただの…
建前じゃ

そのぐらい
察せい



あ…あ…

ああ：
処女膜が：
削り取られて
いっておる：

ああっ…

嬉しい…ぞ…
初春の膣内は
心地よいか…

ならば…
それでよい…





精液とは...
こんなにも
濃厚で...

ふふ... 凄いや量じゃな...

ぬちー！

ああ...
脳が痺れるような...

美味じゃ...の...



ていうか
初春長すぎる
っほいっほい！

じゃー次は
夕立の出版
っほい

ムチッ

駆逐艦貫通式
演習場はここね！



さっ...

あまりわらわばかり楽しんでおっては...

後がつかえておるでな

失礼しまーっす

ぬち



ああ♡
処女喪失してる
っほい!

お腹の中…
いっぱい…た…

ひゃあんっ♡



ああ…♡
提督さんの…
いっぱい出てる…

…っほこっ♡



ちょ…
お前らいったい
何人で…

えーと
あと子日と
村雨と



駆逐艦吹雪
入りますッ

演習よろしく
お願いしますっ♡
提督っ♡

…かん…
司令官…

響…
なんでここに

ん…?

よく寝た
みたいだね。

ガチン…

う…?!
何だこれは…
腕の自由が…

乱暴ですまないね
司令官。

こうでもしないと
逃げられると思ってね

ちよ…
ちよつと響
一体何をやる気
なんだ…!!

流石に自分の
駆逐艦に
手を出すなんて
ことは…!!

ふむ…

しかし…

こっちの方は
とっても期待して
るみたいだが？

あっ……

それじゃ司令官…
覚悟してもらおうか

くうっ?!

ひっ響：
小さなお前が
なぜそんなテクを：

随分鈍いんだね
司令官
私だけが得意という
わけではないさ。

えっ？

みんな色々
溜まってるのさ。

ちほひ

司令官としてみたくて
毎日のように
特訓してるんだよ

そんな…!!

だ…駄目だ
絞り出される…!!

ほら、私の
ロマンユに
精液を出すん

かほ

かほ



×○○○○(ハラショー)
気持ちよくなって
くれたんだね、司令官。



さあ、続けよう
私も我慢
できそうにない…

それに……
早くしないと後が
つかえているんでね♡



……でも
これで満足は
してないね？
司令官……

スルッ



おお：
いい反応

どうしたんですか
霞さ——ッ!?

あ、そっか

あれ！…
元気ない…

描：浜原義女佳



司令官のおちんちんは
響だけのモノなんだから
他の娘達に入れちゃ駄目だよ。

響の赤ちゃんの部屋とおしりの中に
司令官のおちんちんの子種汁をたっぷり出さなきゃ。
今日は響のお腹が壊れちゃうまでがんばってね。



ふふ…
司令官様

たくさん
お射精に
なられましたね

でもまだ
こんな…

素敵です…



司令官様…??

春風君…

なにか仰りたい
のですか?

なぜこんなことを…



こんなことをして…

朝風君が知ったら
どう思うか…

ふふ…
心配には
及びません



っな!?

朝風君…っ



朝風さんも
ちゃんとここに
おりますので

一人だけ反対して
いましたが

やはり司令官様と
朝風さんはそういう…



いけません…
司令官たるもの

皆を平等に
愛して
頂かなくては



ただ…私達も
鬼ではありません
初めてのお相手は
朝風さんに…

ややめっ
グ
グ
グ

やめてくれえっ!!



はい朝風さん
司令官様との
初めて…

おめでと〜うござります



…?
朝風さん?

あらあら…



ほらっこう動いて
差し上げなければ

司令官様に
気持ちよくなつて
いただけませんよ

ほら

ほおら



羨ましい妹…

朝風さんとの
身体の相性が
良いのでしょうか

司令官様…
もうお射精しに？

…あら



さあ司令官様

次は私達も
愛シテクダサイマセ…



終

おいっ 曙!

いい加減、離れ…

ム
うあっ

全部クソ提督が悪い

描いたの：イェクオ

なんて声上げてるのよこのクソ提督

曙、もう悪ぶらなはやめ…

はっ何を今さら

なんだかんだ言いながら

反応しちゃってるじゃない?

この…変態…ッ

ム
うあっ







…クソ提督！

クソ…

あーあー

クソクソ

ドドドド
ドドドド
ドドドド
ドドドド
あーあー



…うるさい
クソ提督



…なあ暗

なんでこんな事
したんだ？



あ♡

あ♡

しれがん♡

ふあ♡

ぐ……
吹雪!
もう出そうだ!

あ♡

わたし…わたしも
イクら♡
イッちゃいます♡

フユ

パフ

パフ

パフ

あ♡

はが

出る♡

はあ♡
司令官の精子
溢れてる♡

あ♡

駆逐艦と……
吹雪と関係を
持つて(持たされて)
しまつてから半年……

提督！
どういふこと
ですか！
吹雪とせつくす
してただなんて……

島風に
見られた

いつから……
いつから
なんです……？

工回きこと、 島風の如しです！

ヒダカメダカH型

すまん……
もう半年になる……

そんなに
前から……

初めは吹雪が
私を襲ったことが
きっかけと言え
吹雪との情事に
溺れたのは私自身だ……
言い訳のしようもない……

あの無邪気な島風から
軽蔑の視線を
向けられるようなことを
私はしてしまつたのだ……

……
提督

吹雪とは
あなるせつくす
とかも
したんですか？

い……いや……
そういう行為は
してないが……



今は従うしかない…
見てろよ！
すぐにヒイヒイ
言わせてやる！

提督♡
お口でするの
うまーい♡

ひゃっ♡
ポッポッ
ポッポッ

でも
島風は
負けません
よ♡

ああー！！

らめえ〜！
もっ出るー出るー！

おひーそ…
そんなら…激し…
おおおお♡

ポッポッ
ポッポッ
ポッポッ
ポッポッ
あ〜♡



あああ
あああ



そんらの……
はんそく……

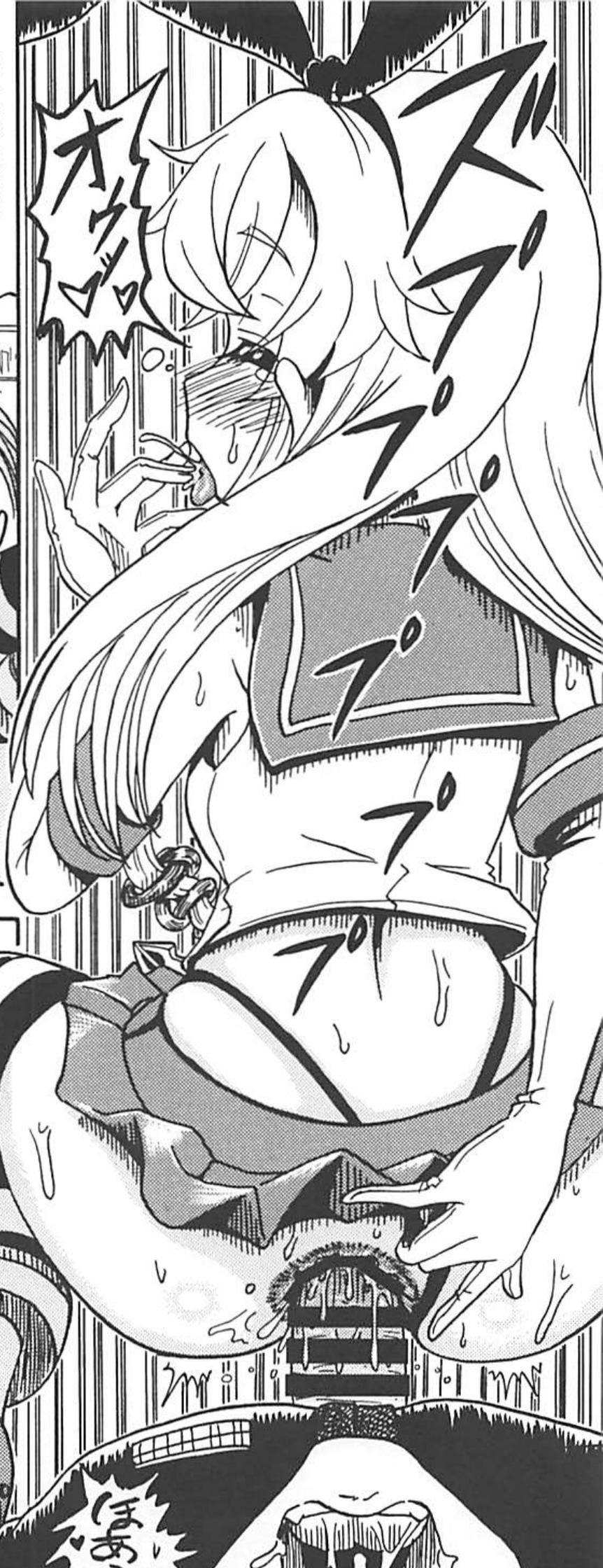
もう提督！
お口でするの
おっそーい！

提督のどーてーは
島風が一番早く
もらうはずだったのに
私より遅い艦に
あげちゃうなんて……

島風はまだ
ぜーんぜん
気持ちよく
なつてませんよ？

はあ
はあ
でも吹雪には
負けませんよ♡
あなるどーてーは
予定通り島風が一番に
もらいますからね♡

やめ……
やめ……



にひひ♡本当に
提督のオチンチン
島風のあるるに
入っちゃったあ♡



すっごーい♡
気持ちいいい♡
腰動いちゃう♡



ていど♡
提督も島風の
駆逐艦あなる
気持ちいい？

ね？
気持ちいいよね？

も…
も…
も…
も…
も…
も…
も…
も…
も…
も…

もっそもっと
速くして欲しいの？
よおし♡

ち…違…
もっそもっと
ゆっく…り
ああああ♡

これ以上
速くなつて
どうなつても
知らないから♡

過負荷全力うっ！
おおおおおお♡
♡♡♡♡♡♡♡♡



おあ♡♡
くっ♡♡♡
ブッポッ♡
ブッポッ♡
おほおほおほ♡
ブッポッ♡

お♡♡
ブッポッ♡
おほ♡♡

てーとく♡
好き♡
好き♡
好き♡

早く
出して♡



せーしっ♡早く♡
早く♡早く♡♡♡

しまかせえ…！
ダメだ…もう…♡
もう出ちやう…♡
いひい…♡

てーとくのせーしっ♡
あなるの奥に
早く欲しい♡





はあ...はあ...♡
提督...鳥風のある
吹雪より良かった？

私が一番？
やつぱり？

そうよね！
私には誰も
追いつけないもの♡

あぁ



吹雪ばかりか
鳥風とまで...
絶望を感じてるはずが
私の巨砲はますます
硬度を上げるばかりだった
...私は提督失格だ...

おわり

萩風へセックスが 健康的だと安易に 教えた結果...

…っ
また…出…

ん…
もっ…
たい…
ない…
です…
♡

萩風…っ！

あら、コレが
健康にいいって

教えてくださったのは
提督じゃないですか♡

そ…そろそろ
一休み
させてくれ…

零狸

まだまだお付き合
いただかないと♡





提督の
おちんぼ…♡

それでは…♡



いただきま…

…あ♡
は…あ♡♡♡

ずんずん
ぱんぱん



提督♡

萩風のおまんこ
いかがですか？

私♡
こんなに
なっちゃって♡

提督♡
感謝してます♡

お互い気持ちよくなって♡
健康になれるなんて♡
ステキですよ♡



ね♡
ですからね♡
健康おちんぼみる♡

早く♡
早く♡
出して♡
ください♡



~~~~~♡

あ♡  
あ♡  
あ♡  
あ♡

ぶるるる♡

もっともっと♡  
ずーっと♡  
射精し続けて♡  
くださいね♡



は…あ♡  
心も体も♡  
満たされます…♡

…心と体に♡  
ストレスを…♡  
貯めない♡  
ためにも♡

ぶるるる♡

♡♡♡♡♡

あっ♡んっ♡  
あ、は♡提督う♡  
いつもいっばい射精してくださって  
ありがとうございます♡  
おなかも♡  
こんなに大きくなるくらい♡

おんっ

ズグ

でも赤ちゃんができるってことはあ♡  
健康な証拠ですよね♡  
出撃はしばらく出来なく♡  
なっちゃいましたけど♡  
赤ちゃんにいっばい♡  
栄養が行くように♡  
いままでよりたっくさん♡  
射精してくださいね♡

おん

おん

おん

おん



失敗？

突然ですけど  
司令官があまりに  
生意気なので  
いちめちやいます

悪く思わないでよ  
元はといえ  
ばアンタが  
スパルタ  
なのが  
悪いんだ  
から

クソザヨ供め  
オレの作戦  
ちやんと守



クソザヨ少年デ  
ト十三  
ふたなり  
逆アナル  
の刑

本当に突然だな！  
お前から俺に何か  
飲ませやがったな！



てか二人とも  
なんてモノ  
つけてんだよ！

普通ありえねえ  
だろうが！

：私の顔に  
なにかついてる？

なにもついてないわ  
いつもの丸顔  
まんじゅうノンキ  
フェイスがあるだけよ

お前らの股間に  
ぶら下がってるモノの  
こと言ってるんだよ！  
お前らの目は  
節穴か！



オラシ

なあんだ  
そっちですか



そっちしか  
ないだろがッ!

他人の節穴より  
自分の尻穴の  
心配したら?

よしよし

おいやめろ!  
何する気だ!  
触るなバカ!

えへへ  
じつとして  
くださいね〜♪

パカッ

うああ!

おやめろ

やめ...う...!!  
はあああ...!!

おやめろ

叢雲ちゃん  
それじゃ  
始めようか

よしっ



あはっ  
お口とお尻犯されて  
ちんちんますます  
カタくなつてますよお  
司令官？

ホラ  
ホラ

普段私たちに  
散々威張りちらして  
クセに両穴犯されて  
ピンピンなんて…

アンタとんだ  
変態じゃないの？

たんたん  
たんたん

それにいつちよ前に  
乳首まで勃たせて！

ドM！  
司令官はドM  
なんですわ♥

そんなドMガキには  
私たちの精子  
たっぷりくれてやるわ！



私たちが犯す度に  
ちんちんから我慢汁が  
あふれてますよ??  
イキたいですか??

ただじゃイカセ  
ないわよ  
もつと変態的に  
イカせてあげるわ♡

Yama  
Kishin



両穴犯されてちんちん  
 おっ勃てるドMを  
 変態と言わずしてなんて  
 言うってのよ♡  
 アンタの変態性を開化させて  
 やるから感謝なさいよ!

司令官のおちんちん  
 私たちのおちんちんと  
 触れ合って喜んでますよ♡  
 司令官はおちんちん好きな  
 変態さんなんです♡



その後は三人で  
ズッココンバツコン  
し続けたけど  
それはまた別のお話

尻穴犯されつつ  
童貞卒業はどう？  
お尻とちんちん  
喜んでるんでしょ？

や、やかま  
しい！

口では文句  
でも下半身は  
正直ですよ





ば

何を言っているんだ  
貴様は

突然だけど、  
私とえっちしないと  
この部屋から出られません♡

# 天津風と笑ってはイケない8時間

作：しゅま

そ・れ・よ・り……♡

えー？  
連装砲君に任せてるに  
決まってるじゃない

れろが……

びっ

そもそも  
休息时间ではあるが…  
警戒はどうした

私と良いことしましょ？  
抵抗してもいいけど、  
ここは海上だし…ね？

わかつてる  
……最近慣れて来た事に  
嫌気が刺すな

陽炎型駆逐艦  
「天津風」

ゴウん

あら往生際の良い…  
タ立とか伊19の事は良いの？

ゴウん

ゆさ

ゆさ

あいつら喋ったの!?

うん……  
わりとあっさり





赤城「お母さん、お父さん、お母さん」



今ならまだ引き返せる  
やめろ吹雪  
こんな事はもう  
やめてくれ！

んんっ♡もう♡  
司令官が  
いけないんですよ？



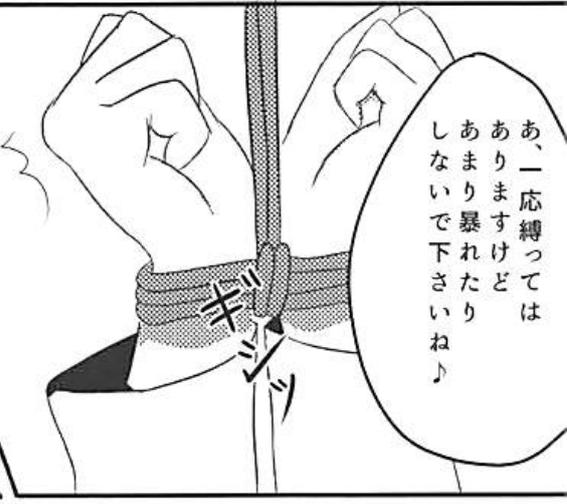
赤城先輩なんかと  
ケツコンして...



私がどんなに  
司令官を愛してるかも  
知らないで



私達艦娘が  
ちよつと力を入れたら  
単なる人間の  
首なんて豆腐みたいに  
潰せちゃうのは  
ご存知ですよね？♡



あ、一応縛っては  
ありますけど  
あまり暴れたり  
しないで下さいね♪



とは言え  
全然勃起  
してくれないのは  
セックス出来なくて困りますので  
司令官の大好きな  
ソックスでおちんちん  
しごいてあげますね



あはっ♡  
やっぱり一瞬でガチガチに  
勃起しちゃいましたね?♡

司令官が足フェチなの  
気づいてましたよ?♡  
いつも私達の足ばっかり  
見てましたもんね?

勃起したということとは  
合意したということでは?

うおおっ!

頂いちゃいますね♡

だ、ダメだっ

ヌキ♡

ヌキ♡

んああああっ!♡

ガク

ガク

ガク

ふるふる

ニク  
フ  
ニク  
ツ



もう出ちゃうんですね？  
タママがキユ〜と  
上がって来てますよ？

よっほど  
私の中が気持ち  
良いんですね？

あ、私  
今日はとっても  
危ない日ですので  
確実に妊娠  
出来ちゃいますからね

う、うおおおッ！

司令官の赤ちゃん汁  
お腹の中に入れて来てるううっ！

で、出ちゃってます！

これですと  
一緒にいてくれますよね？

ビュルルッ

グッ  
グッ

びんびん

びん

びんびん

キターッ  
キターッ

キターッ

あかんなあ  
スパッツに挟まれてるだけなのに  
こない興奮して…





鬼の様な形相で  
私を無理矢理裸にし



その日の提督は

ちよつと!!

何なのよ!

いつもとは違う様子でした



えづくのもお構いなしに

喉奥まで男根を  
押し込んだり

うぐうつ!!



そして最後には

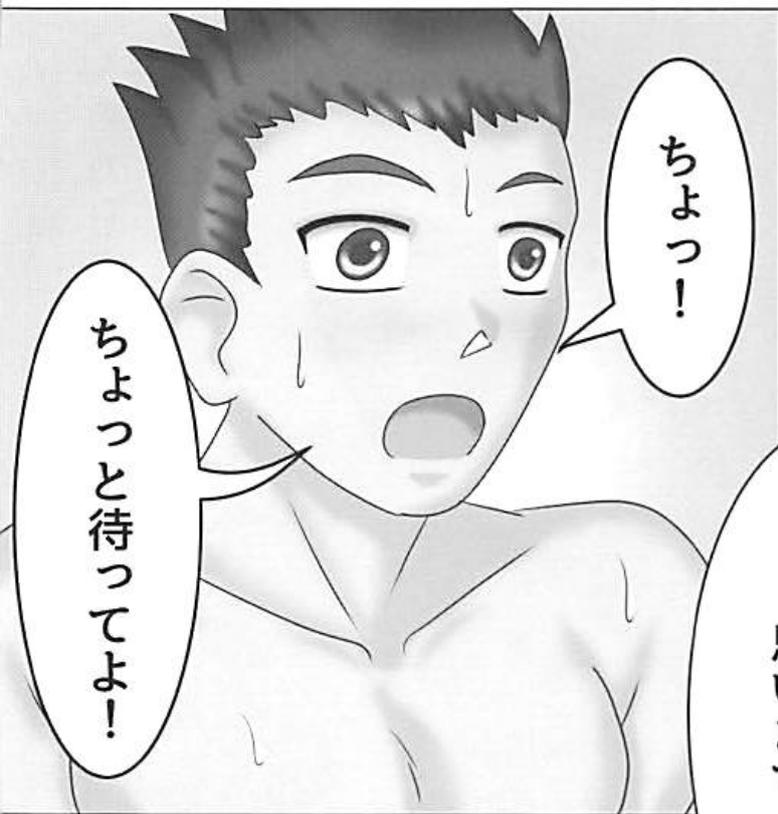
ひぎいいいっ!!

力任せにアナルに挿入

何度も何度も

いやあああつ!!

私のお尻を  
犯したのです



ちよっ!

ちよっと待ってよ!

今夜は私が  
提督を犯したいと  
思いますー(棒)

——という訳でー



何ですかー提督ー

ちよっとこの展開  
おかしくない!?

リベンジ!!  
KASUMI  
ちゃん!

**霞**



さ、さあ〜?

それに霞も  
最後は気持ち良  
くなってたじゃん?

何の事かしら?



私が散々受けた屈辱

こうして晴らそうと  
する事に何か問題でも?

大ありだよ!  
そもそもレイプなんて  
してないし!



けど霞さん

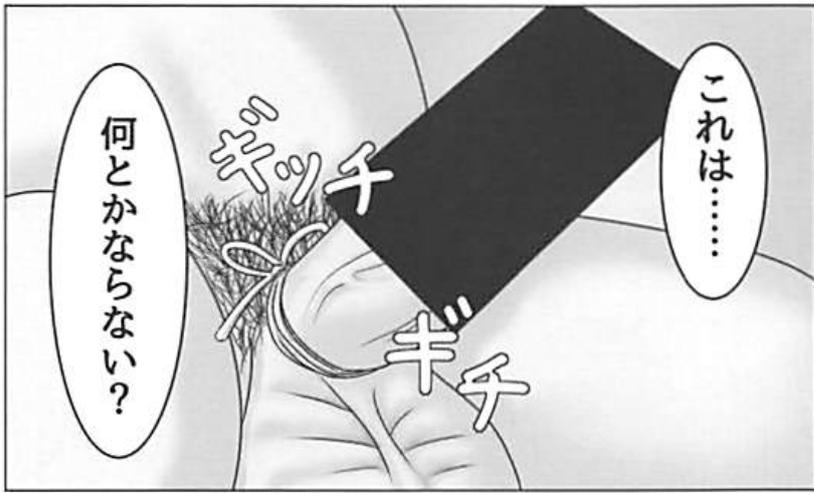
わ  
わかった



とにかく  
今夜の提督は

私の好きな様に  
させてもらうから

フアサ



何とかならない？

これは……



何言ってるの

好きに出されたら  
おしおきにならないじゃない



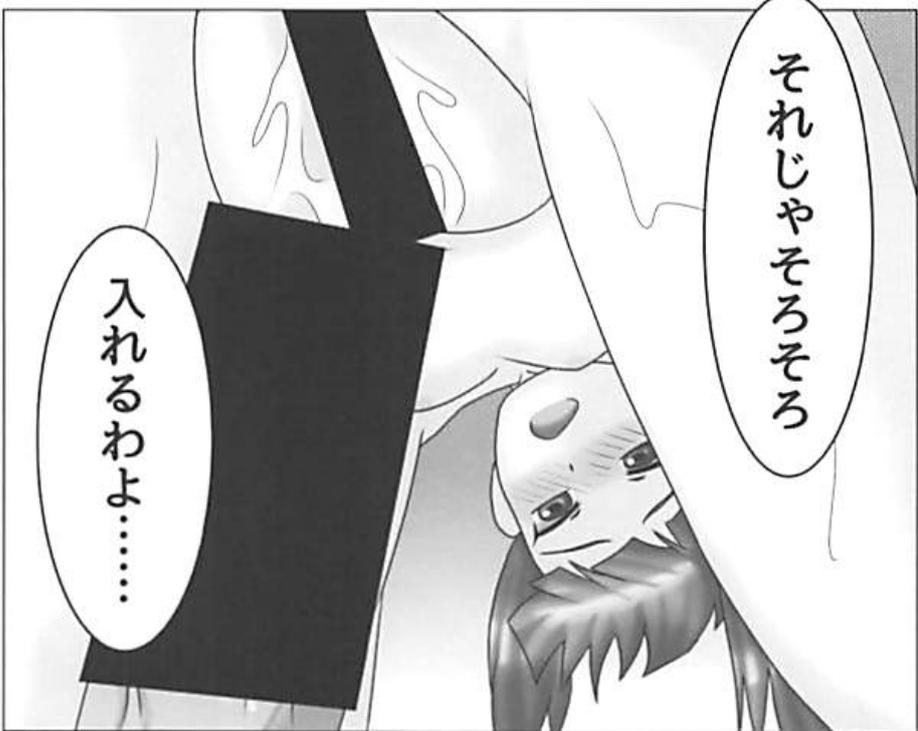
気持ちいいのに  
イケないのが辛い……っ

ぐっ……



あつ……

いつもより固い……



それじゃそろそろ

入れるわよ……



……って

気持ちよかったら

おしおきに  
ならないじゃない



ああっ！イイト！

勝手に腰が  
動いちやうっ!!



……あつ(汗)

※射精が出来ない  
状態でのSEXは  
危険なので  
真似しない様に

●強制たねちゆけふたなりちんぽFUBUKIちゃん

描いた人：まてつ

改装の手違いでおちんちんが  
生えてしまいました…

それ以来第十一駆逐隊のみんなに  
性欲解消のおもちやにされてます

おんなのこなのにはつきばきに  
勃起したふたなりおちんちん…  
はずかしいよお…♡

ふたなり  
ちんぽ♡

ちんぽ♡  
ちんぽ♡

ちんぽ♡

ちんぽ♡

ちんぽ♡  
ちんぽ♡

ちんぽ♡

ちんぽ♡



射精してごよ♡

あかん♡

せえし射精ちやう♡

おんなのこなのにい♡

あかちやん  
デキちやう  
よお♡

あかちやん♡

すきすき♡

わたしと  
ふぶきはの  
あかちやん♡



ふぶきちやん♡

んむっ♡

だめだよお…♡

ふぶきちやん♡

むっ♡

ちゅう♡

ちゅうしよ♡

ほほ♡

ほほ♡

白雪ちゃんは私の赤ちゃんが  
欲しいみたいでいつも  
むりやり中出しさせられます

キスで気持ちよくなるとすぐイっちゃうから  
固く閉じてる私の唇を舌で無理やり  
こじあけてべるちゅうしてくるんです♡



白雪ちゃんが美人のお顔をゆがめ  
鼻息を荒くしながら興奮しぬるぬる  
おまんこで激しくこすこすされると  
ほんとはダメなのに、  
思わず中でイってしまうんです…♡



あかん♡

あかん♡

あかん♡

あかん♡

あかん♡

あかん♡



ふぶきっ♡  
キスすぎだもん♡

すぎっ♡

すぎっ♡

すぎっ♡

あー♡  
あー♡  
あー♡  
あー♡

そのあともたつぷり  
深雪ちゃんと初雪ちゃんに  
強制中出しさせられました…



きもちい？

ふぶきっ♡

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

あー♡

妊娠させちゃうよお…♡



あー♡  
あー♡  
あー♡

女の子なの…♡  
中〇生なの…♡

あっ♡ああっ♡

赤ちゃんデキちゃう♡



射精ちゃう♡

だいしゅきホールド  
ほいでよお♡

初雪ちゃん♡  
やばっ♡

だめっ♡

抜いちゃうだ♡



びゅっ♡  
びゅっ♡

びゅー♡

たねつけせつくす  
きもちいい…♡

数か月後…

もののみごと  
全員妊娠させて  
しまいました…♡

開き直ってぼて腹えっち  
しまくっちゃいます♡

ぼて腹♡



司令官の  
お風呂タイムに  
つい乱入しちゃいました♡

司令官！  
洗いっこ洗いっこ  
ハメっこハメっこです！

楽しいお風呂  
しちゃいましょうね♡

司令官♡  
逃げちゃ  
だめですよ？

ちんちんを  
こちゃつて…  
挿入ちやつて♡

お尻も勝手に  
動かして司令官犯し  
ちやつてるううううう！…♡

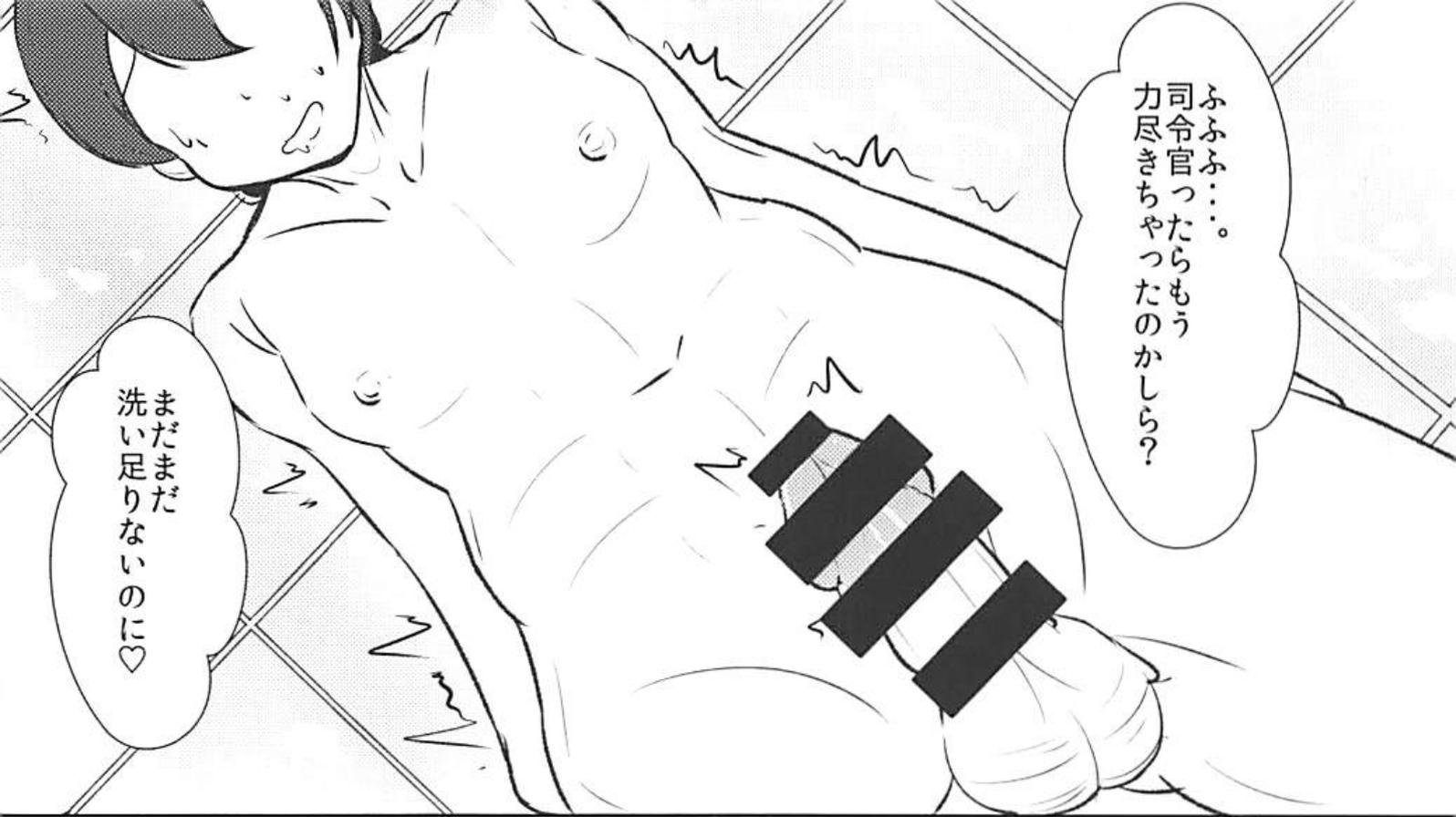
あつひやあああああ！  
司令官ちんぽ  
犯し洗いしちやつてます  
うううううううう！



いっばああい  
司令官印の  
石けん出して  
てください♡

司令官♡  
腔内もあらいつこ  
しましようにね♡





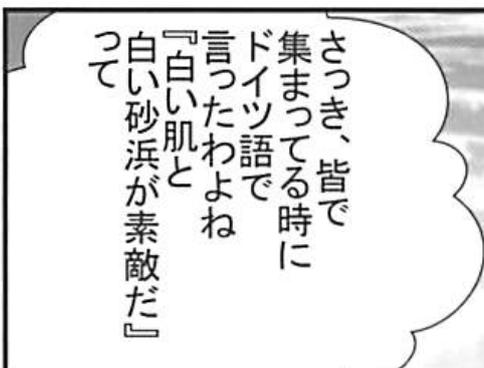
ふふふ…。  
司令官ったらもう  
力尽きちゃったのかしら？

まだまだ  
洗い足りないの♡



ちよっとお風呂に  
つかったら  
また洗いつこしましょ。

司令官には  
いっぱい洗い  
キレイキレイして  
もらいますわ。





昨日私を岩場に連れ込んだ時と同じ台詞よね

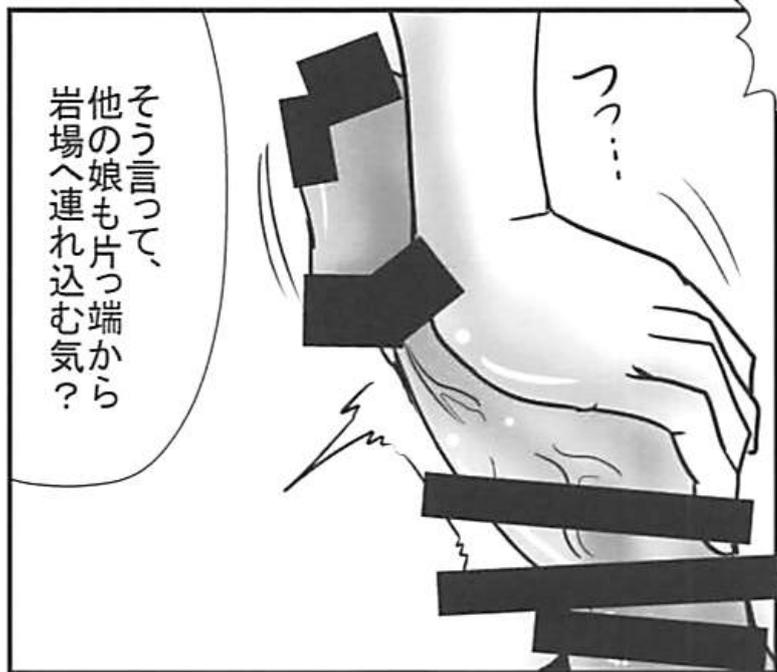
ぬう

ゴゴ



あの言葉

すくっ



フッ...

そう言っつて、他の娘も片っ端から岩場へ連れ込む気？

怖っ



ふ

ん

いやホラ、折角ドイツ語も勉強したし積極的に使っつていこうかなと、ネ



ねえ、そろそろ本国に私達のこと報告したいの

できれば、貴方とずっと一緒に居たい...

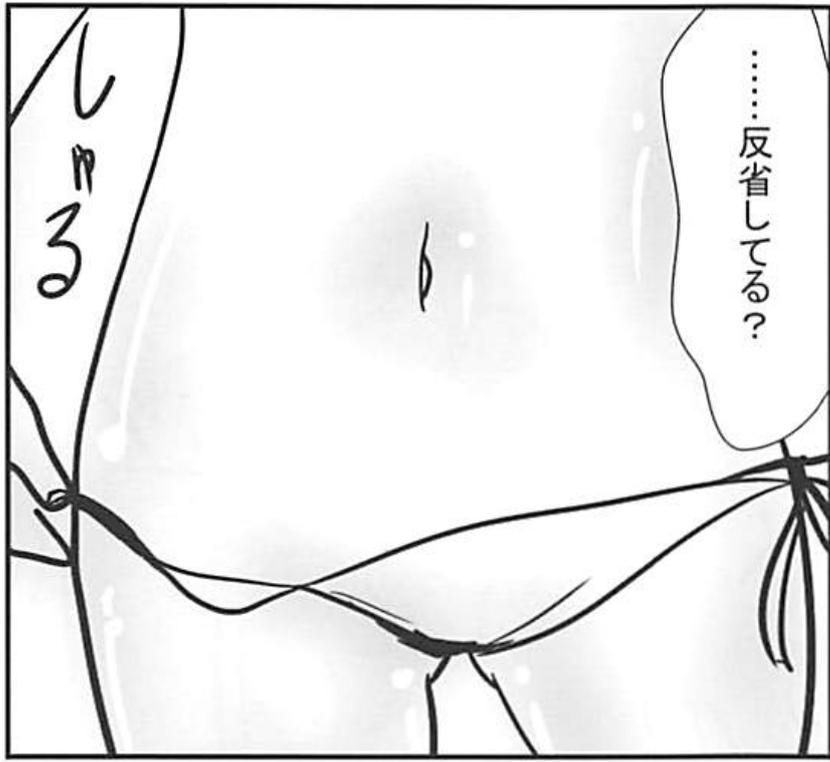
マックス...



...ふーん

いや！マックス以外にそんなこと

そうね、指輪も私にしか渡してないものね





マックス…焦らされてたから  
もう、射精そうだ…

きゅううれ

ふうん……ねえ  
これで射精したら、  
もう自慰も禁止よ



私以外で射精するの  
禁止だから、いいわね

は、は



はっ

ふ

ぬる…

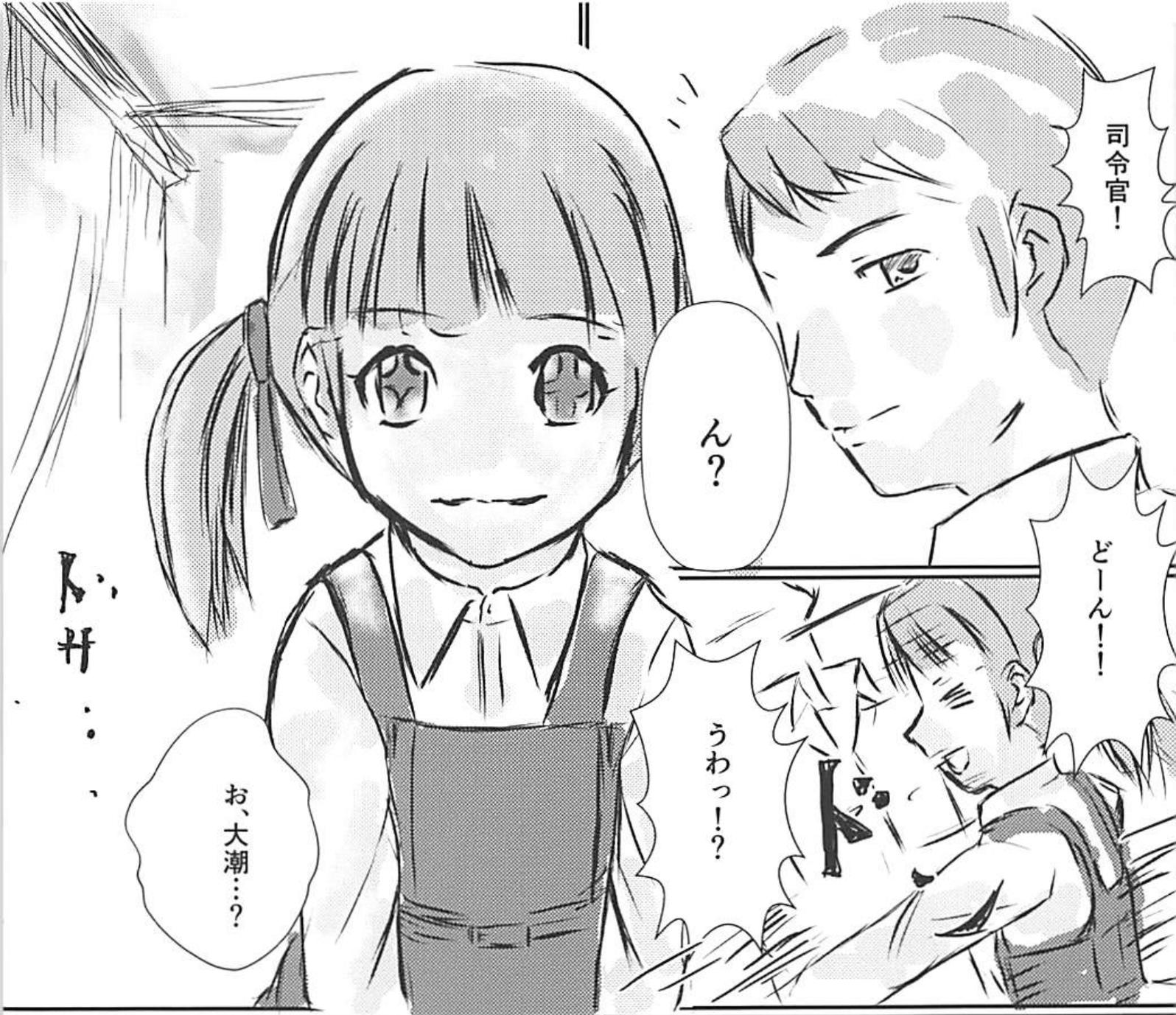


そんな「急」…

っ…射精してるわね  
ふふ

私以外に「こう」いうこと  
しちゃダメよ  
…Ich liebe dich sehr.





司令官!

ん?

ん、ん

お、大潮...?

どーん!ー!

うわっ!?



司令官のおっきな魚雷をください!

はあ?



い、いったい何が...

「司令官の魚雷を  
入れれば、もっと  
ポカポカする」って、  
荒潮が

太

(荒潮めえ…)

では、大潮補給します！

おおー、司令官の魚雷、  
本当に立派です！

って、あれ？

いやいや、無理、むりだから…



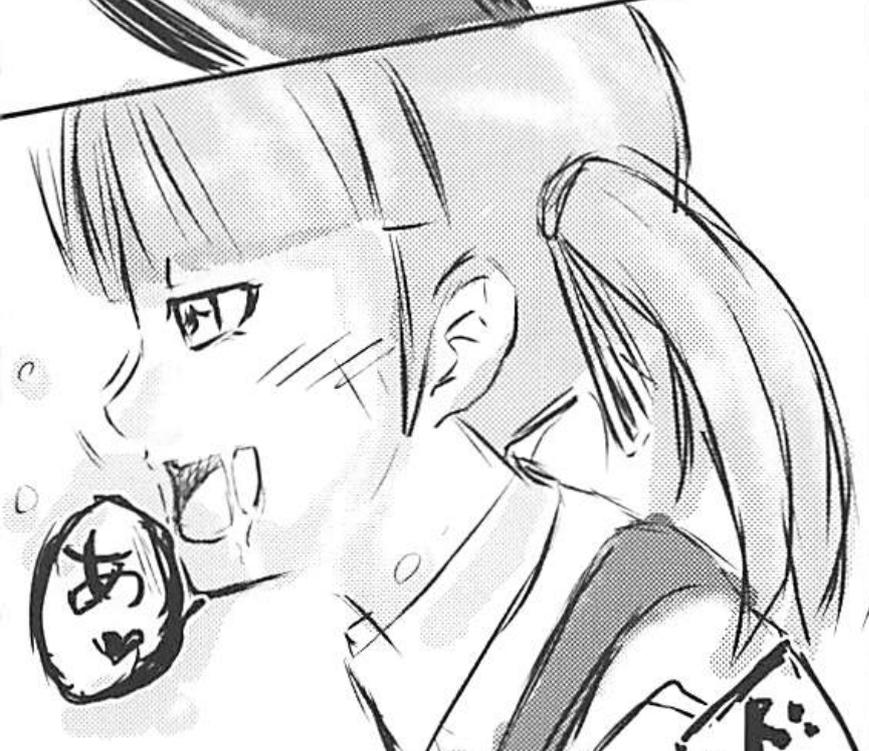
んう、司令官のおっきい  
魚雷で、大潮ポカポカ  
してきました…

うわー、そんな生々しい話  
聞きたくなかったなあ

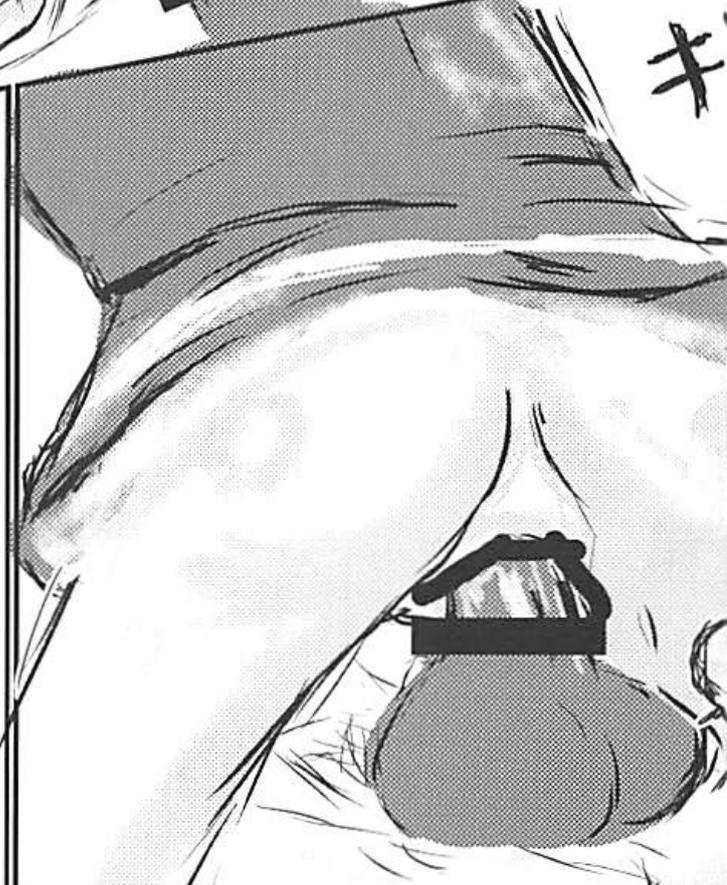


司令官の魚雷を  
入れられるよう、大潮  
練習しましたから

あ



あ



キ



司令官、大潮にいったばい補給を  
ありがとうございましてあ…

次もよろしくお願ひします…！

はい (はい)

グググ

ぐ

コホオ…

スポ



今日はおとなしく  
執務室にこもろう…

とほ  
とほ



どうして、こんな事に…



司令官

暁は  
気付いてたよ？

暁のこと

殺そうと  
したよね？

逆巻 画 てみどろ



はあ

暁の気持ち  
を知って

どうすればいいか  
解らなくなつて



はあ

はあ



そのくせ 自分で  
どうにかする  
訳でもなく

カチカチ

暁の方から  
消えてもらおうと  
思つたんだらう

違うかい？



暁は  
司令官の  
こと

いやー

責めてる  
わけじゃない

責めてるわけ  
じゃないんだ

ただ一言

言えば  
よかつたんだ

大好き  
に  
たき



違う？

ちがうかい？

言えば  
よかつたんだ

正直に

ごめんねって  
いえば  
よかつたんだ



好きに  
なれない？

暁のこと  
きらい？

お前は  
ないだろう



答えてよ

こたえて

あかつきのこと

きらい？



司令官

はあ

いいよ

はー

はー

どし

司令官の望み

かなえてあげる

本能的に子孫  
残したくなつた？

どし



おつきく  
なつてるよ



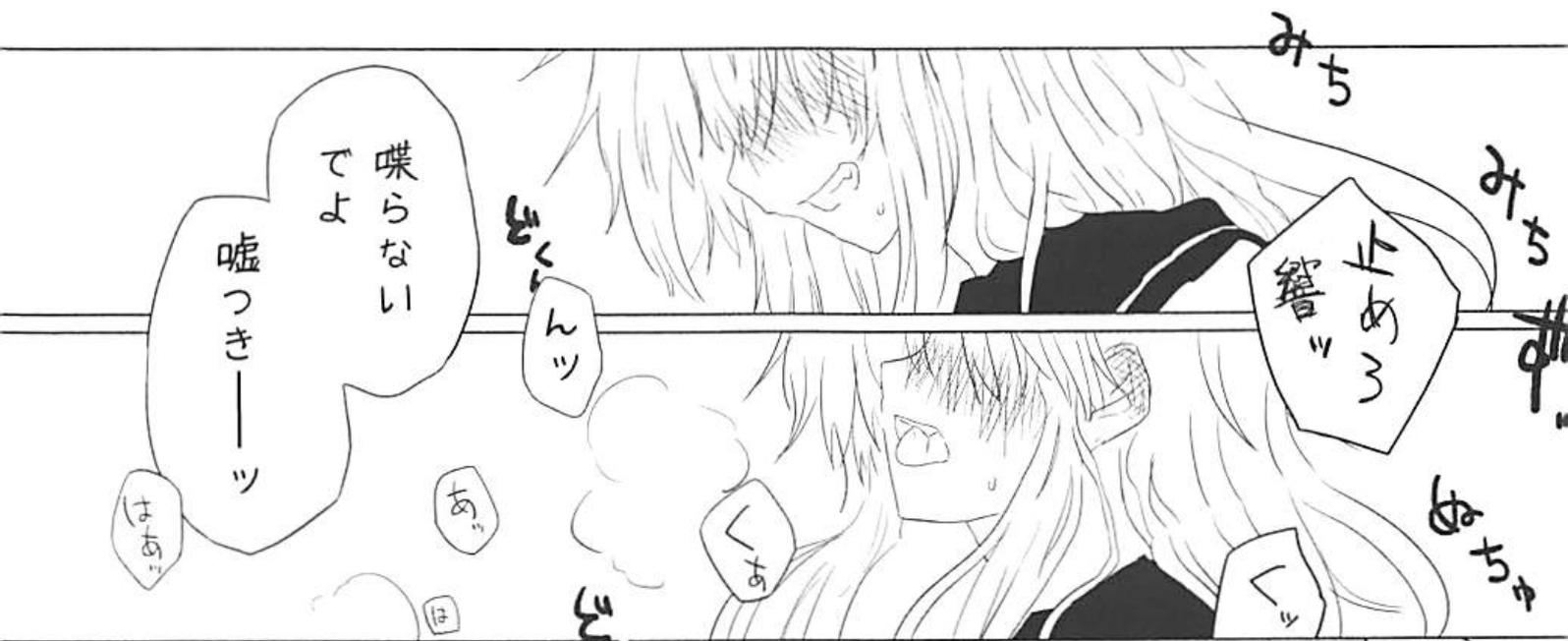
乱暴されて  
興奮した？

暁のこと すきに  
なつてくれたの？



それとも

命の危機を  
感じて



みち

みち

みち

おめろ  
響

喋らない  
でよ

嘘つきーッ

きん  
ん

あ  
あ

あ  
あ

あ  
あ

きん  
ん

あ  
あ



きもちいい?

暁とおんなじ  
おまんこに

しれーがんの

ぜんぶ  
はいっちやったよ?

わたしが  
動いて

あげるッ

あ  
あ

きん  
ん

あ  
あ

あ  
あ

きん  
ん

あ  
あ

あ  
あ

きん  
ん

あ  
あ

あ  
あ



ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー  
ちゅー

ちゅー

ちゅー  
ちゅー

こんなにおおきに

してるじゃないか

嘘つき

わたしのこと  
すきなくせにッ



しれーかん

くわたしは  
まだ

満足して  
ないよ?!



やつと  
啼いたね

もつときかせて  
しれいかん

もつと情けなく  
喚き散らして

よがり  
くるつて

わたしのこと  
すきだつて

はッ

はあ

はあ

はあ

あ

あ

あ

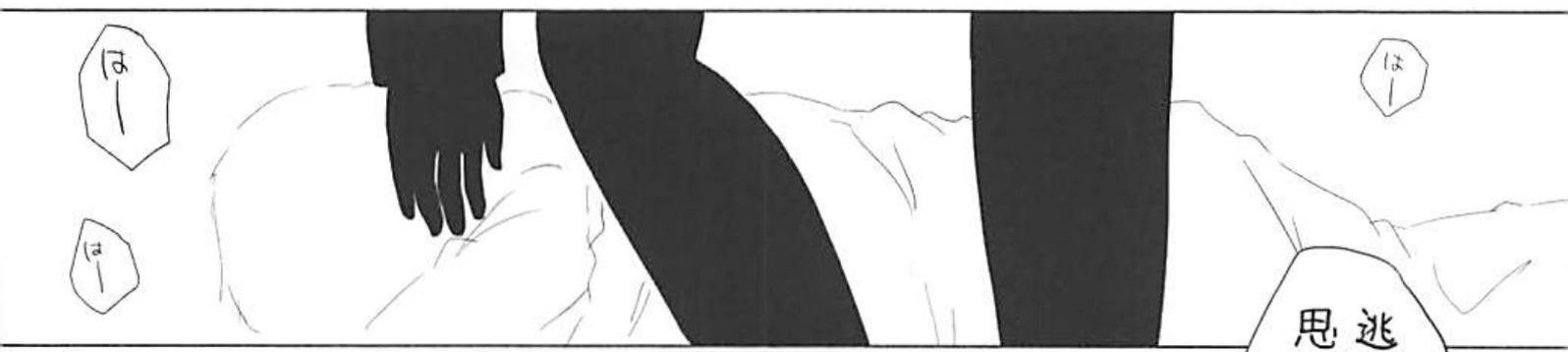
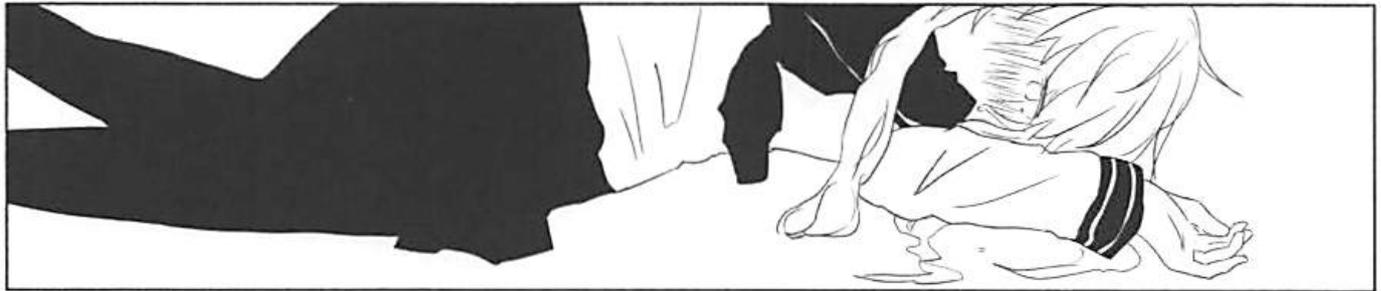
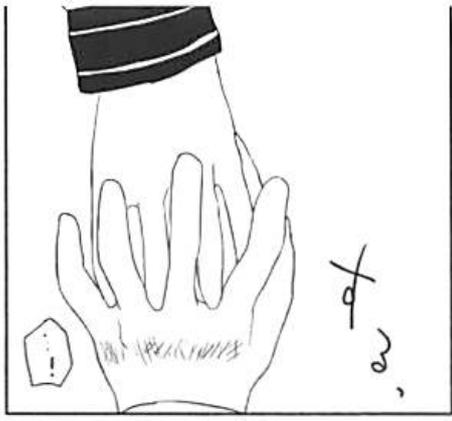
う

あ

あ

あ







暁を殺してまで逃げ出そうとしたのが許せなかった

それは本当だ ほんとうなんだ

でもわたしは 暁のきもちを知ってて利用したんだ

暁がすきでも 誰が好きでなくても

あんなクズだったとしても わたしは司令官が大好きだったんだ

# 「じつは以上」待て！は出来ません！」

作：ニシヤ

「司令官、朝ですよ。起きてください。もう朝食の準備も出来ていますから」  
「ふあ〜……。朝潮、おはよう……」

秘書艦である朝潮が彼を起こしに来るのは日課である。彼は、朝が弱く一つや二つの目覚まし時計では効果が全くない上に、目覚ましで一度起きても二度寝してしまうのだ。毎回のよう寝坊するのを見かねた朝潮が自主的に起こしにくるようになったのだが、これがうまくいっている。

「はい、タオルです。顔を洗ってきてください。それとも、シャワーを浴びますか？」  
「シャワーはいいや……。顔だけ洗ってくるよ……」

提督が身体をどけてすぐに、朝潮は掛け布団を窓枠に干し始める。執務室に寝室と個人用のシャワールームがついているため、その手入れもほとんどは秘書艦の仕事だ。

「ん〜……。気のせいかなあ……。でもなあ……」  
「どうかしましたか？ お顔に何か違和感でも？」

バスルームで鏡を見ながら呟くと、作業を進めながら朝潮が質問してくる。  
「いや、なんか最近朝起きると顔がべとべとしてるような気がするんだよね。ボクも歳かなあ……」

「歳って、まだ二十代も半ばじゃないですか。大分暑くなってきましたし寝汗じゃないですか？」

「そうかなあ。でも、去年とかこんな感じだったっけ……？」

腑には落ちないものの、言っても仕方がない。冷たい水で顔を洗って気持ちを切り替え、毎日朝潮が手入れをしてくれる制服を取りに行く。

「ボクは隣で着替えてくるから。ちょっとこっちにいてね」  
「はい、わかってます」

いつだか寝ほけたまま朝潮の前で服を脱いだら顔を真っ赤にして怒られた。それ以降、必ずこうして声をかけては別の部屋で着替えるようにしている。

「しっかり者の妹が出来たみたいだね」

隣から聞こえてくる水音的に、朝潮は既に風呂掃除の準備を始めているのだろう。毎朝やってきてはその辺りを一通り終え、その後秘書艦任務に就くのかから本当に頭があらがない。そう思いながら着替え、姿見の前でおかしなところがないか確認してみる。

「よし、大丈夫かな。朝潮入るよ」  
「はい、どうぞ」

自分の部屋に戻るのに声をかけるといいうのもおかしな感じだが、そこは何となく口から出てくるのだから仕方がない。扉を開けて寝室へ移ると、ベッドの前には洗濯籠が置いてある。寝間着も毎日洗濯するからそこに入れていくと朝潮に言われた通りにする。本当に任せっきりだが、彼女もまんざらではないようだし、その分は彼なりにお返しを考えているので素直に甘えることにしている。

「よいしょっ、と……。司令官、昨日は大浴場の方をお使いになったんですね。今日は水汚れがほとんどなかったです」

「うん。折角専用の大浴場なんてものがあるんだから、使えるときは使うよ。どうせ誰もこないし朝潮も一緒にどう？ なーんて……」

「はあ、司令官はいつもそういうことを言いますよね。前向きに検討させていただきます」  
「絶対に前向きじゃないけど面と向かって断るのもアレな時に使う言葉だね。朝潮も段々あしらい方がうまくなってきちゃって」

「毎日言われていけば慣れもしますよ。朝食、準備は出来ていますから早く食堂に行ってください。執務開始の時間に遅れますよ」

「はいはい、ありがとね」

毎朝ほとんど変わらないやり取りをして、提督を食堂に送り出した。  
「今日のメニュー的に、戻ってくるまで大体三十分ぐらいですかね」

ちらっと時計に目を移してから、洗濯籠の中身に手を伸ばす。  
「司令官のにおい……。ああ、もう……！」

まだ温もりを感じる服を鼻に押し付けようとして思いきり深呼吸。肺たっぷりに大好きな人の残り香を溜め、そのままベッドに倒れ込む。

「ああ、司令官……！ わたし、司令官のにおいに包まれて幸せです……！ たまらなく、司令官を感じます……！」

繰り返して深呼吸をしながら、ベッドの上を転げまわる。自分の身体ににおいをつけようとしている風にも、自分のにおいをベッドにつけようとしているようにも見える。  
「もう、こんなに……。洗濯物が増えてしまいましたね……」

とろんとした目でしばらくそれを続けていたが、おもむろに右手をスカートの中に入れて。下着越しでもわかるぐらゐに愛液が溢れているのを感じる。軽く触れただけでもぐちゅりという音が響き快感が頭を融かしていく。

「あつ、んつ、ふうっ……！ 司令官、朝潮は悪い子です。司令官のベッドで、司令官の服をオカズにこんなこと……！ でも、やめられないんです！ 毎朝の日課なんです！ これがないとわたしい……！ 司令官のこと襲ってしまおうでえっ……！」

口いっぱい唾液を溜め寝間着を噛む。服に染み付いたにおいを自分の唾液に溶かしては飲み込むために。それとも一つ。開いた窓から声が漏れないようにするために。そうするぐらゐならば窓を閉めればいいのだが、その状況が朝潮をさらに興奮させるのだ。

「はあつ、はあつ、はあつ……！ 司令官が戻ってきたら、誰かが入ってきたら、バレちゃうのに！ エッチな子だって知られちゃうのに……！」

いつの間にか下着はずらされ、朝潮の指は直にクレパスをなぞるようになっていった。扉の方へ腰を突き出し、利き手で思い切り愛撫を繰り返す。派手に音を立てながら擦ったかと思えば、膣内に指を入れてぐぼぐぼとかき回し、たっぷり愛液で濡れた指で小さな突起をつまみあげては嬌声をあげる。

「あふっ、はふうっ……！ 司令官、見てくださいっ！ わたしのいやらしい姿、その目に焼き付けて……！」

どんどん腰は持ち上がっていくし、溢れ出す蜜は太ももを伝ってベッドに染み込んでいく。見られたくないのに見られたい。見られたらどうしよう。見られたらどうなってしまうのか。妄想が加速し、指の動きはさらに激しくなる。ぐちゅぐちゅという音はもはや窓の外まで聞こえるのではないかと思うほどに大きくなり、いやらしい声だけは外に漏らすまいと服を噛む力も増していく。

「早くイかなきゃ、司令官に見られちゃう……！ でも、いつまでこうしていたい……！ イきたい、イきたくない、イきたい、イきたい、イきたい……！ 司令官のベッドでオナニーしてイきたいっ！ イ、イ、イ、イ、イ……！」

口の奥まで服を詰め込み、右手の指も膣内奥深くまで突っ込む。ただ欲望のままに指の腹で膣壁を擦り続けついに絶頂に上り詰めた。

「あ……。はあ……。きもち、いい……」

びく、びく、と浮いた腰が震えてからぶしゅっと愛液を噴き出す。ぬぼっと音を立てて抜けた指が太ももを擦り、そのまま力なく落ちた。少し遅れてお尻もベッドに落ち、背中で自分がどれだけ愛液をまき散らしたのかを感じる。冷たくて湿っていて気持ち悪いはずだが、絶頂を迎えたばかりの身体にはそれすらも心地よいらしい。

「ああ、司令官……。今夜も、わたしのエッチなお汁が染み付いたベッドで寝るんですね……。ふふっ……」

どろどろになった寝間着を口から出し、何度か深呼吸すると満足そうに立ち上がる。比較的乾いている部分で自分の愛液を拭い、びしょびしょになった下着を彼の寝間着の間に挟み込み洗濯籠へ。その上から洗濯物を隠すための袋をかけると、ポケットから新しい下着を取り出して足を通す。

「司令官、これでも全然気付かないなんてすごいですね。でも、そのおかげでわたしもっ」と悪い子になれるんです」

慣れた手つきで敷布団を持ち上げ、これもまた窓枠から外に干す。最後に残った枕を力いっぱい抱き締めると、ちらと時計に目をやり満足そうに頷く。

「いつ気付いてくれるでしょうか。ふふっ、楽しみです……」

もうじき彼が戻ってくる。今から部屋を出ればちょうど廊下ですれ違えるだろう。毎日、何かの事情でこの籠の中身を見せろと言われないか内心期待しながら洗濯場へと向かうのだ。この中身を知られたらどうなるだろうと、また下着を濡らしながら。

「ん、れろっ……。えう、んふ……」

暗闇の中、粘着質な音が響く。熱っぽい息遣いと、布を擦るような音と共に。

「ふふ……。司令官は本当に鈍いですね。犯人をわざわざ懐に招き入れるなんて」朝潮の声だった。提督の顔を舌を這わせながら下着越しに淫裂を擦っている。眠った提督を前にしては朝のように激しく自慰行為に浸ることも出来ないらしく、音は控えめであった。けれど、朝潮の目の蕩け具合は朝の比ではない。

「くふっ……。司令官、とっても美味しいです。本当はお風呂に入る前の方が望ましいんですけど、この時間じゃないと眠りませんもんね。そこは我慢します」

眠る時間はいつも正確で、その上一度寝たら朝まで目を覚ますことはない。眠りの深さも相当で、ちょっとやそっとのことでは起きることはない。それは、毎晩のように寝室に忍び込んではおかずを頂戴している朝潮が一番よく知っていた。

「最初のころはドキドキでしたよ。起きちゃうんじゃないかって。でも、起きないですよ。もんね。司令官、毎晩毎晩唇を奪われてるんですよ？　こうして舐め回されてるんですよ？　全部、鈍い司令官が悪いんですからね……」

深く口付けをしながら指を動かす速度を上げる。こしゅこしゅという音に水気のある音が混じってくるが、それでもやはり彼が目覚める気配はない。

「んんっ、くうん、ああん、くうっ……！」

朝潮の鼻息がどんどん荒くなっていく。自分の吐いた熱い息を感じる。自分の唾液まみれの彼の顔を間近で見てもまた唇を重ねる。声が溢れそうになるたびに強く唇を押し付けては、辛うじて叫びそうになるのを抑える。

「んちゅ、えろっ……。うふ……。司令官の顔、わたしのよだれでべとべとです。わたしのにおいでいっばい。でも、今日はもっと……」

充分すぎるほどに下着が湿るようになったことを確認してからスカートを脱ぎ捨て、眠っている提督の顔に跨る。鼻先ぎりぎりのところで割れ目をなぞりつつ、あいた手では自分の胸をいじる。

「今朝替えてからずーっと穿いてた下着です。司令官の隣にいますとすぐに濡れてしまうので、今日何度もわたしのお汁を吸ったえっちなやつです。どうですか？　わたしのにおい、しますか？」

小声で言いながら指のグラインドを大きくする。蟻の門渡から陰核までを激しく擦り、どんどん淫靡な汁を滴らせていく。やがて布地が限界を迎え、朝潮の指を伝って下に落ちる。びちゃびちゃと水滴が落ちる音聞き、朝潮の興奮がどんどん高まっていく。

「ん、くうん、あっ、あっ……。わたしのお汁、美味しいですかあっ？」  
ぐちゅ、ぐちゅ、にちゅ、にちゅ、ぬちゅっ——

いやらしい音はどんどん大きくなり、分泌される愛液の量も増えていく。薄白く濁ったぬめりのある液体が彼の顔の上に溜まっていく。それを見て、朝潮はさらに乱れる。

「ごめんなさい、司令官っ。ここまでにするつもりだったんです。でも、もう我慢でき

ません。キスしてくださいっ。とつてもえっちなやつうんんっ！」

股布をずらして秘部を露出させるとそのまま腰を下ろす。彼の唇に自分の下の口を合わせ、思わず軽く達した。

「あっ、はっ、はあっ……。これ、気持ちよすぎる……。ダメ、癖になりそうです……。ああ、司令官がわたしのを……。司令官の唇、気持ちいいですっ……！」

もう大きく腰は動かせない。僅かに腰を前後左右に動かし、提督の唇で愛撫を行う。右手では陰核を握り、左手ではその桜色のつぼみを押しつぶすようにしながら。

先程のように少しずつ滴るようなことはない。朝潮から流れ出す愛液は提督を濡れさせるのではないかと思うほどに激しくなり、直に彼女が絶頂を迎えることを如実に示していた。

「ここまでされても起きないんですかっ！？　起きてくださいっ！　わたしのえっちなところ見てくださいっ！　ほら、ほら、ほら！　子ども扱いしてますけど、ここはもうこんなにいっ……。？」

少しづつ声が大きくなっていき、このままでは本当に目を覚ましてしまうのではないかと、彼が寝返りを打った。

「あはっ……。ははっ……。イ、イっちゃった……。気付かれたって思っただけで、思いつきり……」

驚きに目を開き全身から嫌な汗を流しながら、呼吸にあわせて潮を噴く。ぶしゅっと溢れ出していく潮が提督の髪を濡らすたびに、背中がそくそくする。それは背徳感を飲み込んだ至上の快感で。

「何もしてないのに、また……。イ、くうっ……！」

どこを弄っていたわけでもないのに、朝潮の身体は再度激しい絶頂を迎えた。

「ふふっ……。あう……。これ、最高です……」  
だらした口を開き、言葉と共に涎を零す。下の口もまた栓の壊れた水道のように愛液を撒き散らしていく。

「明日、どう説明しましょう……。でも、誤魔化せば明日からもこれが……」

得も言われぬ幸福な時間の中ほんの少しだけ頭を悩ませるが、この状況を処理するつもりは毛頭ない。そっとベッドから降り、愛液でべとべとになった提督の頬をそっと一

撫ですると耳元で囁く。

「おやすみなさい、司令官。愛しています」

音もなく隣の部屋に移動すると、そのまま部屋を出ていく。流石にこのまま布団には入れない。一度自室で汗を流してから、何事もなかったかのように執務室で横になる朝潮だった。

「司令官、朝ですよ！ 起きてください！」

「んん……。ふぁあ……。おはよう、朝潮……」

翌朝。いつものように提督を起こしにかかる朝潮。ほんの少し、実は起きていてくれたんじゃないかという期待を持ってのことだったので、いつもよりも声が大きい。

「今日はなんだか元気だね……？ 何かいいことでもあったの……？」

寝ぼけ眼を擦りながらそんなことを聞いてくる辺り、残念ながら昨晩の出来事は気付かれていないようだ。あれだけ激しくやっても起きないとなると、どこまでやってもいいのだからと朝潮が舌なめずりをしそうになったところで、提督が自分の顔に手をやった。

「……なんか、今までよりもべとべとしてるような？ それに、何か髪の毛もごわごわしてるような気がする。あ！ 朝潮が嬉しそうなのでもしかして、犯人がわかったのか……？」

彼女が見張りをしてくれていたことを思い出し無邪気に質問する。朝潮は今度こそ気付かれたのではと下着を濡らしたわけだが、残念ながら違うとわかり、普通に應對する。

「残念ながら、誰もここを訪れませんでした。わたしは執務室の扉の前に布団を敷いていましたから、開けば問答無用でわたしの頭に扉が当たります。ですがそれはなかったの、ここには誰も来なかったということになります」

わたしが犯人ですとよっぽど言いたかったが、それを言ってしまうえば秘密の楽しみは二度と出来なくなってしまうかもしれない。仕方なく、自分がやったということ以外の事実を話す。

「そうか……。となると、やっぱり汗なのかな……」

「そうかと思われまます。睡眠中、何度か酷くうなされてるようでしたし」

「え、うなされてた！？ そっか、それでこんなにべとべとか……。あ、そうだ朝潮。

今日から添い寝してよ！ 朝潮と一緒に寝たら気持ちよく眠れるかもしれないし、もしかしたら朝潮が思いもよらないルートで誰かがここに入って来たのかもしれないし！」

それはいつもの軽口だった。断られるとわかっていて、軽いスキンシップのつもりで言ったものだった。そして朝潮も、それをいつもの通りに受け取り断ろうとした。が、昨日までの朝潮と今朝の朝潮では経験が違う。

ちょっとやそつとどころではない。あれだけやっても起きなかったのだ。一緒に寝れば、彼の腕に抱かれたままいやらしいことが出来る。そう思うと、さらに下着のシミが広がっていく。

「わかりました、いいですよ。もし本当にわたしの目を掻い潜ってやってきた犯人がいるのならば、それ以外に見つける方法もないでしょうし」

「わかってる、わかってるよ。冗談だってえ……！？」

「では、今日はご一緒させてもらいますので」

「え、え！？ ちょっと朝潮、いいの！？ ポク、これでも男だよ！」

まさか許可されるとは思っていなかったので大いに取り乱す。あたふたと手をあちこちに振り回し、朝潮に確認を取る。

「司令官が提案したんじゃないですか。わたしはそれが合理的だと判断したからその提案を受け入れたわけですが、司令官には下心でもあるんですか？」

「いや、減相もない！ そんなものは微塵もございません！ 今晚はよろしくお願ひします！」

ベッドの上で土下座をする提督を見て、少し残念そうに鼻を鳴らす。いっそ襲い掛かってきてくれればいいのにと思いつながら、今夜はどんなことをしようかと考える。

「はい。でもまずは顔を洗って、ご飯を食べに行ってください。変な期待を持って執務に影響が出たら承知しませんからね」

「わかってます！」

いつもより機敏に動く提督を見て少しだけ不安に思う。昨夜あれだけ激しくやったにも関わらず、今は色んな妄想をしたせいで身体の火照りがいつもよりも酷いのだ。もし、日課の最中に彼が戻ってきたら――

「まあ、その時はその時ですね」

「んん？ 朝潮、何か言った？」

「なんでもありませんよ。今日も天気が良く助かるって言っただけです」

自分の愛液がたっぷり染み込んだ布団に手をかけつつ適当なことを返した。早く食事に行つて、なるべくゆっくり戻ってきてください。そう思いながら。

「ごめん朝潮！ まさか、そんなことになってるなんて夢にも思わなくて！」

「うぐっ、ひぐっ、酷いです……。わたし、何度も声をかけたのに……！」

夜、ベッドの上で朝潮が泣いていた。見れば、白いシーツに黄色いシミが広がっている。朝潮を中心にして、提督の寝間着もそれで汚れていた。

「ごめん、ごめんよ！ ボクがあんなことを言い出さなければ……！ 朝潮、このことは誰にも言わないから、泣き止んで！」

「うう、ぐすつ……。こんな醜態を晒して、わたしもうお嫁にいきません……」

朝潮は二人で寝ている間に濡らしてしまつたらしい。その恥ずかしさからか、先程からずつと手で顔を覆つては泣いている。提督も、あまりの状況に完全にパニックだ。

「そんなことないよ！ こんな誰だって経験あるって！ それにこれはボクのせいだし……。だから、とりあえず身体を洗つて着替えよ？ この処理もなんとかしなきゃいけないし……。そうだ、大浴場で洗つてそのまま脱衣所に干してきちゃえばいいんだ。

あそこ、ボク以外は入らないんだから！ 朝潮、お願いだ。ボクと一緒に来て！」

冷静さを欠いた状態で必死に考え、何とか最善と思われる策を絞り出した。早速それを実行しようと汚れた布団を担ぎ、朝潮の手を引いて部屋を飛び出す。朝潮の口元が吊り上がっていることにも気づかずに。

ことの起こりは数時間前に遡る。朝の話の通り、朝潮は提督と共に寝るために寝室を訪れていた。恥ずかしさを誤魔化すために色々なことを早口で話す提督をなだめ、二人でベッドに入った。そこまではよかったのだ。しかし、問題はその後。

「……これは、予想外でした」

提督が深い眠りに入るまで、散々してきたイメージトレーニングを頭の中で繰り返していた。絶対にいやらしいことはしないからと断言した彼に、口にするのも憚られるほ

どいやらしいことをするつもりでいた。しかし、眠りについた彼は無意識のうちに朝潮を抱き枕のように抱き締めってしまったのである。

「これはこれで嬉しいですが、それよりもどかしいです……」

仰向けのまま、身体の向きを変えようにも変えられない。腕は身体ごと抱き締められているので手先を動かすので精一杯。これでは彼に触れるどころか自分を慰めることすらできない。

「ああっ、司令官がわたしを求めてくれていると思うだけで、こんなにも身体が熱いの……」

触らずとも、既に下着がぐしょぐしょになってるのがわかる。スイッチは既に入つており今すぐ自分を滅茶苦茶にしたくて仕方がないのに、完全に生殺しの状態だ。

「まさか、このまま朝まで解放されないんじゃ……。そんな気が狂ってしまいます。何とかしなければ」

もじもじと脚を擦り合わせてはいるが、その程度の刺激では物足りない。このまま眠ることなど出来ないだろうし、何とかこの状況を脱して自分を慰めなければならない。

「でも、これだけぎゅつと抱き締められては、力づくで離れれば起こしてしまいますよね」

彼を起こすのは最終手段である。このまま目を覚ませば、彼は朝潮を抱き締めている状況を認識してしまう。そうなれば、次は朝潮を気遣つて一緒にベッドには入ってくれないだろう。もちろん彼が再度眠りについてからベッドに潜り込むことは出来るが、それとこれとは話が違う。

「いい案が全然浮かびません……。それに、このまま朝になってしまえば結局司令官はわたしを抱き枕にしたことに気が付いてしまいますし……。もういっそ、起こしてしまいましょるか」

首を傾けて気持ちよさそうな寝顔を見つめる。そうしているとまた子宮の辺りが疼いてくる。一生懸命太ももを擦り合わせ、少しでも快楽を得ようと努力する。

「こうしてると、おトイレを我慢しているみたいですね……。あっ！」

何か悪いことを閃いたようである。可愛らしい朝潮の顔に影が差している。

「ふふ……。司令官が悪いんですからね……。ここまでしているのに、わたしに手を出

してこないから……。でも、おもらしって結構恥ずかしいですね……。それも意図的となればなおさら」

今まで散々恥ずかしことをしてきたが、経験のない不慣れなことはどうしてもひっかかるらしい。とはいえ、やると決めた以上はやる。一度身体の力を抜き、下腹の辺りにだけ力を入れる。

「んっ……。なかなか出ないですね。んんっ……！」

ここで用を足してはいけないと脳が認識しているのだろう。どうしても最後のひと踏ん張りがきかない。力むには力むが出てくる気配がない。

「ふう……。いつも通りです。これこそ一番のマーキングじゃないですか。ほら、いつものようにわたしのにおいを司令官につけるんです……！」

提督のことが好きだった。だからこそ自分が秘書艦に選ばれた時、彼を独占する方法を考えたのだ。残念ながら独占する方法は思いつかず、想いが振じれに振じれて自分のおいをつけて他の艦娘が寄り付かないようにしようというなんとも動物的な結論に至ったわけだが。

「あっ……。はぁ……。これも、たまらないですね……！」

考えを変えろと思いのほか簡単にできた。排尿感と、じんわり温かくなっていく下半身の感覚に快感を覚えながら、膀胱に残っている分を全て出し切っていく。

「これでもやっぱり起きないんですね。ごめんなさい司令官、後には引けないんです。もう、司令官はわたしのものですからね……！」

それから嘘泣きをしつつ提督を起し、自分の思ったとおりにことを運ばせたというわけである。

「よし、これはしばらくシャワーかけてればいいよな。いつもこんなに広く作ってどうするんだって思ってたけど、今だけは感謝するよ」

消灯後の廊下には誰もいない。トイレに起きた艦娘と鉢合わせすることもなくうまく大浴場に滑り込み、浴室に布団を投げ込んだ。

「あ、朝潮？ ほら、お風呂に入ろう？ そのままじゃ気持ち悪いだろう？」

先程からずっと俯いている朝潮に声をかけつつ自分も服を脱いでいく。下こそ脱がないうが、朝潮を先に脱がせるのは間違っているような気がしてのことだ。

「……脱がせてください」

「えっ……。！？ そ、それはだって……。いや、わかった……！」

小さく首を振りながら朝潮に言われてしまえば罪悪感が沸き上がってくる。何も出来ないぐらいに沈むこともあるのだから仕方ないと言いつつも、朝潮の寝間着に手をかけた。

「脱がせるから、その……。ばんざいして？」

「はい……！」

無論、朝潮が俯いてほとんど話さないのは本心を悟られないためであるが、その効果は絶大であった。普段どれだけセクハラまがいの発言をしても、その先を求めてはこない彼が恥ずかしそうに頬を赤らめている。ちらりとその表情を見るだけでも、朝潮は耐えがたいほどの性的興奮に襲われていく。

一方提督は、シャツと一緒に服を脱がせて籠に入れてそのまま視線は戻さない。戻せば朝潮の膨らみかけの胸が目飛び込んでくるだろう。これ以上朝潮を辱めてはいけない。そう考え、必死に目を背けたまま今度はズボンに手をかける。

「脱がすからね……！」

ズボンとパンツを脱がすために朝潮の前に跪かたちになった。どうしてもシミの広がった部分が顔の前に来る。如何に顔を背けても、その独特のにおいが鼻を突く。ダメだとはわかっていても彼の男の部分が反応してしまう。頑張っても無心になるように努めるが、汚れた下着の中に入れた手が朝潮の素肌に触れると、一箇所血液が集まっているのがわかる。

「あっ……！」

ぬちゅっという音と共に朝潮が声を漏らした。下着をおろされた時に、粘液が糸を引いているのがわかったからだ。そして、その声に反応して彼は朝潮の方に目を向けてしまった。当然、未だ無毛の綺麗な割れ目が目と鼻の先に来る。

「いや、朝潮、これは、その不可抗力で……！」

ここが最後のターニングポイントだっただろう。視線を下ろし、小水とは違うもっと白く粘着質な液体で汚れた下着を確認し、朝潮の本性を見抜くべきだったのだ。だが、彼の目は朝潮の女の部分から目を離せなかった。

「司令官、早くお風呂に……」

「そ、そうだよ。うん、そうしよう！」

そう言われ慌てて視線を外した提督は、朝潮の汚れた下着とズボンをそのまま籠に投げ込み、自分も裸になってしまった。もう逃げられない。

「ボクは布団を洗っちゃうから、朝潮はシャワー浴びて湯船につ……う？」

朝潮の手を引いて浴室に入った。半自動の扉は勝手に閉まる。そのカタンという音を確認し、朝潮は提督の足を払う。湿った足場に予想していない奇襲、当然踏ん張りも利かず彼は派手に転んでしまった。

「い、たた……。朝潮、その、怒ってる……。よね……。？」

頭こそ打たないように朝潮が足を差し込んでくれたが、それでも衝撃までは消えない。軽く脳を揺らされ身体から自由が奪われる。

今のは間違いなく意図的に行われたものだった。朝潮は自分をここで殺すつもりかもしれない。そう思った彼は何とか朝潮を説得しようとその顔を見上げ、気付いた。

「え、えっと……。？ 朝潮……。？ なにを、してるの……。？」

普段の凛々しい表情からは想像できないほどに、朝潮の表情が濁っている。それから、恥ずかしげもなく足を広げて股の間を激しく擦っていた。理解が追いつかずただその行為を見ているうちに、シャワーの音なんかでは誤魔化せないほどにぐちぐちゅと音が大きくなっていく。

「あはっ、ふふっ、くふうん……。あーあ……。司令官に見られちゃいました。バレちゃいましたね、わたしが司令官でオナニーするいやらしい子だって」

唾然とする彼を前にして腰を突き出し、もっとと見てくださいと言わんばかりに指の動きを激しくしていく。最愛の彼を前にして普段よりも敏感になった身体はすぐに絶頂を迎えそうになる。が、この状況でどんどん大きくなっていく彼の陰茎を見ているとそれが勿体なく思ってしまった。

「どうしてこんな、むぐうっ……。？」

「舐めてください、司令官。わたしの色んな汁で汚れたそこを」

状況を理解していない彼と覚悟を決めた朝潮では出来ることに差がありすぎる。倒れたままの提督の顔に跨ると、彼の後頭部がごつごつと地面に打ち付けられるのではない

かと思うくらい強く股を押し付ける。

「どうです？ えっちなにおいしますか？ しますよね？ 司令官のことを思うと、いつだってえっちなお汁が溢れているんです。もう、いやらしいにおいが染み付いて消えなくなってると思うんですよ。でも、司令官が綺麗に舐めとってくれたらもしかすると……」

下唇から鼻の辺りまでに愛液を擦り付けるように腰を動かす。彼の意志は関係ない。昨夜のように自分のにおいを押し付けるようにしていく。

「それとも、ずっとスケベなにおいをさせておいた方がいいですか？ 司令官の隣で、いつだって発情したメスのにおいをさせていた方が……。きょううん！？」

全身に電流が走ったような気がした。突然知らない快感に襲われた朝潮は腰を止め、酸欠の金魚のように口をばくばくとさせる。

「あ、あん、あぁ……。んっ、ふう、くうん……。！」

腰を止めたはずの朝潮に、それでも続けて快感の波が押し寄せてくる。開かれた口からは嬌声が零れ、いつしかその快楽を享受するのに夢中になっていく。

「司令官のべろ、気持ちいいです……。とっても、きもちいい……。でも……。！」

腰を浮かして姿勢を変え、彼の頭を両手で掴む。両足で彼の腕を身体ごと抱き込むようにしながら。

「あんなに毎日アピールしていたのに犯してくれなかったから、わたしが司令官を犯します。これはもう決定事項です。んっ、れろっ……」

寝ているときとは違う。唇を奪っただけでは飽き足らず、舌まで中に押し込む。遠慮がちに引っ込んでいた舌を吸い出し、これでもかというほど舌を絡めていく。口の間から漏れる唾液が混ざり合う音が二人の気持ちを盛り立てる。

「こうしてキスするの初めてだと思います？ 毎晩、司令官の唇はわたしのものだったんです。毎晩毎晩わたしに一方的に犯されてたんですよ、司令官は！ べとべとでしたよね？ ぜーんぶわたしのせい。本当は毎朝顔を洗われるのが残念で仕方なかったんです！」

いつものように提督の顔に舌を這わせつつネタばらしをする。彼の身体に鳥肌が立っていくのを感じる。それが舐められていることによるものなのか、それともその告白に

よるものなのかはわからなかったが、朝潮は行為をやめるつもりはない。

「わたしのアソコを見て固まっちゃったけど、昨日だって司令官の顔の前にあつたんですよ？ 目を開けば中まで見えるくらい大きく口を開いていました。それなのに起きないから……？ 司令官、こっちはどんどんおっきしてきますね？ まだ大きくなるんですか？ これ、わたしの中に入れるつもりですか？ ねえ、司令官！」

何も言えない彼に代わり朝潮の独白に力が入っていく。先走りか溢れる彼の男根を手の平で弄びながら、毎晩のことを彼に伝えていく。話せば話すほど熱く脈打っていくそれをしごきながら、言葉の継ぎ目でキスをする。

「朝潮、ボクもう出そう……。お願い、もっと強く……っ！？」

射精したい一心で手を動かし、朝潮の小さな手ごと自分の息子を握った。その瞬間、目の前に星が散る。少し遅れて頭の中にごしゃっという嫌な音が響き、自分の頭が床に強く打ち付けられたのだと気付く。

「ダメですよ、司令官。勝手なことをしたら。わたしはずーっとおあずけの状態だったんですから。司令官も同じ気持ちで味わってくれなきゃ……。それに、言いましたよね？」

一度頬を大きく舐めてから耳元へ口を近づけ、耳たぶを食みながら囁く。

「わたしが司令官を犯しますってええっ……っ！？ んんっ……っ！」

その言葉が引き金だった。朝潮の握っていた陰茎から熱い白濁液が噴き出し、朝潮の身体に降り注いでいく。湯気で満たされているこの空間でもわかるくらい熱さをした彼の子種。それが身体を滑り落ちていくだけで朝潮も気をやりそうになる。

「司令官は本当に酷い人ですね……。ダメだって言ったのに。それに、こんなにもったいないことを……。んちゅ、んはっ……。れも、おいひいれすよ」

絶頂の余韻に浸る彼の身体に腰を下ろし、手に付いた一番粘度の高いそれを口に含む。

「わたしの唾液と司令官の精液のブレンドです。いかがですか？」

口を開くとどろどろに掻き混ぜられたものが舌を伝って垂れてくる。抵抗できない彼は必死に顔を背けようとするが、朝潮の力の方が上だ。せめて飲み込まないようにと固く口を閉じると、朝潮も口を閉じる。

「んくっ……。冗談ですよ。これは、わたしのものです」

口の中身を飲み込んだのだろう。朝潮は自分の身体を指でなぞり、最後にお腹に手を当てると嬉しそうに笑った。

「でも、これじゃダメですね。同じお腹でも、ここじゃない。次はきちんと……。あれ？」

先程までそそり立っていた陰茎に手をやってみるも、射精を終えたせいで既に小さくなり始めている。

「本で読んだ通りですね……。司令官ならそれでもと期待していたのですが、そんなにうまい話はありませんか？」

「あつ、やめて朝潮……。出したばかりはダメなんだ……」

先程と同じように手で擦ってみるが、ふにやりとしたまま固くなる様子はない。それに、提督の切なそうな声からしてもどうしようもないだろう。

「では、他の知識も正しいのでしょうか？ いえ、間違っても関係ありませんね」

「ちょ、ちょっと朝潮、何をんんっ！？」

身軽に頭の向きを変え、再び彼の口を下の口で塞ぐ。しなしなと小さくなった男根を頬張り舌で舐め回しながら、右手で彼の菊門の位置を探す。

「んっ！？ んんっ！？」

朝潮が何をしようとしているのか気が付いた彼は抗議の声を上げるが、蜜壺を押し付けられるだけで何の効果も為さない。

「一本、二本？ わかりませんがまあいいでしょう。えいっ」

位置を把握した朝潮が、たっぷりと唾液で濡らした指を突っ込む。朝潮の綺麗な指は、彼の抵抗もむなしくぬるぬると中へ押し入っていく、指の腹で腸壁を抉るように動く。

「こっちで慰めたことではないので知りませんが、こんな感触なんですね。次から候補に入れて……。ああ、司令官！ ここですわね？ ここが気持ちいいんですね！？」

あちこち指を動かしていると、彼の息子が反応する場所があった。口の中で脈打つそれをしゃぶりながら夢中で指を動かしていく。段々口の中では収まらなくなってくるが、それでも顔を離さない。先程と同じところまで戻すまで、そのまま愛撫を続けていく。

「んぶっ……。けほっ、えほっ……。ふ、ふふっ……。おっきくなりましたよ、司令官。さあ、今度はこっちに入れましょうね」

喉奥に触れられ咳込む。胃の中身が逆流してきそうなのを抑え、熱い肉棒に自分の割

れ目を合わせた。

「ああ、そんな潤んだ目で見つめないでください。我慢できなくなるじゃないです、かっ……！」

如何に普段から慣らしていても、指以上の太さのものをいれたことはない。先端が穴を押し開けてはいるが、その先に中々入っていかない。

「うふ、これだけでも気持ちいい。にゆるにゆるして、くにくにして……。でも、これじゃダメなんですよね。わたし、司令官に処女を奪わせたいんですから。あれ？ でも、わたしが司令官を犯しているのに奪わせるというのは正しいのでしょうか？ まあ、いいでしょう。覚悟は出来ましたか？ いきますよ、三、二、一！」

ぐりぐりと動かしていた腰の動きを落ち着け、真っ直ぐに腰を落とせるように位置を調整。提督に心の準備を促し、カウントダウンの途中で思い切り腰を落とす。

「あっ……。はっ……。入ったあ……。入りましたね、司令官……。感じますよ、司令官の熱い気持ちを……。どうですか、わたしの膈内は？ 気持ち、いいですか？」

処女膜を貫かれて達したらしい。びくびくと身体を震わせ、厚い胸板に頭をもたげる。返事はなかったが、聞こえてくる鼓動に彼の興奮を感じ取り、満足そうに笑う。

「もう喋る余裕もないんですね？ いいですよ。いいですよ。司令官はそうして横になっていてください。そうしていれば、わたしが満足するまでずーっと気持ちよくなれますから」

そう言って口付けをすると、膈内で陰茎がびくと跳ねたのがわかる。なんだかんだと期待しているのだろう。期待はしているが、あまりにも積極的な朝潮の責めに色々と追いついていないのだろう。ほとんど放心状態だ。

「んっ、んっ、んっ、あっ、んっ、んんっ……。動くたびに膈内が擦れてっ、奥にあたって、気持ちいいですっ！ 無理矢理押し広げられて、指じゃ届かないところにぶつかって、すっごく、きもちいいですっ！」

くちゅくちゅっ、ぐじゅぐじゅっ、じゅぶじゅぶっ――

朝潮の動きが大きくなるにつれ、結合部から漏れる音も激しくなっていく。肌がぶつかるばんばんという音も、痛々しいぐらいの音になって浴室全体に響き渡っている。

「はあ、はあ、はあっ！ うう、くふうんっ！ これ、すぐにイっちゃいそうです！ ずっ

と我慢しているとダメですね。さっきの司令官の気持ちわかります。でも、はじめてがすぐに終わっちゃうなんて嫌です！ もっと、もっと、はあん……。っ！」

ほとんど抜けたところから、一番深いところまで一気に腰を落とす。体重をかけて、勢いをつけて、我武者羅に彼のイチモツを擦りあげる。その度に彼が零す声もたまらない。じんじんとした快感の中に違った興奮が混じり、さらに腰を動かす速度が上がっていく。

「あふっ、あう、んっ、くっ、ああん……。いい、いいです！ 気持ちいいです！ わたし、バカになっちゃいそうです！ 今まで何度もバカなオナニーしてきましたが、これはダメですっ！ 本当に、ダメになっちゃいますっ！ 司令官とのセックス、司令官使ってオナニーしてるみたいでっ！ そんなの不謹慎なのにっ！ ちゃんと愛してるのにっ！」

ぶちゅっぶじゅっ、と一突きごとに潮を噴く。だらしのない顔をしつつ彼の身体に腕を回しながら、それでも腰の動きだけは一切緩めない。厚い胸板に乳首を擦り付け、開かれた彼の口を自分の口で塞ぎ、大好きな彼の全てを感じながら獣のように腰を動かし続ける。

「しれいかん、しれいかん、しれいかんっ！ 気持ちいいですよねっ？ 感じてくれますよねっ！？ だからこんなに固くなってるんですよねっ！？ また、たくさん出てくださいね！ わたしの膈内にたくさん種子種注いでくださいねっ！ わたし、ちゃんと孕みますから！」

彼の腰が少しずつ浮いているのがわかる。呼吸が浅くなっているのがわかる。もうじき果てそうなのだろう。

「わたしもイきますっ！ 一緒に、一緒にイきましょう！ 二人で、一緒に！ ああっ、もう、イきそうです！ しれいかんも、しれいかんもいっしょにっ！」

ほとんど口を開いたまま話すものだから唾液がそのまま垂れていき、浅い呼吸を繰り返している彼の口の中に入っていく。段々と呂律の回らなくなってきた朝潮は思いっきり彼の口に吸いつき、自分の唾液を彼に押し付ける。

「んんっ、んんんっ、んっ、んんっ、んむうっ――！」

朝潮の身体が跳ねた。そのすぐ後に彼の身体も小刻みに跳ねる。がくがくと身体を震

わせつつ長い息を吐き、脱力感と倦怠感に身を任せる。

「はあっ、はあっ、はあく……。また、たくさん出ましたね……。お腹の中に司令官の熱いのが感じます……」

二人でしばらく余韻に浸ってから、朝潮が自分のお腹をさすった。幸せそうな目でそうする姿をしばらく見ていると、彼女の表情が焦ったものに変わる。

「は、激しくイッたせい……。あ、ダメ、出ちゃう……!」

何とか身体を起こして彼の上から降りようとしたようだが、それすら叶わないままにじょわわと音を立てて黄金色の液体が溢れてくる。すぐに色々なものと混ざって二人の身体を伝い、独特のにおいを立ち上らせる。

「ごめんなさい、司令官。今度はわざとじゃないです……。でも、これでもう司令官はわたしのものですからね……」

そんな状況でも、朝潮は彼を抱き締めたまま動かない。ここまで来たら、今更どうこうしても仕方がないということだろう。

「あははっ……。こんなに激しくされちゃったら、もう他の子のことなんて考えられないよ……」

ずっとされるがままだった彼が朝潮の身体に手を回し、ぐっと身体を引き寄せつつ期待の入り混じった声でそう告げた。

「司令官、それじゃあ……!」

「うん。それにボクにはもう朝潮の、その……。えっちなにおいが染み付いちゃってるから、ね?」

今までで一番輝く彼女の瞳に見つめられ、少し恥ずかしくなって言葉を誤魔化した。告白の返事としてはかなり最低なものだったが、朝潮の目にはどんどん温かい涙が溜まっていく。

「はい、はい……。司令官は、わたしだけのものですからねっ……!」

満面の笑みでそう言われ、釣られて笑顔を返す。酷く予想外のことではあったが、朝潮の気持ちは純粹に嬉しいし、そういう関係になるのも願ってもないことだ。それに、そうなれば途中で聞いたような行為は控えてくれるだろうとも思った。が、それは少しばかり甘い。

「それじゃあ、早速二回戦いきましょう! 今度はラブラブエッチですね!」

「え? あ、ちょっと朝潮?」

「一度だけじゃ受精しないかもしれませんから、お腹いっぱいになるまで注いでくださいね!」

「ちょ、ちょっとまって朝潮おっ!? んんむっ!?」

早速唇を奪われているし、朝潮の手は再び彼の肉棒をそり立たせようと弱い部分を的確に狙ってくる。散々待ての指示を受け続けてきた朝潮の性欲はまだまだ枯れることはない。どうせここには誰も来ないのだ。朝まで彼が解放されることはないだろう。そしておそらくは、その先もずっと。場所が変われど、朝潮の気持ちに収まりがつかずはきつとこの関係が続いていく。

人間には才能というものがある。ない、というものも含めて。

幸いに生まれ持ったとして、それを選ぶことはできない。類まれな泳ぎの才能を持つたまま、山奥の寒村で生涯を終える人もいる。芸術家の才能を持ちながら、平凡な会社勤めに一生を捧げた人もいるだろう。

僕はといえば、才能というものはない存在だと思っていた。特に必要とされず、それを求めず。無関心よりは積極的に嘲笑される側。それが分相応だと考えていた。

あの化け物たちが海から来るまでは。

深海棲艦、と呼ばれる人類の敵。それに対抗しうる唯一の力、少女の姿を持った軍艦、艦娘。荒唐無稽極まる現実に、世界は大きく作り変えられた。

そしてそこで、僕の才能というものが見出された。

僕には、艦娘たちを率いる能力という〈才能〉があった、らしい。

「司令官、失礼します」

控えめでもよく通る声と共に、彼女は入ってきた。地味な色合いのセーラー服と浅黒く焼けた肌、素朴な顔立ち。それらにそぐわぬ無骨な『儀装』をまとった少女。

「お帰り、綾波。大変だったみたいだね」

「いえ、司令官が事前に装備を整えてくれましたから、損害はほとんどありません！ ちょっと服は汚れちゃいましたけど」

照れくさそうに笑う彼女は、僕の鎮守府におけるトップエース、特型駆逐艦II型・綾波。過酷な南方の戦線を支え奮闘した彼女は、歴戦の強者といった風格を漂わせている。それでも柔和な性格は出会った頃のまま、そのギャップが愛おしい。

——いや、そんな生易しい言葉で誤魔化すのはやめよう。僕は彼女が欲しかった。綾波という少女を思いのままにしたかった。

スクールカーストというものはこの国にもある。僕は間違いなくその底辺に居た。蔑まれ罵られ嘲笑われるための役割を背負う身。

そんな僕が、人類を救う希望たる艦娘の指揮官だ。艦娘たちは見目麗しい少女たちで、しかも誰もが僕に好意的だ。それで舞い上がることができれば、まだ良かったのかもしれない。

けれども僕は、そこまで素直に喜ぶことはできなかった。彼女たちが求めているのは〈提督〉としての僕に過ぎない。もし僕が彼女たちを異性として好きだなんて言おうものなら、どんな侮蔑を向けられるか。

不信と被害妄想と言われればそれまでかもしれない。それでも、お世辞にも容貌の優れない僕に特別な感情を持ってくれる子なんているはずがない。そう思うのは当然だと思ふ。

「ともあれお疲れ様。ドック、開けてあるから」

「はい、お風呂ですね、癒やされてきますよ」

だから僕は、もう一つの〈才能〉を使う。誰にも本心を悟られない、外面の良さという〈才能〉を。



機密に類される書類というのは毎日生まれ、毎日処分される。その処分は秘書艦といえど触れることはできない。指揮官自身が責任を持って処分しなくてはならない。——と、いうことになっている。

艦娘たちは知らないだろうが、そんなのはこのローカルルールだ。もっと言えば、僕の都合だ。付け加えれば、この設備の関係でもある。

戦闘で汚損した衣類は艦装の修理に合わせて新品が支給され、古いものは機密保持と汚染防止のために焼却処分される。この汚染防止というのも僕の嘘だ。

回りくどい説明は止そう。僕は書類を処分するふりをして、彼女たちの「古着」をこっそりと手に入れられるということだ。



二度三度と施錠を確認した執務室で、僕は右手を動かす。もちろん上下動だ。握りしめているものは、二つ。ひとつは言うまでもない言いたくない。

大事なのもうひとつ、そこに巻きつけたもの。ついさっきまで綾波の履いていたショーツ。

決して派手とはいえないデザイン。それでも布地の面積は思っていたよりも少ない。浅く日焼けした肌も、これが包んでいる箇所は出会った頃のような白さを残していることを知っている。

中破して帰還した時の、破けた服の下から覗く色。その白さが「見えてはいけないところ」という意識を掻き立てる。

艦娘は少女の姿をしている。けれどその「女」としての部分まではどうなっているかは知らない。一応は「生殖は不可能」「感染症の恐れ」という話はあるが、恐らくはもう手を出して更迭された奴もいるだろう。

僕はしない。せっかく手に入れたこの立場を、この生活を、そして性活を、一時の欲でフイになどしない。性欲くらいコントロールしなくては。

何処かにいるであろう（ひょっとしたらもう居ないであろう）馬鹿を嘲笑いながら、空いた左手でスポーツブラを顔に当てる。思い切り吸い込んだ息は、少しだけ酸い汗の香りと痺れるような女の子の匂いに満ちていた。右手の中で硬さが増す。

出会ったときから、その純朴な様に汚らしい感情を抱いていた。今まで僕を馬鹿にし

てきた女どもへの憎しみを劣情に変えてぶちまけたかった。

たとえば、そう。こうしている時にうっかり鍵を掛け忘れて、いつもの調子で綾波が入ってきてしまったら。

机の上に広げられたさっき廃棄したはずの制服と、僕が握りしめた下着とを見たら。怒るだろうか。恐れるだろうか。泣くだろうか。侮蔑するだろうか。

そのどれよりも早く命令しよう。こっちに来い、と。艦娘は提督の命令には逆らえない。これから何をされるのか解っていても。

続けて命ずる。跪け、と。僕が——彼女の知っている僕が、決して言わないであろう言葉で。

その時彼女はどんな顔をするだろう。きっと怯えたような、信じたくないような顔をするだろう。ひょっとしたら「冗談ですよね？」って聞いてくるかもしれない。耳の奥にその声を幻聴しながら、僕は手の動きを加速する。

立ち上がり、彼女の顔に突き付ける——想像をする。一度として触れたことのない彼女の頬に初めて触れるのは、自分の最も汚らわしい部位。欲望が粘つきながら滴る穂先で、彼女の柔肌を犯す。

綾波が何かを懇願するように声を上げる。それも聞こえないほどの快感が僕を決壊させる。汚穢の濁流が音を立てんばかりに吐き出された。

青臭い白濁が浅黒い肌を染める——という想像を焼き付けて、数億の子種が布地と縫い目に染み込んでいく。

毎度のことながらすごい量だ。気持ちよさはこの上ないが、この一発で満足してしまう。

妄想にはまだまだ先があって、顔射されて放心状態の綾波を犯すところまで行くはずなのだが、既に情欲はショーツの中で凍死していくばかり。

それでも僕は満足気に息を吐き出す。快感の余波に胸が震えて、吐息は笑い声のようになつた。

ああ、そんなことをするわけがない。彼女たちは人類の希望なんだ。それを預かる者が彼女たちを傷付けて良いわけがない。

僕は違う。僕は相応しい。自分の欲望をコントロールして、彼女たちをマネジメント

している。

不感症の潔癖主義者に言わせれば、歪みきった詭弁だろう。だが、こんな環境で僕のような若い男が節制を保つにはこうするしかない。よもや適当な艦娘を娼婦にしることも言うのか。そんな下劣な真似は出来ない。僕は人類の守護者なんだから。

さて、環境の保全と機密の保持だ。最後の務めを果たした綾波の衣服を処分することにしよう。不透明の袋に詰めていく。

名残惜しさはあるが、どうせまた手に入る。人類のために戦い続ける限り。素晴らしい再生産だ。

執務室の扉を開ける。

「司令官、綾波戻りましたあ」

そのすぐ前に、綾波はいた。口から心臓が飛び出るほどの驚きをなんとか隠す。

対して綾波は、にっこりと笑ったままだ。

——まるで、僕が出て来るのを待っていたように？

「あ、ああ、早かったね」

「司令官」

誤魔化して去ろうとする僕を打ち据えるような呼びかけ。半ば返した踵のせいで、手にした袋は綾波の目の前に晒されている。

「それ、なんでですか？」

ぞわり、と背筋に怖気が走った。笑顔が変わらないのが恐ろしい。そしてその笑顔から目が逸らせない。答えようとして、作り笑いをしようとして、口の端が引きつる。

それを合図としたかのように綾波が一步を踏み出す。

本能的に後ずさる。

さらに一步。綾波が執務室に入ってくる。

後ろ手で閉めた扉が、檻のそのような音を立てた。

「あ、あやな……み？」

「それ、なんでですか？」

録音のように繰り返される言葉。だが今度は手が出てきた。逃れる間もなく腕を掴まれる。

「ひ——」

漏れた息に声帯の震えが乗った。決して強く掴まれたわけではない。

だが振りほどこうとすれば握りつぶされるのではないかと思うほどに、何かの意志をそこに感じていた。

「教えてください、司令官」

がちやり。鍵を掛ける音にまた身体が震えた。本能的にまた一步下がろうとしたその時、彼女の手が離れた。

「うあ……っ!？」

無様に尻餅を付く。手から離れた袋が転がって、その中身がこぼれた。

「あ、あああ……」

もはや意味のある言葉は出てこない。さっきまで彼女が着ていた服。下着。そこに付着した白い粘液までもが晒されていた。

「それ、なんでですか？」

三度目の問いは、もはや問いではなかった。僕の首筋を狙ったギロチンの刃。

「——教えてくれたら」

綾波の手が動く。——彼女の、スカートの裾へと。

浅黒く細い指がそこを摘む。持ち上げる。黒いスカートの下の、日焼けの境目。グラデーシヨンのその上までが晒される。

先程の僕が「使った」ものとは比較にならないほどの、彼女がこんなものと思うほどの、布地の少ない下着。

「教えてくれたら、綾波を、もっと——差し上げますよ？」

「——え？」

何を言われたのか理解が追いつかない。追いつかないまま、綾波がこちらに歩み寄る。

スカートの下を晒したままで。

「ばんっただけじゃなくて、その中身も見たいと思いませんか？——おちんちん、こすりつけたくないですか？」

次は耳を疑った。今、何と言った？あの綾波が、何を口にした？

「大丈夫ですよ、まずは見抜きしてください。いつもみたいに、おちんちんしこしこつてみてください」

いつものどこか舌足らずな声が、容赦なく卑猥な言葉を紡ぐ。理解できないのではなく、理解したくないのだと理解した。

そして言葉を理解すれば、身体は反応してしまふ。へたりこんだ僕の両脚の間で、屹々と天蓋を張るものを綾波は見逃さなかった。

「ほらあ、もうかっちかちのびいんびん♪しこつてほしくてびくんびくんしてますよお♡はあやあく♡してください♡」

ひ、と喉奥から声が漏れた。突然の甘ったるい囁き声ではなく、にっこりと細められた目の奥の光を恐れた。僕をどうにでも出来るという意志の欠片。

僕は命じられたかのように取り出す。綾波の卑語と生存本能に近い何かに張り詰めたソレは、幾度かの扱きに隠しようもなく右曲がりに勃起していた。

「きゃあ♡百戦錬磨のオナニストなんですわ、司令官♡みせてくださいあ♡しれえかんの、お・な・に・い♡」

頷きはガクガクと震えた。恐怖からか、倒錯の快感からかは解らない。綾波の瞳から逃れるように、彼女の秘所にびったりと張り付くような下着を凝視して扱き始める。

ついさっき射精したばかりの精囊がまた張っていく。だがまだ快感というよりは痛み、そして恐怖が勝っていた。

「あら？気持ちよくなさそうですね？」  
身体が震えた。表情を伺うことなど出来るはずもない。

「ゆ、許して！ごめんなさい！」  
「あはっ、司令官つたらおもしろおいひと♡オナリながら謝られても困ります♡」

「たすけて……ころさないで……」  
「ひどい人でもあるんですね♡何千億匹もせーしちゃん無駄死にさせておいて……」

綾波の片手が動く。思わず背が反りかえると、その手がセーラー服の裾を掴んで躊躇なくそれを首筋まで引き上げるのが見えた。

手の浅黒さに慣れた目が焼けるように眩い白い肌。微かに膨らんだその頂は桜色。淫靡な色彩に欲情が弾けた。

陰囊が裏返るかのような勢いで飛び出した精液は高く打ち上がり、その桜色を白く上塗りした。

「きゃあっ♡どーてー司令官の無駄撃ちせーしちゃんつたらあ♡まだ綾波、おっぱい出ませんよお♡」

めっ、と子供を叱るような声を出して、乳頭に掛かった精液を指先で塗り広げていく。汚れていく。僕が汚すはずの綾波が、自分から僕で汚れていく。

違う。こんなのは違う。僕が汚したかったのは、僕が犯りたかったのは、純真無垢で僕のことなど疑いもしない、柔和で穏やかで愚鈍で都合のいい少女そのものの綾波だ。

だというのにその綾波は、今。  
「ねえ、司令官……♡」

僕に、歩み寄って。  
「この可哀想なせーしちゃん達、今度は——」

まくり上げたスカートの下の、ショーツに指を掛けて。  
「綾波のなかに——ください♡」

く、いとずらされる布地。そこに表れたものに僕の目は釘付けられた。  
「あ……あ……」

喉が震えて声が漏れたのは、それが受け入れがたいものだったから。  
綾波のソコは、僕が思い描いてきたもの——未成熟な少女の白磁のような秘裂ではな

く、淡い茂みの下に花卉のような陰唇が顔を覗かせる、紛れもない「性器」だった。  
「どうですか、綾波のここは？もし司令官があ……童貞で、下着泥棒で、オナニストな

上にロリコンの変態多重苦さんだったらごめんなさい♡綾波も司令官のことと思って、  
自分でおまんこ使いすぎちゃいましたあ♡」

言うが早い、空いた手の二指をその陰唇へと滑り込ませる。まるで吸引するかのよ  
うな滑らかさで吞み込んだそこから、ぬち、くちゅ、と粘った音がした。

「んひう♥司令官のおちんぼ欲しくて、こんなになっちゃいましたあ♥でもお、膜はちゃんとありますよお……ほらあ♥」

深く挿入した指が、僕の目の前で陰裂を割り開く。より大きな水音と共にむせるような匂いが脳髓にまで染み込んだ。

広げられた花卉の上に小さな突起がピンと上を向き、薄桃色にぬめる柔肉が小さな口をバクバクと動かしては、涎のような愛液を垂らしている。

これは、そう。獣の口だ。今から獲物を食らうための。

「よおく見てくださいねえ……もうすぐ、なくなっちゃいますから……」

突きつけるように綾波が一步前へと出た。より強くなる匂いは、良く知っていた。

幾度となく顔に当て、嗅ぎ、時には口に含むことすらした匂い。

それとは比較にならないほどに濃いそれは、もはや臭気にも近かった。後ずさろうとする一瞬前、綾波が更に踏み込んだ。

結果、綾波は僕の顔に跨る形になる。

口を塞がれ、鼻は陰毛にくすぐられながら雌の臭いを貪るしかない窒息へと追い込まれる。

「こわくないですよお♥おいしいですよお♥司令官のことしか考えてないおつゆですよお♥」

綾波が腰をグラインドさせる。その動きが強制的に開口させてくる。

流れ込んでくる愛液を遮ろうと、なんとか押し返そうと思わず伸ばした舌が触れたその時、彼女の身体が電流を受けたように痙攣した。

「あああああんっ……だめえ♥」

「ぐ……ふ……」

彼女の両腿が僕の顔を締め付ける。首を折り、頭を潰されるかと思わされる恐怖。

本能的に酸素を求めて息を吸い込む鼻から、容赦なく彼女のフェロモンが流れ込んでくる。雄を屈服させる雌の瘴気。

犯されている。僕は彼女に今、犯されている。その事実を僕を支えていたものが崩れる。

彼女の脚が緩められると同時に、僕は執務室の床へ仰向けに倒れた。

見上げるのは背を弓なりに反らしながら膝を折る綾波。

ぼたぼたと滴り落ちる淫蜜が僕の顔へと滴り落ちてきた。もはやそれを甘んじるしかない。

やがて糸の切れたパペットのように、綾波が僕に覆いかぶさる。

「あっ♥綾波のお汁でお顔があ♥きれいにしますう♪」

むしゃぶりつくように綾波が僕の顔を舐め回し、唇を貪る。

初めてのキスという事実さえ上滑りしていく。この先にあることを考えれば。

「すき♥すきですう♥んちゅう♥いい人ぶって、きれいなフリして、本当は卑怯卑劣な変態さん♥はむ、ちゅっ♥綾波だけが知ってる司令官の本性、みんなにも教えてあげたいなあ♥」

「む、はっ……や、やめ……」

呼吸を奪われるような愛撫と口吻。

奪われていく。僕の身体が、心が、ブライドが、理性が。

「じょーだんですよお♥こんな情けなくて変態な司令官は……綾波だけのものですからあ♥」

綾波の身体が離れる。それと同時に、痛いほどに張り詰めた僕の怒張に彼女の指が絡んだ。

「だから……いっしょに、もうオナニーじゃ満足できないカラダに……なりましょ♥」

その先端が導かれる先は、灼熱を錯覚する柔肉。まるでそれ自身が意思を持っているかのように、雄を受け入れる期待に垂れ下がった陰唇が吸い付く。

次に待つのは紛れもない屈服。僕は今から、この駆逐艦に蹂躪される。

屈辱が快感に上塗りされるのを感じながら、僕は首を何度も横に振った。

「い、いやだ……たのむ……やめて……」

「やめて、ばかりですよね。司令官は」

突如としてトーンの落ちた声音に身体が凍りつく。首はちょうど真上を見上げていた。つまり、綾波を。

淫らに蕩けていた顔は心底の侮蔑へと豹変していた。ただ瞳の中にだけ、変わらない

光が宿っていた。

「綾波が、こんなにしてあげたいのに。してほしいのに。されたいのに。させたいのに。」

だから、こんなになっちゃったのに」

その光がゆっくりと近付いてくる。

「司令官が綾波の下着で何をしているか知った時、最初は怖かった。いつか綾波自身も、こんな風に汚されるんだって」

話し声の息遣いすら触れる距離。彼女の顔が視界を占めた。

「けど、同時にとてもいけない感情が綾波の中に生まれました。この人に汚されたい、壊されたい、滅茶苦茶にされたいって。でも」

唇が重なる。拒む間もなく舌が割り入ってくる。

僕の両目にはもう、開かれたままの綾波の双眸しか見えない。口内を蹂躪されながらも、その目に縫い付けられたように身体は動かない。

拒むつもりは僕の舌だけは動き、それもただ絡め取られるに終わる。

窒息感に気が遠のきかけたその時、ようやく唇は離れた。

「あなたは何もなかった。してくれなかった。解っちゃったんです。この人は、自分を綺麗のままにしておきたいんだって。それって——綾波と、同じだって」

顔のラインを確かめるように、彼女の指が僕の頬をなぞる。そこにはひんやりとしたぬめりが伝う。石垣を侵食する蛭蟪みたいだ、と麻痺しかけた頭は考えていた。

「あなたにとって都合のいい、何も知らない綺麗な子でいるつもりだった」

綾波の左手が服の裾を掴み、引き上げる。右手がスカートの裾を掴み、持ち上げる。露わになる素肌。焼けた肌。白い肌。

「けど、もうそれじゃ満たされないから。壊れちゃったほうが楽だから。だから」

ず、と重々しい所作で綾波が腰を落とす。僕の先端が飲み込まれていく。

「おっ……あ！」

「したい。させたい。してほしい。それしか言えないように……司令官も壊して、あげます♥」

綾波の顔が再び蕩ける。淫猥に、そして狂気に。

彼女の腰が激しい上下動を始めた。包み込むというよりは締め上げるかのような膣内は、それ自体が僕への苛虐を楽しむかのように蠢いている。

「んっお、は、く、おっ……」

「我慢はあ、ダメですう♥おとなしく、ちんちんに♥したがってえ♥」

再び卑猥な言葉での責めが始まる。僕は歯が砕けんほどに食いしばってそれに耐える。

だが綾波の肉壁が僕の怒張を逆撫でする度に、その力すら抜けてしまう。背が反り、眼球が裏返り、意にない声が漏れる。

僕は努めて思い出す。艦娘との接触に対する禁則事項。

感染症のリスク。生殖機能を有する可能性。発覚時の処罰。その他諸々。手と足がそれに応えて弱々しくもがく。綾波はなおも楽しそうに言った。

「だあいじょおぶ♥かんむすとのえっちはあ♥びょーきも♥にんしんも♥ありませえん♥」

「う、うそだっ」

言い返す僕の心は動転していた。それならこの行為の意味は。

「かんむすが♥なかだししほーだいの♥ちんずりあなだなんて♥しられたらあ♥だあれもしごと♥してくれませんもの♥」

言葉を区切りながら腰を叩き付ける綾波。その動きが突然に加速する。

「あっ、が、くう……っ！」

「だ・か・ら♥むせきにんに♥しゃせー♥しましょ♥」

耳元で熱を放つような言葉が紡がれる。削り取られ摩耗した精神に、もはやそれに抗う力は残されていない。僕は為す術なく精子を吐き出す。

「あ、がああ……っ」

「あはあ♥せーしちゃんいらっしやあい♥ティッシュでもばんつでもない♥おまんこのなかですよお♥よかったですねえ♥」

綾波は歓喜に歪んだ嬌声を挙げつつ搾り取るようなねっとりとしたグラインドに切り替える。膣肉の執拗な絡みつきには、これで終わらせるつもりなどない意志が籠っていた。

「あん♥にげないで♥あやなみがいくまで♥ついてくれたら♥にがしてあげます♥」

そんな言葉を信じられるわけがない。生殺与奪に等しいものを握っているのは綾波だ。だが、その蕩けきった表情は彼女もまた限界が近い証でもある。

「しれえかんのどーてーおなにーちんぼ♥なまはめまんこじゃないとイけなくしてあげ

ますから♥がんばりましょうね♥」

そんな顔で、僕を侮って、嘲って。射精の余波が収まってきた心が、それへの怒りを巻き起こす。

思い知らせてやる。どちらが上なのか、文字通りカラダに教えてやる。屈辱に床を掻くばかりの手を伸ばし、彼女の腰を掴む。

「あっ♥」

「……ちくしょう……ちくしょう……！馬鹿にしやがって、馬鹿にしやがってえ！うわあああああっ！」

「きゃあんっ！あつ、しれえ、か……っ」

滅茶苦茶に突き上げる。綾波が顔を歪ませ、先程とは温度の違う声を上げた。

「くそお、くそおっ！イけっ！イっちまえよお！」

弾き飛ばすように腰を叩き付け、浮き上がる綾波を引き寄せる。抽送というよりは打突に近い乱暴さ。

「あつ、だめ、そこだめのっ！や、あつ、ああああああああんっ！……！」

両手を頭に当てる背を仰け反らせる綾波。絶叫と共に全身を痙攣させる。

やった。イかせた。この僕が、この気の触れた駆逐艦を懲らしめてやった。僕には才能がある。女を屈服させる手管も。

さあ、顔を見せてみる。だらしなくいった雌の顔を。僕に屈した証を――

「……なあんちゃってえ♥」

「なっ……？」

がばり、と音がせんばかりの勢いで綾波が再び僕に覆いかぶさる。その表情はさっき以上に狂った淫蕩に染め上げられていた。

「しれえかん、かあわいい♥あんなのでいくわけないじゃないですか♥ちんぽはそつぎょーしても♥あたまがどーのまんま♥きゃはあ♥すきい♥」

「んむっ！ぶ、はあ……ぐう……」

獣が獲物を貪るような口吻が浴びせられた。彼女の舌が這う度に、僕の中に残るブライドが舐め取られるように崩れてゆく。

「しましよ♥もつとしましよ♥ひきょーひくつなしれえかんを♥あやなみせんよーち

んぽに♥きたえてあげますう♥」

言い終わらない内に綾波の腰がまた動き出す。二度の射精で過敏になった僕を引きずりあげるような刺激が脳髓まで突き込まれる。

「ぐが、ああっ！！」

唸り声が裏返る。それこそ身体の内側と外側を裏返されるほどの快感。いや、それを通り越した痛み。激痛といってもいい。

「あや、な……っ！や、め……」

「やめて？」

「がっ……！」

綾波の細い腕が伸び、華奢な指が僕の首筋を掴む。

「そうじゃ、ないですよね？」

再びあの表情。あの眼光。目の前にあるものを壊し、支配する獣の顔。

浅黒い肌が光をも飲み込む暗闇に見えた。

電灯が切れたように視界が明滅する。白と黒。白と黒に。

ああ、そうだ。僕はもう、飲み込まれるしかない。白を装うことなく、黒へと染まるしかない。自分の意志など、立場など、意地など、矜持など、保身など、ない。

「……したい」

「はあい？」

「……させたい」

「はあい」

「してほしい……っ！」

「……はあい♥」

再び綾波が動き始める。奪い尽くすため。絞り尽くすため。喰らい尽くすため。僕はそれを望みとしない。けれども、望みとしないてはならない。行かねばならない。彼女の招いた、境目の向こう側へと。

気が狂うほど綾波に犯されてから一週間が過ぎた。幸いにしてあの一夜で僕は解放された。

翌朝ベッドの上で目を覚ました僕の前に彼女の姿はなく、再び遠征に出たとの報告を受けた。

全てが悪夢だったと断じるには無理があった。飛び飛びでも生々しすぎる記憶。

その断片もあの狂気に満ちた笑顔に埋め尽くされている。それから、彼女の白い肌と黒い肌。ついでに透明な汁を噴出する僕のモノ。

すべて、現実だ。

その証拠に、もう下着を盗んだりしない。それどころか性欲すらない。艦娘たちのあらゆる姿に何も感じなくなった。

吐き気がする。手が震える。目眩がする。それでも他の艦娘には気付かれないようにしてきた。

僕は優秀で、才能があって選ばれた、人類の守護者。そのように振る舞わなければならぬ。

廊下の窓から外を見る。見えているのは景色ではなく、そこに映る僕の顔。

——司令官も壊して、あげます♥

違う。僕は壊れてなんていない。壊されてなんていない。僕は——

〔司令官〕

〔あっ!?!〕

不意の声に上ずった声で返す。振り向くとそこには彼女。

視線が暴れた。探していたのは他人の目か、それとも逃げ道か。

ここには僕と彼女しかない。

逃げ場所も、ない。

〔戻って………ただ〕

〔どうしました? ご気分が優れませんか?〕

顔を覗き込んでくる表情は、まるで僕を心底心配しているようで。

けれどそれを信じる事が出来なくて。沸き起こる恐怖に足がもつれる。

〔あ………あ………〕

胸が早鐘を打つ。それは恐怖のそれでもあったが、同時に血流が下腹部に集まるものも感じていた。

僕は彼女を恐れているのか。それとも彼女に興奮しているのか。

「いけませんね、こちらへどうぞ」

彼女が僕の手を握った。僕には抗えなかった。

ぼたん、と扉が閉じる音。それは執務室のそれではない。医務室でもない。狭い空間。とても狭い空間。その中心にあるのは白い便器。

「な、な……」

「ようこそ、じょ・し・と・い・れ♥ずっと入りたかったんじゃないですかあ？」

後ずさりは二歩もなく、壁際でへたり込む。冷たいタイルが僕の身体を震わせる。

「いいもの、みせてあげますね♥」

スカートのポケットから何かを取り出す。薄桃色の、プラスチック製の棒。その片方を引き抜いた。

「それ……」

「あはっ♥へんたいさんならしてますよねえ♥」

彼女は躊躇いなくショーツを引き下げ、しゃがみ込む。性器を見せつけるかのような蹲踞の姿勢。その前に棒をかざす。

「んう……♥いまさらだけど、はずかし……あはあ♥」

しゃああ、と勢い良く彼女の陰唇から逆る流れが棒に降りかかる。

「なんで……そんな……」

「ごめんなさあい♥あやなみ、ウソついてましたあ♥」

やがて流れはぼたぼたとした滴りになり、止まる。その雫をも擦りつけて綾波は立ち上がる。

「かんむすはあ……にんしん、しまあす♥」

その顔はとびきりの狂気に染め上げられて、僕の最後の抛り所を断頭した。

「う……そだ……」

「あはあ♥子作りしないのに♥おまんこ♥あるわけじゃないですかあ♥かんむすがただの♥てーとくせんようおなほって♥おもってましたあ？」

彼女は手にした棒——妊娠検査薬をかざしながら言う。

「んう……まだわかんないですう♥にんしんかくじつせーし♥ほしいなあ♥」

彼女が僕に跨る。ズボンを、下着を剥ぎ取る。僕に抵抗は出来ない。なぜなら。

「しれえかあん♥わかりますよねえ♥」

「……したい……させたい……させてほしい……」

うわごとのように僕は呟く。それが僕に、境目の向こうへと落ちた、僕に許された唯一のことだから。

「あはっ……やりましたあ♥」

そして僕と繋がった彼女は、検査薬を見て嬌声を上げる。

また視界が明滅する。

白と黒。

白と黒に。

シロクロ。

シロクロと。



# 「メール」

夜の11時。

エメラルドグリーンのリボンが執務室の扉にかけられている。

それが私達の合図でした。

「……提督」

リング泊地第三十区画鎮守府、鶴岡提督の執務室を照らすのは、窓から差し込む月明かりだけ。

ほの暗い部屋の中で、ワークチェアが軋む音が響いていました。

軋ませているのは、提督と私。

ワークチェアの前、執務机の上に、書類は少し。

ペン先の乾いた卓上筆の隣に、四ヶ月前に書いた、出撃記録が載っていました。

四ヶ月。この間に振り返るほど、多くのことはありませんでした。

あったのは、ただ一つだけ、提督とずっと、セックスしてただけ。

「ふっ……ふっ……あははっ」

背もたれを倒したワークチェアに身体を預けながら、私は、つい妙なおかしさに笑ってしまいました。

ボタンを外された白いブラウスも、首に掛かるだけのエメラルドグリーンのリボンも、胸の谷間を出されて、衣服にもやはない赤紫色のミニスカワンピースも、夕雲型駆逐艦一番艦のものなのに。

私は、この四ヶ月、駆逐艦として戦っていなかったのですから。

毎朝丁寧に結わえている三つ編みも、夜ごと解かれて、今日もすでにぐしゃぐしゃ。

白いストッキングは、毎回破られちゃうから、また明日、新しいものに変えないといけません。

下着だって、もうぐちゃぐちゃに濡れてしまっているのだし、新しいものを申請しようかしら。

……明日がもしも、あるのなら。

「ふっ……ふっ……ふっ」

「……どうした、夕雲」

ワークチェアの足下に跪いて私のスカートの足を喰らうように嗅いでいた提督が、そん

## 作…初瀬川みづる 絵…結城私心

な私の笑いに、寂しそうに問いかけてきました。

怯えたまなざし、虚ろな瞳。

私にすがる、瘦けた面立ち。

力の無い、笑み。

言葉を失わせる笑みが、私の方に向けられていました。

彼は、なにも知らないのでしょうか。

私がなにに笑ったのか。私がなにを、笑ったのか。

私は彼には告げません。

代わりに破れた白いストッキング、その太ももの間からこちらを覗いてくる提督の頭を、

私はゆっくりと撫でてあげました。

「いいえ、提督。なんでもありません」

夕雲型駆逐艦一番艦、夕雲として、私は笑ってみせます。

ワークチェアの肘掛けに自分の脚を引っかけて、Mの文字のように広げながら。

撫でた手をすべらせて、スカートの端をそっとつまみ、自分のお股を晒しながら。切なげに空いた片手の小指を食み、潤んだ瞳をそっと細めながら。

秘書艦夕雲は、提督に微笑みを与えます。

「提督のお好きなように、今日も秘書艦、夕雲を、お使いくださいね」

提督の目に、深い笑みのシワを刻ませるために。

リング泊地第三十区画鎮守府、唯一の艦娘として、勤めるために。



私の提督、鶴岡提督は、一般的に見ても優秀な提督ではありませんでした。

ひょろっとした学者さんのような風貌をしていたけれど、計算ごとや謀には疎い人だったし、書類仕事も苦手そうで、よく誤字がありました。

地域住民との打ち合わせや、艦娘の作戦会議を忘れたりすることもありましたし、よく本営からはお叱りのお手紙が届いていました。

叱責の声や、注意の声に、彼はただ笑うだけでした。

「すまない」「申し訳ない」という言葉もなく、笑うだけなのは、彼にとって、もうそんな言葉は言い飽きたと言うことだったのかも知れません。

それでも、以前の彼は、深海棲艦との戦いに向き合う人でした。

少しでも良い成果をあげることが、彼なりにには頑張る人でした。

だから、私は、そんな彼のフォローをすることこそが、自分の使命なのだと言いつ聞かせ、彼の秘書艦を勤めてきました。

だめ男製造機だから心配、と姉妹艦の長波さんには言われてしまったけれど、私はそれでもよかったです。

提督を支える秘書艦って、そういうものではありませんか。

着任できる提督を選べるわけではありませんし、艦娘である以上は、提督に付き従うものなのです。

私は提督のお力になれているのであれば、それでよかったです。

『秘密の合図』も、その一環でした。

たくさんの艦娘の中で、提督は男の人。

私はむしろ、『そういうこと』を求める人であることに、ほっとしていたんです。

普通の男の人なんだな、って。

当時は良く一緒にいて、ざっくばらんにお話しできた秋雲さんからは、『のろけ乙』みたいな言葉をいただきましたけど、互いを知っている間柄で、相応に尊敬している男の人から、真摯に求められるのって、私には悪いことのように思えませんでした。だからかしら。

『彼をお慰めする任務』は、嫌では無かったです。

ひょろりとした風貌とは裏腹に、黒くて固くて、長い……そんな彼の大切な部分を、最初は手で、お口で……胸で、太ももでと、徐々に段階を踏みながら、お慰めしてきました。それでも最後の一线はずっと守っていて、私を貫くことだけは、避けていました。

「後戻りできなくなるし、知られれば僕は君と一緒にいられない」という理由だったのですが、きっと私を案じていたのだと信じていました。

変な気遣いを見せるところも、提督らしくて微笑ましかったのを良く覚えています。

いつも提督から求められて、私は断ることをしませんでした。

大きな提督の手で、体中を触られて、少し高めの鼻で嗅がれて、微かに無精髭の残る唇で舐められて……。

とても恥ずかしかったけれど、かつてはまだ、深海棲艦との戦いの間にあって、彼と触れ合うことは戦いを忘れられた良い一時で、微笑み合いながら触れ合う時間は楽しかったです。

あの瞬間は、きつと提督の一番であったと信じていました。

提督の一番でいられている私は、誇らしくて好きでした。

そんな私でいさせてくれている、提督が好きでした。

でも、ある日。

この鎮守府に舞い込んだ、大きな遠征任務、その終わり。私達の部隊が深海棲艦からの不意打ちを受けました。

部隊の皆が疲労困憊の中で受けた一撃で、姉妹艦、巻雲さんが、轟沈しました。

深海棲艦は無我夢中で撃破したけれど、巻雲さんは、もう戻ってきません。艦娘ですら、こういう事態はもちろん想定の内でした。

けれど思い描いていたからと言って、現実として直面したら、それを受け入れられる訳ではありません。

哀しみにくれた鎮守府の空気を、秘書艦である私は変えられませんでした。提督はそんな私を、責めることはしませんでした。

『艦娘の本領』を求めて、巻雲の無念を晴らすという復讐<sup>はた</sup>を掲げる艦娘達の言葉を、提督はやはりただ笑って受け止めてくれました。

自分の言葉の代わりに、相手の言葉を失わせる、いつもの笑み。鎮守府所属の艦娘達は、提督が出撃を嫌がったことを主要因にして、私を含めてどんどん出撃の機会を失っていきました。

出撃の機会を失った艦娘達は、別の鎮守府への転属や、艦娘自体をやめていきました。なにもいってはいきませんでした。黙って私をかばってくれた。

私は、そう思っていました。

不甲斐ない秘書艦となっていた私を、それでも秘書艦としておきつづけてくれた提督は去って行く他の艦娘に、やはりただ、笑みだけでした。

そうして、リング泊地第三十区画鎮守府は、所属艦娘を次々と失い、そして……最後まで残ってくれていた長波さんが、鎮守府を去ったのが、四ヶ月前。

リング泊地第三十区画鎮守府所属艦娘は、私だけになって、この四ヶ月間、出撃も、遠征も、なにも、していません。

提督がしていたのは、提督のタイミングで、緑のリボンを執務室の扉にかける。ただ、それだけでした。



私のお股をしゃぶって頂いた、お返しに提督をお慰めして。

ゴクンと飲み込んだ提督のおつゆの味を喉の奥に感じながら、居住まいを正して、私は明け方、部屋に戻りました。

ぎいと開いた扉は、少し前から立て付けが悪いので、明日はその申請書をゆっくりと書くことが仕事になりそうだ、なんて思いながら、一人だけの二段ベッドに身体を投げ出しました。

一時間ほど眠れば、総員起こしの時間です。

総員といっても、私一人だけ。

それでも、規則に則って行動するのが、艦娘である以上当然の態度なので、起きねば成りません。

こんな生活が、四ヶ月、大体三日に一度のペースで、繰り返されていました。

「……寝ないと、少しでも、いいから」

幾度も、身体の奥に熱く走る絶頂の感覚に焼かれたから、背中や腰が痺れたように倦怠

感を覚えているのに、冴え冴えとしてしまった頭は、うまく私の身体を寝かせてくれません。

言い聞かせるように言葉にしても、簡単には寝られない。

一度投げ出した身体を起こして、私は真つ暗な部屋の中で、せつかく正した衣服を脱ぎ去って行きます。

まるで、お人形さんのようでしたけれど、きちんと、しなければ。

私は、夕雲型一番艦夕雲。

主力オブ主力なので、すから。

「主力オブ、主力……ふふっ、一人だけしか、もう、居ないのに」

唇を微かに動かすように言葉にします。

言葉にして吐息になると、ほんの少し、提督の精液の臭いがありました。

幾度も熱く頂いた、提督のお汁の臭い。

胃が、爆発したように、喉が引き絞られました。

「うっっ、んぐっ」

慌てて口元に手を当てましたけど、もう遅くて、私はベッドから飛び跳ねるように床に膝をついて、もう抑えられない嘔吐感のまま、胃の中を戻してしまいました。

喉の奥から、お腹の中まで、体中がひりひりと熱くて、痛いんです。

目の奥が溶けてしまったように涙がこぼれて、鼻水だって垂れてしまうのでした。

「はっ……はっ……はあっ……はあっ」

舌先から唾液と胃液が混ざったものがこぼれ落ちて、床を汚してしまいました。

白い何かも、胃液にまざってしまいましたけれど、もう涙で何も見えませんでした。

せつかくさつき結び直した三つ編みに吐瀉物がかかってしまいました。

汚れてしまった身体を清めるために、早くお風呂に入らないといけないのに。

きちんと、夕雲型として、やらないといけないのに。

主力オブ、主力なのに。

「うっっ……うああっ……ああっ……」

心がぎゅっと、締め付けられて固まってしまったようで、私は、痛くて、痛くてその場から動けませんでした。

私は、動けないままの身体で、なにも出来ない秘書艦で、なにも守れない艦娘でしかありませんでした。

戦友を失ったことで、壊れてしまった、欠陥品の艦娘でしか在りませんでした。秘書艦の勤めがなければ、艦娘でも、もはや居られませんでした。

ただ出来たのは、汚れてしまった床に、叫ぶように何かの汁を垂らすことだけ。真っ暗な部屋の中で、私は、ただ自分の目の前に、身体の中の汁を、吐き出し続けるばかりでした。



朝日が、窓から差し込んで、湯面をきらきらと光らせていました。

艦娘の身体を癒やし、清める入渠ドックの中に、私は身体を揺蕩わせていました。

いいえ、入渠ドックといっても、艦装が傷つかないのなら、ただのお風呂に過ぎないので、お風呂にはいって、ただですね。

一睡も結局出来ていませんでした。

代わりに、何かをすることも出来なくて、総員起こしの時間、唯一睡眠してよい例外が認められた、入渠ドックに身体を運んでいました。

曇りガラスの向こう側に、朝日が差していました。

体中の液体があふれ出てしまったかのような一時も、遠く昔に思えるほど、呆然と、私は髪だってお湯につけたまま、窓を見つめていました。

長い髪が、海藻のようにお湯の中に揺蕩っていました。

お湯の中の髪先を指でくると纏わせて、その指先をそっと、自分の胸に当ててなぞりました。

少しだけ小ぶりになった胸に、髪が這ってまるで縄のように私の胸に伝っていきます。左の鎖骨から胸の谷間を通して、右の胸の外縁をなぞって、右の鎖骨を通して、胸の中心に指をやると、八の字のように、胸を髪が包んでいく、ふわりとお湯の流れに解けて

いききました。

私は、そんな子どものような遊びを、何回か繰り返して、ふと、口元を緩ませました。

どんなに胸を縛ろうと思っても、髪はお湯に解けてしまって縛れませんでした。

ごく簡単な遊び、手慰みにもならないそれが、なんだかとてもおかしくて、哀しくて。

そっと指先に纏わせていた髪を外して、私は、そっとお湯を手にとって顔を拭きました。温かい感触が包むのに、少しだけ浸ってから、入渠ドックから立ち上がりました。

ぼたぼたとお湯が髪先から、身体からこぼれ落ちました。

「……そうね、そう、よね」

その様を一瞥して、私は一人だけの入渠ドックで咳いてから、脱衣所へと向かっていきました。

入渠ドック側の扉をしめて、脱衣所と入渠ドックの通路の間にあるコンソールパネルを、身体を拭かないままに手早く操作し、アラート音を無視して、操作を完了しました。

ふっと微笑んだ私は、そのままの脱衣所へ向かって歩んで、脱衣所の扉もしっかりと閉めました。

少し経ってから背後で、滝の爆発するような大きな音がしました。

遠く、入渠ドックの窓には大量の液体が窓を埋め尽くすように注がれていました。百九十単位の高速修復材が、入渠ドックを埋め尽くしていました。

私は、そんな光景にちらりと一瞥してふわりと眦に笑みの皺を加えて、髪をきちんと結わえて、ブラウスを整えて、赤紫色のミニスカワンピース、そのスカートの襞もしっかり付けて、新品の白ストッキングで新品の薄紫色の下着を包み込むと、鏡では確認しないままに、脱衣所を後にしました。

エメラルドグリーンのリボンだけは、手にしたままなのですから、確認するまでも無く、着乱れていましたので。

深夜1時半。

◆

私が、丁度提督の机に備えついた内線を切ったタイミングで、執務室の扉が開きました。エメラルドグリーンのリボンがかかった扉が、ぎいと音を立てて開きます。

「こんばんは、提督」

「……夕雲」

私の名を呼んだ提督の声の後、執務室の扉の鍵が、カタンとかけられる音がしました。部屋の中は執務机にあるデスクライト以外は真っ暗なので、歩み寄ってくる提督の顔は

臍氣にしか見えませんでした。すこし、困ったような表情をしているのだらうな、と

「……夕雲」

は感じ取れました。

それは、そうだと思います。

「……どうして、君がその椅子に座っている」

私が執務机に座って、提督を待ち構えていたのですから。

「……どんな風に私達を見ていたのか、一度見てみたかったです。それと……今日の合図は、私がつけたものですから」

「……どういう、ことだ」

執務机からゆっくりと立ち上がると、私は彼の言葉には応えないまま、ゆっくりと微笑んで、彼を執務机の椅子へと手を延べて誘いました。

片手をそっと頬に当てて、瞳を潤ませながらのお誘いに、提督は微かに喉を鳴らして、その誘いに乗ってくれました。

細身の提督の躰をやや過剰に包み込むワークチェアへ提督が座り、その提督に跨がるように、私は躰を寄せました。

その手に、もう一つ忍ばせたエメラルドグリーンのリボンをそっとポケットから出したことを、悟られないようにしながら、提督の胸元へと頬を寄せました。

「……初めて、提督をお誘いしました。いつもは、提督がリボンを巻いてくださいますから」

「……夕雲、一体、何があったんだ」

「ねえ、提督。私って、気持ち良かったですか」

提督の問いかけも、言葉も、何も受け取りません。

笑みを浮かべたまま、躰だけを重ね合わせていきます。

「ねえ、答えてください、提督。私、気持ち良かったですか？」

「……それは」

「答えられない、ですか？ ふふっ……こまったひとなんですから」

提督の回答を食うように結論を投げつけます。どうせ待っても、答えは返りません。

返ってくる人なら、これまでだって返ってきているはずです。

「提督……私は、とても苦しかったです。夜ごと提督と過ごす日々が、苦しくてたまりませんでした。どんなに優しく抱きしめてくれても、どんなに躰を火照らせてくれても、

提督のおつゆを頂いても、私は苦しくて、苦しくて仕方なかったんです」

「でも……でも君が、あんなにも傷ついていたから」

「提督は、私達をなんだと思ってるんですか。……肉便器ですか？ 痰壺ですか？……仮に女の子だとしても、まして艦娘だとしても、貴方は私達が見えていないです……私達を戦いから遠ざけたのですから」

艦娘である私達を戦いから遠ざける。

では私達は、一体何のために艦娘になったのでしょうか。

「だ、だって戦えばまた沈むかもしれない、僕だって、君たちのことをもう、失いたくないか……ないんだ」

取り繕うように言葉を発する提督を、私はただ微笑んで見つめるだけでした。

心は冷えきったまま、いつもの提督のように答えを返したくないから、笑むだけの、笑み。

とても便利で、ずるい手段だと思いました。

ずっと、そうして生きて来たんだと、嗤えてきました。

だから、とびっきり、嗤ってあげました。

手にもったエメラルドグリーンのリボンを握り締めながら、嗤ったんです。

「……失う覚悟もないのに、私達を、戦わせていたんですね。ひどい、人ですね、提督は」

「ち、違う、僕は……僕は」

「戦えば、私達は傷つきます。悲しみます。苦しいとだって、思います。でも、戦えなければ、痛みや苦しみを、乗り越えるチャンスすら得られません」

「っ……そ、れ……は」

「もう一度聞きます、提督。私は、気持ちよかったですか。たくさん戦わない私を、愛してくださいませんか。慰めにつかっていたいたんですよ？ なら、私は……」

私は、気持ちよかったですか？ 白いブラウスを引きちぎって胸でしてあげたのはいかげでしたか？ 赤紫のワンピースにどれだけお汁をかけられましたか？ 白ストッキング

や下着をぐちゃぐちゃにしてみましたよね？ あれ、どうしたんですか？ ねえ、答えてください、提督」

提督の胸元で、私は彼に飛びつきりに嗤って告げていました。頬に熱い雫を零しながら、口の端を震わせながら。

喉の奥が、引き絞られながら、嗤ってあげたんです。

もしも、彼がここで少しでも言葉が発するほどの勇気があったのなら。

たいして気持ち良くなかった、でも、素直に気持ちよかった、でも、言葉をくれたのなら、私は、きっと、それで満足だったと思います。

答えをくれたのなら、こんなに幸せなことはなかったと思います。

でも、彼は、いつもみたいに、力なく、虚ろな瞳で笑うだけ。

いいえ……『違います』ね。

笑った顔のように見える、ただ、泣きそうな顔を見せていただけでした。

怒ることも、嘆くことも馬鹿馬鹿しくなる、ずるい表情をもって、ただ逃げようとして

いただけでした。

そう……気がついてしまったんです。

入渠ドックで、髪を胸に纏わせながら、提督の表情の正体が何なのか。

その戒めを、解く方法にはどんなものがあるのか。

気がついて、なんてことはありませんでした。

ほんの少しでも、抵抗を見せたのなら、戒めなんか簡単に解けてしまう、そんな些細な

ものでしか、なかったのですから。

五分、映る室内時計を見て、答えを待ちましたが、なにも、言葉は帰って来ません。

思っていた通り、なにも、返すつもりは、彼にはありませんでした。

ずっと私と肌を触れ合わせながら、それでも、私は彼のなにもにも触れることができ

ていなかった。なにも、彼を知らなかったんです。

優しいを、何もしないことだと思っただけの人だと、今の今まで知らずに騙されて

いただけでした。

「……もう、いいですよ、提督」

何も言わない提督に、私は耳打ちしました。

ずっとワークチェアの上で、彼に跨りながら、言葉を待った五分間。

彼にももらったたくさんのが、心の中で巡って、解けて消えた五分間。

きっちり経過するのを見守ってから、私は、彼に告げました。

彼の二の腕にゆるりと手をかけながら。

その手首を、さりげなく掴みながら、彼の耳元に囁きました。

「提督が言葉で答えてくださらないのなら、貴方の体に、直接伺いますね」

「ま、待て、何をするつもりだ」

「クスクス、提督が大好きなスキンシップです。いつも、していることでしょうか？」

「……いや、だって、今日は君が」

「そうですね。私がリボンをかけたんです。私が、慰めて欲しいから。初めて、貴方に

私が求めて、この時間を頂きました。貴方の体で慰めてもらうために」

「待て、僕は、今、君とこんなことをしたくない、君に、抱かれたくないか」

「そんなこと、私には一度も聞かなかったじゃないですか。リボンを巻くのは、いつだっ

て、提督でしたでしょうか？ きちんと体の周期を合わせるのに、どれだけ苦労して来た

のかも、知らないではないですか」

ほら、また言葉を失った。

なにもいえない提督の手を、力を込めてリボンで巻いて、椅子の背もたれ、ヘッドレス

トの柱にぎゅっとくくりつけてあげました。

艦娘の挙力で腰を押さえつけてあげたなら、これでもうほら、動けませんよね。

「待って、夕雲、僕は」

「待ちませんよ、提督。貴方は、なにもかも知らないまま、私にただ、抱かれていれば

いいんです」

「夕ぐっ……うっああっ」

抵抗の色を示そうとする提督の股に、手を差し伸べて爪を立てました。

ズボン越しに熱く滾り出しているものに、爪を立てただけ、でも服にしわがきつとつい

ちやいますね。

私の服にだって気を使ってくれませんでしたから、私も気にはもうしません。

べろりと、唇の端を舐めました。

戦う時の、私の癖だと、巻雲さんが言っていましたっけ。

戦いでないのに、久々にやったその癖に、私は目を細めました。

でもおかしいですね、海でもないのに、唇の端は塩っぱい味がして舌がヒリヒリしてし

まいました。

目の奥がぎゅっと震えて、熱くなってしまいました。それでも、震える手に力を込めて、私は提督のズボンのチャックを、強引に、引き裂いたのでした。

◆

むっと提督の臭いが提督の股間から立ち上がります。幾度も幾度も、エメラルドグリーンのリボンが尻にかけられるたび、嗅いで来た、味わって来た臭いです。

提督のスボンのチャックがこわれ、その下のブリーフにも、爪を引っ掛けてビリッと引き裂いてあげれば、一層強く、私と提督の間で臭い立ちました。脈打つ黒くて、太くて、長いもの。

鋼の砲身の代わりに、この四ヶ月、私に与え続けられた、提督の砲身へ、私は爪の先を立てるように指を這わせました。

「うぐっ……ぐ、あ」  
今まで、してあげたことのない行為と、先ほど与えた苦痛からか、提督が呻き声をあげました。

提督は、私が慰めてあげても、全然言葉での反応を返してくれません。

提督が感じているのか、感じていないのか、それ察するのは、いつも私の役割でした。どんな言葉も、かすかな反応も、私の提督が、私を一番の艦娘としてくれるのなら、大切な材料でした。

だから、わかるんです。

さっき痛いようにわざとやってあげたのに、提督は今、気持ちいいって、感じていることを。

「……このまま、握り締めたら、血出ちゃうかもしれないね、提督」

先ほどよりもぐっと爪の先端を食い込ませるようにしてあげても、口をむすんで呻くだけ。

自罰的にでもしているつもりなのかもしれません。でも、指先から伝わるのは興奮の脈動で間違いありませんでした。

ずっと彼を慰めて、彼のお汁をすすって来ました。

艦娘として、彼のそばにいたつもりでした。

提督としての彼を、支えて来たつもりでした。

だからわかりません。

彼のことは、全部わかりません。

彼は、きつと未だに、どうして私が今日、こうしているかもわかっていないことを。

「……ねえ、提督」

爪の先を、そっと離してあげると、彼の肉棒が脈打って、じんわりと熱く硬くなっていました。

そのままつるつるとした爪の背中で、裏筋をそっとさすってあげると、それだけで、びくと肉棒は震えていました。

目をぎゅゅとつむりながら、私の攻めに耐えるような素振りの彼を、私は見つめながら、跨っていた足をそっと上げて、そのまま提督の肉棒を、太ももで挟み込むように、彼の腰に、お尻を乗付けました。

足先は、提督のお顔の方に向けて、提督の膝に、後ろ手をつく格好です。

ワークウェアに座っているままでも、私の足先がきちんとしゃぶれるように、配慮した結果です。

きちんと、私は配慮して上げましたから、言葉もなく提督の口の中に足先を突っ込みました。

「ぐっ、んぐっ」

逃れようとする頬には、突っ込んでいない方の足の甲で、張り手をするように蹴り飛ばして上げました。

咳き込んで、開いた口の中に親指を突っ込み入れるように、右足、左足をついて、ついていきます。

首を動かすから、なかなか入らないのが大変でしたけど、二、三回、提督の頬を蹴り飛ばしてあげたら、きちんと、ストックキング越しに親指をしゃぶりだしてくれました。

口に突っ込んだまま、指を閉じて開いてをしてあげると、おもしろいように提督の舌が絡みついて来ました。

朝の入渠以降、一度も洗っていないストックキングの味って、どんなものなんでしょう。

私は、味わったことがわかりません。でも、きつと美味しいのだと思います。

だから、太ももの間で提督の肉棒は脈打ってさらに大きくなったのですから。

提督がなにをして欲しかったのか、本当にして欲しかったことを、もしかしたら提督以上知っていたのかもしれない。

私は、提督のことを、本気でいつもお慰めして来たのですから。

「……提督ったら、つばでぐちゃぐちゃになっちゃいました……もう、新しいのをは無いのに、ひどい提督ですね」

指先からぐちゃぐちゃと粘着質な音が立つまでしゃぶらせてから、私は提督の体から足を下ろしました。

足先と提督の唇の間で、唾液の端がかかって、彼の首まで汚していました。

提督の制服も、また洗濯し直してしようね。それほどに、ベタベタと唾液はくっついていて、彼は汚れていました。

蹴り飛ばした痛みからでしょうか、足先をしゃぶらされた屈辱からでしょうか、涙を流しながら提督は私を見つめて来ます。

「もう、やめてくれ、たのむ、から」

弱々しく呟いた提督の言葉に、私はにっこりと笑みを浮かべて聞きません。

彼の肉棒はこの上なく隆起して、私のお股に擦り付けられています。

びくびくと先端からあふれ出したお汁のせいで、私のストッキングはまた臭いがついて使えなくなってしまうていました。

だから、どうせ使えなくて捨てるから。

私は彼の前でストッキングに爪をかけて、びりびりとわざと音を立てて引き裂いて上げました。

爪の先でクロッチを引っ掛けて、下着だって脱ぎ去って上げました。

ストッキングが裂かれる音があるのに、提督は目を伏せて、もう言葉もなく静かに泣いていました。

その頬を、躊躇いなく私は平手で打ち付けました。

「見ててください、提督。いつも、見ててくれてるんですから」

じんじんと、手が痛いけれど、目を見開いた提督の瞳の中に、私がきちんと映ることの方が大切でした。

眉の間に刻まれた、深いシワが困惑に歪んでいきました。

歪む、という事象に、私はほんの少しだけ、安堵しました。

提督は、私の心がわからない、と思う程度に、私のことをみてくれていた、という証左でしたから。

私の中の最低限のハードルを超えた提督の成長ですが、私にはもうそんな彼を喜んであげる心の余裕も、時間もありませんでした。

本当はずっと前に超えているべきハードルだったのに、超えて来なかった。そんな彼に、私は彼の最もしてほしく無いことを、やはり嗤ってしてあげました。

「提督、これ、もらいますね」

提督の肉棒を、私のお股に擦り付ける、素股をして差し上げました。

一番喜んだように肉棒が脈打つのに、提督は苦しそうに顔を歪めて腰を逃そうとする、行為です。

「嫌だ……だって、そんなことしたら」

今日はそうして腰を動かすことを、私が許しませんから、言葉で抵抗をしていました。

「そうですね、提督は、駆逐艦なんか興味の無い、普通の男の人のはずですものね。私を抱けば、もう言い逃れができませんものね」

私の言葉に、提督が瞳をそっと逸らしました。

逸らさないでいてくれたら、私はまだ、騙されていてあげたのに。

正直で、愚かで、どうしようもない人。私が、もう諦めるぐらいに、ダメな人。

残念で悲しくて、憤ってしまって仕方なくて、それでも愛しい、貴方に、最後のチャンス。私は与えました。

提督が一番好きな、素股をしてさし上げながら、脈々と出そうになる精液の子感をどんな高めながら、私は祈るように問いかけました。

「それでも、私は、提督が好きでした。提督は私のことを、どう思ってたんですか」

「……僕にとってだって、たいせつな、『秘書艦』『だった』よ」

すると出てくる言葉が、酷く心に突き刺さりました。

提督は、愚かな人でした。

大切なことは、絶対に言ってくれない貴方の態度を、『答えなかったこと自体が、答えだと思わせる』最後のチャンスだったのに。

答えてしまったことで、私はもう揺るぎなく思うしかなくなりました。

「……貴方にとっては、ただ、秘書艦でしか、なかった、ってことですね。私が何を思っているのかなんか、関係ない、ただ、答えたくない、逃げたいものは、逃げていただけの、酷い、なんて、酷い、人」

「……それは、は」

「……もう喋らなくて、いいです、提督。これから、これを、貰いますから」

私は唇を噛んで、提督に笑いました。

涙が流れていても、眦を下げて、頬を上げてあげれば、そうですね、悲しくてしかたなくとも、辛くて仕方なくとも、笑んだように見えるでしょう。

貴方が教えてくれた、辛いことから逃げる方法ですね。

戦わない貴方が、私に教えてくれたことです。

教えてくれたことを、私は貴方にそのまま返して上げます。

ぐちゅり、とこれまでにないほど硬く隆起したものが、私の中に入ってきました。

「痛い、いたっ、いたい、ですっああっ、こんなの、いやっ……うっ、ぐっ、きもち、悪い、痛い、です、提督」

唇を歪めて、笑いながら私は彼に言葉をあげました。

辛いから、痛いから、笑んで逃げたい。

貴方が教えてくれたことを実践しているのに、痛くて痛くて、たまりません。

こんな私から目を伏せて逃れようとするから、その首をぐっつと締めて上げました。苦しんで、見開いた目の前で、それでもなお、私は笑って上げます。

「痛いです、す……でも、ほら、ちゃんと、入ったんですよ。提督のものが。痛くて、

苦しんで……お腹がはちきれそうです」

唇が震えてしまうのをなんとか堪えながら、私は彼の大きなものを、全部、体の中に埋

め込みました。

目を見開いて固まる彼の肉棒が、脈打って、震えていました。

入れただけで、爆発しそうな彼のもの。

瞳を閉じたら、きつと感触に浸って爆発してしまうからでしょうか。

そんなことまで、知りたくなかったのに。

私は、もはやなんでも、彼のことならわかるんです。

首からそつと手を離しても、目を伏せないことだって、私が少しでも動いたのなら、もう、耐えられないことだって。

「……くすくす、提督」

「ゆう、ぐも」

彼の口元に、人差し指を立ててしまえば、彼はまた言葉を失うことだって、お見通しです。そんな私のことなんか、結局見ていなかったことまで、全部。

「もう、ダメですよ。許したり、しませんから」

ぐっつと、腰に力を入れて、私はがむしゃらに彼の肉棒をしがき上げました。

擦れていく彼の先端が、一つ突かせただけであふれ出した彼の精液が、破瓜の傷跡を擦

り上げて染み込んで、体の内側から焼けたように痛い、でも、私は腰が動かなくなるまで、無我夢中に彼の上で跳ね上がるように彼を貪りました。

彼の望んだ通り、私が夢想した甘い関係を壊すように。

ただ酷いことをされたように、見せかけるように。

幾度も幾度も、彼の肉棒が跳ね上がって精液を吹き出しても、私の中を汚しても、辞め

たりなんかしませんでした。

……どうして？

一度だけで女の子が、満足するはずなんかないじゃないですか。

男の人とは違うんですから。



五回目に私の体に精液が注ぎ込まれた処で、私の体がようやく震えだして力がふっと抜けたように、絶頂を迎えました。

息を乱して、提督の体にすがりつきながら私は彼の腕を縛っていたリボンを、そっと解きました。

彼の腕がだらりと下がり、提督は呼吸を荒くしながら、自由になった腕で、私を押し退けようとした。

自分の自由にならない性行為は、彼にとっては初めての経験だったのでしょう。

どんな言葉を吐いても、やっぱり、私のことなんか、どうでもよかったのでしょう。でも、私は彼の体から離れるわけにはいきませんでした。

「……提督。今日で、私、四ヶ月、戦って、いないんです」

「……それが、どうした」

「……わかりませんか。わかりません、よね」

「……一体なんなんだ！全部全部、僕の代わりにやってしまうくせに、なにも知らない」と馬鹿にして！僕が、なにもわからない？！君が、なにもさせなかった。君が全部やってきたから、僕にはなにもできなかっただけだ！」

私を椅子から押しつけて、精液でべとべとの床に押しつけながら、最後の最後で、提督が声を荒げてくれました。

ずっと、私のことを暴きながら、一言もいわなかったことを、今更いってくれた。体を震わせるように息をしながら、私は、滑稽な彼に対する感情が、もはや哀れすら通り越していくのを感じました。

全部、私がやってしまったから。全部、私がこなしてしまっただけから。言ってくれば、よかったのに。

したいことを、させて上げたのに。

私はもう、なにも言わないまま、じっとあえて体を投げ出して、彼のくちから罵る言葉を浴び続けました。

床を震わせる、憲兵の足音です。

ばたん、と大きな音が執務室に響きました。

提督の言葉が、大きな音とともに掻き消えました。

「な、なんなんだ」

「内部統制室管理課一課の三枝だ。貴官を艦娘適正運用違反および倫理規程違反の現行犯で拘束する」

「ま、まてなんだそれ、僕は、僕は」

「知らない？四ヶ月出撃していない艦娘について、内部調査が入るのは軍務規定に記載されているだろう？秘書艦からだって、先ほど了解の電話をもらっている。深夜査察は例がないが……なるほど、君の秘書艦はとても優秀だと見える」

「な、僕は、僕は、なにも、なにも知らない、僕はただ、傷ついた彼女を」

「惨状は明らか。身の振り方を考えておけ」

遠くに彼の声が聞こえるのを、私は私の体にタオルをかけてくれた憲兵の方々に抱かれながら聞いていました。

主力オブ主力。優秀な秘書艦。そっか、やっぱりそうだったんですね。

ろくに眠れなかったから、私はまどろみの中で、小さく、口元を歪めてつぶやきました。

「提督、私を選んで、よかったですよ？」

貴方にとって、私にとって、一番いい最後を、迎えられたのだから。

私は、全部、あなたのことなら、わかるんですから。

# 「月は無慈悲な夜の雌犬」

# 絵作… ラリアット

夜闇を照らす、照明弾の眩い光。  
砲火がおのれに降り注ぐ中、戦い続けた。  
船底に穴が空く。

切り刻まれ、打ち砕かれ、黒鉄の躰が欠けていく。

やがて船体は暗い海中へ引きずり込まれ、水底へ沈んでいった。

それは、そうしてフネとして終わった。

それを駆動させていたのは、何百人もの人間であり、その意思であり、彼らの生命活動であった。その終わりとはい、それを動かしていた人間たちの死と同義である。

つまるところ、それは軍艦という兵器、火砲を詰んだ巨大なシステムに過ぎず——最後まで戦い抜いたという記録は、フネではなくその乗員へ帰結するものだ。

残されたものは残骸であり、記録であり、そこから想起された物語に過ぎず——ゆえに、艦娘と艦艇の間に連続性はありえない。

そう理解していながら、少女は、我がことのように虫食い穴だらけの記憶を参照する。あがくように、もがくように。

初めて彼と会ったとき、少女はまだ何も知らない幼子だった。生まれたてだったのだから、文字通り、子供だったと言えるかもしれない。

海原での戦いの記憶から成立した知性体——人のかたちをした亜人間、艦娘と呼ばれる存在としての生。

確立された人格は、戦いの記憶と肉体相応の未熟さの混淆物に過ぎなかったし、そこに成熟した人間性など望むべくもなかった。

だからそう、今思い返すと、少し気恥ずかしいような自己紹介をした。

「秋月型防空駆逐艦、四番艦、初月だ——安心しろ、お前を守るのが僕の任務だ」

少し、驚いたような顔をした後、未だあどけなさの残る顔立ちの男は笑った。

「ああ、よろしく頼むよ。ようこそ、鎮守府へ」

大抵の場合、艦娘は海にまつわるものが好きだ。  
岸壁で碎ける波。

夕暮れに染まる水面の色。

闇色の夜の海を照らす月光。

海より生まれ、海で戦い、いつか海に還る運命だから、自然と目に映る景色を愛してしまう。

しかし初月が好むのは、海にまつわる事物ではない。

まず艦娘になって知った食事が好きだった。お昼に食べるカレーライスが好きだ。甘味処で食べるおやつもいい。カツレットと一緒に食べるご飯の美味しさときたら格別だ。

それに——提督と一緒に過ごす日々はもっと好きだった。

提督からはいつも、優しいにおいがする。温かくて懐かしい、泣きたくようなにおい。それが、生命の熱なのだといふ気がしたのはいつだったか。

まだ春の名残が強い、初夏の夜だった。

秘書艦の仕事に慣れてきた時分——デスクワークの手伝いというのは新鮮な驚きに満ちている——であり、初月も提督の日課にだいぶ理解が進んできていた。

午後の仕事が終わると、提督は初月と食べるための夕食作りに取りかかる。鎮守府という組織・共同体は、一見すると軍隊を模しているようで、その実、変なところがちらんぼらんだ。

だから艦娘が食事を作ったり、反対に提督が作ったりすることも普通に起きる。最初は奇妙な習慣だと思っただけだが、実際に体験してみると悪くない。

そう特に、初めて提督が振る舞ってくれたカツレット——もとい、とんかつと白米のなんと美味なことか！

豚ロース肉のとんかつは衣がサクサク、肉は柔らかく噛み切れて、脂身はじゅわっと甘い。しょっぱくて酸っぱいソースをつけて、山盛りの白飯と一緒に頬張る幸せときたら！

忘れてはいけないのが、包丁で細切りにした千切りキャベツだ。脂っぽくなってきたら！

口の中を爽やかにしてくれる、瑞々しい葉物野菜なしにとんかつを語ることはできない。提督はそこに大根の味噌汁までつけるものだから、初月は箸を止めることができず、ついついご飯を食べ過ぎてしまう。

この、大根の味噌汁がよかった。味噌の香りが立った出汁に、煮えた大根の甘みが溶け出して、飲んでいただけで体がぼかぼかする。

米粒が立っている白飯だけでもご馳走なのに、揚げたてのとんかつ、歯触りのいいキャベツ、美味しい味噌汁ときたら卑怯すぎる。

まったく提督の料理は卑劣だ。初月にとって忘れがたいご馳走を、ああも容易く作り出せるなんて。

閑話休題。つまるところ初月は、今日の夕食にご満悦であり、にこにこよい気分のまま皿洗いを終えていた。いずれ、提督にこういう料理を振る舞えるようになるのが、少女の新たな目標になっているのは言うまでもない。

昼の熱気の余韻を、わずかに残す夜の空気。生ぬるさが、ひんやりとした夜風に変わっていく時間が好きだった。

こういうとき、提督はふらりと一人で涼みに行く。案の定、彼は執務室から姿を消していた。食後の散歩なのだろう、と察しをつけて提督の行きそうな場所を見て回る。

途中、上の姉たちや歴戦の駆逐艦たちに彼を見なかったか訊いた——みんな親切ない艦娘たちだった。彼女たちからも提督は慕われているようで、その親しさが口調から伝わってくる。

少し、胸の奥がむずむずした。

五分も歩き回っていると、提督はすぐ見つかった。

鎮守府の敷地にある、古い神社の境内——もう人がいなくなっていて久しいのに、妖精さたちが手入れを欠かさないので、生活感がないままびかびかだ——に彼はいた。

無人をいいことに、軒下に腰掛け、片手には液体を注がれたグラス。いいご身分である。「初月か」

こちらを向いた男——酒のおいがした。

提督は何とも珍しいことに、酒も煙草も好まない男であった。無趣味というわけではなく、料理作りが趣味のようなものだと言っていたけれど。

ともかく、嗜好品の類にまるっきり興味が無いのだ。

その彼が、酒精のおいをさせていたものだから、思わず初月は眉をしかめた。このにおいは、あまり好きにならない。

「アルコール……お前が？ 珍しいな」

「舐めるぐらいの量だよ。たまには、ね」

なるほど、グラスに注がれた液体の量はびっくりするほど少ない。しかし鼻が利く初月には、相当に度数が高い酒だと理解できた。

そもそもジョッキで飲むような酒ではないというだけで、相当に効くはずだ。

「飲むのは勝手だが……ちゃんと水も飲むんだぞ？ 二日酔いのお前の世話はごめんだからな」

「わかってるよ、初月は真面目だなあ」

彼の隣に腰を下ろす。何か、酒を飲みたくなることでもあったのだろうか。

そう思いながら、提督の横顔を見やる。

「どうしたんだ、飲酒なんて」

返された言葉は、問いかけの答えではなかった。

「そう言えば初月、秋刀魚食べたことあるっけ」

「ない。僕はまだ、秋を過ごしたことがないからな」

そっか、と呟いて。

提督は意味深に微笑んだ。悪戯小僧のように邪気のない笑みだった。

「たぶん今年の秋も、秋刀魚との戦いが待ってる。初月にも出て貰うが、頑張れ」

「……秋刀魚との戦い？」

「ああ、去年の秋刀魚は手強かった——秋刀魚の季節で北方の深海棲艦が散り散りになったのはよかったが、深海棲艦を餌に大繁殖した秋刀魚が陸地へ大攻勢をかけたんだ」

「……提督、酔ってるな？」

「酔ってない、嘘だと思えば時雨や夕張に聞くといい」

「何でも爆発的に数を増やした秋刀魚を率いる知性化秋刀魚——秋刀魚大王の恐るべき戦略により、歴戦の秋刀魚漁船たちも少なくない打撃を受け、鎮守府に支援要請が来たのだという。」

かくして鎮守府の艦娘たちは秋刀魚狩り作戦に出撃、探照灯やソナーを漁業転用し、夜戦にて秋刀魚大王を討ち取って美味しく食べたのだとか。

この戦いで深海棲艦側が受けた被害は大きい。北方棲姫（通称ほっぼちゃん。その愛らしさから人里に迷い込むことがよくあり、害獣として毎年のように時雨に駆除されている。鍋にすると美味しい）三〇〇体ほどが秋刀魚に捕食されてしまったのだ。

海原の覇者にならんとした種族、再生秋刀魚——旧世界のバイオテクノロジーが生み出した恐るべき魔物は、いずれ第二第三の秋刀魚大王を生み出すことだろう。

「提督、もういい。寝ろ。寝てしまえ。お前は疲れてるんだ」

初月はじつとりと半眼で提督を睨み付けた。

しかし提督はどこ吹く風と、涼しい顔でグラスを傾けた。舐めるような飲み方だ。

「そうか……つまりお前は、わざと僕をからかっているんだな？」

「あっ」

失言であった。

気まずそうに目を逸らす提督を見ると、なんだかどうでもよくなってしまふ。この男のこういう妙なところが、初月は嫌いではなかった。

「それで、どうしてこんなところで飲んでるんだ？」

艦娘の中には飲酒をたしなむものもいるし、彼女たち御用達の酒場もある。わざわざ

屋外で飲む必要はあるまい。

「一人で飲みたい気分なんだ。あそこは騒がしすぎる」

なるほど、と初月は思う。たしかに、彼女から見ても酔っぱらいたちはいささか陽気すぎる——端的に言って鬱陶しい。

そこで、ふと気付いた。

「一人で飲みたい、か。じゃあ僕がここには邪魔だろう。すぐ移動する」

「いいよ、別に、初月なら構わない」

おそらく提督に他意はない。そうわかっているのに、口の端が緩むのを堪えきれなかった。

「そうか。なら、いい」

それからしばらく、二人は黙って軒下に腰掛けていた。居心地のいい時間だった。初月は提督と過ごす、他愛もない時間を愛していた。

だから、彼が口を開いたのはまったくの奇襲だった。

「少し、昔のことを思い出していたんだ。それで、飲みたくなった」

やはりアルコールは美味くないな、と彼はぼやいている。

先を促すように、初月は黙って頷いた。

「この戦いは、もうとっくの昔に、人間抜きで回っている。おかしなものだろうか？ 元々は、深海棲艦に怯えた人間が、艦娘に泣きついたのが発端だっていうのに」

今の地上——つまり鎮守府の外に残っている文明の規模は、驚くほど小さい。生活レベルはともかく、人口規模という観点から見ると小さすぎるくらいであった。

鎮守府にしてみても、ほとんどそれ単体で物資が循環するように設計されていた——秘書艦の仕事をしてみてわかったことだ。

「でも、無理もない。フネの魂なんて眉唾なオカルトだった。なのに現実には、それが形を取って現れた——だから、怖かったんだ」

「深海棲艦が怖かった、のか？」

それとも、と口に仕掛けて、初月は口をつぐんだ。

恐ろしい考えだったからだ。

「どうだろう。当時、区別なんてなかったんだと思う——艦娘と深海棲艦は、同じ現象

の表と裏だつて考え方もある。ともかく、大昔の人間はこの戦いに関わることをやめようとした。もう自分たちの手に負えない、とね」

その瞬間、提督の面差しは驚くほど老け込んで見えた。表情に宿る疲労感か、遠い昔に目を向けるような眼差しがそう感じさせたのかもしれない。

「そういえば、と初月は思う。」

自分はこの男がいつ生まれて、どんな半生を送ってきたのか知らない。

たしかに内陸には廃墟の街が残っているけれど、放棄されてから一世紀以上経っているはずだ。多めに見積もっても二十代であろう提督が、その目で見てきたかのように語るのはおかしい。

だから、辻褃合わせをするのなら。

男がいつものようにホラ話をしているのか、彼の年齢が見た目通りでないかのいずれかだ。

その答え合わせをする気にはなれなかった。

「そうして多くの人間は、この星から出ていった。今、陸に残っている人間は余程の物好きか、その子孫だ」

結局のところ、いつものホラ話なのだろうと思う。人間の大半が、突然、空の彼方へ出て行くなんて初月には信じられない。

冗談めかした口調で、彼の言葉に応じた。

「それじゃあ、お前は物好きにも鎮守府で提督なんてしているんだな？」

茶化すような台詞だった。

なのに、青年の表情は優しかった。

悲しいぐらいに。

「もちろん、最後まで付き合うつもりさ。この戦いが終わる日まで、お前たちの戦いを見届ける。それが目下、俺の生きる理由だからね」

思えばその言葉が、初月の心に育っていた淡い思いを、決定的に変えたのだろう。

うっすらと月明かりが差し込む夜だった。優しく笑う男の横顔を、いつまでも記憶に焼き付けたいと願った。

「——ならば、僕がお前を守る。約束だ」

それは他愛のない約束だった。

提督にとっては、妹のような少女の微笑ましい言葉だったはずだ。だが、初月にとってのそれは、違えることのできない自他への誓約になった。



恋煩いであった。

初月はあの夜を境にして、提督を異性として意識するようになった。

彼のことを思うと、こんなにも胸が苦しい。心臓は高鳴り、頬は紅潮してしまう。最初は何かの病気かと思った。深海棲艦との戦争において、こんな症状が出たことは一度もなかった。

姉たちにそのことを相談すると、神妙な顔で頷かれた。

曰く、恋であろうと。

最初はからかわれているのかと思ったが——恋愛感情というものについて調べていると、ほどなく、それで間違いないらしいと納得した。

するしかなかった、とも言える。

どうしようもなく、おのれの中の感情を制御できなくなっていた。提督が、他の艦娘と談笑しているだけで、胸が痛くなってしまふ。

気付いてしまった。

どんなに初月が彼を好いていたとしても。

彼の隣を歩いているのは、自分でなくても構わないという当たり前のことに。目の前が真っ暗になるような、苦しみに満ちた熱。

初めてだった。

戦場で沈むよりも、ずっと、嫌なことがあるなんて思わなかった。

肉体を駆け巡る激情と情欲を、どうすることもできないまま——少女の熱情は暴走した。

目が覚めると四肢がベッドに縛り付けられていた経験はあるだろうか。

普通はない。もちろん提督——抗老化処理の恩恵で見た目通りの年齢ではない——の少々長い人生においても、そういう経験はなかった。人間同士の戦争なら捕虜の概念もあろうが、深海棲艦との恒常的戦争状態において捕虜はあり得ない。

艦娘ですらない人間とあってはなおさらで、もし船上で出くわさうものなら海の藻屑か餌になるのが関の山だ。

ぐるりと周囲を見回す。

見慣れた私室の天井、調度品である。どうやら就寝中に拉致されてしまったわけではないらしい。服装は寝間着ではなく、執務中のそれだ。どうやら居眠りした後、ここに運ばれたらしい。置き時計は深夜を指しており、到底、自然に目覚める時間ではないことがわかった。

「目が覚めたか」

透き通るような声だった。それが聞き慣れた少女のものだったから、思わず、警戒心を解いてしまいたくなる。

「……初月？」

しなやかな体つきの、美しい少女であった。

凛とした顔立ちに涼しげな目元、月のように煌めく瞳——幼さを残しながらも、伶俐な美貌をすでに完成させている面差し。

駆逐艦の艦娘でこそあるものの、身長も体つきも、軽巡洋艦の艦娘たちと大差ない。端的に言って発育がよかった。なるべく異性として意識しないよう心がけていたが、その細い腰に目を奪われたことは一度や二度ではない。

黒と白の落ち着いた色合いの制服——上着の裾や、プリーツスカートから覗く手足は、黒いボディスーツに覆われている。薄手の生地でできた特注品で、通気性がよく蒸れのない、とは本人の言である。

初月はこれを下着代わりに使っている——これまた初月の自己申告。訊いてもいないのに、年下の女の子の下着事情を聞かされるのは割りとつらい。

そう、変なところで世間知らずなのが初月だった。

ストイックな武人めいた言動をしているが、意外と子供っぽいところもある。食い意

地が張っているくせに粗食に慣れていて、見たこともない美味しい食べ物を見ると眼をきらきらさせる可愛い娘だった。

ともあれ、提督は想像しうる最悪の事態を覚悟した。

つまり。

「初月、お前が——」

「提督、寝ぼけているのか？ ……ふふっ、お前はのん気なヤツだなあ」

微笑む少女の顔に、ぞくりと首筋の毛が逆立った。今まで彼女から感じたことのない、艶めいた息づかい。

「もちろん、僕がしたに決まっているだろう？ お前の寢床に不審者など入れるもんか

「冗談じゃ、ないよな」

平然としている初月に、質の悪い冗談を期待して問うてしまった。先ほど、少女から感じた色香に惑わされたおのれを、男は恥じていた。

それがいけなかった。

「……冗談で、こんな非常識なことはしない。なあ、提督」

姿勢が仰向けのまま固定されているため、提督は身動きができない。その牀の上に、初月が身を乗り出す。ほんのり上気した顔が、彼を覗き込むように近づいてきた。まるで舌なめずりする肉食動物だった。

やけに熱っぽい吐息が、男の口元を撫でつけた。桃色の唇が艶めかしく感じられてしまう。

「今までに、僕で欲情したこと、あるのか？」

「気まずい沈黙。」

「ちゃんと答えないと解放する気はない。そう言外に含ませた問いかけだった。」

「……ある」

「どんなときに？」

実のところ、提督は度々、初月の肢体に異性を感じていた。彼女の言動は紛れもなく、生真面目な少女のそれだったが、肉体の方は艶めかしすぎたのである。小さな肩に似合わない、肉の詰まった腕。決して大きくはないが、たしかに存在を主張する乳房の膨らみよく鍛えられ、引き締まった腹筋。細くくびれた腰に、豊かな臀部の広がり。

しなやかな太ももはほどよく肉感的で、健康的な色香を漂わせていた。端的に言えば、初月の全身が提督の好みだったということになる。

しかしそれを自分の口で認めると良識ある成人男性に迫るのは、かなり惨い仕打ちであつた。

「夜中に……初月の太ももを想像して……あ……」

「自慰をしたのか？」

小首を傾げて、こちらの瞳を覗き込んでくる初月。その真っ直ぐな眼差しにいたたまれなくなり、提督は目を逸らした。

「そうか……お前は、僕みたいな艦娘に欲情していたのか……どうしようもないなあ」

呆れたような口ぶりと裏腹に、初月は嬉しそうに眼を細めると、口の端をつり上げた。「それって、僕を女として見てるってことか」

ベッドの脇から男を見下ろす初月の顔は、知らず、熱に浮かされたように朱色に染まっていた。その一言で、提督はこの事態の原因を察した。だから、はっきりと自分の感情を伝えるべきだと思つた。

「……俺は、初月が好きだよ」

結論から言えば、彼の選択は何もかも手遅れだったし、どう答えていようと初月の暴走が止まることはなかったのだ。

初月の顔が、嬉しそうに歪められる。

「僕も、お前が大好きだ……ああ、嬉しいなあ」

じつとりと涙で濡れた初月の両目が、愛おしそうに提督を見下ろす。やがて意を決したように、少女はベッドから距離を取った。しゅるり、と衣擦れの音がした。

顔を横に向ける。

初月は上着を脱いでいた——提督の視線に気付くと、仕方ないなあと苦笑。ぎこちない手が腰に伸び、ブリーツスカートが重力に従って床に落ちた。

あらわになったのは、インナー代わりの黒いボディスーツに包まれた初月の裸身だ。肌の露出面積はほとんどないが、びったりと張り付くようにタイトな素材のため、彼女のボディラインが丸わかりだった。

しなやかで細身でありながら、乳房は膨らみ、腰はくびれ、尻肉が自己主張する美し

い肢体——思わず息を呑んだ。

「お前は本当に、どうしようもない奴だ……」

優しい微笑と共に、初月がベッドの上に移動する。のしかかるようにして、提督の腰の上に少女の体重が乗った。咄嗟に逃げようとしたものの、四肢を固定されているせいで、提督はほとんど身動きができなかった。

「……っ！ 初月、こんなことはやめろ！」

無言のまま、少女の手がベルトに伸びる。細い指が、提督のズボンを脱がせた——ぶるん、といきり立った逸物が飛び出す。我知らず、彼の男性器は勃起していた。

言葉よりも雄弁に、欲情を伝える肉棒であつた。

「これがお前の……あれ……か。うん、ずいぶんと元気だな」

興味深そうに肉棒に鼻を近づけ、すんすんと嗅いでみせる初月——まるで犬のようなしぐさ——むわっ、と香る汗のこもった雄のにおいを感じ取り、うっとり頬を緩ませた。

「提督は、僕と、いやらしいこと、したくないのか？」

返答を待たず、初月は口の端を歪めた。

屈折した恋情と、燃え上がる肉欲が混じり合い、少女を陵辱的性交へ駆り立てていた。「お前は、僕を抱かないんだろう……僕はもう、一刻も早く、お前と交わりたのに」遅しい男根を目にして、少女の中で昂ぶった淫欲の炎は限界に達していた。取り繕っていた理性が消え失せ、浅ましい雌の顔が現れてしまう。

もう、限界だった。

「待っ——」

「ダメだ♡」

まるで、獲物を前にした肉食獣の笑み。

先日まで子供っぽく振る舞っていた少女とは思えぬ、蠱惑的な声音だ。初月の瞳を濡らすものが、はち切れんばかりの愛欲だと提督が気付いたときには何もかも遅かった。ボディスーツに覆われた細い指先が、そっと少女自身の股間に伸びる。

スーツの生地を指で引き裂いた——ぬちゃ、と水音。すでに興奮しきっているのか、粘度の高い分泌液が、少女の初々しい女性器からあふれ出していた。

サーモンピンクの粘膜は細く、可愛らしい割れ目だったが、柔らかくほぐれきっている。愛撫はおろか、自慰一つしたことがない初月の肉体は、すっかり発情しきっていた。股ぐらからあふれ出す愛蜜を指ですくい、亀頭に塗りたくる——少女の指が触れるたび、男根が面白いように震えた。

「ぼくは、いま……お前の……ここで、シたいんだ♡」

愛液塗れにした男性器を、ボディスーツに包まれた少女の指先が無で回す。

びくびくと痙攣する肉棒を見つめ、初月は心の底から嬉しそうに笑った。

「なあ提督……お前に、ぼくの、はじめて、あげるから……♡」

とろとろと潤滑膜を垂れ流す陰唇が、指で割り広げられる。指の三本程度、すぐに飲み込んでしまいそうなほどの柔らかさだった。ぱくぱくと開いた女性器の奥には、鹽道を覆う処女膜。

腰を浮かし、濡れそぼった小陰唇を肉竿に擦りつける——その熱に、初月は酔っていた。

人間の未通女なら、初めての性交を楽しむ余裕などないだろう。如何に、初月が姉譲りの発育がいい肉体を持っているようにと、

だが、初月は艦娘である。その成り立ちからして、肉体と精神の比重が逆なのだ。彼女の心が男との交わりを望めば、軀もそれに応じて変化してしまう。艦娘が記憶や伝承から成立した存在ゆえか——少女の肉体は、思ひ人との交わりを前にして、それに適した機能を獲得していた。

一方、先ほどから無言の提督は——途方もなく興奮しきっていた。

どのみち抵抗しても無駄っぽいとか、もう説得できる段階を飛び越えているとか、色々理由はあがる。つまるところ彼は初月を人間として好んでいたし、その肉体を魅力的だと思っていたし、こここのところ性欲が溜まってむらむらしていた。

——要するに、提督はチンポに敗北していた。

眼を細め、ゆっくりと亀頭と陰口を近づける初月——ベニスに手を添えながら、じりじりと腰を落としていく。生娘ゆえに戸惑いこそあったが、恐怖は微塵も感じられない

動き。

くちゅり、と水音がして。

「くう……んっ」

甘い声が、初月の喉を震わせる。

勃起して十分に膨らんだ亀頭が、初々しい少女の粘膜を押し広げ——少女の細腰が一息に下ろされた。

ぶちっ、とあっけなく膜が破れる。

破瓜の痛み。つう、と愛液混じりの血が女性器から流れ出して——脳天まで突き抜けるような衝撃が、背骨を駆け上がった。

「んくっ、ふうううううううううううう♡♡♡」

嬌声であった。

あふれ出したのは痛みではなく、快樂ゆえの艶声——初月はこのとき、人生初の絶頂を迎えていた。

ぷしゅと潮を吹きながら、少女の背が弓なりに反り返り、涙が頬を伝い落ちる。

「これで……提督は、ぼくのものだ♡ 姉さんたちじゃなく……ぼくのっ♡」

うっとり眼を細めた初月の口から、万感の思いを込めた呟き。

破瓜の血を結合部から流しながらも、その顔には満ち足りた幸福感が宿っている。

満足げに提督の顔を見下ろす初月——征服感を隠そうともしない、子供っぽい笑み。

ぎゅうぎゅうと収縮した初月の膣壁は、痛いぐらいに提督のペニスを締め上げていた。

「なんだ、その顔……提督は、無理矢理されて気持ちよくなってるのか？」

騎乗位の姿勢で提督の男根に貫かれて、初月は幸福感でいっぱいだった。何かを堪えるように唇を噛む男の顔を見ていると、背筋がゾクゾクする。今まで感じたこともなかった、嗜虐的よろこびが、少女の胸に、いいようなない充実感を与えていた。

こんなの、美味しいご飯をお腹いっぱい食べているときだって感じなかったのに。

「しょうがない奴だなあ♡」

らんらんと輝く瞳が、妖しく揺れる。無意識に舌なめずりしてしまう。

少し、腰を動かしてやると、提督の表情が変わる。それを見ているうちに、何となくコッが掴めてきた。



「あつ、あつ、ああ♡ ふつ、んっ♡」

ぎこちなく、おっかなびっくりの動きだった。しかし時折、不意打ちで膣を締めると、提督がとてもし顔をするのだ。小刻みに、男の上で腰を振る——黒のボディスーツのごしにもわかる腹筋が揺れ、へその穴が上下する度、彼の呼吸が乱れるのがわかった。それだけで、初月はしあわせになってしまう。ぬちゃぬちゃと淫靡な水音を立てながら、腰を上下させる。その度に初月は甘ったるい嬌声をあげていた。

不意に、陰茎が震えるのがわかった。本能的に、男の限界が近いのだと悟る。

「あはっ♡ もう射精しそうなのか、大人だろ♡」

そう言いながら青年を見下ろす初月の目に浮かぶのは、隠しようもない喜悦の色。からかうような口調に、嗜虐的なよろこびが溶け込んでいた。

「提督はっ♡ 大人なのに♡ ぼくの中で、出したがる変態なんだあ♡」

何かを言おうとした青年の口を、初月はおのれの唇で塞いだ。初めての接吻だった。湿った唇と唇が触れあう——むずかゆいような感触と、それ以上の興奮。

唾液を流し込むようにして、提督の口腔へ舌を差し込む。歯茎を犬のように舐め回し、初月は嬉しそうに眉を下げた。何もかも、自分のものにしてやったという安心感が、心を満たしていた。

びんと立った乳頭が、ボディスーツごしに青年の胸板で潰れる。その心地よさに腰のあたりがゾクゾクした。

唇を離す——つうっ、と唾液の糸がかかり、途切れた。上半身を起こして、提督を見下ろしながら口を開いた。

気持ちよくて、頭がふわふわする。

この男の子種なら、いくらでも受け止めてやりたかった。お腹いっぱいに精液を出されたら、どんなにいいだろうと思う。

下腹部が熱っぽくて仕方ない。ずっしりと重たい子宮の熱が、初月の理性を煮溶かしていた。

甘えるように鼻を鳴らし、提督の耳元にささやいた——雌犬の表情。

「ぼくとお、家族になろう♡」

射精して、孕ませて、父親になる。

その意味が伝わった瞬間、男根が張り詰めるのがわかった。亀頭が膨らみ、鈴口が開いていく。射精寸前のペニスをはじめ抜くため、初月はリズムカルに腰を動かす——ばちゅばちゅと結合部から音を立て、熱に浮かされたような声をあげた。

「はあああ♡ ぼくをっ♡ 孕ませて♡ 赤ん坊を産ませたいんだあ♡」

「——初月っ！」

提督の声。

びくん、と男性器が震えた。

熱い迸りが、膣の中で爆ぜている。びゅるびゅると粘っこい体液が排泄され、腔壁に叩き付けられている。

腔内射精。雄が雌を孕ませるための交尾そのもの。

たまらなく興奮した。提督の無責任な種付けが——我を忘れて自分の牀に溺れた無様さが、何よりも愛おしい。

初月の腰が跳ねる——男の後を追うように、二度目の絶頂を迎えて。

「はっひい♡ くらうううううううう♡♡♡」

潮を吹きながら、初月は喜悦の涙を流した。愛液でべとべとになった二人の結合部を見て、それが初めての性交だったと思うものはいまい。

とろとろと漏れ出す分泌液の混合物——多量の愛液と精液に薄められた破瓜の血だけが、それを物語っていた。

「はじめてのおちんちん、きもちよかったあ……♡」

自身の膣で立ち上がる硬いもの——再び男根が屹立していた。

提督の方を見やると、気まずそうに目を逸らしている。

「んっ♡ 最低だな♡ ……もう一度、したいのか？」

「……したい」

ついに、提督は頷いてしまった。自制心を失い、情欲に負ける青年。そのみっともない姿が、たまらなく嬉しかった。

独占欲と嫉妬心と性欲から襲ったはずなのに、今のは初月を満たしているのは、燃え

上がるような愛情だった。この男の身も心も、自分で埋め尽くして気持ちよくしてあげたいと思った。

提督の中の寂しさが消えるまで、何度でも、何度でも——浅ましく、淫らに、腰を振ってやろう。

これから先も——提督に指揮され戦う艦娘ではなく、男に腰を振る雌犬になればいい。愛しいにおいに包まれる、しあわせな未来図を思い浮かべて、初月は微笑んだ。

「ああ……ぼくが、おまえを、守るよ♡ 約束だ♡♡♡」

・了・

私の大きなお腹の中には司令官の子供が居ます。穏やかな朝の時間。私の愛する人は既に出勤した後で、こうやって一人になると幸せをかみしめる時間が多くなりました。

「来月には、抱けるんだ……」

私は幸せそうな表情でお腹をさすり続けました。

司令官のことが好きになったのはいつの頃でしょうか。着任して初めて会ったときからでしょうか。

「はあ」

そっと溜息をつきました。課業も終わり、消灯までは暇な時間です。鬱屈とした気持ちを晴らすために、演習場で運動してみたいところですが、今夜は別の部隊が押さえています。

「溜息をついていると、幸せが逃げますよ？」

「……はあ」

僚艦の質問に、私は溜息で返しました。

「……神風ちゃん、どうしたの？」

「ちょっと、悩み事です」

「……提督でしょうか？」

もう一人が応じます。私の顔が火照ったのを、堪えきれずに二人の僚艦がくすりと笑いました。

「神風ちゃんはわかりやすいですね」

「はい、そのとおりです」

「あの人、人気あるけどね。あの堅物の提督が、ましてや部下と付き合うとは思えないわね」

そう、堅物です。提督と呼ばれているとおり、ここの艦娘部隊を束ねている司令官です。物静かで、誰にも対して公平で——理想的な上司と見なされています

司令官に恋心を抱いている艦娘も少なくないとは聞きます。でも、女性関係になると異常なくらいに何も噂がありません。

「その気があるとか？」

「いやいや、きっと故郷に許嫁がいるんじゃない？」

後ろで僚艦が噂を始めました。

一度くらい食事を一緒にできればな……でも……私にはできない。最近では司令官と話すことさえ少し緊張します。食事に誘うなんて、到底無理な相談です。

基地内が殺気立ってきた、というのはい過ぎでしょう。バレンティンデーが近付いています。そうは言っても全員がチョココレートを作るわけではありません。基地の男性の職員に律儀に配る人、親しい相手だけに贈る人、全く興味を示さない人……

その中で特に張り切っている人が居るのは、明らかに司令官狙いでしょう。そういう私は何もしていません。

「バレンティンが近いけど、当然作るんでしょう？」

僚艦が訊いてきたが、私は首を横に振りました。勇気がわきません。話しかけるのも辛いのに、それでチョココレートを作る？ 苦役に他なりません。

「あのね、神風ちゃん。これで何もしなかったら、もう脱落しますよ？」

「でも……」

「これを逃したら、来年になりますよ？」

私は再びかぶりを振りました。

「不安だったら、私が手伝います」

「……わかった、やってみます」

チョココレートか……いや、普通のチョココレートを贈るのもつまらないでしょう。少しは違いを付けて……そうだ、チョココレートケーキはどうでしょうか。一人だけチョココレートケーキだったら、実に目立つことでしょう。

そして、バレンティン当日。基地内はまさに浮かれていました。この日ばかりはとても深海棲艦と戦っている場所とは思えません。もっとも、そういう私も浮かれている一人ですが。

心臓が早鐘を打っています。緊張で手が震えています。でも、ここで落とすわけにはいきません。私特製のチョココレートケーキ。皆には何回も試食してもらって、ようやくできあがったケーキです。

司令室のドアは開け放たれています。今日に限っては出入りする人が多いから、開けっ放しにされているようでした

「し、失礼します」

声の上擦っています。ああ、恥ずかしい。

「神風か」

書類を読んでいた司令官が、穏やかな笑みを私に向けてきました。それだけで私の心臓が止まりそうになります。

「お、神風もチョココレートか……」

司令官が言うなり、私は机の脇を見て目を剥きました。既にたくさんのチョココレートの箱が積まれており、どれも可愛らしいラッピングです……中にはハート型のものもあります。

でも、ここで覚悟を決めなければ……

「これ、受け取ってください。神風特製のチョココレートケーキです」

司令官、喜んでくれるかな？ 大丈夫だよな？

「ありがとう、後で美味しくいただくよ……ああ、受け取っただけで甘い匂いがするな……」

「はい、お口に合えば幸いです」

うん、よしっ！ まずは成功。司令官はそのケーキをそっと置きました。しかし、私の任務はこれで完了ではありません。

「どうした？ まだ何か？」

私は手紙を出しました。

「あの、司令官、これを！ あ、後で読んでください」

失礼な渡し方。でも、こうしないと私は倒れそうで……それはメッセージカードです。単に「お慕い申し上げます」と一言だけを書いたカード……私ができる精一杯の表現です。

「それでは、失礼します」

私は逃げるようにして、司令官の表情を確認することなく、その部屋を後にしました。

ホワイトデー。一月後に基地はまた浮かれ始めます。その私も浮かれている方でした。どのようなお返しに貰えるのか気になって仕方がないのですが、いざ任務となればいつも通りにこなせます。これは日頃の訓練のたまものでしょうか。

こういった日に任務があるのは曙光でした。待機日だったら、司令官と会う口実ができませんでした。

報告書を携えて司令室へと赴きました。木製の重い扉を開けると、そこは甘い匂いが漂っています。

「司令官、哨戒任務の報告書です」

「ああ、ありがとう」

「異常はありませんでした」

報告書を手渡しして、いつものように平静を装って部屋を出ようとすると、司令官が声をかけてきました。

「待った。渡したいものがある」

その一言で私の胸が高鳴りました。

「何でしょうか？」

「今日はホワイトデーだから、バレンタインのお返しのクッキーだ」

それは可愛らしい包み紙でした。

「私なんか、ありがとうございます」

恭しくそれを受け取ります。手にずっしり来る重さに私は内心驚きました。

大きなお返しを貰うと急に欲が出てきました。来る前は貰うだけで充分だと思っていたのですが。

「司令官、今度のお休みの日は、お暇でしょうか？ その、よろしければ、一緒にお出かけしていただけないでしょうか？」

言い切ってしまったあ。誘ってしまったあ。急にデートのお誘いなんて、いくらなんでも……言った自分が心の準備ができていません。

沈黙が落ちます。私の心臓は麻痺を起こしたかのように痙攣しています。

「……その日は用事がある」

「そ、そうですか」

肩をがっくり落として、私はあからさまに落ち込みました。それを不憫に思ったのか、司令官は取り繕うように言います。

「……正確には用事があるのは午後からだから、午前だけならどうだ？」

「は、はい。大変ありがたいです！ では、〇九〇〇に駅前で如何でしょうか？」

「わかった」

「ありがとうございます」

司令官の返事に私は舞い上がって、隠そうともしない笑顔で司令室を後にしました。その夜、仲が良い僚艦の方にこのことを報告すると、彼女たちはいっとう驚いた様子を見せます。

「神風ちゃん、やりましたね！」

「……あの提督がデートのお誘いに乗るとはね」

私の報告に二人は喜んでくれました。

自室に戻って、司令官から頂いたクッキーを頬張ります。控えめな甘さが口いっぱい

に広がりました。どれも不揃いだけれども、司令官さんが丹精込めて作ってくれたクッキーです。大事に食べましょう。

「どんな服を着ていこうかな……」

私は既にデート気分でした。休みの日までまだ五日もありますが、もう明日が休日な気分でした。

春を想像させる柔らかい陽光が駅前の広場に降り注いでいます。風は冷たく切り刻むようですが、日の光は暖かさは春のそれでした。

私は十五分前に広場に居ました。周りから勘ぐられないようになるべく派手すぎない服を選びましたが、ちょっと地味でしょうか。

「司令官、まだかな……」

リボンを通して直していると、私は司令官が来るのを見つけて凝びました。

「おはようございます」

「おはよう」

いよいよデートです。そうは言っても、午前中だけでどこまで行けるでしょうか。お昼には司令官は駅に行かれるので、そう遠出はできません。

「いきなりだが、今日は寝坊してな。実は朝を摂っていないんだ」

「あ、えっと、それじゃあ」

私は周囲を見回して、何か良いお店がないか探します。

「喫茶店はどうでしょうか？」

「それにしよう」

喫茶店に入って奥まった席に案内されました。司令官はモーニングセットを頼みましたが、既に私は朝をしっかり摂ったので、コーヒーだけを頼みました。

「妹さんは、砂糖は要りますか」

店員が無邪気に訊いてきました。妹——傍から見れば、司令官と私は兄弟のように見えるかもしれません。

「ミルクだけで大丈夫です」

「承知しました」

店員が去って、私は頬を膨らせました。できれば、彼氏と彼女として見て欲しかったところですが。

「ははは、妹か」

「し、司令官さんも同調しないでください」

そう言うなり、司令官は私の頭をわしゃわしゃと撫でてきます。私をからかっているのですが、それだけで私は赤面しました。

「すまん、ついな」

司令官は我々駆逐艦を妹のように接することがあります。ただ、普段は淡々と接することがもっぱらです。

今日の司令官はいつもと比べて砕けた様子です。

モーニングセットが運ばれてきて、司令官が朝食を食べ始めました。

「いきなり、喫茶店で済まないな」

「いえ、大丈夫ですよ……それにしても、びっくりしました。司令官さんも寝坊するところがあるんですね」

「今日に限ってはな……神風との待ち合わせに遅れなくて良かった」

私は再び赤面しました。

喫茶店を出て、私達は街中を適当に散策しました。とりとめのない話をするだけですが、私にとっては至福の時間でした。

時間はあっという間に流れて、いよいよ終わりの時間が近づいてきます。

「そろそろ駅に行く時間だ」

「一緒にします……ところで、今日はどちらに行かれるのですか？」

司令官がはたと足を止めて、私に硬い表情を向けてきます。

「墓参りだ……」

「あ、それは失礼しました」

「いや、謝罪する必要はどこにもない。別に隠しているつもりはない」

司令官はそう取り繕いましたが、今の硬い表情が妙になりました。悲しいというものではなく、会うのに緊張するような表情でした。

駅に行く道すがら、司令官は供花を花屋で買われました。駅の改札で、いよいよ別れることになりました。

「今日はありがとうございました」

「あまり楽しい場所に連れていけなくて、申し訳ない」

「いえ、大変楽しかったです」

そう話していると、駅のアナウンスが司令官の乗る列車の発車が近いことを告げます。では、週明けに

司令官は早足で改札を抜けていきました。私はその背中が雑踏に埋もれるまで立ち続けたままです。

基地に戻って寮に入るなり僚艦が訊いていきます。

「どうだった？」

「楽しかったわ」

「どこに行ったの？」

私は素直に答えると、彼女は溜息をつきました。

「それだけ？」

「ええ、でも、司令官と一緒にできただけでも楽しかったわ」

「そのまま、告白すれば良かったじゃない」

「一気に頬が熱くなりました」

「こ、こ、こ、告白？」

私は固まりました。告白なんて、まだ到底できそうにありません。

「うーん、まだまだ、これは無理っばいわね」

僚艦は微笑して八重歯を覗かせました。そのまま立ち去りまして、私だけが残された形になります。

告白か……？　そういえば、パレンタインデーのメッセージカード……司令官はどう思ったのでしょうか？　返事を聞けず仕舞いでした。でも、ゆっくりやればいいのです。急な告白なんて、司令官はきっと迷惑でしょうから。

それから一週間後でしょうか。僚艦が息せき切って私のところに来ました。

「神風ちゃん、大変です！」

「どうしたのですか？」

「ちょっと、人が居ないところでお話しましょう」

彼女と一緒に寮のいっとう奥の談話室まで行きました。彼女は周りに人が居ないことを確認してから、囁くように言いました。

「別の娘が、司令官さんに告白したそうです」

「う、嘘でしょう……？」

私の間抜けな声が辺りに漂いました。

別の娘が司令官に告白した——でも、司令官はそれを断った——そのような噂を聞いた翌日のことです。普段通りに事務室に行くと、一部の艦娘からの視線が明らかに敵意を込められていることに気がつきました。

私は素知らぬ顔で朝に予定されている演習に行きます。早めに演習場に行くと、艦装を着けました。春の海の波はまだ冬のように冷たく身体を切り刻みます。

演習開始の三十分前なので誰も居ません。艦装を慣らすため私が海上を走ろうとすると、鋭い口調で呼び止められました。

「何でしょうか？」

先程、私を睨み付けた彼女が同じく艦装を背負っていました。

「良くも抜け駆けしてくれたわね？」

「何かな？」

「とぼけるんじゃないわよ……あんた、提督と勝手にデートに行ったでしょう！？　あなたが勝手な行動をするから！」

私は素っ気なく答えると、彼女の怒声を返してきました。私は呆れかえりました。

「それがどうしたって言うの？」

「どうしたって……」

「あなたも司令官のことが好きなことはわかったわよ。でも、こういったことに抜け駆けも何もないわ」

「あるわよ！　皆でそう決めていたの……提督が誰かを選ぶまで、勝手な行動をしない」と決めていたのに！」

「馬鹿らしいわね」

彼女が突進してきました。私が難なく避けると、彼女は無様に海上を転びました。彼女は泣いていました。痛いからとかそういう理由ではありません。きっと悔しいのでしょう。そう、私も悔しいです。先んじて告白されたことは、とても悔しいです。

そうこうしているうちに、演習に参加する面々が続々とやって来ます。彼女と私のことを誰かが訝しげに見ました。

演習場での一件から数日が経ちましたが、依然として私に向けられる敵意は止みません。告白したとされる娘が突然除隊すると、私に対して非難的な言動を向ける人が多くなりしました。

「神風ちゃん、どうするの?」

寮の自室で休んでいると、僚艦が心配そうに訊いてきました。彼女は司令官への好意を抱いていないのか、私に味方をしてくれます。

「これくらいのこと……大丈夫よ」

「そう、あまり無理をしないでね」

あの噂を聞いて以降、司令官のことが頭を過ぎらない日はありません。誰にでも対して優しく公平である司令官。しかし、あのデートの日、司令官は私に砕けた笑顔を見せてくれました。

午前中の喫茶店で食事を一緒にして、散策をしただけの短いデート。それは私と司令官とだけの大切な体験です。できれば、あの笑顔をずっと見てみたい。独り占めしたい。その気持ちを自覚しました。

あの娘と同じように告白しても失敗するかもしれない。私は司令官についてももう少し情報を集めるべく、噂好きで知られる重巡の方にこっそり質問しました。

「ああ、神風さん、大丈夫ですか?」

約束の場所で会うなり、彼女が質問してきます。

「何がですか?」

「色々とよからぬ噂が流れていますよ」

彼女はメモ帳を取り出して、顔を歪めました。たぶん聞いた噂を確認しているのでしょう。

「それは関係ないことです。それより、お願いした私の質問ですが」

「わかりました。まあ、これはご内密にお願いしますね——司令官ですが、生まれの事情がすこおし複雑でして……その、何というか、要は不義の子供らしいです」

「不義? ……もしかして、うわ——」

私は慌てて口を閉ざしました。

「まあ、その大体想像通りだと思います……それでご両親の仲はもう冷え切っていて、

家庭環境が複雑だったとか……そのため、女性関係には慎重らしいです」

「そういうことなんですね」

「ええ、まあ、こういった部隊ですから、慎重になる人は多いですけど。この司令官は特に慎重なんです」

ようやく納得ができました。しかし、司令官が仮に不義の子だとしても、私としては関係がないことです。生まれがどうであれ、私は司令官に恋をしているのです。

「ありがとうございます。参考になりました」

私が礼をすると、彼女は溜息をつきました。

「あのう、あまり司令官とこれ以上お近づきになるのは……また変な噂を生みますよ」  
「大丈夫です。お気遣いなく」

司令官がどうして女性に対して慎重なのかはよくわかりました。しかし、慎重だというのなら、どうして私とデートをしてくれたのでしょうか。断ってもいいはずですが、それともここからは駄目だと、という線引きがあるのでしょうか?

その日がやってきました。司令官に私のことをどう思っているか聞くと決めた日です。私はこの日のために練習と言いますが、想定訓練を重ねてきました。

課業の終了直前を狙って、司令室に入ります。事前に秘書艦の方をお願いしたとおり、秘書艦は席を外しておりました。

「どうした、神風?」

「少し込み入ったお話がありました……」

司令官は首を傾げながらも、ソファに座るように促しました。司令官が席を立って、応接用ソファに座ります。

「手短かに」

司令官に促されるともう後戻りはできません。

「その、司令官は、私のことをどう思っているのでしょうか?」

「……良い部下だ。日頃からよくやってくれていると思う」

「いえ、違います。私を女性として、どう思っているかです」

私は俯きながらも顔を真っ赤にして訊くと、司令官は少し表情を強張らせました。司令官は何も答えず席を立ち、執務機の抽斗から何かを取り出してきました。

紙切れ——いえ、それは紙切れではありませんでした。私がバレンタインデーに渡したメッセージカードです。

「これは……」

「あのときのだ。神風が私を好いてくれているのは知っている。でも、それに応えることはできない」

「な、何故ですか？」

「何も上司と部下の関係だからだ。ある一線を越えてはならない。私は、神風をせいぜい妹のように扱うまでだ」

予想はしていましたがこうやって面と言われると、私の胸は悲しみに満たされました。応えることはできない、ということですか。どうしたら……応えくれますか」

「どうも何も無理な相談だ。神風の気持ちは非常にありがたいのだが……」

「私は！ 私は！ こうやって司令官のことを慕っているのに……！」

「慕っている気持ちはわかる……でも、無理なんだ」

「それは、司令官が不義の生まれだからですか？」

「思わず私の発した言葉に、司令官の目がつり上がりました。

「それ以上言うな！」

司令官が机を叩いて、その迫力にはたじろぎました。しまった。言っただけいけないことを言ってしまった……」

司令官は興奮されているのか、肩で息をしています。握った拳を怒りで震わせておりました。

「……す、すまん、つい」

司令官が冷静さを取り戻して、謝罪をします。私は立ち上がり、頭を垂れました。

「不快な発言をしてしまい申し訳ありませんでした……失礼します」

逃げるようにして部屋を出ました。

「か、神風ちゃん？」

「放っておいてください」

ちょうど戻ってきた秘書艦の方が戸惑い気味に呼び止めたましたが、私は涙を拭いながら、そこを立ち去りました。

拒絶されてしまった。司令官を怒らせてしまった。確かなことは一つです。そう、私の恋は成就しえない……

あの一件以降、周りにはまさかと思うほど大人くなりました。抜け駆けとかそういう非難も潜んでおります。司令官に好意を抱いている方々も、自分の恋路が叶わざるとに気がついたのでしょうか。

当の私は何事にも力が入りません。演習も訓練も形ばかりで淡々とこなすだけです。護衛任務や哨戒任務では、私は隊長命令により外されることが多くなりました。任務に

出られるような精神状態ではないからです。

ああ、こうでは、艦娘になった意味がありません。祖国を護れぬ兵士に価値などありません。もう止めにしましょう。恋も叶わない。艦娘としての力も発揮できません。

こう決心して私は除隊願をしました。ああ、司令官とお話するだけで苦労したのに、こういった行動だけは早い。逃げるのだけは早い自分にはただただ嫌悪感がわきます。

司令官が居ない時間帯を見計らって、秘書艦に除隊願を渡しました。

「神風ちゃん、よろしいのですか？ 本当に……」

「もう決めたことですから」

「……わかりました。手続きを進めます」

「よろしくお願いたします」

私は深々と頭を下げました。

こうして手続きは淡々と進みました。除隊の日はあるという間に来ました。

最後の日。つまり私がただの少女になる日です。片付け終わった寮の自室を見回しました。今更になって、ここから離れたくないという気持ちがあります。

寮を出ると、既に日は暮れており、夏の夜風が吹き荒れていました。見送りに来るの

は少数です。除隊に至る経緯を考えてみれば当然でしょう。

「神風ちゃん……元気でね」

私を力強く抱きしめてくれましたが、その身体は心なしか震えております。ああ、この方は最後の最後まで味方で居てくれた。しかし、結局恩を仇で返す形になってしまいました。

「迷惑を掛けてしまって、ごめんなさい」

「気にしないでください」

私はしばし話し込みました。夜の風が撫でるようにして吹いて、私の長い髪や彼女のセミロングボブの髪が大きくなびきます。

「それでは、さようなら」

見送られる視線を背中に受けながら、私は力弱く歩き出します。

基地はあつという間に見えなくなりました。心残りはいくさんあります。一番大きいのはもちろん司令官です。

司令官との恋は結局叶わなかった。元から見込みのない恋だった……バレンタインやホワイトデー。たまたまデートができたから浮かれただけのことです。

でも、司令官のことは今でも好いております。故郷に帰ってからも、司令官のことはずっと頭の中に留まり続けましょう。

ああ、私はある欲望を覚えしました。司令官との叶わぬ思いが、いつか醜い欲望へと成り果てていました。それに衝撃を覚えつつも、私はあらがうのをすぐに諦めました。

——司令官と繋がりたい。その欲望に操られた私は重い足取りで再び歩きだしました。

司令官の居宅は、基地からほど近いところにありました。軍の借り上げの家だそうです。

私がおそるおそるチャイムを鳴らすと、戸の向こうに見覚えのある影が現れました。「神風です。夜分遅くに済みません。最後に司令官にお別れの言葉を言いに来ました」

しばしの沈黙が落ちて、戸がゆっくり開けられました。

「入れ」

司令官の家の中は思った以上に片付いており質素な生活を送っているのがわかります。

居間に通されて、提督が座布団を出してくれたので、私はそこに腰を下ろしました。

司令官は晩酌の最中だったのでしよう。机には合成酒とつまみが並んでおります。

「突然押しかけて申し訳ありません」

「もう、気にしなくてもいい。余計な礼も要らない。上官と部下の関係は、もう終わったんだから」

「はい」

私は鞆から酒瓶を取り出して、司令官にお渡ししました。

「せめてものお礼の品です」

それは道すがら酒屋で買ったお酒です。未成年には売れないと言われましたが、兄に頼まれたからだだと強訴して買いました。きついお酒のことですが……

「ありがとうございます、頂こうか」

司令官はさっそく一杯目を並々と注いで、一気に煽りました。

「ふうう、これはきついな」

そう言いつつも二杯目を飲み始めます。予想以上の早さに私も驚きました。

「神風もどうだ？」

「あ、はい。頂きます」

既に酔っているのか、私が未成年だということを忘れていたのでしよう。

私の分がグラスに控えめに注がれます。少し口を付けると、焼けるような強さでした。私が飲むのを躊躇している間に、司令官は三杯目に行こうとしています。

「あの、それ以上のペースで飲むのは……」

「大丈夫だ」

「本当に大丈夫でしょうか？ お水は要りますか」

「それなら頂こう」

私が台所に行って水を汲んでいると、居間で倒れる音が響きました。

「司令官、大丈夫ですか？」

居間に慌てて行くと、顔を真っ赤にした司令官が寝ておりました。私は立ち尽くしました。そうです。ついに機会が巡ってきました。本当はもう少し時間を掛ける予定でしたが……怖じ気づく時間はありません。

汲んできた水を煽るようにして飲みました。私は覚悟を決めて、下着と袴を脱ぎました。

司令官は未だに穏やかな寝息を立てています。

「失礼します」

私は司令官の手首を縛り、そしてベルトを外しました。ズボンに手を掛けて、ゆっくり下ろします。

心臓が早鐘を打っています。胸に手を当てると、その鼓動に我ながら驚きました。

そして、ついに下着を下ろしました。

「あ……これが……」

初めて見る異性のそれに、私は見惚れました。これ以降はもう本の知識に頼るだけです。

「こうすればいいのでしょうか」

司令官のそれを握り、予想以上に温かいことに戸惑いました。なんとも言えない匂いが心地よく感じられます。

それを啜って私は舌で先端を舐めます。そうすると、口の中で一気に熱くなり大きくなり始めました。

「ううう！ げほっ！」

いきなり大きくなって、息が詰まりかけたので、私は啜えるのを止めました。

「はあはあ、凄いい、こんなに大きく……」

寝ているのに大きくなるんだ。これが入るんだ。提督の大きくなったそれは、痙攣しております。それは花を求めているかのように痙攣しております。

私は自分の足らぬところに手を伸ばしました。足りないところが微かに湿っています。もっと濡らせばいいのでしょうか。

私はそこを思うままに指で弄りました。触っているうちに特に敏感なところを見つけ、集中的に弄るとどんどん液体が出てきました。

「あああっっ！」

弄りすぎで全身に電流が走り、力が抜けそうになりました。もう呼吸は乱れきっています。

「これなら、きっと……」

私の準備は完了です。気がつけば司令官のそれは小さくなっていたので、私はもう一度啜えました。

司令官のものが大きくなり、私の唾液で濡れました。いよいよ司令官の余ったところを私の足らないところに入れます。馬乗りになる形で腰を沈めていきます。

先端が花弁に当たりました。それぞれがぬめっていますから、予想以上に滑り、その滑った感触だけでも快感を覚えます。

「う……ん……」

司令官が目覚まし始めます。私は腰をさらに下ろしました。何かが入る感覚に驚いて、私は一瞬止まりました。

「あれ……おい、か、神風？ 何を！」

ついに目を覚ました司令官は、困惑した声を上げます。

「あ、起きてしまいましたね……」

「止めろ、何を考えているんだ！？」

私は袴をたくし上げました。繋がりがかけているのを司令官に見せつけます。

そして、私は腰を一気に沈めました。

「あああっ！ 入って……くる……！」

突き抜けるような痛みが走って、あまりの痛みに涙が浮かびます。私の秘所から血が

流れてきました。

「やっ、やっ」と繋がれました……ね……どうですか？ 私の中は、気持ちいいですか？」  
痛みが少し治まると繋がった喜びに満たされます。そう漏らす私に司令官は悲しさを諦めがない交ぜになった表情を向けてきます。

こういったことはよくわかりませんが、私は本能的に腰を振り続けました。そのたびに司令官の陰茎が私の中でこすれて、弱い電流のようなものが走ります。

時折、夜風が窓ガラスを大きく震わせる中、私と司令官の荒い呼吸と肌と肌とがぶつかり合う音だけが響いています。最初は乾いた音もやがて湿り気のある音になっていました。

全身は汗でぐっしょりです。司令官のシャツも汗で濡れています。窓ガラスから射し込みはじめた柔らかな月明かりに司令官の力の抜けた顔が浮かびました。

「か、神風……」

不意な呼びかけに私は腰を振るのを止めます。

「もう、止めてくれ。こんなこと……」

「駄目です」

「しかし……」

「止めません、私は司令官が好きです。初めてを捧げるほど好きです」

今度は腰を上下に振ります。そのたびに司令官の余るところが、奥を突きました。

「ああ、これ……凄い！司令官の……」

突き上げる感覚。痛みはとうの昔に忘れて、快楽が波のようにやってきます。

奥まで突かれて、そして一気に腰を上げる。そのストロークの繰り返しで形容しがたいた快感でした。

「あっ……」

腰を上げすぎて、抜けてしまいました。見ると秘所と先端が糸を引いていることに、私は言い様のない恥ずかしさと覚えました。私と司令官の粘液が混じり合っているのです。

「もう一回、腰を下ろしますね」

そのとき司令官が抵抗したので、私は身体を倒して密着すると再び大人しくなります。

これだと大好きな司令官の顔が近くで見えます。そのままの状態に腰を動かして、再び司令官のものが私に入ってきました。今度はするりと挿入されます。

私は再び上下の運動を始めました。

「司令官、愛しています。だから……」

やがて、司令官の陰茎が痙攣をし始めました。ああ、あれが近いのだ、と本能的に悟ります。それに呼応するように私の膣も収縮をし始めます。

「ああ、凄い、どんどん熱くなる……」

「神風、止めてくれ、抜いてくれ、限界だ！このままだと……」

「いや、です。司令官のが、欲しいです！私は司令官のものを、全部受け止めます！」

ただただ射精を促すためだけの乱暴な動きをします。最後に大きく腰を動かしました。先端が一気に私の奥を突き上げた瞬間、私の中で熱いものが弾けました。

私たちは乱れた姿のまま、まどろんでいました。私は下腹部で熱が弾けた余韻に浸っています。腕をほどいた司令官は隣でどこか疲れた表情です。

ああ、司令官を犯してしまった。私の欲望だけで犯してしまいました。行為後にその罪悪感が腹を切ったかのように押し寄せてきます。

「ごめんなさい」

「もう謝らなくていい」

「はい……」

そして黙り込みました。まだ荒い呼吸音が部屋に静かに響いています。

「……神風、いつか、私が不義の子と言ったよな？ あれは本当なんだよ」

「嘘ではなかったんですね」

「不義だと聞いて何だと思った？ 浮気かと思ったか？ 自分の実父が戸籍上の父とは違うとはよく聞くが、実父と戸籍上の父は一緒なんだ……」

「では、どういった不義なんでしょうか」

「……今日、神風がした行為によって生まれたんだよ」

司令官は皮肉を込めた笑いを浮かべました。怪力で締め付けられたような苦しみを覚

えて、私は息ができなくなりました。

「神風、大丈夫か」

様子がおかしくなった私を、司令官が優しくさすります。

「はい、大丈夫です……」

「嫌な話だ。聞きたくないのなら止めよう」

「いえ、聞かせてください！ 私は司令官のことをもっと知りたいです！」

「……うちの親父も結構女性から好かれていたらしくてな、ただ、親父としてはもっと自由に遊びたいということで、特に付き合わなかったらしい。そういったところに業を煮やされて、今日のように親父を襲った女性が居た。それがうちの母親だ。それで見事に妊娠、私が生まれたわけだよ」

司令官は溜息をつきました。

「それで、どうなったのでしょうか？」

「うちの親父は律儀すぎたとか生真面目だった。責任を取ると言ってもそのまま籍を入れた。そして、私が生まれたけどな。ただ、親父は私をどうしても好きになれなかったらしい。親父はずっと私のことを無視しようとした。それに母もついにきれたわけだ。ついに母親からも、お前を生んだばかりに父親と不仲となったと誹られる始末だ」

私はどう言葉を返したらいいのかわかりませんでした。

「今のお父様やお母様は……どうなさっているのでしょうか？」

「母は私が軍に入る直前に病気で死んださ。親父はすぐに連絡が取れなくなった。今はどこに居るのかもわからない……因果なものだ。あの親父と同じ道を辿ろうとしている」

「司令官が、女性と付き合うのを避けている理由がよくわかりました。でも、それなら、どうして私とデートをしてくれたのでしょうか？」

その質問に司令官はしばし押し黙りました。

「……好きな女性から誘われて、デートを断る男なんて居ない」

その一言に私は息を呑みました。司令官が私を好きだった？ 好いてくれていた！

「でも、神風と付き合うのが怖かった。うちの両親のような関係がどうしても頭を過ぎる。私と付き合うより、別の男と付き合ってくれたほうがまだ幸せになれると思っていた」

「……今も私のことをどう思っていますか」

「好き……いや、お慕い申し上げます」

司令官の一言に私は破顔しました。

「ありがとうございます、司令官。あなたのご両親と、私達は決定的に異なるところが一つあります。だって、お互いに好きだと思っている……なら、心配はありません」

「そうだな、なら大丈夫なのかな……」

司令官がようやく笑ってくれました。司令官はいきなり私を抱き寄せます。

「あ、待って、心の準備が……」

「うるさい」

司令官は私の唇を無理矢理に奪いました。

エピローグ

「じゃあ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

今日も司令官はいつもどおりに出勤されました。私と司令官は無事に結ばれて今に至ります。身重な身体で家に戻り、家事をこなして終わると、お昼までのわずかな時間が一人で物思いに耽られる時間です。

こういった時間もそのうち取れなくなるでしょう。今までは変化があることを恐れていました。でも、今はその変化が来るのがたまたまなく待ち遠しいです。

椅子に座って、大きくなったお腹をさするとそれに呼応するようにお腹の中の赤ん坊が動きました。どういった子が生まれてくるのでしょうか。

私は壁掛けのカレンダーを見遣りました。赤丸で囲った日——出産予定日はもうすぐです。

# 戦後、深海棲艦との戦争が終わった後。

作画：ターレットライター  
浜原義雄

最後の日付の上に大きくバツ印を書きこむと、提督はすべての日付の上にバツ印が書かれたカレンダーを破り取り、何度か折りたたんでゴミ箱に押し込んだ。三月終わりのカレンダーもあと一枚しか残っていない。この鎮守府と提督自身が現役として兵部省の書類に記載されているのも、このカレンダーの残りと同じだけの期間だ。いや、鎮守府はもう現役から外れているかもしれない。戦争を通じて肥大化といえるほどまで成長した水軍の段階的縮小、その一つのステップとして数えられているこの鎮守府の閉鎖も今や、まだ再就職先や就学先の決定していない何人かの艦娘の斡旋以外の業務は残っていない。一部の施設の取り壊し作業はすでに始まっており、提督居室の窓からは艦装工廠の建物を覆う足場と資材置き場の姿をはっきりと認めることができた。

最後まで点けていた机に備え付けられたフィラメント灯のスイッチを切ると、提督は暖房のタイマーを確かめ、ベッドに敷いた布団にもぐりこむ。

温い布団にくるまりながら、提督はぼんやりとまだ今後の身の振り方が決まっていないう部下の艦娘たちのことを考えていた。単純に希望に合う就職先がまだ見つかっていなかったり、試験の結果待ちの艦娘が大半なのだが、一人だけ旗色が不鮮明な艦娘がいるのであった。この鎮守府にいる艦娘のうち、一番付き合いが長く、筆頭秘書艦も務めている駆逐艦娘の五月雨がそれであった。再就職先の希望を聞いても、あいまいな答えしか返ってこず、そのたびにぐらかされてしまっている。

自分の退役まであとひと月ほどしかない。おそらく、再就職先が決まろうが決まらなからうが、自分が退役したら彼女と会うことももう二度とないだろう、しかしどうするつもりなのだろうか……。そういったことを考えているうちに提督はゆるりと眠りへと沈み込んでいった。

下半身が布団とは明らかに異なる、しっかりとした重みをもった暖かさに包まれている。半分目が覚めたような、しかし残りの半分はまだ夢の中にあるような感覚の中で提督寝返りを打とうとすると、その暖かさが身じろぎして、下半身がすんと軽くなった。そして、下半身にひんやりしたものが絡みつく感覚。股間がしっとりとした温かさ、艶めかしさに覆われていた。そそり立った逸物のカリが、程よい硬さの峰に一瞬触れ、

先端が粘り気を持った柔らかな組織に撫でられる。そのまま、粘り気のある液体が一塊となって逸物の中心を押し上げられてゆき、そのまま逸物の外へと放たれる。逸物の外へと飛び出した精液は、なにかに当たって亀頭の上に垂れた。

夢うつつの中で、やってしまった……。という意識が脳裏を鋭く駆け抜け、提督はゆっくりと体を起こす。同時に、なにかぬるりとしたものが亀頭に落ちた精液をなめとった体を捻り、枕元に置いた携帯電話を取ろうとして、何かが股間に蹲っていることに気付いた。携帯電話を開き、画面を股間に向ける。

「さみ……。だれ……。？」

「ふが？」

五月雨は目を細めて液晶の灯りを見上げると、口元に着いた精液をべろりとなめとった。それから、提督の足元に置いておいた上下一組の総入れ歯を口に嵌めて微笑む。

「おはようございます、おとーさん」

おとーさん、の発音は存在そのものがあまり大っぴらではない作戦に提督と五月雨が従事していた時、偽装身分として与えられた父娘を演じていた時と全く変わらないものだった。

提督が絶句している間に五月雨はその逸物が再び硬さを取り戻していることを確認すると、嬉しそうに微笑んで立ち上がる。腰を落とし、片手を自らの股間に、もう一方の手を提督の逸物に沿って提督の上に腰を下ろした。逸物が柔らかい温さに包まれる。五月雨が腰をわずかに上げ、それから再び腰を下ろすとそれに合わせて逸物を包んだ肉も上下に動く。果然とその様子を見ていた提督だったが、それが意味することに気付くと両手を伸ばし、五月雨の腰と肩をつかんで挿挿を止めさせた。寝ぼけ眼でまだはつきりとした頭を何とか動かしてなんとか言葉を吐き出した。

「五月雨、なんでこんなことを」

すると、五月雨は目元に無邪気と言うほかに形容しようのない微笑みを浮かべる。

「パパになってください」

「拒んだ場合は？」

「その時は、」五月雨は口元にも天使のような、だからこそ背後に何か潜んでいることを感じさせる微笑みを浮かべた。「父親のわからない子供が一人、この世に増えるだけです」

「なぜ？ お前なら、もっと良縁だって探せるだろう」

すると、五月雨は黙ってベッドの脇のカーテンを開け放った。月明かりに五月雨の体が照らし出される。それから、身に着けていた白を基調にした制服の上衣を脱いで放り出し、スカートもたくし込むようにして小さく畳む。

「この前、先に退役した白露さんたちと会いました。それでね、聞いたんです。外で恋人ができて、この体を見ると逃げ出しちゃうんだそうです」

月明かりに照らされて、五月雨の体中に散らばった、引きつったような縫合跡や変色した火傷跡、クレーターのよう真ん中が凹み、周縁が盛り上がった銃創が浮かび上がる。艦娘としては珍しいことに、五月雨は上官が変わることなくずっと提督の下で戦ってきたから、すべて提督の指揮下で戦っているときにできた傷跡ということになる。顔に被弾するたびに乳歯も永久歯も飛び散り、歯も全て入れ歯だった。

「だから……その、提督さん、子供が出来たらパパになってくれませんか？」

五月雨のその言葉に、提督は黙って手を離れた。上体を起こし、片手を五月雨の背中に回す。そっと五月雨の体を倒すと、両手で五月雨の腰を押さえ、一旦自分の腰を引き、逸物を半分以上引き出した。五月雨の口から押し殺したような嬌声が漏れるが、それを無視して体重をかけ、一気に逸物を押し込む。予想外の展開に、五月雨の嬌声が一層大きくなった。片手で五月雨の後頭部を抱え、そっとキスをして唇の間から舌を割り込ませる。歯茎のさらに根本、入れ歯と粘膜の境界のあたりを舌でなぞった。五月雨の鼻息が唇を撫でる。五月雨も口を開け、舌を伸ばして絡ませる。唇を離すと、上気した表情で五月雨は抽挿に合わせて荒い息を吐いて、唇の端から唾液を垂らしながら艶めかしい笑みを浮かべた。

提督はそれを見ながら指を唾で湿らせ、五月雨の控えめな膨らみを周縁から渦巻きを描くようになぞっていく。乳首に触れるか触れないかまで指を近づけるが、そのまま円の半径を大きくして行きふたたび膨らみの周縁をなぞる。それを数度繰り返していくうちに五月雨の胸もすっかり上気したように、白っぽい肌がうっすらと赤く染まっていた。控えめながらも、しっかりと掌を押し返す弾力を持った胸を包み込むように撫でると、ピストンによるものとは異なる喘ぎを五月雨が漏らす。膣も一層強く逸物を締め上げ、提督が腰を目いっぱい押し付けて抽挿を止めると精液が五月雨の中に吐き出される。半

分柔らかくなった状態で五月雨の中から逸物を取り出すと、五月雨が口の中から入れ歯を取り出し、提督の足元に座る。提督が片手を添えて逸物を差し出すと、五月雨は歯のない口でくわえこみ、舌と歯茎で逸物を刺激する。逸物がまた硬くなってくると、五月雨はカリ首に舌を這わせたり、わざと亀頭に歯茎を当てるなどして、硬軟巧みに刺激を繰り返した。

やがて、逸物がこれ以上ないほどまで張り詰めると五月雨は黙って口を離して腰を落とす。提督も黙ってその腰に手を添え、ぐるりと五月雨をひっくり返し、うつぶせに横たえた。そのまま腰を持ち上げ、片手を添えて逸物を挿入する。後ろから五月雨の胸に手を添えながら抽挿すると、五月雨はまた嬌声をあげながら腰を左右に振って応える。提督も、五月雨を押さえつけるようにしながらピストンを繰り返した。

射精をするたびに体位を変え、お互い無言のまま唇や胸を貪りあう。騎乗位で五月雨が搾り取り、後背位で提督が注ぎ込む。何度も射精を繰り返しているうちに、東の空が薄く明るくなってきた。さすがに疲れ果てた提督が半裸のまま寝転がると、五月雨がその上に寄りかかった。



「おとーさん、パパになってくれますか？」

「もちろんだよ」

そう言って提督は上半身を起こし、そっと五月雨を抱き留める。

「でも、なんでこんな方法を？」

「私はある場所で、目的を定め、その目的達成にはどういった手法が有効か学びました。奇襲もその一つです」

五月雨の答えに提督は思い当たるものがあつた。提督自身が、仕事の合間に教えた簡単な戦術などに関する話だ。

「これは戦争じゃないよ」

「相手がいて、うまく現実と折り合うように目的達成を行う点では変わりませんよ」

情事の名残を感じさせない淡々とした五月雨の答えに、提督はそうだな、と言って黙り込んだ。それも、似たことを五月雨に教えた記憶があつた。それを五月雨なりに応用した結果なのだろう。ある意味、自分が蒔いた種というわけだ。

けれどまあいいか、提督は心の中で呟いた。誰かと一緒に過ごす戦後も悪くない。それに、五月雨のことは憎からず思っていたのだ。

# 「陽炎ちゃんが恋慕を「じじらせ提督を逆シイ」した後イヤイヤする話」

作……白  
……璃  
……桜  
……花

SCENE 1

「ええ……本当に、ね」

鎮守府の酒保休憩室、窓の外は雨が延々と降り、そんな中二人の艦娘が酒を飲み一時の安らぎを得ていた。

「ねえ、大井っち」

片方の艦娘、北上が、氷の入ったウイスキーのグラスを揺らし、もう片方の艦娘の大井に語り掛ける。

「なんです?」

楽し気に、笑顔を造り大井は返す。

自分を相手にするときだけ彼女は猫を被る、本当の自分を見せない、そんな様に、北上は呆れを感じているが、その内心まで大井は踏み込めない。

「またさ、提督ったらフられちゃったね」

北上は少しだけ、ウイスキーを口に入れる、冷えた安酒の味が舌を痺れさせた。

「……いつまでやるつもりなのよ、あれ」

「さあ、まー提督奥手だからね、大井っちが慰めてあげれば止まるかもね?」

北上がにやつく。

「……それ、冗談にしても大概にしてよ」

大井が、苦虫を噛んだような顔で北上に言う。

素の態度、大井も、他所の鎮守府の提督だが恋人がいる。

北上はその顔をつまみに、ウイスキーを口の中に入れ、ごくり、と飲む。

こういう顔も出来るんだ、と思いつつ、でも、口にしない。

「ごめんごめん大井っち、私も軽率だったよほんと」

「そんな謝らないでくださいよ北上さん、私も申し訳なくなるんですから」

北上が手を合わせ謝る、大井はそういう様子に、さすがにちょっと強く言ってしまったかと認識してしまい、楽し気に訂正をした。

「そうだね、うん……それにしてもさ……雨、止まないね」

北上が、窓の方に目を向ける。

水が屋根や地面に叩きつけられる音が、ノイズの様に鳴り続けていた。

## SCENE 2

11月2日

今日がわたしの着任日！今日工廠で生まれたわたしは司令の部屋にやってくる。

ここの鎮守府は南国の土地、だから温かいけど、雨が多く湿気てるみたい。

顔合わせは執務室で、でも執務室は一端提督が別の部屋に行ってる間に自分が待ってる、来たら挨拶、という流れ。

これは瀬賀式の艦娘から提督への挨拶礼儀みたいで、そんなこんなで執務室で待っている。

どんな司令官かしら、と思いつつ、扉が開かれ、わたしは振り向く。

「やっ与会えたー陽炎よーよろしくねー！」

笑顔で、司令官と思わしき女の子に語り掛ける、黒髪のセミロングで、背はわたしよりちょっと上。

体はすらりとして、綺麗な人、この人が司令官なら、楽しい日々になりそうね。

「あ、うん……俺はこの提督だね、よろしく」

司令が差し出した手、手袋に包まれた手、わたしはそれに返し、手袋越しに手を握り合った。

11月3日

司令官、男だったの！？

先輩の天龍さんから聞いたけど、あれで男って……わたしより美人じゃない。

メイクなに使ってるのかちょっと気になる……

11月5日

初めての出撃、望月さんとかに連れられてわたしは最後尾。

うまくやれるか心配だったけど、上手く魚雷が敵の駆逐艦に当たって轟沈させられた

わ！

帰ってきたら司令官に褒められちゃった、嬉しい！

11月6日

そういえば司令ってなんで若いの、って北上さんに聞いてみたの。

どうにも、適性が凄くから軍が学生を徴用したみたい。

じゃあきつと凄いのね司令ってと北上さんに話したらそうだねーってちょっとやる気ない相槌打ったのが気になるけど、すごくないの？

11月10日

初めて建造に立ち会った。

がこんがこんと鉄の胎盤、資材をあげて作られる。

何分かかるか表示され、鉄の胎盤蠢き続ける。

そんな歌を口ずさみながら、出来上がる艦娘を見届ける。

わたしも最初に見たのはこの工廠、

今回できたのは長門さん、戦艦がすぐできるなんてびっくりだけど、この世界本当にすごいわね。

その日は長門さんを案内したわ、そしたら前から居た長門さんに会って挨拶したけど、無視されちゃった。

失礼な反応だけど、駆逐艦と話をするつもりはないということなのかしら？

11月12日

建造した長門さん、解体されたみたい。

仕方ないわね、同じ艦娘は二人もいらなみたいだから。

だからあの長門さん、わたしにあの時話しかけなかったんだ。

11月13日

提督と艦娘の恋愛について天龍さんに聞く。

「ん、どうにも他所の鎮守府でもあるみたいだぜ。まあ提督にとっちゃ異性なんて艦娘ぐらいだからな、そりゃそういうの出来るって」  
とのこと。

「じゃあ、あの司令も恋人居るのかしら？」

そう聞いたら溜息をつかれた、変な事言ったかしら？

11月18日

近くに接近した深海棲艦を迎撃！

夜の海は生暖かくて嫌な感じだったけど、何とか魚雷でなんと戦艦撃墜！やったあ！

その日は司令にケーキ食べさせてもらって嬉しかったわ。

11月20日

黒潮とか不知火とかこの鎮守府に居ない事にふと気づく。

でも何時か会えるわよね、きっと。

11月25日

今日は司令の部屋の掃除を任されたのでやっておいた。

途中、本が置いてあって読んでみたけど……司令も男の子なのね、やっぱり。

でも、人間ってこういうえっちな事、好きなのかしら……？

11月26日

興味があつたのでえっちな本を買って読んでみる。

女の人ってこういう事するんだ……

驚きながら、ベッドの上で自慰……というのをやってみる。

クリトリスをでで擦っていると、だんだん気持ちよくなって行って、なんかこう……日記に書くのも恥ずかしい。

11月30日

テレビゲーム、なるものを大井さんから知る。

遊んでみる、面白い。

お給料で買おうっと。

12月2日

着任一か月目、艦娘として生きて一か月が経過。

そのことを記念してちょっとしたパーティみたいになるんだけど、司令の方と話そうとするかどうか、素っ気ない態度になっちゃう。

「なんでかしら……どきどきするけど、何かの病気？」と北上さんに聞くと「恋なんじゃないの？」と冗談交じりの言葉。

冗談交じりだからよくわからないけど、本当にどうしてかしら……

SCENE 3

12月12日

司令と一緒にの食事、ちょっと洒落たレストランでのご飯。

司令はわたしの身の回りの事とか、いろいろと話が合って、意外と相性が良かったのかしら、とか思っちゃった。

わたしがゲームとか遊んでるの知っていると、面白いゲームとか教えてくれちゃった。でも、やっぱり眼を合わせられない、どきどきする。

恋、なのかしら本当……でも、まだ口に出せない。

帰り道、傘を開いた司令の腕にちょっとぎゅっと抱き着いちゃう。

「どうしたんだ？」

「何でもない」

そんなやりとりをして、一緒に鎮守府まで帰っちゃった。

12月15日

司令があげたゲーム面白い。

12月16日

イ級二隻を一回の砲撃で沈めた、柄にもなく喜んじゃって周囲をヒかせちゃった。

12月19日

何か司令と一緒にいることが多くなってく事に気付く。

ご飯も、遊ぶ時も、いつも一緒。

なんか上司と部下というより、友達みたいな、そんな距離感。どきどきするけど、悪くない感じ。

12月25日

きっと、この感情は恋だとわかった。

その日、無理をして前に出すぎて砲撃を直撃を受けて、なんとか帰還。

大破して何時沈むかわからない恐怖と意識の中、司令がやって来て、オイル塗れの体を抱きかかえて入渠させてくれた。

嬉しかった、涙が出た。

体が治ってく間、看病するように、わたしを見続けていた。

だから入渠が終わったら、つい「しれえっ！」って叫んで抱き着いちゃった。

「か、陽炎……？」

って、司令は驚いちゃったので、つい「う、嬉しくないんだから……」とか言っちゃって、嫌ってなきやいいけど……

SCENE 4

1月20日

司令と初デート、日本では雪だけどこは南国だから、温かい町でのショッピング。  
街並みは現地の人が多く、何を言ってるかわからなかったけど司令が通訳してくれた、  
本当司令ってすごいわね。

服とか水着とか買ってもらったけど、大切にしなきゃ。

アイスクリームを食べてると、嬉しそうな顔をして、嬉しかった。

でも……司令はどこか、遠い眼をしてた、だから、わたしはわたしなりに、何とか頑張ろうと思うのだった。

1月22日

司令とえっちなことをすることもあるかも、とか思ったので売店にあったセックス講座の本を買って読む。

買う時はマスクにサングラスにコートと、不審者みたいな恰好になっちゃったけど、きつとバレてない筈。

こういう本を読みながら、戦果を上げて、司令を喜ばせないと。

1月28日

今日は五隻沈めた、でも、司令はあまりうれしくないみたい。

1月30日

大井さんに疲れているのではと言われる。

わたしは大丈夫よと返す。

今日は駆逐艦七隻、うん、いい戦果。

だけど司令はあまりいい顔してくれなくて悲しい。

どうすればわたしの頑張りが、伝わるのかしら？

2月2日

司令に体を触られてる妄想でオナニーしちゃった。  
この日記が司令に読まれたら死んじゃいそう。

2月4日

久しぶりに司令と話せたんだけど、話しが噛み合わず、適当な相槌で流されてる感じがする。

嫌われちゃったのかな……？

もっといっぱい、敵を殺さないと。

2月5日

司令の妄想でオナニー、責められたい、抱かれたい、でも、それを言ったら軽蔑するわよね……

SCENE 5

4月2日

最近、司令とも話をしない。

春なのに嬉しくない。

今度の大規模作戦、鬼か姫の首をとれば、見向きしてくれるかしら。

4月11日

大規模作戦開始、他の鎮守府の艦娘も海域に集まったの大戦争。

わたしは水雷戦隊を率いて輸送する。

ペイロードを全てドラム缶と言う名前の空間圧縮型コンテナに切り替え、確な武装もない状態での輸送は気が滅入る。

4月12日

同海域の姫クラスのとドメを刺せた。状況は夜戦、夜風が温かい中、月明かりが照らす敵の駆逐タイプの子に近寄り、魚雷を当て、爆殺。

それを司令に帰ったら報告、だけど返事は軽い相槌だけ。

わたしが血だらけだったからかしら？

4月28日

大規模作戦が終了、わたしは何体も姫を殺したけど、司令は素っ気ないし、デートにも誘ってくれない。

気分が落ち込む、何がいけなかったんだろう、そんなことを考えてしまう。

その日も司令でオナニーした。

5月2日

ありえない、ありえない、ありえない。

司令が他の艦娘と付き合ってるなんてありえない。

天龍さんがそれをしゃべってたけど、つい胸倉掴んでしまったけどありえない。だって司令もわたしのこと好きはずだもの。デートだってしてくれたし、そんなはずはない。そう泣きながら言ったら、天龍さんもわかってくれた。よかった。

## SCENE 6

5月3日

怖い、本当の事が怖い。

捨てられてないわよね、本当よね？

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

わたしは服を脱いで考える、でも、どうしようもなくなってく気分。

服を脱ぎ捨て、立ち上がる。

鏡を見る。

綺麗な、わたしのからだ。

エッチな漫画を、思い出す。

嗚呼、そうだ。

わたしがやればいいのよ。

体をゆっくりりと、気持ちよく味合わせてあげれば、きっと、司令も、前みたいにデー

トとかしてくれる。

アイスクリームだって食べさせてくれる。

そう考えると気分が上向きになって行く。

つい、舌なめずりしてしまう。

## SCENE 7

提督の眼が覚める、薄暗い、橙色の照明の部屋、背中質感はベッド。体が大の字で寝てる状態。

寝ているときに別の部屋に移されたか、と認識する。

両腕両足はどうやらベッドの支柱に縛られてるみたいで動かない。

服は全部脱がされ、裸のようで、体に、抱き着く少女の質感。

服は着ている、けども、下の方は裸のようで、太腿が絡みつく感覚がある。

「ん……」

「起きたわね、司令」

耳元に声、声の方を向くと、そこには陽炎の姿。

彼女が抱き着いていたのかと認識した彼の唇にそっと、陽炎の口づけが行われる。

少年提督の唇に、柔らかい、少女の唇が交わる。

「好きよ、司令……だから、気持ちよく、してあげる」

そう言いながら陽炎は少し離れ、提督の露わになり、はち切れんばかりに隆起したペ

ニスに、手袋越しに手を添え、撫でる。

「……男の人って、こんな感じなのね」

陽炎はそのままその肉茎を手で優しく、愛撫する。

「気持ちいいわよね？おちんちん、やさしく、しっかりと気持ちよくさせられてるんだから」

無理やり早くするのでなく、ゆっくりりと、丹念に、颯るように白手袋越しに、ペニスを弄り、その先端から透明な先走り汁が漏れ出すと、陽炎はごくり、と唾を飲む。

白手袋に包まれた手が離れてく、そしてすぐに、陽炎の口が、提督の肉茎を包み込む。

「ん……ちゅ……ん……ちゅっ♡」

ぬるりとした口による愛撫、舌が絡みつき、ストロークし、喉まで口を性器として使うイラマチオ。

陽炎の未だ男を受け入れていない膣口は濡れ、彼女の口は提督のペニスを味わう。

しごき、そして提督は彼女の喉奥に精を放つ。

「んっ♡♡♡」

初めての精飲、喉に大量の精液が流し込まれ、それを吞みながら、提督の陰茎を舌で掃除し、刺激を与えながら、名残惜しそうに漏れる精液を吸い出す。

「んっ……んむっ……はあんっ♡一杯出たじゃない。どう？でも、まだ終わらないわよ？」

口淫を止め、それでも勃起し続ける提督の陰茎、その先端を尿道を刺激しないように手で撫でながら、陽炎は言う。

提督は息を荒げながら、その快楽を、その愛を受け止めるしかなかった。

陽炎は陰茎を弄る手を離し、今度はその毛もない、幼い下半身を提督の顔前に近づけ、

そして腰を下ろす。

柔らかい彼女の股間が、跨り、提督の顔を撫でる。

体重をかけすぎないように、彼女の陰裂や陰核が提督の唇や鼻を撫で、顔に尻肉が当たる。

「はぁんっ♡ちゃんと洗ったから綺麗でしょ……？司令の為に尻の方も、何回も、何回も汚いの出して綺麗にしたのよ……んっ♡」

顔面騎乗を行うという行為に、倒錯した快感を陽炎は得る。

舐める事を強要するのではなく、優しく、甘露のような愛液を、女体を擦りつける。

濡れきった陰裂が、提督の潤いのある唇と、キスをする。

「舐めても……いいのよっ♡」

誘惑するような、甘い声。

陰裂は提督の唇を何度もキスし、提督もそれに応え、陰裂を舌で割り、処女孔越しの膣内を味わう。

「ひうううっ♡こ、これえっ♡手よりも何倍もいいっ♡」

提督の舌で、陽炎は一度絶頂する、つい、下半身を押し付けるが、提督は膣内から零れる蜜を、必死に舐める。

「あんっ♡しれえってばっ♡ちょっとはげしすぎっ♡そんなにわたしのおそこ、おいしいのっ♡」

甘い声を上げながら下半身を押し付け、何度も陽炎は絶頂していく。

だが、ある程度絶頂したところで顔面騎乗を陽炎は止める。

「はぁんっ……美味しかったかしら……？じゃあ、そろそろメインディッシュといくわよっ♡」

そして陽炎は、提督の股間の処まで向かい、先走り汁で濡れきった陰茎を手で掴み、膣口に宛がい、腰を下ろす。

処女孔を押し広げ、そしてすんなりと、あっさりと、膣内に陰茎が入った。

「んっ……ひうっ♡は、入ったわよ」

入った瞬間、痛みと共に強い快楽で一度絶頂。そしてそのまま陽炎は抱き着き、密着した状態で騎乗位で腰を振る。

ゆっくりと、くちゅり、くちゅりと愛液に満ちた膣孔で、提督の陰茎を啜え込む。

提督の陰茎を刺激し、強く締め付けた。

「はうううっ、司令のおちんちんきもちいいっ♡どうっ♡わたしのおまんこもきもちいいっ？」

どんとんと腰を振るのが強くなる、提督も快楽の中、かるく、ああ、と相槌を打とうとした瞬間、陽炎の膣内に精液が放たれる。

「んっ……びくびく、してるわね……出ちゃった？でも……まだ終わらないわよ？」

子宮に精を放たれ、大量の精液が子宮を染め、膣口から溢れ零れるのを実感しながら、陽炎は腰をグラインドさせる。

すると精液を搾り取られながらも提督の陰茎は萎えることなく、その快楽を味わい、陽炎もまた、射精されながらGスポットを刺激する快感にすぐに酔いしれる。

「薬、ちゃんと効いてるでしょ？いくら出しても止まらない薬……わたしも、ちょっと媚薬試してみたから……初めてでもすっごく気持ちいいけど」

怪しげな笑みを浮かべながら提督の陰茎を膣で啜え込み、自分の膣内をかき回す陽炎。射精が止まっても尚、くちゅり、くちゅんと淫らな水音が鳴り響き、薄暗い照明の中、ツインテールの少女の妖しげな笑みが提督の眼に映る。

「だ、か、らっ♡司令も一杯気兼ねなく、陽炎の膣内に一杯びゅーって出していいわよ？いっぱいいっぱい出して、妊娠させていいからっ♡」

そう言いながら、陽炎は密着体制から挿入したままスクワットするようなガニ股になり、頭の後ろで腕を組む。

この体制だと服を着たまま、けれども下半身は脱いでると言う煽情的な恰好が、提督の眼に露わになった。

「スクワットって知ってるわよね……じゃあ、行くわよっ♡」

そうして陽炎は、スクワットを始める。



「いっちっ♡にっ♡さんっ♡しいっ♡どおっ♡陽炎のえっちなスクワット♡気持ちいいわよね♡」

ずちゅん、ずちゅん、ずちゅんと淫音が鳴り、愛液と精液が混ざり合い泡を立て、ツインテールを揺らしながら、激しくスクワットし、膣穴で肉茎をしごき出す。

先ほどまでとは打って変る激しい刺激、たまたま提督は一度目の射精をするが、それでも腰のペースは止まらず、射精直後の敏感なペニスに刺激される。

「ずりっ♡ずりっ♡膣穴で刺激される感覚はどうかしらっ♡縛られてっ♡いっばい気持ちよくされるのっ♡」

激しく腰を振られ、提督は何度も精を吐き出しながら、挑発的に陽炎は囁く。

「わたしは気持ちいいよっ♡だってっ♡司令のおちんちんだものっ♡」

陽炎も何度も絶頂していた、だからこそ、貪欲に快楽を貪るスクワットを何度も、何度も行う。

精を出し切り射精が止まる、けどもスクワットは止まらず、すぐにペニスは勃起し直し、すぐに精液を充填し出し、また再度の射精に向かっていく。

「さんっ♡しっ♡さんっ♡しっ♡ひうううっ♡」

そしてスクワットを繰り返し、子宮は既に精液で満タンになり、膣口から愛液交じりの精液が溢れながら、陽炎は快楽に甘く叫んだ。

「ひーっ♡ひーっ♡」

それでも快楽を貪るのを止めない、精液を注がれながら最奥まで啜え込み、腰をガニ股で下品に回し、提督の肉茎を再充填する。

そうしてまた充填が終わると腰を振り始め、じゅぶん、じゅぶんと注挿音が膣口から鳴り響く。

「ひぐうううっ♡またひっっちゃうっ♡でもとまらないっ♡とまんないっ♡」

徹底的な快楽責めの逆レイプ、肉茎はまたすぐに射精し、陽炎は恍惚に浸る。

その快楽に二人は溺れ、その夜は過ぎて行った。

そうして何度も射精し、ベッドの上が精液と愛液交じりの熱を帯びた空間になって陽炎も疲れ果てたあたりで、陽炎は逆レイプを止め提督の拘束を解いた。

「はあ……はあ……どうかしら……陽炎のえっちな姿……」

拘束が解かれたものの、それまでの快楽責めに生きた心地がしない状態の提督はベッドに座り、陽炎は提督の体に抱き着く。

「……気持ちよかった、凄く」

提督が、口を開き感想を言う。

確かにいきなりの逆レイプに戸惑いはしたが、気持ちよかったし、胸が晴れる気分でもあった。

「やったあ！司令も最近相手してくれてなかったから、嫌ってたのかと不安だったのよ……無理やりなのは司令が、悪いんだから」

その声に、陽炎は喜んでぎゅっと抱き着く。

「あ、うん、それはごめん……そういうつもりじゃなくて、つい、忙しくてね」

提督は素直に謝る。その眼に、涙が浮かんでいた。

「いいのよ、謝ってくれたのなら、でも……またこうやって襲っちゃっていいかしら？」

陽炎はその涙に気付き、手で拭ってあげながら、言葉を返す。

「ご自由に」

陽炎の言葉、その言葉に、提督はやんわりと構わないと言う言葉を返すのだった。

SCENE 9

XXX4年 8月3日

陽炎が沈んだ。

俺の恋人だった、彼女が沈んだ。

俺の判断ミスだ、俺が全部悪い。

気が沈む。

狂いそうになる。

XXX4年 8月7日

陽炎を再度建造。

代替品を造ると言うのに後ろめいた感情を得てしまう。

けども、止まらなかった。

XXX4年 8月20日

陽炎とスキップを行う、順調？

XXX4年 9月05日

陽炎が好きな人を出来たと言った。

機装整備員だと言う。

私室に戻った後荒れて暴れ果てた。

鏡に映った自分に嫌悪感を浮かべながら、陽炎を解体する。

XXX4年 12月22日

陽炎を建造。

今度は大丈夫な筈だ。

XXX5年 1月13日

二人っきりの空間を作って一緒の時間を増やす。  
上手く刷り込まれてきた。

XXX5年 1月20日

彼女が脱走した。

すぐに捕まえる。

それを発見した天龍には感謝する。

理由は説明しない、艦娘の私物運用だ、軍法会議にかけられるのは勘弁だ。

XXX5年 3月3日

まただ！今度は姉妹艦と一緒に駆け落ちときた！

俺は道化か！道化だな！狂った手を使って嫌われても当然だ！

だけど理不尽な怒りは止まらない、脱走艦娘の追撃を行うことにする。

XXX5年 3月5日

捕まえて二人を解体、手引きした存在も解体する。

胸がすっとした。

けどもすぐに、喪失感に見舞われる。

XXX5年 3月10日

また彼女が建造で生まれた。

この日記に記述するのがつらい。どうすればいいかのメモを別に書くとしてここには最低限の記録を書く。

目的としては、彼女に強い愛情を抱かせるためだ。

それも、俺を無理やり縛って犯すほどの愛を抱かせるぐらいに誘導しないとイケない。

でないと、裏切られる。

また、裏切られる。

X X X 5年 5月13日  
彼女を解体する。

X X X 5年 5月14日  
彼女を建造する。

X X X 5年 8月6日  
彼女を解体する。

X X X 5年 10月1日  
彼女を建造する。

X X X 5年 12月25日  
彼女を解体する。

最悪のクリスマスだ。

事情を知る艦娘の眼差しに狂いそうになる。

鏡を見て自分の顔に耐え切れず割る。

拳が血まみれになった。

X X X 5年 12月29日  
彼女を建造する。

X X X 6年 2月6日  
彼女を解体する。

X X X 6年 2月7日  
彼女を建造する。

X X X 6年 4月15日  
彼女を解体する。

X X X 6年 6月30日  
彼女を建造する。

X X X 6年 9月9日  
彼女を解体する。

X X X 6年 9月15日  
彼女を建造する。

X X X 6年 11月1日  
彼女を解体する。

X X X 6年 11月2日  
彼女を建造する。

X X X 7年 5月5日  
俺は、どうしようもない人間だ。

駆逐艦陽炎に恋をしたのは何時からだろう、よくわからない。

けども、その笑顔がまぶしくて、だから、一緒に居たいとおもった。

初めての恋は成就した、だけど、泡沫のように轟沈で終わった。

だからそれを認めないかのように次の陽炎を建造で作った。

けども彼女は、別の男に恋を移した。

だから解体した。

その次は姉妹艦、そして解体する。

姉妹艦も造らないようにした。

造っても、すぐ解体する。

そして何度も、何度も、何度も試行錯誤した。

裏切らない彼女を、俺の事を愛してくれる彼女を。

開かずの部屋と呼ばれた部屋で、その試行錯誤を何度も行うメモをした。

何度も裏切られ、裏切られ、そして彼女が自分への愛情を強める状況を造り出す方程式を造った。

そしてその通りに動いた、結果、彼女は俺を無理やり犯そうとするぐらいの愛情を持つに至った。

けれども、俺は、彼女の愛情を持つにふさわしい人間なのだろうか。

何人も、裏切った彼女を解体した俺が。

自分勝手な俺が。

嫌いになってくる。

吐き気を催してくる。

だから、この日記を陽炎、君が読んだら、俺の事を殺してほしい。

## SCENE 9

「開かずの部屋？」

食堂で、陽炎が大井や北上と話していると、その話題が出る。

何時もは提督と陽炎は一緒に食事を取るが、今日は出張なので一緒に食事はとってなかった。

「そうそう、そういう部屋があるって話よ」

北上が楽し気に話す。

「何かあるのかしら？」

「倉庫とかでしょ？」

大井があきれ顔で言う。

「さてね、提督の秘蔵のえっちな本の倉庫だったりして」

「……北上さん？」

真剣な声で、大井が告げる。

それに対し、小声で、陽炎に聞こえないように、北上は何かを囁いた。

溜息をつく大井、その様子に陽炎はきょとんと首をかしげる。

「どうしたの？」

「何でも無いよ、まあ、興味を持ったのなら調べてもいいかもね」

にやついた笑みを浮かべながら、北上は言い放った。

そうして陽炎はちょっと興味を持ったので、事務室からマスターキーを持って開かずの部屋を探す。

好奇心で、鎮守府内の色んな部屋を開けてみたが、だいたいみんな使われた部屋で、開かずの部屋は存在しなかった。

陽炎は少し考える、提督が隠し部屋に使いそうな場所を見取り図を眺めながら。

そこで、そう言えば提督の私室は少し狭かったな、と言う事に気付く。

後は陽炎がやることは簡単だった。

提督の部屋をくまなく探し、そして鍵穴を探す。

「……見つけたっ」

押し入れの中に入り込んで、やっと、ドアノブと鍵穴を陽炎は発見する。

そしてマスターキーから合う鍵を探し、上手くはまった鍵で扉を開く。

扉の先は窓がなく、真っ暗な場所だった。

電気のスイッチは近くにあり、押すと無機質な白いLED電球の光が、辺りを照らす。

その部屋の壁は、陽炎の写真が多く、壁を埋め尽くさない程度ではあるが貼ってあった。

けれども、その写真のほとんどは自分が知らないものだった。

そして、椅子と机があり、その机の上にはペンと、何冊かの日記帳と思わしきもの、そして一丁の拳銃があった。

「……何、この部屋」

陽炎の心の中に、不気味な、不快感が抱く。

どういふことなのか、わけがわからない、そう考えた彼女は、まず、縋るように、一冊の本を手を取った。

## SCENE 10

また、寝ている間にどこかに連れてこられたか。

目をアイマスクで塞がれ、椅子に足を縛り付けられ、後ろ手を結束バンドで拘束された提督は考える。

「さてと、司令起きたら今日はえっちなこと、まだしないわよ？」

陽炎の声が、提督の耳に響く、柔らかく、明るい声だ。

「起きた」

「じゃ、問題ないわね」

そう言って陽炎は、提督のアイマスクを外す。

無機質な白い光が眼を刺激し、その光に慣れた提督の視界の先にあったのは、自分の罪を、まとめた部屋の光景。

「これ、読んだわ」

机越しに、拳銃を手を持った陽炎が告げる。

不機嫌そうに、彼女は語る。

「そうか」

殺されるか、それも悪くない、そう、提督は考える。

「言いたいことは？」

「すまなかった」

これで、終わりか、そう、提督は思った。

陽炎は溜息をつき、そして拳銃を天井に向け、引き金を何度も引く。

銃声が鳴り響き、葉莢が床にばらばらと落ちていき、そして弾切れになったら、銃を投げ捨てる。

「……陽炎？」

提督は驚く、次の瞬間、優し気に陽炎は微笑み、そして机越しに口づけをした。

柔らかい口づけ、そこから、舌を流し込み、絡め合う口づけ。

数秒のキス、けども、何時間ものキスに感じるぐらい、濃厚なキスを行い、名残惜しうに糸を引きながら、陽炎の唇が離れる。

「……殺すわけ、ないじゃない。わたしだって、司令の事、好きなんだから……それが、司令が望んだ事でも、好きなものは、好きなんだから……」

陽炎は、涙を流して言う。

死ねるなんて、そんな終わりは甘かった、そう、甘いキスの後提督は思う。

「……そうだったな」

「そうに決まってるじゃない……だから……いっぱい、今日はここで愛し合いましょ……うん、愛し合うわよ、ここで、嫌がっても、絶対に」

そうして陽炎は、机を乗りあげ、椅子に縛られた提督の体に絡みついでいく。

互いに快楽を貪り合い、こうして鎮守府の一日は、過ぎて行くのだった。

毎度唐突で済まないが。

「ホヒッーヒッー！」

夕雲による公開セックスが始まっていた。なお夕雲の下に組み敷かれている提督はボールギャグを付けられているので発言もできない肉バイブ状態である。これもうレイブだよ。

「中出ししたら（強制的に）合法（にもっていけるの）です！」

さいで。（良い子も悪い子も絶対にマネしないでください（えー）

そして朝霜、藤波、清霜、沖波の四人がいる。夕雲に電気のついていない視聴覚室に呼ばれたと思ったらしいいきなりのセックスショー開始である。だが誰も逃げ出そうとはしなかった。

「ふえ……」

皆かぶりつきで長女のレイブ、もといセックスを見つめている。

それに応えてかばんばんばん、と肉を打つ音が一層激しくなる。

「あっああっ、いい、いい、いいの、いいの、旦那様、旦那様あ、おちんぼ、すてき、すてきすてき、夕雲のくちくまんこにこりこりあたるのお」

水音、嬌声、肉音、全ての音が、全員を苛む。

「おっ、おっほおっ、ほひっ、し、きゅ、もっど、もっ、あっ、は、っひいっ」

下品、と表現するしかないその顔、その声、その体、その膣穴、その全てに、目が離せない。

「あヒイーン！ アァン！ オォ、オホォ！ あァん！ らめ、とまらない、とまらないのぉ！ みんな見てるのにー！ 嗚呼、アァー！ ごめ、なさいねえ！ ゆっ、夕雲はあー！ お、おちんぼ、おちんぼ好き、すきい！ せっくす、だいすきなのお！」

セックス、という言葉に、誰かがびくりと反応する。そして隣を見て、顔を見合わせ、ついでに、ついでに。——誰もが、同じだった。

その反応を、夕雲は嬉しそうに微笑み——股をがばりと開いた。結合部を四人にぼちりと見せつける。

「ん、フフ、フフ……。アァ、い、いい、イク、イク、イクわ、ああっ、妹たちの前で、イッチャウー！ 本気でイッチャウーわ！ ああ、アァーっ、アオオオーっ！」

そして、夕雲は見られながら、びくん、びくん、と大きく身体を震わせ、男の胸に力なく倒れ込んだ。ぼろん、と肉棒が外れ、夕雲の膣穴から大漁の精液がどろどろと零れている。

四人は、見つめていた。見つめるしかなかった。

——五分後。

「……というわけで、これがセックスです。さあ、みんなも一緒に処女を捨てましょう！」

むくりと起き上がった夕雲は、なんかとんでもないことをのたもうた。

「……なんでよ……」

妹たちは一斉に突っ込んだ。いまだにわけがわからない、そういった顔をしている。が、賢明なる読者諸君はお分かりだろう。

これは夕雲先生による提督を使った性教育の時間なのだ、と——。

「……だからなんでよ……」

こっちに突っ込むんじゃないやありません。

\*

事の起こりは数日前。

「性教育、ですか」

「うんまあ、補講みたいな感じだね」

艦娘に対する教育というのは——実は公的には行われていない。これは建造された段階で世界の知識が脳に焼かれる為である。ただしこれはあくまでも最低限であり、特に戦闘知識に偏っている。一般常識に関しては全く無いという娘も少なくない。兵器なのだから正しいといえれば正しい。とはいえ流石に買物すらできないのはどうか、と、一

部の鎮守府では一般教養をメインに私塾レベルの講習を行っている。後は艦娘からの依頼が入り次第、授業を増やしている。

その中でも性教育に関しては非常にデリケートな話題であり、しかし、必須項目である。艦娘は激しい戦闘後、性欲が非常に高まり、我慢し続けているとつい提督を襲って——ということが初期の鎮守府運営には多々見られていたのだ。とはいえ基本的に提督は口を出さずに、大淀などに任せっきりののだが……。

「秋雲のエロ同人誌とかが基準になりかけているんだよねえ」

「あー」

出撃がある以上、授業を受けるかどうかはその艦娘の自由意思になってしまっている。講師もまた艦娘である場合も多く、タイミングが悪いと一つのカリキュラムだけ一向に受講できず、独学にならざるをえない。……つまりはそうなるのであればどう正解なのかわからないのだ。

「清霜からチンチンすこいトゲトゲしているの？ と聞かれたときはどうしようかと」

「ど、どういう事なんでしょうか？」

「モザイク」

「あっ」

夕雲は得心いったとばかりに手を叩く。これももし海外の鎮守府だったら無修正AVでも見せれば一発だったかもしれないが、書籍、とくにエロマンガだと所々ファンタジーな部分がある。太さとか長さとか持久力とか回数とか量とかその他諸々。

「まあそういうわけで、さりげなく大淀にアンケートを取ったらファンタジイを信じちゃってる子が割といたから、何人かで補講をしよう、ということになってね。悪いんだけど妹さんたちの性教育お願いできるかな」

提督は書類を渡した。そこには朝霜、清霜、沖波、藤波の名前がある。皆性教育の点数が悪かったり、あるいはちょっと特殊な嗜好を持つ子たちである。

「承りました」

ふふ、と笑いながら、左手で頬を抑える。

「うん、協力できそうなことならなんでもするから」

「ん？ 今なんでもするって言いましたね？」

「うん」

——そういうことになった。

「今何か不穏な地の文が見えたような」

「気のせいですよ提督。ところで、こちら問宮さんの新作おうどんです」

「わーい」

提督はいきなり出てきたうどん……クロロホルム淫乱うどん改をズルズルとかつ込んだ。効果は淫乱化【狂】勃起持続【狂】精液増大【狂】睡眠【1h】である。

「ぐうすやすや」

「では、いっつしようたいむ♪」

地獄の幕が開いた。

「というわけで、あなたたちにはこれからセックスをしてもらいます」

「……」

「……」

「……」

「……あの、一ついっすか」

アホくせー、と顔に出しながらも、朝霜は手を挙げた。

「はい、何でしよう朝霜さん」

「拒否権は」「他に質問は？」

「……」

まずい、太平洋だ。四人の脳裏に謎の単語が走った。

「……ふ、藤波には必要ないです！ か、カレシいるし！」

重い沈黙を破るかのように藤波が続く。

「まあまあまあ。それはなんて喜ばしいこと！ とところでそのカレシは画面の中から出てくるんですか？」

「……」

「うるせえ！」

夕雲の追い詰めに藤波が泣き出した。

「いーじゃん二次元！ 誰にも迷惑かけてないんだし！ 藤波だって……だって……ううっ……」

なお艦娘が提督以外の誰かと付き合う、という話は滅多に聞かない。対深海対策の為、誰でも提督になれる。そして提督になれば艦娘はいくらでも建造が可能であり、艦娘側からもよほど酷い提督でない限り他の男にちょっかいかけようとはしない。(万一いたとしてもその艦娘に潰されるし、その提督も他所の艦娘を奪うとして上から処罰される)つまりはわざわざ他所の艦娘と提督が付き合うメリットが無いのだ。

故に大体は提督にべったりするか艦娘同士でレズるか、はたまた二次元に逃げ込む。

「気持ちわかるわ、藤波さん。でもね、えっちな漫画を基準にしてもらっては困るのよ」

「えっ」

「精液はガロン単位で出ないの。大体このくらい」

夕雲の膝から、どろりと精液が垂れる。淫乱うどんの効果もあってか一般人よりは多めだが、それでもガロンは出ない。

「……やっぱりそうか。うすうすそうじゃないかな、って思ってたんだけど」

「いったいどんなエロマンガ読んでたんだろうか、と藤波に視線が集まった。

「というわけで皆さん、身をもって正しい性知識を身につけましょうね？」

「ええ……」

「きもーい」

「めどーい」

「お黙り」

夕雲がきたりと睨んだ！ 沖波は辣み上がった！ 藤波は辣み上がった！ 朝霜はちょっと漏らした！

「……戦艦になれるって聞いたんですけど？」

そして清霜は空気を読まなかった！

「そうでしたっけ、ウフフ？」

夕雲さんすこぶるにっこり。

「騙したんだ……」

清霜が泣きそうになる。この末っ子の涙には色々弱い子がいる。

「今キョちゃん泣いて……?!」

「足柄、お仕事」

「はい……」

ともかく。

「ごめんなさいね……。でも空母になられるかもしれないわ。……そしてそこから戦艦を目指せる、かも！」

「本当？ 頑張る！」

純真な瞳をする清霜に罪悪感を感じるも、しかしそれ以上の覚悟で夕雲は笑顔を張り付けて嘘を吐いた。なお、ヒト、それを愉悦と言う。

「あの……す、すみません。提督にやおい穴がどこにも見当たらないんですが」

ただ一人興味津々で提督をガン見するのは沖波。メガネがキラリと輝く。恐らくは電探を使用してまでくまなく観察しているのだろう。

「ありません」

メガネがパリンと割れた。

「そ、そんな……！ 信じていたのに秋雲先生……！」

そのまま腰を落として泣き出した。どうやらこの鎮守府の秋雲先生BLにも手を出していた模様。

「秋雲さんは後でお仕置きですね」

その頃の秋雲さん。

「すみません〇〇のしっ〇さん！ 締め切り延ばしてください！ なんでもしますから！ (提督が)」

土下座交渉中な模様。

なおその後夕雲姉さんのキョーレッツなお仕置きにより原稿を落とすのだがそれは別のお話。

「ていうかさ、司令はいいのよ」

朝霜が鼻を抑えながら言う。なおこの子だけフツーにテストの点が悪かった、という理由である。

「ええ、こんなこともあるのかと提督にはセックスのことしか考えられないセックスモンスターになってもらいました！ そのままだと危険ですのでベッドに拘束してあります」

と、夕雲がボールギャグを外す。

「SEX！」

めっちゃいい発音のセックスが聞こえた。毒電波とか出てそう。

「SEX SEX SEX SEX SEX SEX SEX SEX SEX SEX——ングウ——！」

再び閉じられる。がちやがちやと鎖が暴れる。

「ね？」

「何が「ね？」だー！——！」

朝霜全力の突っ込みも夕雲はウフフのフと意に介さない。

「さてそれでは覚悟も決まったところで、誰からいきみますか？」

決まってねえよ、といったげな視線を、しかし夕雲はすこぶるにっこりとはほ笑むのみ。あ、駄目だこれ。朝霜たちは諦めた。

「……」

「……」

「……」

「……」

朝霜、沖波、藤波は顔を見合わせる。

「……よ、よし、ここは藤波が」

藤波が口を開く。

「藤波ちゃん？！」

「藤！？」

「沖ちゃん、止めないで。……こんなときぐらい、沖ちゃんを守らせてよ」

「そんな、藤波ちゃんが犠牲になるくらいなら私が！」

「そんなこと言わないでよ……」

「でも……」

「——え、ええい！ あ、あたいがやる！ あたいが一番槍だ！」

二人のやり取りに感化されたのか、朝霜は一步前に入る。

「どうぞどうぞ」

沖波と藤波は一步引いた。

「……き、きたねーぞおめーらあ！」

朝霜、3秒ほどして嵌められたことに気づいた模様。

「大丈夫だよエース、あんたならイケる！」

「そうそう。きつとさっきの夕雲姉さんみたいになるぐらいだから」

「え、やだ。あんな変な顔はちょっと……」

「あなたたちちょっと」

喧々諤々と言い争っている。

「ひぎっ……！？」

清霜が一番槍をずぶりと呑み込んでいた。

「……」

「……」

「……」

「あらまあ」

処女肉を貫いた証である破瓜血がぼたり流れるころ、ようやく夕雲除く三人がはっとする。

「「……あああーっ！」」

「き、清オオオオオオ！ だめだよおめーにやまだ早いつてーか何あたいより先に処女散らしてんだアアア！」

「だ、だって、せ、せん、かんに……」

「おめーいつもそれだな！ なりたいのはわかるけどそのなんだもうちょっと状況の判断ってもんをだな！」

「う、うう……」

「ど、どうした清！ は、早く抜くんだ！ 夕雲ねーさんのようにアホッ面晒すことになっちまうぞ！ いいのか！ やめるんだマジで！ 人生おわっちまうぞ！」

なおこのとき夕雲先生がメモで「朝霜さん後でオシオキ」と書いていたがまあそれは別の物語である。

「いたい……」

「へ？」

「いたくて……うこけないよう……」

どうやら痛みで動けなくなった模様。まあ中〇生というか小〇生なボディの清霜に提督の肉棒は太すぎたのだ。

「あほー！ あーもうこりゃ駄目だ！ 沖、藤、ちと手伝ってくれい！」

「はいよー」

「……はっ、ご、ごめんなさい見つめてしまいました！」

わたわたと三人は痛みに泣く清霜の体を掴む。

「藤は右側、沖は左側な！ あたいはま——その、ええと、股を持つわ！」

「いたいよういたいよう……」

「清、もうちょいだ！ 頑張れ！」

「うん……」

「よっしゃいったろー！ いーち！」

朝霜は清霜の尻を前から掴んで持ち上げる。

「んぎいいいいいい！」

「朝ちんっ、早いっ、早すぎ！」

「お、おうそうか！ ちょっと降ろすべ！」

藤波、沖波が清霜をゆっくりと上に持ち上げるも、清霜が痛がる度に下す。その度に朝霜は結合部を揉みほぐす。

何度も何度もそれを繰り返し、少しずつ持ち上げる長さは上がったものの、しかし完全には抜けない。

「ええいくそ、なんかヌルヌルしてるし！ 清お、こんなときにおもらしかよばっちなあ！」

「違うう、違うもおん！ うう、うう」

四人は悪戦苦闘しながらも、とうとうあと少しまでというところまで持ち上げた。

「よーし！ そろそろだな！」

「んぎぎぎぎ……」

「こらえろ清！ ここが勝負どころだ！ 頑張れ！ 戦艦になりたいんだろ！」

「う、うん——！ 戦艦に、なって、やるううっ！」

清霜は力を込めた！

込めすぎて足が降りあがり、左右を抑えていた沖波と藤波に当たった！ 流石に清霜が小〇生ほでいとはいえ朝霜一人では支え切れず……

——ずぶり

支えを失った清霜の身体は、フリーフォールのように肉棒に突き刺さった。

「あぎいいいいいっ——！」

が、そのとき！

「ングウ————ッ！」

提督が大きく震えて、清霜の腔に射精をした！

「あっ、ああっ、あづ、あづいっ、おなかあづいようっ——！」

「ふひえっ！？」

間近で中出しを見てしまった朝霜はその場にへたり込んで、血と愛液と精液と小便の入り混じった液体を顔面から被ることとなった——。

「え、あ、なか、だし……？ きよが……？ ……うッ……」

朝霜はそのまま腰を抜かして気絶した。



肌寒さに震えて、朝霜は目を覚ました。

「……！」

服が、無い。下着すらない。だがそれに驚いている暇はなかった。

眼前に蠢く肉がある。ぐちゅりぐちゅりぐちゅり、先程の清霜や夕雲のような、生々

しい肉の蠢き。

「沖ちん、ごめん、ごめんって、もう、もう許して、ねえ、お願い、お願い」

「駄あ目♪ 今更何を言ってるの。脱走兵はなにされたって文句言えないんだからね？」

沖波と藤波、姉妹二人が男に跨がって、腰を振っている。先程の清霜と同じように、犯されているのだ。

いや、違う。自分から腰を振っている。沖波と提督が繋がっている。そしてその沖波の手で、藤波が縛られている……！！

「……どうですか？ 朝霜さん」

「な、なに、が……」

夕雲が、後ろから声をかける。

「藤波さんが逃げ出そうとしたから、私と沖波さんで藤波さんを捕まえて……あとは見との通りですよ」

「な、なんで……」

何故、そんなことになったのか。妹の疑問に。

「みんな、えっちなから」

姉は優しく嗤って答える。

「うふふ……。司令、藤波ちゃんのカラダ、すごくえっちなんですね。おっぱいもあるし、腰つきもいいし……。藤波ちゃんのカラダを弄る度に、提督のおちんぼ、びくびくしてます。あんっ。でも残念。犯してるのは、私、沖波でえす♪ ふふふ、どうですか、沖波の初物まんこ、気持ち良いですか？」

沖波の、どこか楽しそうな声に、提督はふいごのような音を口から出しながら腰を振る。

「ああ、ああっ、そんなに暴れてえ、いいんですね、沖波まんこっ、私みたいな貧相な子でも、いいんですね。……よかった」

「よくなっ、あっ、指、あっ、だめっ、そんないれないでっ、だめっ駄目だっばっ」

「駄目？ どうして駄目なの？ 気持ち良いんでしょう？ そんなによがって……。藤

波ちゃんも、おちんちんで処女膜破られたいから？」

「！」

「あっ、藤波ちゃんの膣、きゅってした……。凶星かあ……」

「……ッ」

顔を赤くしながら、藤波は口を紡ぐ。

「すけべ。藤波ちゃんは、すけべ」

そんな藤波の耳元で、優しく、優しく罵る。

「ひう……」

「私達艦娘は、みな全て、提督という港に繋がりたいんですよ。私達だけの港に」

「あ……え？」

夕雲が優しく、朝霜に囁く。朝霜は、まだわけがわからないのか、夕雲と提督を交互に見る。

「すけべ、へんたい、へんたい、へんたい、へんたい、藤波ちゃんのへんたい」

「やめ、やめて、おねが、やめ、やめて」

じゅぼじゅぼと響く淫乱な蜜と肉の棒と蠢く肉から染みる汗が交じって臭う。いやな臭いだ。見たくない光景だ。だというのに、鼻をつまもうともしなければ、目を逸らそうともしない。

「……朝霜さんも、犯せば、わかりますよ」

おかせば。その言葉が頭に響く。

「三人一緒にイコウ」

「駄目えだめだめえ見ないでみないでみないでいかさないでえええええっ」

「あは……イッちゃえ」

あんな風に。楽しそうに。

犯している。自分を。

自分も、ああなれば。

「シたいでしょう？」

いや、いやだ、やだ

「濡れてるでしょう？」

ちがう、そんな、ちがう

「目が離せないでしよう？」

だって、あんな、あんなの

「ひいっ、ひいっ、ひいひいっ、ひいひいっ……！」

「あっ、ああああっ、んっ、ああ、あつ、あつ、あつ、あつ……！」

「そう、その感情。その劣情。それこそが」

やめて——

「命よ」

——あ。

夕雲が、力つきた沖波と藤波を、ゆっくりと退かす。

沖波の腔から、ずるりと肉棒が出る。——未だに、そそり立っている。

「さあ、朝霜さん？」

夕雲が囁う。あくまのように。

「あなたの番ですよ？」

「……」

朝霜は、見つめている。夕雲を、姉を、そして男を、肉棒を。

「準備はいりませんよね？ 私の、清霜さんの、そして沖波さんたちのセックスで、理解したでしよう？……今の私のようになるのだ、と。そう、浅ましく、悍ましく、獣のように」

そわりと、震える。朝霜は体の奥が熱くなっているのを再確認していた。

「朝霜さんがいやだ、というのなら、あのぶりぶりのおちんちんは、私が食べてしまえますね？ 嗚呼……まだあんなにそそり立って……。妹の処女を奪い続けたというのに

……ふふ……素敵……」

「……あ、ああ……」

朝霜は、言葉を出した。出そうとした。だが舌が回らない。だからと涎が出る。目がぼんやりする。かと思えばくっきりと映る。目が、離せない。

自分に命を吹き込んでくれるものに。

「……そうですか。では、どうぞ、存分に——」

夕雲は、全てわかったかのように微笑み、

「○してしまいなさいな？」

最早、けだものとなった朝霜のこころを解き放った。

「あ、アアア……」

四つん這いで朝霜が進む。前へ、前へ。提督に、肉棒に向かって。邪魔するものは誰もいない、だというのに朝霜は、けだものは進まない。まるで手足の使い方を忘れた赤子のように。それでも前へ、前へと進む。

そしてようやく血まみれの肉棒を顔にぶつけて、いとおしそうにはお擦りをする。

「あ、あひっ、ひい！」

そして赤子が乳を吸うように勢いよくくわえ込む。

「んこお……」

勢いが良すぎて噛んだのだろう、男が暴れる。が、けだものは止まらない。止まり方がわからない。

最早蹂躪と言って良いそれは、次第に収まる。代わりに愛撫が、愛でるように愛しうに優しく優しく優しく優しくけだものが、少女が口の中で男を愛でる。ちゅうちゅうちゅうちゅうちゅうと柔らかく蹂躪する。熟練れた娼婦のように。ときおり初心な子供のように。ころころころころ頬の中で男を慰める。

びくん。

男はあえなく射精した。

少女は突然の精に驚くも、むせることなく、それを飲んだ。ごくごくごく。おいしそうに。いとおしそうに。うっとり。

少女は——朝霜は、立ち上がった。

理解した。理解してしまった。自分がそういう生き物だと、脳にはっきりと焼かれた。恥ずかしさはある。が、どこか嬉しさすらある。

「……」

やることはわかっていた。

男の肉棒を、男の精を、自分の中に、腔に収めるのだ。

「……んっ！」

「……動く、よ」

「……」

「んっ……」

「ぎこちない。お腹がじんじんして、動こうにもよく動けない。」

「あ……ん……」

「それでも、犯す。犯そうとする男を、犯す。」

「あひっ……」

「犯して、犯して、犯して、犯して、」

「んっ、あ、ああ……んっ……！ はあん……」

「いつしか、朝霜は悦んで泣いていた。」

「はひっ、んっ、んくう……！」

「今すぐやめたい／もっとしたい。」

「恥ずかしい／うれしい。」

「やだ／すき」

「すき」

「……あ、うあああ、あううああ……」

「ぼろぼろぼろ涙を容しながら、それでも朝霜は腰を振る。」

「んぐっ、……うう、ああ、ご……んっ、んんっ……すっ……んはあっ……！」

「何かを言いかけて、それを飲み込む。それが心の中で腐り落ちる前に、別の言葉を飲み込む。」

「朝霜は男を見る。」

「胡乱な瞳だ。けだものの瞳だ。理性なんてない雌を犯すだけの雄。それに跨がり、貪る自分は、なんとという破廉恥なのだろうか。」

「……うう、うぐっ、ひっ、くっ、ああ、うう……ああ、うああああ……」

「泣いた。泣いた。犯した。泣いた。犯した。犯した。けだもののように。きちがいのように。そして。」

「射精。」

「……ッ！」

「嗚呼。終わった。終わってしまった。どくどくと流れ込む精をこころ一杯に感じながら、少しずつ終わる勢いに泣きながら、幸せを感じる自分を恥ながら、」

「……あ、ああ……んっ……」

「結局、何も言えずに。何もできずに。」

「あ、は……」

「そのまま、男に倒れ込もうとするのを、」

「はい」

「交替」

「二人の手が止めた。」

「朝ちん、何ぞ開気出してんのさあ。藤波まだなんだかんね？」

「えー、次私ー！ 今度こそ空母にクラスチェンジするー」

「清霜ちゃんはブレないねえ」

「楽しそうな姉妹の声に、とても、とても安堵する。そのまま身を委ねなくなる程に。」

「……ああ、……あたい」

「どったの？」

「……まだ、まだ、何も……」

「泣き出す朝霜を、姉妹の手が優しく撫でる。」

「もっかいすればいいじゃん」

「もっかい。」

「そうですよ。一度で終わりじゃないんでしょ？」

「だよね！」

「恐らく、朝霜の葛藤など、知る由もないだろう。」

「だが、もう一度、という言葉が、朝霜のこころを奮立たせる。」

「……ん、そだな！ うん！」

もう一度。そうすれば、わかるかもしれない。わからないかもしれない。恥を重ねるだけかもしれない。それでも――。

それでも、肌を重ねたい。深く、深く、これが罪だというのなら、それでも構わない。

「よっしゃみんな！ もいっちゃったろー！」

「『おおー！』」

その先に感じた何かを、もう一度感じたいから。

（あのなんだかいい話風味でシメられそうなんだけれどもウッドンが切れて目が覚めたので拘束解いてくれるとありがたいんだけど）

――そして、男が干からびるまで、小悪魔となった四人は代わる代わり精を貪った。

（あのさあー！）

「？ ……ねえ、司令が何かいいたげなんだけど」

「気のせいだろ！ それよっか勃起が悪くなってんぞ！」

「えーとそういうときはお尻の穴を」

「んぐうー！ー！」

「おおすげえ！ 沖ちゃんは物知りだ！ 流石メガネ！」

本当に干からびるまで、貪ったとかなんとか。

・あん えびろーぐ

その姿を、夕雲はすっかり録画していた。

（録画完了――うふふふふ、これだけ情けない姿をついっかかり広大なネットに流してしまえば提督を慕う子もいなくなるでしょう。提督も自信を無くして引退――「だめだ……やっぱりナイチチはだめだ……ナイチチは淫魔だ……」そんな風に脅える提督をそっと抱き締めて籠絡させて夕雲だけの旦那様に……そして夜も昼も無く独占……嗚呼、完璧、完璧だわ……！ おお神様……夕雲は自分が恐ろしい……！）

おお、なんと恐ろしい計画か！ 仏陀よまだ寝てるのですか！

『ほっとけ！』

さいで！

――が、夕雲さんは気づいていなかった。

「と、ところでさあ、みんな」

彼女らもまた、世間一般ではサキュバスと言われる夕雲型なのだ――

「あたい司令の嫁さんになりたい」

（……えっ）

「わ、私も……です」

「沖ちゃんも？ ふ、藤波もさあ……こ、これ、すぎ、かなって」

「えー、みんなそうなの？」

（えっ、えっ……？）

「な、なんかさ、司令の、今みたいなポロポロの情けない姿見ると、その……ぎゅって抱き締めたくなるっていうか」

「『わかる』」

（わかる。……いやいやいや。みんなどうしてダメメンズ好きなの！？ お姉ちゃんわけがわからないわ！）

理由・アンタの妹です。

（なんて……こと……）

「夕雲姉！」

朝霜が土下座をする。

「あたい……司令の嫁さんになりたいんだ！」

「うん！ このひと、支えたい、支えないとだめっほい！」

「お願いします、私にもどうか……」

「夕雲姉さん……だめ？」

「う、うう……」

夕雲は外道である。外道であるが。

「……し、仕方ないわね……」

提督とは別ベクトルで可愛い妹たちの願いを無下にできるほど外道ではなかった――

「話は聞かせてもらった！」

そして残りの夕雲型が全員現れた！

「ンまあ今回容量と時間の都合上出番の無かった長波さんとその他の皆！ ……どこから聞いてました？」

「最初から！」

なんか股の間から変な振動音が聞こえたが夕雲はあえてスルーした！

「というわけで独占はするいぜ夕雲姉さん！ あたしたちは……同じ夕雲型じゃないか……！」

「長波さん………良いことを言おうとしてごまかそうとしても駄目ですよ？」

「いいじゃんさー。あたしもしたい」

「ま、はしたない」

「を共にしたい」

「慕入り宣言！？ くっ……いいでしょう。では夕雲型全員で提督のお嫁さんに――」

「オーッ！」

こうして。

提督は夕雲型全員を娶ってしあわせにられましたとさ。干からびたけど。

「あの、僕の意志は？」

ねえよ。

どっとはらい

「んおほおオオおおお♥♥♥ イグウウウウいくいくいくいッ……つぐウウウウウウウウウウウウウウウ♥♥♥」

それを聞いて嬌声だと……然るに女があげたものと気付けるものがどれだけいるだろうか？ 野太く、大きく、長く……それは正に毛駄物の絶叫であった。

薄暗い室内には明かり一つなく、ただ僅かにカーテンの隙間から星明かりと月光が漏れ出るのみである。

そんな射干玉の闇夜であっても、飛び散る汗の珠はハッキリと見えた。そして蠢く一つの白い影も……。否、二つだ。だがそれらはまるで蛇のように絡み合い纏れあって、一時とじっとしてはいなかった。

「おうおう、良きイキッぶりじゃ。フフフ……これでもう何度目かのう？」

影の一つが蠱惑的な口調で尋ねる。ただその声は驚くほどに幼い。それもそのはず、伸し掛かるような肢体は手足こそ伸び切っているものの起伏に乏しく、無駄な脂肪など一切ついていなかった。顔つきもまだ「幼気な」という表現がピッタリの年格好である。せいぜいがランドセルを背負って通学している位の。

だが浮かべる顔つきは淫靡な雌のそれであった。しかも傾城のという枕詞が付く。

小さな鼻に僅かに朱を差したような唇。短く太い眉の下には紫水晶を思わせる大きな瞳が二つ、さも愉快というように歪んでいる。一つに結んだ後ろ髪は腰まで届き、その色は瞳と同じく自然界には決してあり得ない薄紫色。だがそれは染めたものでは断じてない。彼女らの仲間内では珍しくもないのだ。例を挙げるなら他にもクリアブルーや赤、緑にピンクにエトセトラエトセトラ……。

彼女は初春といった。

人間ではない。人の姿をしてはいるがれっきとした兵器、艦娘だ。その中でも彼女は駆逐艦という部類に属する。

そんな人非ざる者は、その病的なまでに白い顔に三日月のような亀裂を浮かべた。

「ほうれ見いや。お主の汁が顔にまで飛んで来おった。くふふ、甘露甘露じゃわ」

ペロリと長い舌を動かすもその手は止まらない。

「あっ♥ おっ♥ あがっ！……や、やべ……もおやべでえ……い、イッだあ♥  
もうイッだからあ！ ああああああ♥」

「ははは！ まるで犬じゃな！ 盛りのついた犬そのものじゃ！」

「ちっ……ちぎや……」

違う——と言いたかった。だが初春はそんなもう一つの影の頸を掴むと、

「何が違うものかえ！ ほれ、ようやく己が眼で見るが良い！」

そういつて無理矢理横に向かせる。そこには古い姿見があった。

鏡面に映る姿……長く黒い髪は艶めいて、紫色の髪と絡み合いながら真っ白なシートに散らばっている。初春の乏しい身体とは違う、成熟した大人の肉体。豊満というには形容しきれない程の大きな胸はなんと105cmのKカップ。初春が先程からグニグニと揉みしだいているそれは寝そべっても形が崩れず、その柔らかさと張りを強調するかのようだ。先端の突起は固く勃起していて、瑞々しい桜色のそこを甘噛みするのが初春は好きだった。

そのくせ胸から下はスラリとして腰は括れており、形の良いヒップは歩くたびに左右に揺れ、街を歩くときは男の視線を釘付けにしていた。脚も手も長く、肌も初春とは対象的な健康的な白さで……つまるところモデル顔負けのボディラインをしているということである。事実、これまでに何度も赤レンガからの要請で「提督募集」のパンフレットの表紙を飾っていた。

優れているのは身体だけではない。どこか幼さを残しつつも美しく整った容姿は、美少女・美女だらけの艦娘達の中にもけっして褪せることはなかった。本人は少し垂れ気味の眼を気にしていたが、長いまつ毛に縁取られたそれは一層その魅力を掻き立てていた。泣きボクロすら色気に一役買っていたといっているだろうか。

だがしかし……今はそんな面影は微塵もなかった。

高い知性の滲み出る表情も、高く通った鼻筋も、ぶっくりとした唇も……。今浮かべている表情を見たら、誰しもその印象を粉微塵に粉砕されるだろう。

鼻水と涎は垂らしっぱなし。口はだらしなく開き、はみ出た舌はダラリと垂れたまま。唾液と粘液に塗れた顔は紅潮し、その眼は黒目が上にいったまま戻ってこない。

「あ……あああああ……あああああああ……やあああああ！ やらあ！ やらあああ！ 見ないれえ！ ごんな顔見ないれえ……！  
人はここまで乱れた表情を出せるのか、という見本のような表情だった。いや、出させ

られたと言った方がいいか。事実脳の許容範囲を超えた快楽によって意識すら途切れ途切れで、一体いつからこうしているのか、いや今が何時かすらはつきりしなかった。

「くふふ、妾がそれに是と思うてか？ ……足りぬ。ちいっとも足りぬわ。もっともっともおおーとお主の淫らな声を、顔を、姿を……妾に見せてくりゃれ？」

いつから……どうして……。

ぐちゅりと音を立てて動いた初春の手に意識を飛ばしながら、提督——美波アキラは考えた。そう、確かあれは——……。

【1】

赤レンガに命じられその場所に立ったアキラは、しかし大きな溜め息を吐いた。

「確かに……上の意向は分かるけどさあ……」

眼前には海風に長い間晒されたせいであろう、少々錆びついた看板が門柱にはめ込まれてある。そこにはこうあった。

呉基地 第006鎮守府。

深海棲艦との闘いが始まってもう二十数年経つ。呉はその戦略的、戦術的位置から最初期から稼働を始めた軍港の一つだ。雲霞の如き奴らの物量に対抗して、艦娘を擁する鎮守府も次から次に創設されていった。

ここはその六番目に開かれた鎮守府である。それは即ち——呉だけでも鎮守府の数が三桁に達している現状から見ても——最古参にして歴戦の勇士であることの証明でもある。実力のない鎮守府は責め立てられ、文字通り潰されるしかないからだ。事実同じ呉地方で残っている一桁台は003と009の計三つだけである。

そんな栄光極まりない鎮守府に、何故アキラのような——同輩達から一歩抜きん出た戦果を挙げて期待されているとは言え——大佐風情が赴任させられたのか……。

いや、既にその答えは分かっている。呉の006といえば仲間内でも有名であった。

『提督喰い』……『淫魔共の巣』……か』

いくら相手が深海棲艦という人外の者とはいえ、戦歴が長い……ということはそれだけ『人間を辞めている』ということだ。長く戦場にその身を置いたものは身体か、精神か……或いはその両方を侵される。

殺戮や残虐行為を楽しむ者。アルコールや薬物、賭博に溺れる者。精神が壊れ機械になっ  
ていく者……。

中でも一番多いのが『色に溺れる者』である。

手軽で手早く安価で、大抵のことは何の道具も必要ない。互いの肉体があればいいだけなのだ。しかも副作用もなく快楽までついてくるとききている。提督という男に見目麗しい美少女・美女が百人以上、閉鎖された空間内で日々命のやり取りという強いストレスに晒され続けるのだ。寧ろそうならないのがおかしいだろう。

だがこの006鎮守府はそれを顧みても『異常』であった。

曰く、赴任した童貞提督がその日の内に犯され搾り尽くされた。

曰く、幼ければ平気だろうと飛び級の天才児を送り込んだら、精通するまで食られ馬鹿になって帰ってきた。

曰く、動物などのマスコットキャラクターですら獣姦・異種姦用に飼いなされる。

曰く、近隣住民にまで被害が及び、周囲一体は無人情帯と化している。

曰く、今まで腎虚・EDにされた提督の数は四桁に届く……等々、その悪評を教えればキリがない。だが実力だけは確かで、今まで何度も大きな戦果を達成してきたという経歴があるため上も容易に解体する訳にもいかない。

そこで頭を抱えた上から白羽の矢が立ったのがアキラだ。

連中は確かに男狂いの色魔ではあるが同性愛嗜好はない。開戦初期は不足していたが、昨今は女性提督も数を増やしつつあるし、アキラのように躍進著しい者も増えてきた。そこで今ならば——といった事柄が数日前、赤レンガの会議室で大將級の上官連中に説明された理由であった。

嫌で嫌で仕方なかったが軍人は縦割り社会。NOとも言えず、また昇進と昇給、上とのコネという餌までちらつかされて……結局アキラはこうしてここにいたのである。——とは言え、

「心内で愚痴でも仕方ない、か」

そうとも、バレなければいいのだ。アキラはそう自分を半ば無理矢理納得させると、グッと一步門の内に足を踏み入れた。

「愚痴を言いたいののはこっちじゃ」

その時だった。誰もいないと思っていた空間に、鈴の鳴るような声が聞こえたのはいや事実、鎮守府正面玄関と正門とを結ぶその小道にアキラ以外の姿はなく、ただ桜の花弁が風に舞っているのみである。と、さして高くもない門柱の影からズイッと畳まれた扇が伸びた。どうやらその影にいて気付かなかったらしい。すっと上下運動なしに伸ばされた腕は細く、病的に白い。そのまま歌舞伎や舞を思わせる仕草で、アキラの前に進み出した影があった。

「予想はしていたというものの、あやつらをどう有めたらよいか……はあ、頭が痛いわい」

扇を額に当ててこちらも溜め息を吐く。その仕草が恐ろしいほどに艶っぽい。

「お主が此度遣わされた提督じゃな？」

アキラとて着任したばかりの新人提督ではない。ここに来る前にも鎮守府を指揮したことがあり、だからこそ彼女の名前もスッと出て来る。

「初春……」

「なんじゃ？ お主、そうは見えぬが新人提督かえ？ それともお主の鎮守府には妾はいなかったとでも申すか？」

艦娘はその全てがクローンだ。どこかでオリジナルが顕現するとその細胞は採取され、培養されてどの鎮守府でも顕現出来るようになっていく。まして初春は駆逐艦だ。顕現しにくい艦でもない。

「あ、いや……その、いきなり現れたからビックリしちゃって……」

そう言う初春はファン、と鼻を鳴らしながら扇を開き、口元を隠しながらアキラを上から下まで観察するように睨めつけた。まるで値踏みしているかのようだった。

「ここで売女共の代表——のようなことをしている初春じゃ。よろしう」

扇とは反対側の手を伸ばしてくる。握り返すと仄かに白檀の香りが鼻腔をくすぐった。

「ば、売……って。その、他に言いようが……」

「如何に言葉を飾ろうが本質は変わらん。黄金は黄金、糞は糞じゃ……？」

軽い握手を交わした後、そう言いながら初春は何か微妙な表情で首をかしげた。

「？ どうかした？」

「……いや、なんでもないわ。妾の気のせいじゃ。まあ、代表とは言うたが何のことはない、ただ一番の古狸というだけだな。ああ、後はまあ会話やらこみゆにけいしよんが出来るから就いているだけじゃ」

その言葉にげっそりしたくなる。淫魔共の巢という二つ名がアキラの背に押し掛かっていた。本当に自分はここでやっていけるのだろうか？

「とりあえずのお主の仕事は、血走った目をしてる淫魔共にご紹介することじゃな。安心せい、お主ならとりあえずとって喰われたりはせぬよ。それに妾も可能な限りさぼおとすると約束しよう」

「よ、よろしくお願いします……」

「で、お主、名は？」

そのやり取りでアキラはまだ自分の名も名乗っていないのを思い出す。

「あ、美波。美波アキラ……。階級は大佐……。よ」

「では美波提督様、ようこそ淫魔共の巢へ」

初春はまるで西洋の騎士のように右足を後ろに、左手を胸に当てて頭を下げた。

【2】

それからのことはといえば、倍速送りのように目まぐるしく過ぎていった。

白けきった視線と、複数の舌打ちが乱れ飛ぶ中で自己紹介。鎮守府内を案内してもらえば、廊下に転がる大人の玩具。そこいらに転がる丸めたティッシュ。私室の壁と天井を全て今までの被害者のものだろう、絶頂した相手の顔写真で覆っている艦がいた。同様に石膏で型取った男性器を部屋のインテリアにしている艦もいた。しかも部屋の主は駆逐艦である。まるで二日酔いの晩の悪夢の再現だ。とは言え……。

「人間って本当、慣れの生き物だよねえ……」

赴任から三ヶ月、そこにはすっかり慣れてしまったアキラがいた。

赤レンガの報告通りというか、初春の宣言通りというか、アキラが襲われる（性的な意味で）ようなことはなかった。艦娘達も指示には——アキラの実力は認めているようである——従ってくれるし、たまに男に飢えた艦娘達が狩りと称して男を襲いに行くくらいで、それなりに平穏な日々を送れている。

当初は狩りを止めさせようと頑張ってはみたものの、無駄だということがわかってからは放置していた。何せどんな手段を使って拘束しても連中は脱走し、翌朝にはツヤツヤとして戻ってくるのだから。赤レンガも半ば諦めているようであった。

だから平穏無事、世はおしなべて事も無し……とはいかないのである。世の中そう上手くは回っていない。

「提督、第一艦隊帰還しました」

大淀の声が告げると同時に、執務室のドアが蹴破られるように開かれた。

「だからよォー、あん時まずはヲ級の腐れマンコにぶち込めばよかったんだ」

「童貞の男子中学生みたいなタラレバは止せ。ああ、そういうえば最近シヨタを喰ってないな」

真っ先に入ってきたのは天龍だ。軽巡最大級の胸をたぶんどぶんと揺らしながら、愚痴を漏らしている。うっすらと浮き上がった腹筋を汗で濡らしながら隣を歩く長門は、それを適当にいなしては妄想の世界に浸っているようだった。あれでもこの鎮守府のエースオブエーズである。

二人共惨憺たる有様だった。服は焼け焦げ、或いは破け、その柔肌を露わにしている。

それを隠そうとすらしらないのだから、見えてはいけないものがはみ出てしまいそうだ。長門などピンク色をしたその片鱗が……。

「えー、長門さん。童貞って面倒臭くありません？ 私はやっぱ年上だなあ。包容力があってえ、兄系でえ、チンコおつきくってえ……」

「早く部屋帰ってオナって寝たい……」

「雲龍さん。ポンチ丸酷使すんの止めてくださいよ。あれ鎮守府共有の財産なんですからね」

航改二となった千代田も雲龍も負けず劣らず酷い格好だ。ちなみに彼女の言うポンチ丸とは鎮守府で飼っている犬（雄 雑種 三歳）の事だ。ニクポー、パイプ、タマ（金玉から）と皆好き勝手に呼んでいる。専ら暇な艦娘やその手の趣味の者に性欲解消用に使われている。

「皆さん不潔です！ そんな……ふ、ふしだらなことを！」

「カカッ！ どの口が言いよるか、このマゾ豚が。好き者のくせしおって」

色気の充満する部屋に最後に入ったのは未だ可憐な蕾——であるはずの駆逐艦である。唯一マトモそうなことを言う朝潮だが、初春の言うとおり度を越えた被虐嗜好の持ち主であり、屈強な男に無理矢理犯されるのを何よりも好んでいた。わざと薄着で危険な路地裏を歩くようなムツリである。

「こ、これまた……皆手ひどくやられたね……」

生唾を飲み込むのを懸命に抑えて、ようやくひねり出せた言葉はそれであった。全員が全員、中破以上の損傷で肌色の占める面積の方が多くくらいだ。

「おう提督、やっぱもう少し航空戦力ねえとあそこ駄目だわ。奴ら糞ひり出すみてえに爆撃してきやがってよお」

「あと駆逐艦も対空能力が高いほうがいい……早くオナりたい……」

「う、うん……わ、わかった。検討してみるよ。とりあえず皆お疲れ様。ドックは空いてるからゆっくり入渠してきて」

「すまない提督。子宮が昂ぶってしまってシヨタを喰わないと寝られそうにない。バケツを使ってもいいか？」

バケツとは高速修復材の通称である。長門は戦艦の為ただでさえ修復時間が長く、お

まけに今回は大破であった。要は『早く犯りにいきたいからさっさと治させろ』である。「か、構わないよ。うん、バケツはまだ余裕あるし。ほ、他にも時間長い子いたら使っているからね」

「ではそうするか。皆の衆、湯浴みに参ろうぞ」

初春の鶴の一声で一同はめいめい執務室を出ていった。最後にベコリと礼をしてから朝潮が戸を閉めたのを確認して、アキラは椅子に沈み込む。

「は……はああああああ……」

襲ってくるのは疲労感と安堵……。よかった、今日もバレなかったという……。そして……。

「うっ……うう……またっ！」

もじもじと太股をすり合わせながら、アキラもそそくさと執務室を後にする。目指すはトイレ。その個室だ。しかも使う者のいない男性提督用の、である。

「……ッ！」

カチャカチャとベルトを外す動作すら覚束ないほどに、急ぐようにジッパーを下ろしズボンを出っ張りに引っ掛ける。式典ではスカートを履くことが義務付けられていたが通常業務では自由で、アキラの周囲でも動きやすいからとズボン派の方が多かった。その真っ白なズボンの下には本来なら華やかな女性用ショーツが見えるはずであった。が、現れたのは男性用下着型サポーターである。

「はー♥ はー♥」

それすら脱ごうとする。だが思うように脱げずいた。もどかしそうに下に思い切りズリ下げると……ベチーン♥ ソレは思い切りアキラの腹に当たる。

チンポだ。そこにはチンポが生えていた。

しかも唯のチンポではない。デカイ。ただひたすらにデカイ。

まるで作り物だと思えるほどにそれは長く、太く、大きかった。全体的に淫水焼けしたかのように黒ずんでいて、ミミズのような太い血管が肉芽を這い回っている。亀頭も大きくエグい程にカリが張り出しており、長さ30cm、直径6cmのそれは普通の成人男性ですら滅多にいない超巨根だった。

それだけではない。その下にはソフトボールサイズのデブプリとした睾丸が、パンパ

ンに張って存在を主張していた。

美波アキラは男性なのか？ 否、違う。その豊満過ぎる胸は作り物ではないし、何より大き過ぎる睾丸の下には割れ目——女性器が肛門へと続いている。

深海棲艦の襲来はそれまでの現実を、日常を、常識を一変させた。人間以外の知的生命体の敵、妖精という非科学的存在、艦娘という人非ざる者……。

そしてその影響は一般の人々にも現れていた。『ふたなり』と呼ばれる男女両性の特徴を持った者たちの登場である。美波アキラはそれであった。

「はー♥ はー♥ くっせ……」

片手では掴みきれない肉竿を握ると、アキラは思い切りごしごしとしごきだす。その動きは他人から見たら「痛くないのか？」と思われる程に激しい。

「くっせ……くっせ……あんな格好で……くふうん♥ あんな格好でうろつき回って……んんんん♥ 私がどれだけ……どれだけ……ああ♥」

激しすぎるオナニーのおかずは先程の光景だった。無理もない、モデルや俳優以上に整った顔立ち、身体つきの美少女・美女たちが半裸のような状態にいるのだ。股間の勃起を抑えるので精一杯だった。脳内に長門の姿が浮かぶ。しゅっ……しゅっ……こしゅ……しゅっ……。

「っふ……ふんっ♥ ふんっ♥ 済ました♥顔おん♥しや……がって♥ そんな男を誘うような……つくそ♥ お前なんか……お前なんか♥」

その瞳の中ではもう長門は犬のように四つん這いになって、快楽に顔を歪めていた。我慢汁と呼ばれるカウパー腺液が次から次に尿道から溢れていく。普通の男性なら射精したと見間違える程の量だ。

「っああああ♥ 天龍♥ 天龍♥ 軽巡のおおほお♥ 軽巡の分際でえん♥ なんだ！ その！ おっぱいは♥ こうしてやる♥ こう！ してやる♥」

立派過ぎる胸に無理矢理巨根を挟んで奉仕させる。無論想像の中でだが。手首にまで垂れた粘液は滑りを良くすると共に、そのいやらしい音で聴覚的にもアキラを興奮させていった。ずちゅ……にちい……ずちゅ……ちゅぶぶ……。

「はらっ♥ 見なさいよっ♥ 見ろお♥ あはは、姉の♥ 前で♥ 犯されてえん♥ ふっぐううう♥ だらしなくアへった感想はああア♥」

千代田も、姉の千歳すら巻き込んで自らの欲望の材料にする。浅ましいその姿に先程までの提督としての威厳はない。ごちゅ……ずちゅ……にちゅ……にちゅ……。男子トイレの個室内に淫臭が充満する。汗と我慢汁と唾液の臭い。

「オラッ♥ オラッ♥ 雲龍！ 雲龍ううう♥ 孕めッ♥ 孕めええ♥ そのデカすぎるパイオツから♥ 母乳吹き出してアクメしろオオン♥」

妄想なら全てが自由だ。例え妊娠していいない雲龍が母乳を撒き散らしながら絶頂したとしても。既にチンポだけではない、その下のマンコからも愛液がグチョグチョと滴り落ちていた。

「ヒヒ……ヒヒ♥ そんな♥ キッツキツマンコで締め上げてえんん♥ 初めてなのにい♥ そんなにザーメン欲しいのオ♥ このクソガキ♥ あ♥ あ、ヤバ……もう♥ もう♥ つくふっ♥ あっ♥ あっあっあっあっ♥」

朝潮を犯している妄想で致している最中だった。それまで必死に堰き止めていた快感が膨れ上がっていくのを感じる。キンタマの中でマグマのようなそれがぐわんぐわんと製造され、射精管を通して龟头へと運ばれていくのが分かる。次第に視界は明滅し、意識は遠く離れていく。

「あっ♥ 駄目エ♥ まだっ……まだイッチャ♥ はぐうん♥ あ♥ あ♥ ダメダメダメダメ……」

本当ならもっともつとこの快楽に浸っていたかった。だが先程網膜に焼き付いた映像は余りにも刺激的すぎたのだ。アキラの思考回路は急速、その妄想の中身を書き換えることにした。

「つくそ♥ くそっ♥ 子宮の中にイ♥ 子宮の中に直接っ……おっぐおオオオオ……駆逐マンコに種付けっ♥ 種付けしてやるっ♥ ザーメンでたっぶたぶにしてやるうううん♥ 孕めッ♥ 孕め朝潮オオオ♥ あ♥ イ……つく……イクイクイクイグイグ……」

朝潮の子宮口にびったりと当てるイメージで、アキラは最終段階に入る。今までの前後に長いストロークを止め、まるで何かを搾り出すかのように短く、速い動きに変えていく。ぢゅっぢゅっぢゅっぢゅにぢゅしゅ……ここ……ここ……。そして……炸裂した。

「イッ……グッああああアアアアア♥♥♥」

ぶびゅっ……どびゆるるるるるるる！　びゅくびゅくびゅくびゅー………  
るるるる！　ぶびーっ！　ほびゆるるるるるるるぶびゅー！

「ほ♥……おっ……は……♥　あ♥　あ♥　っぎい……♥」

並の成人男性ならもう数発分は出ただろうと思える量を洋便器に放っても、アキラの射精は止まらなかつた。やがて朦朧とした意識の中、肉棒に添えた手すらだらしなく垂れ、制御を失った肉竿は辺り構わず白濁液を噴射する。

ぶぼほびゅーーぶびゅー……るるるるるる！　ほびゆるっ！　ぶびゅっびゅー……るるるる！　ぶびゅっ！びゅー……びゆるるるる………

「あ……へっ……♥　えあ……あー……♥　うあー……♥」

恍惚——アキラの表情を表現するなその一言に尽きるだろう。涎を、鼻水を垂らし眼球は上を向きながらもその口元は確かに笑っていた。

びゅっ……ぶびゅっ……びゅっ……びゆるっ……っびゅ………

「は……はあ……はひゅう……ひゅう……あ……」

ようやく呼吸が戻り白く染まっていた視界が元に戻ってくる。だが待っていたのは洋便器だけでなく、壁に床に、そして天井にまで届き汚す白濁色の粘液だった。アキラが一番見たくない光景がそのまま存在していた。

「はあ……はあ……ぐすっ……うっ……ま、また……またやっちゃった……」

年端もいかない少女たちを自分の勝手な肉欲で穢す快感。見ることすらおぞましい自分のソレを浅ましい獣のようにしごく姿……致す度に、終える度に自己嫌悪で自分を殺したくなる。……だというのに……。

「う……あ……♥　またあ……」

心の中で謝っている相手の少女たちは、いつの間にかその白濁液で汚れているのだ。そしてそれを一瞬でも考えてしまったが最後、欲望を吐き出したばかりの肉棒は再び硬さを取り戻し、ヘソに着かんばかりに反り返るのだった。

「も、もう一回……もう一回だけだから……あ♥」

そう言いながらアキラが再びちゅこにゅこと自分の竿をしごきだすのに、時間はそうはかからなかつた。

結局、アキラはその後三回もそこで射精した。

「はああああああああ……」

罪悪感と自己嫌悪から溜め息が止まらない。あれから便器だけでなく、壁や床天井まで綺麗に後片付けをして、執務室に戻る為に廊下を歩いている。どうせ後でまた汚してしまうが、この艦娘にバレる可能性があった為放置できなかった。

そう『後でまた』である。アキラは日に三回、起床後、昼休み、就寝前と男子トイレに駆け込んで淫らに己を慰めていた。

一般的にふたなりは普通の男女より性欲が強いと言われている。だがアキラのそれはどう考えても異常だった。並外れたサイズの巨根と睾丸がそうせざるを得なくしているのだ。一回でも怠ると睾丸が破裂しそうな痛み、サポーター越しにも分かる程にチンポが勃起してしまう。

精通してからというもの、この並外れた性欲にアキラは悩まされ続けていた。回数が増えるどころか増える一方だし、チンポやキンタマのサイズも年々大きく——今年22歳になるが流石にここ数年はその数値も落ち着いてはきたが——なっている。

こんなこと家族にすら相談出来ず、周りに言えるような友人もいなかった。自分の身体がコンプレックスで今まで恋人が出来たこともない。第一どちらの性別を恋人にすればよいというのか？

おまけに思春期以前から胸のサイズも常人離れしていて、現在100cm超えのそれは未だ成長の兆しを見せている。その為男の格好やフリをする事は物理的に不可能であり、消去法で小学校から女性として生きてきた。軍に提出した書類も全てそうになっている。だからこそ軍も適役であると『女性提督』としてこの鎮守府に赴任させたのだらう。……それが完全な逆効果だとも知らずに。……そんなことを取り留めもなく考えていたからだろうか？

「！……ここは……」

気が付けば執務室はとうの昔に通り過ぎ、見知らぬ場所に立っていた。一番近い部屋から現在地を割り出そうと、扉の上を見上げる。

「そっか。どうりで見覚えがないわけだ」

入渠ドック——ドアの上のプレートにはそう書かれていた。人間であるアキラには余

り馴染みのない場所である。

「もう皆修復は終わったかな？」

なんとなく……そう、本当になんとなく中を覗いてみる。あれから結局小一時間近くオナニーに費やしたため、もう誰も残っていないだろうという考えもあってだった。バケツも自由に使っていていいと言っているし大丈夫だろう、と。無人の脱衣所はガランとしていて人の気配はない。アキラは扉を閉めて踵を返そうとした。

パチャッ……。水音がアキラの耳朶に響いた。誰か——いる。そう分かった瞬間、足が止まった。いや、まだ入渠中の艦娘がいたからどうだというのだ。そのまま執務室に戻るだけなのは変わらないではないか——理性ではそう分かっている。だがアキラの身体は息を潜め、まるで気配を隠すかのようにゆっくりと忍び歩きで脱衣所を進んでいく。

近づくほどに水音は大きくなった。誰かがシャワーを浴びている。擦りガラス越しの輪郭だけではそれが誰かまでは分からなかった。これ以上近づけば向こう側からアキラがいることもバレてしまう。周囲を見渡すと伏せられた籠が並んでいた。脱いだ衣服を入れておく為のものだろう。と、その中の一つだけ、中身が入ったものがアキラの目に留まった。白を貴重にした制服、仄かに香る白檀の香り……。

「これ……初春の……」

ゴクリ、と喉が鳴る。戦闘でボロボロになったもののきちんと丁寧に畳まれている。音を立てないようにそっとそれをどかすと……。

「あ、あった……」

目当てのモノに辿り着いた。薄いピンク色の下地に黒のレースで飾られたそれ——初春の下半身を包んでいたショーツだ。可愛らしさと色っぽさを併せ持つデザインで、触ってみるとまだしっとりとし暖かかった。ついさっき脱いだばかりといった感じだ。

「はー♥ はー♥ はー♥ ダメ……ダメダメダメ……こんなの……」

息が荒くなる。口ではそう言いつつ握りしめた掌はいつの間にかじつじつと汗ばんでいた。震えながらそれを裏返していく。

「……ッ……」

股間に当たる部位——クロッチに僅かな染みを発見する。どくん。心臓の鼓動音が周囲に漏れ出そうほどに高鳴った。

「ふー♥ ふー♥ ダメ……ダメ……ダメ……あああ……」

アキラはもう、ショーツを握りしめた手を近づけているのか、それとも顔をショーツに近づけているのかすら分からなかった。確かなのは、ゆっくりとではあったが高く形の良い鼻にそれが触れそうに……否、包み込まれていくということだけだ。そして……。

「すうううううううううううううう……はああああああああああああああああああああ……」

電流に触れたように身体が痙攣する。脳神経が一本ずつぶちんと切れていくのがわかった。鼻腔いっぱい広がる汗と初春の甘酸っぱい臭い……そして白檀の香り。アキラは何度もショーツを顔に押し付けては深呼吸を繰り返した。何度も何度も何度も。やがて肺腑の中の空気が初春の臭いでいっぱいになったと実感すると、アキラは既に涎を垂らしている唇を開いて、真っ赤な舌をはみ出させる。蛇のようにゆらゆらと動かし、一瞬の躊躇の後クロッチの染みに併せて舌を這わせた。

「~~~~~ツツッ！……♥♥♥」

眼から火花が飛び散る。ピリピリとした刺激が舌の上で暴れ、得も言われぬ味が口腔内を幸福感で満たす。この世のあらゆるものに形容することも出来ない味。正に甘露とはこのことだろう。たまらない。美味しい。何度も味わいたい。

「はっ♥ はあっ♥ んぢゅ♥ れろおおおおお」

それはまるで発情した犬そのものだった。顔は紅く染まり、瞳の中にはハートマークが浮かんでいる。舌を淫らに動かしながら床にまで涎を垂らす浅ましい姿。そしてその変化は身体にまで及んでいた。

「あっ♥……あああああああ♥ うそお……さっきあんなに……ひぐう♥ あんなにヌイたのにいいいいいい♥」

男性用サポーターの甲斐なく、アキラのズボンはずんずんと張っていた。先程だけではない、今日はもう起床後にも二発ヌイている。計五発だ。だというのにそこは既に限界以上に膨らんで、まるで狭い狭いと言いかのように主張していた。

「ダメええええ♥ はあっ……はあっ……こんなとこじや……あああ♥」

そう、ここは脱衣所である。すぐ隣の入渠ドックには初春がまだいるのだ。こんなと

ころでそんなことをするのは自殺行為以外の何物でもない。わかっている。理性ではわかっているのだ。だが……。

「ダメ♥ ダメ♥ ダメ♥ んんんんん」

カチャカチャ……ジィィィィィ……。本能は、身体は、手は、淀みなくバックルを緩め、ジッパーを下ろしていた。そしてサポーターを横にズラしてそれを外部に引きずり出す。

「あ……は……♥ もう……もうこんなに……」

むわあ……っと。籠った熱気と臭気を放ちながら現れたアキラのチンポは、先程同様へソに付かんばかりに勃起していた。……いや、その大きさは先程以上かもしれない。

「ああああ♥ ダメ……それだけは……バレちゃうううう……バレちゃうからあ……」

ここまでなら今すぐ引き返せばいい。誰にも見つからないしバレる危険性は少ないだろう。だがここから先はヤバイ。最悪、アキラの身体の秘密が鎮守府全体に知れ渡ってしまう恐れがある。そうなったら確実にアキラはおしまいだ。

「あ……あああ……あはあ……だ……だ……めんめんん……あっ♥」

やった。やってしまった。

可憐な初春のショーツは、既に我慢汁でヌラヌラと濡れている醜いアキラの肉棒に巻き付いていた。ピンク色の布地がじわじわと濡れ、アキラの淫汁が、淫臭が染み込んでいく。もう言い訳のしようがない。だが、その事実が最後の理性のストップバーを破壊する。

「っふああああおおおオオオオ♥♥♥」

被せたショーツごと一気に肉棒をしごき下ろす。今までとは比較にならない快楽がアキラの脳髓を破壊した。

「ぎもっ……ぢ……♥ これっ♥ これ、ずこっ♥ ずこおおお♥」

ぬぢゅぢゅぢゅぢゅにゅこにゅこにゅこ……既に射精寸前の速さでチンポをしごいていた。龟头はショーツのクロッチで包み、丁度染みが鈴口に当たるとるようピツタリと着けている。その状態でショーツが伸びるのも構わず、無理矢理引っ張って肉欲に溺れている。

「初春のっ♥ 初春の駆逐艦マンコオオオオ♥ 駆逐艦マンコと疑似セックスううう

♥ ギもぢゅぢゅぢゅぢゅ ーわああああ……気持ちいいよおおおお♥」

我慢汁を許容量以上に吸い込み、ショーツはベチョベチョに濡れていた。あれだけ臭いが染み付いてはいくら洗ってももう落ちまい。だがアキラにはそんなことどうでもよかった。この快楽さえ、この快楽さえ味わえるなら。

「おほっ♡ ほっ♡ へっ♡ ひもひいひい♡ くひくかんまん♡ もっどお♡ はちゅはるもっとお……♡」

——妾がどうかしたかえ？——

「え……？」

鈴の鳴るような声が——アキラの背後から——振り向いたその先に——紫色の瞳——

「あっ！ やらっ♡ らめっ♡ 待っれ待……ダメエエエエエ♡ おっ♡ おほっ♡ あがっ♡ イッ……」

つま先がきゅうっと丸まる。だがそんなアキラの懸命な我慢をあざ笑うかのように。「……ぐううううううううううう♡♡♡ あ——♡ がっ♡ ほひいひい♡♡♡」

ぼびゆるるるるるるる……ぶびゅばっびゅぶっびいひいひい……るるるるるるるるるるる……初春のショーツが白濁色……いや、先程より濃いのだろう、薄黄色のクリーム色塗れになっていく。当然、それだけで受け止めきれぬような量ではない。いくら鈴口がクロッチで包まれていても、だ。

「っひいひいひい♡ っうう？ ひがっ……いちゅもと違っ……ひぎいひいひい♡♡♡」

ぶぼぼ……びゆるるるるる……びゅぶ——っびゅ！ ぶびゅううう……るるるるるる……先程あれだけ射精したというのに。その量は減るところか寧ろ増してさえた。

「おかひっ……♡ これえ♡ と、どべでええええ——♡ 誰がどべでえええええ……あ……っが……♡♡♡」

ポドポドと重量感を持った音を立てて、精液が床に白い水たまりを作っていく。そんな中、アキラの世界は点滅する。真っ白な世界、真っ黒な世界、視界通りの世界。それ

ら三つが交互に繰り返され続けるのだ。その度に自分は絶頂しているのだな、とアキラはなんとなく理解していた。

やがて射精の勢いも収まった頃、息も絶え絶えな自分の枕元に、すっ……と、誰かが座り込む気配を感じた。

「フフ……いっっばあいビュッビュしたのお♡ どうじゃ？ 妾のパンツは？ オマシコの臭いは？ 気持ちようシコシコ出来たかの♡」

「うっ♡♡♡」  
ぶびゅっ……。最後の射精が放物線を描き、その人物……ショーツの持ち主である初春の顔を汚した。

「くふふ……んれろお……♡」  
舌でこそぎとりながら、初春は、笑った。

そうあれが悪夢の始まりだった……あれから初春は白濁液に塗れたショーツを履き、ポロポロになった衣服で床の精液を拭くとそれすら身にまとった。

「フフフ、ああ臭い、臭いのう。鼻が曲がりそうじゃ。このぼんつは妾の一番のお気に入りじゃったのこれではもう履けぬ。フフフ、どうしてくれるというんじゃ？ ん？」

その瞳は怪しく揺らめき、口元は愉悅の笑みを浮かべていた。まるで新しい玩具を見つけた子供……いや、新鮮な獲物を捕らえた肉食獣のように。対してようやく射精の快感から我に返ったアキラは、顔を蒼白どころか真っ白にして震えている。

「あ……ああああの……そ、その……っ……こめっ……」

震えて口が回らない。奥歯がガチガチと鳴っている。

「くふふふ。まさかお主がフタナリじゃったとはのう……道理で妙な臭いをしていると思つたわい」

小さな舌で唇を濡らしながら「ぶんと臭い、雄の、ザーメンの臭いのう」艶っぽい表情でアキラを見つめる。

「こんなあに臭くて、濃くて、粘り気があって……ふふっ、ほうれ見よ。ぶりっぶりのザーメンが指で摘めるわい。んあ……」

そのまま親指と中指で持ち上げたザーメンの塊を口の中に入れてしまう。ぬちゅぬちゅとわざと下品な音を立ててしゃぶり尽くした後、喉元を見せつけるように顎を上げながら、ゴクリーと飲み込んでみせる。その一連の動作に、精を放ったばかりのフタナリチンポが再びビビキと音を立てて勃起していった。

「はははっ♥ なんじゃ?! もうおっ勃ておったのか?! ははは! 節操なしにも程があるのう? ははははは」

「あっ……あああ……違っ……違うっ! こ、これは! これ……違っ……」

そうは言ってもチンポは小さくなってくれない。初春は一通り嘲笑った後凄惨な笑みを浮かべて。

「今宵妾の部屋に来よや。枯れ果てるまで搾り取ってやるぞよ。……来なければ……分かかっておるな?」

逃げられない……蔑むように見下ろす初春に、アキラはガックリと膝を着いた。

その日の真夜中、駆逐艦寮の一室を訪ねる彼女は死人の顔をしていた。扉をノックすると同時に中に引きずり込まれ、悲鳴を上げる暇もなくベットに組み敷かれた。ギリギリとした眼光の初春は軍服の前を力ずくで破き捨てる。地味なブラに包まれた巨大な肉の塊が二つ、外界に晒される。小さな手がブラを掴み、ズラすようにして上にたくしあげた。

「くははっ! 最初に見たときから思うとつたが一体何を喰えばここまでデカくなるんじゃ? まるで牛じゃな牛。くふふ、愛宕や雲龍でさえここまでデカくはないぞ? ん?」

「あっ……や……やめ……」

「乳輪は胸ほど大きくないのじゃな? 乳首といい鮮やかなピンク色をしとるわい」

小学生のような初春の小さな手が乳輪の周囲をつい……と円を描く。それだけで全身に鳥肌が立つほどの快感が走った。

「しっかし重いのう。ん? 一体どれほどあるのやら? 1kg……もつとあるかのう? くふふ。まるでゴムマリか肉で出来たボールじゃ」

たぼんたぶんにゆぼったぶぶん。上下左右に。持ち上げたり倒したり、引っ張ったり押し込んだり。ぐにぐにと形の変わる大きすぎる胸を使って、初春は明らかに「遊んで」いた。まるで自分の身体が玩具にされたようで、アキラは悔しくて悲しくて仕方なかったが、その心の最も奥で、アキラ自身さえ気付いていない仄暗い何かが育ちつつあった。

「おやあ? もう乳首が勃起し始めておるぞ?」

「え?! ……う、嘘っ! そ、そんなこと……」

「嘘なもんかえ。ほれ、こんなに大きく勃起して、コリッコリに硬くしておるではないか……のうっ?!」

「ぎちぐにいいいいいいいいいいいい。いぎやああああああああ……!」

両方の乳首が千切れたかと思った。それほどの力で初春はアキラの乳首を捻り上げたのだ。

「ほうれ、ほれ! ほれ! ははは、よう伸びるのうお主の乳首は。子を孕んだらさぞ



「それにしても」ペロリ——と赤い小さな舌が、つやつやとした唇を円を描くように濡らしていく。眼は捕食者のそれである。

「なんとという……嗚呼……なんと芳醇で、濃厚で、たまらぬ臭いと量じゃ……ああ、臭い。臭い。すんすん……すううううう……はああああああ……すううううううう、はああああああ」

奇しくも先程初春のシヨーツにしたことを今度はアキラがされていた。尤も臭いを嗅がれていたのは未だ天を衝く肉竿にだった。

「クフフ、提督よ。おまきちゃんとチンポを掃除しておるか？」

「ふへっ？」

「見よ……んれええええ……」

「ッぐううううううううううう……」

初春の舌が亀頭のカサの下周りをなぞるように一周させて、  
「んれろお……ひよ、ほおおおおんにゃに、ひんかふひーぢゅがこびりついておる♥」

初春の舌の上にはクリーム色をした恥垢……いわゆるチンカスチーズがこそぎ落とされてのついていた。自分の身体が……いやフタナリチンポがコンプレックスだったアキラにとって、そこは触れることはおろか、見ることもすら嫌な忌まわしき部位だった。掃除などしたこともなく、その状態は当然だと言えた。

「くふふふ♥ まだまだひんかふひーぢゅが、あんにゃに♥……れろお……つちゅ……ぶちゅ……ちゅ……ちゅ……はむっ……んれえ……れる……ぶちゅ」

夢中になってチンカスチーズを掃除していく初春、亀頭から竿、根本に裏筋まで、丁寧に丁寧に掃除していく。アキラは射精しないよう奥歯が砕けるほど噛み締めるしか出来なかった。

「んれええええ……ひんかふひーぢゅ、れえんぶろれらぞ♥」

長い時間をかけて……最早舐めていないところなど無い位、フタナリチンポを舐め回した初春は、得意気に全ての掃除が終わった成果をアキラに披露する。自身ですら引くほどの量を舌にのせた初春は、次の瞬間とんでもない行為に出た。

「あああああ……あああんむっ♥ もぐもぐぐちゅぐちゅ♥ にっちゅにっちゅむぐむぐ♥」

なんと口を閉じると。頬が動くほどの勢いで咀嚼したのだ。……そして、

「も……はむはむ♥ くっちゅくちゅにっちゅぶぢゅ♥ もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ……くっくん♥ ふううううう……♥ ああ、なんたる美味……飲み込むのが惜しいくらいじゃわい♥」

飲み込んでしまった。

自分の穢らわしい部位の、しかも老廃物をこんな幼く可憐な少女が、あんなにも嬉しそうに美味そうに食べている……その事実がアキラの心にドス黒い優越感を抱かせる。そして暴力的なまでの快感も。正直これ以上耐えられそうになかった。しかし、  
「フフフ……では、今度はこちらをいただくとしようかの。とくとご覧あれ、初春が舌の妙技を。んれろおおお……」

「止めてー」と、言う暇もなかった。腐肉色をした大きな亀頭は、初春の可憐な唇にちゅつと触れた瞬間、口腔内からはみ出した舌に引きずり込まれるかのように吸い込まれていく。  
「んぶっ……ぼっ……ちゅず……ぶほほ……んぶう……んん……」

流星に大きすぎたのか。初春は最初から開けていた口の大きさを修正するように顎をどんどん開いていく。

「んほおっ！ んぐっ……ぶほっ……おげえ……うぶっ、おの、うふへものが……あおが……はふええひまうれはないふあ……」

どうやら何か言っているようだが、それは言葉にすらなっていないかった。だが一瞬たりとも止めることなく、ぎちぎちと限界以上に顎を開けて初春はアキラの肉棒を飲み込んでいく。

「ぶほほほほほほ……ちゅずる……ぶぶっ……んぶう……ちゅううう……」  
「ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……」

アキラにしてみればたまったものではない。限界寸前なチンポを、初春のところが柔らかく、熱いほどの口腔内に吸い込まれているのだ。  
「ぶぶぶ……ろおひゃ？ わばわの、おふひまんふおはあ？ ふあまわんれ……んちゅ……あろ？」

ちゅぞぞぞと音を立てながら、あれほどまでに巨大なちんぽが初春の小さな口の中









「ははは……ンギッ……ひ、聞こえるかや？ わ、妾のオマンコがア……裂けてしまいうじや。フッフ。ち、ちと……加減しては……ふぐっ……くれぬかのう？ フッフ」  
額に珠のような汗を浮かべながらも、初春は笑みを絶やさな。無論腰を沈める動きもだ。膣穴は限界以上に伸び切りみぢみぢみぢ……とかぎちいっ……ミリミリ……と嫌な音を立てていた。いくら愛液で濡れていたとしても無理のあるサイズ差なのだ。

「くふっ……う……今まで喰ってきたどのチンポよりデカイわい……んっぐ……ふふふ。たまらんのう。おとおっ……ほ♥ お主のフタナリチンポはあ」

ぎぢみりめり……ぶぢぢ……にぢい……ミリミリ……グギィ……。

「ぎい……いいい……ちんぼお……ちんぼぢぢりゅうううう……」

「ふふふ、ちいとほ……んんん♥ 我慢せい。ふっ……んんんん！ ……ふうっ……ふうっ……フン、ほれ見いや。ようやく挿入ったぞよ？」

やや不満げな声に自分の下半身を見れば、そこにはフタナリチンポの丁度真ん中ほどまで腰を沈めた初春のマンコが見えた。限界以上に拡張された割れ目からは幾筋もの赤い血が流れ落ちていた。

「さ、裂け……」

「裂けてはおらんわ。……多分の。……ッ因果なものじゃ、妾達艦娘はいくら怪我をしようが入渠して修復すればどんな傷も立ちどころに治ってしまう……んっ……処女膜もほれ、この通りじゃ……つまり永遠の処女というわけじゃな。カカカッ。男の夢であろう？」

しかしの……と僅かに眉を歪めながら、初春は下腹部に手をあてた。そこは不自然なまでにポコッと盛り上がっている。アキラのフタナリチンポの形がハッキリと浮かび上がっていた。

「フッフ……これだけ挿入れておるのにまだ半分とは……ほれ」

ぢゅぶんっ♥ 押し付けるように体重をかけると、亀頭の先が何かをコリッ♥ グリッ♥ と押す感覚が伝わった。

「妾のオマンコの奥の奥……子宮口まで届いておるのののう」

コリッグリグリ……コリッ。そのままアキラの身体の上で円を描くように腰を回す。

「っああ！ あぎっ！ っふ……ち、ちんぼ……ちんぼうごがじゃにやいれえ……」

「何を言うて……おる！ っふ……っふ……動かすのはあ……はううん……これから

……じゃわい……んっ！ んっ！ んんんんっ！」

アキラの腰の上を跨ぐと初春は沈めた腰を上へと引き戻していく。内部の細かい肉壁のつぶつぶが、フタナリチンポをこそぐようにぢゅぶるると扱っていく。

「おっ……おぐっ……ひっ……や……おとおおとおおお……」

しかも絶妙に腰を回しながら、ゆっくりゆっくりと。腕は脇の下が見えるように頭の後ろで組んでのガニ股上下運動。ストリッパーのようなその下品な動きに、アキラのチンポは硬さを、大きさを増していく。

「お……お……！ っふううん……やべ……やべれえ……おひんぼお！ おひんぼとけちやうからああああ！！！！ しゅぐれちやうからああああ！！！！」

「っふん！ ふんっ！ んっ！ はは……幾らでも射精するがあ……んっ！ よいわ！ おふっ！ キンタマがあ……空っけつになるまでえん……おほっ♥……搾り取ってやるうううん」

キツキツなのに膣内は口の中以上に熱く。すぐにネチユネチユと愛液を垂れ流している。一方アキラのチンポも耐えられるわけもなく、我慢汁をダラダラと情けなく垂らしながら両者の滑り具合を高めていった。

にぢゅっ……ぶぢゅっ……つちよ……ぐちゅ……ぶぢゅぢゅぢゅ……ぐぶっ……。

狭い室内に先程のフェラの時とは別種の水音が響く。水というより粘液質の何かと違った方が正しいか。規則的に。ゆっくりと。淫臭を辺り一面に放ちながら。

「っふん！ っく！ っしかし……これでは……んんん……ちとお面白みにい……んうううううっ……か、欠けるのお……仕方ない……」

初春が何かをするつもりなのを察知して、アキラは抵抗の為に顔をあげた。

「つくつく。伊達にここで売女の代表なぞやっておらんわ。さあて、久しぶりにいくぞ？ すぐにびゅっびゅ射精せぬよう、尻穴に力を入れよ？ すー……は……は……すー……は……は……」

……すー……は……は……何度か深呼吸を繰り返しながら、少しずつ膣内を狭めたり緩めたりを繰り返す。それですらアキラには途方もない刺激だったのだが……。

「んおっ……」

カッ——と目を見開いて、初春は腰を下に降ろした。

それ以上挿入ははずのないチンポが更に初春の体内へと飲み込まれていく。

「おぐっ……っひ……ううっ？」

先程までとは明らかに違う感覚が龟头を襲い、アキラは再び未知の快感に包まれた。

「っひ……っひう……っひゅー……ふひううう……ふふ。ひ、久しぶりじゃったが……ふお……っぐ……上手くいったのお……何せここまで使わんとならん奴は少ないからのう」

「っがひ……っひ……いぎい……にや、にやにを……ひたによお……！……！」

「子袋の入り口をおん……ひ、開いたのよ。くふふ、要は子宮口じゃな。ほおっ……んうううう」

「こ、こうでもせんと……お主のデカマラは全て挿入りきらんから……の！」

ぐぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……ぶぢゆるっ！

証明するかのようにフタナリチンポは更に奥に、奥にと飲み込まれ、遂には根本まで……初春の薄い尻とアキラの下腹部がびったりとくっつくまで飲み込んでしまった。

「っは……はああ……ひゅううう……ふう。っさ！ これで全力で腰を振れる

というものよ」

「……たあ……っぶり……射精してたも」

「……根こそぎ。そう正にその言葉が似合う勢いで初春は腰をあげフタナリチンポの表面をこそぎとっていく。」

「っや……あああああああああっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

「あっ」

速くなる。速くなる。速くなる。暴力的なまでの——いや、暴力そのものの蹂躪が、

「おうっ」

「っはあ！」

「っひいっ！ うっ！ ああああっ」

「あっ」











# 「ドイツ艦のやり方」<sup>メッド</sup>

レーベが島風の制服を着た少年を発見してから三時間余の刻が経っていた。尋問と称する事実上の陵辱は未だ続いていた。レーベの激しい抽送に少年はただ為す術もなくその秘肛を犯されるのみであった。

当直室の奥の仮眠室の中では少年の秘肛からの腸液が抽送にあわせてリズムカルに鳴り響いていた。夢中で腰を振るレーベのうしろで仮眠室の鍵を回す音が聞こえた。そして、あっという間に「ガチャリ」という音とともに仮眠室の扉が開いた。

「当直中なのに見かけないと思ったらこんなところにいたの」

そう言って仮眠室に入ってきたのはレーベの同型艦マックスだった。

「なんだ、マックスか」

「なんだじゃないよ。こんなところで、總統の玩具なんて使って」

「ちょうど持ち合わせてたから尋問に使わせてもらったよ」

「それは、まだ機密解除されてないはずだけど」

そう言われると、レーベは抽送を止め少年の秘肛から今まで挿入していたモノを引き抜く。ピクツとした反応とともに、少年のこじ開けられた秘肛から白濁した液が流れ出す。

「とりあえず、その子連れて保全室に行くよ」

「わかったよ」

レーベは股間のモノを下着に収めて衣服を調べた。その間に、マックスは少年の衣服を調べた。少年は自分で立つことは出来ない様子だったが、マックスは少年を易々と抱き上げた。

「レーベ、行くよ」

「はい」

マックスは誰かに見つからないか気掛かりだったが、夜も更けていたこともあって誰にも出会うことなくドイツ艦専用の保全室にたどり着くことが出来た。

# 絵作：いくた☆なお ：まゆら。

ドイツ艦専用の保全室は鎮守府本庁舎の一階の端にあった。廊下に面した側には金庫のような文字盤鍵の付いた重そうな鋼鉄製の扉があり、逆側には書類飛散防止のための鉄格子のかかった窓があった。

少年が目覚ますと今までいた部屋とは違う別の部屋にいることに気付いた。ゆっくりと部屋の様子を見ると、鉄格子のはまった窓から月光が差し込んでるのが見えた。そして、その月光の中に二人の人物が立っているシルエットが見えた。

二人の人物のうちの一人、レーベがワンピースをたくしあげ自分の肉棒を握った。そして、それを抜くと、肉棒は伸び、そして逆側の先端がだらりと垂れ下がった。

レーベはその抜き去った肉棒、いやディルドーというべきものをマックスに渡すと、マックスは、今までレーベの腔内に入っていた部分を舐めあげた。そして、レーベはしゃがんでマックスのショーツを下ろした。マックスは、それに合わせて少し足を広げると、レーベはそこに体を割り込ませた。レーベはまず舌を伸ばして鼠蹊部を舐める。そこから、少しづつ舌をはわせ陰核包皮に移っていく。レーベは舌で柔らかく包皮の上から陰核龟头を刺激した。くにゅくにゅと舌での圧力を受けマックスのクリトリスは徐々にその赤みと硬さを増していった。

レーベは、右腕をうしろから回して中指をマックスの腔口に当てると、入り口をなぞるように滑らせた。舌からの刺激を受けマックスのそこは既に湿り気を帯びていた。ゆっくりと愛液を集めるように指を動かすと、自然とマックスの小陰唇はレーベの指を迎え入れるかのように開いた。

レーベの指はそのまま、小陰唇の縁から腔口を求めていく。レーベはより湿り気の増したマックスの腔口を焦らすようになで回した。その刺激に呼応するがごとく、マックスの腔口からは、愛液があふれ出してきた。

それに合わせて、レーベは中指をマックスの腔に深く挿れ込んでいった。レーベの指がマックスの感じやすいところに触れると、マックスは微かに腰を動かした。レーベはさらに人さし指を挿れると、その部分をさらに強く刺激した。

自然とマックスのひざが開いて鉄格子にもたれるような形になった。レーベが二本の指を引き抜くと、腔口と指の間に愛液がきれいなカテナリーを描いた。



マックスは舐め続けていたディルドーを自らの膣口にあてがい、左手で小陰唇を開くとゆっくりと自らの中に沈めていった。

ディルドーが奥まで入ると、小さな電子音がした。そしてそれと同時にマックスの腰が不自然に震えた。

「何度やってもこれは慣れないな」

マックスの言葉にレーベが答える。

「でも、一度始めると病みつきになっちゃうよね」

「感覚接続と射精機能。まるで本物のペニスのようだ」

「そうだね」

レーベはそう答えると、マックスから映えたペニスのようにも見えるディルドーを軽くしごいた。

「まあいい。尋問の続きだ」

マックスはベッドに縛りつけられた少年のそばに近寄った。少年は再び気を失っていた。半開きになった少年の口にディルドーを合わせると、そのまま喉奥に達するくらいまで深く挿し入れた。

ディルドーに犯された少年の喉は強い嘔吐反射を引き起こし、無意識に少年は強く嘔吐した。そして、息苦しきで意識を取り戻した。

涎と鼻水に塗れた口内をマックスのディルドーが容赦なく陵辱する。ディルドーから伝わる喉奥で龟头を刺激する感覚がマックスの脳内を支配していた。

そして、その刺激はディルドーの回路にも伝わり、射精に至る感覚をマックスに伝える。込み上げてくる物が会陰から尿道を経て、龟头にまで伝わると、マックスの抽送はより早くなり、そして、ディルドーから大量の擬似精液が少年の口内に濁流のごとく押し寄せた。

口内で収まりきらない擬似精液の圧力はそのまま鼻に逆流し、副鼻腔を圧倒し、そして、二本の髄髄のように両方の鼻から垂れ流れた。

マックスは、ディルドーを口中から引き抜くと、ディルドーの先端からまだ出し切っていないかった擬似精液がたたりと垂れ、少年の胸元を汚した。

マックスはそばにあった鏡を持ち少年の目の前で、少年自身が見えるようにした。

「目覚めたようだね。気分はどうだい」

マックスの質問にも少年は答えられない。

鼻から擬似精液を垂れ流し呆然としていた。

マックスは改めて侵入の目的を問おうとしたが、少年が答えられない状態であることは火を見るより明らかだった。

「おちんちん、おちんちんちょうだい」

少年はうわごとのように、そうつぶやいた。

「マックス、この擬似精液は媚薬作用もあるんだって」

「尋問用だって言うのに、これじゃ使い物にならないじゃないか」

マックスはレーベに答える。

「もう、この子は壊れちゃったから、楽しんでやおうよ」

「レーベは最初からそのつもりだったんじゃないの？」

「あはは、ばれたか。でも、鎮守府の他の艦娘に使うわけにいかないじゃないか」

「それも、そうだね」

マックスは体勢を変えると、少年の腰を持ち上げて、一気にディルドーを少年の秘肛に挿入した。

「はあああっ」

少年は、挿入された瞬間に少女のような声で絶頂を迎えた。ペニスは萎れたままだからと先走り液を垂れ流していた。「ドライ・オーガズム」いわゆる、メスイキを迎え、敏感な体のまま、マックスのディルドーによる抽送を受け、少年はさらに大きな声を上げた。

少年の秘肛は痙攣を起こしたかのように収縮し、ディルドーを締めつける。龟头に伝わる直腸の感覚はよりマックスを刺激した。

「うっ」

マックスがそんな声を上げると、マックスに挿入されたディルドーは、二度目の射精に至った。少年の直腸が擬似精液で満たされる。

少年にとって不幸なことに、それは本物のペニスではなく、ドイツの誇る最新鋭ディルドー「総統の玩具」なのであった。本物のペニスであれば、射精とともに脳内にプロ

ラクチンが放出され、急速に性欲を喪失する。一方、總統の玩具は、射精に伴う快感だけを脳に伝える。性欲を抑制する事無く快感を得ると、人の脳はより快感を求め、快感の性のフィードバックが成立してしまふ。マックスもまた、その快感の虜となっていた。マックスは、擬似精液でより潤滑の増した少年の秘肛をただ無心にディルドーで突きつけていた。

レーベは、マックスによる陵辱を眺めながら自らの指で秘部をいじり始めていた。中指で陰唇にまわりつく愛液を拭うと、それを潤滑として陰核を刺激し始めた。時計回りにゆっくりと指を回しながらもう一方の手で、制服のワンピースをたくしあげ、ささやかなバストを手のひらで包みながら人さし指で乳首をいじっていた。

保全室の中では、マックスによる抽送の音とレーベの秘部から響く水音が渾然一体となつて響いていた。

レーベはしばらく、一人で秘部を刺激していたが、そのうちに少年の横たわるベッドに上つた。少年のぼんやりとした目線の先には、ふわりとしたワンピースの中の下着に包まれていないむき出しの性器が露になっていた。

レーベは腰をゆっくりと落とすと、そのまま少年の顔にまたがった。そして、少年の唇に陰唇を押し付け、マックスと向かい合つた。

「舐めて」

そう言うと、レーベは少年に体重を預けた。少年はレーベに騎乗され、息が出来なくなった。必死でなんとか呼吸できる隙間を作ると、唇を閉じていた筋肉がわずかに緩んだ。

レーベは腰を動かして陰核で少年の唇をこじ開けると、そのぬめりに陰核を擦り付けた。

マックスは、引き続き抽送を続けていた。先ほど放つた擬似精液は若干水分を失い、粘り気のある音を奏でていた。

レーベはそのまま両手を伸ばすと、呼応するようにマックスも手を伸ばし、互いに手を取りあつた。そして、そのまま唇を重ねた。

それまで、異なるリズムだった二人の動きは徐々にシンクロしていき、規則正しい水音のリズムが保全室を支配した。

マックスの動きが激しくなるにつれてレーベの陰核を押し付ける力も強くなり、二人の舌も混じりあつた唾液と共に絡めあつた。

少年は、酸欠気味になりながら、ディルドーが前立腺を刺激する感覚に戸惑っていた。あるはずのない子宮が収縮する感覚を覚えながら、ただ抽送を受け入れていた。

マックスの動きが激しくなり、その抽送がより早く、より強く少年の前立腺を刺激した。一方で、硬くなつた前立腺に龟头をこすりつける感覚はマックスの性感を刺激し、会陰から尿道へと徐々に射精感覚が上ってくると、マックスはさらに激しく腰を動かした。

「ドクン」

という音とともに、ディルドーから三回目の精が解き放たれた。そして、勢いよく放出された擬似精液は少年の前立腺をその熱と圧で圧倒した。少年の直腸は激しく収縮しディルドーの擬似精液を絞り出すかのように蠢いた。

少年の絶頂がトリガーになつたのか、それと同時に、レーベは体を硬直させ背を反らせた。やがてマックスにもたれかかるかのような姿勢になつた。

少年はそのまま、意識を失いぐったりとした。

マックスは、少年の秘肛からディルドーを引き抜くと、ごぼつと音を立てて擬似精液が流れ出した。

レーベとマックスは唇を重ねたまま、少年の上でゆっくりと抱きあつていた。ふと気付くと、保全室の窓からは暁の空の色が差し込んでいた。

ぼんやりとしたまま、レーベとマックスはくちづけを交わし続けていた。その時、保全室の鍵が外からがちゃりと音がして解かれた。

「ああ、いい湯だった」

そう言って、ビスマルクが保全室に入ってきた。大きなバストをバスタオルに無理やり納めた、いかにも風呂上がりといった風情だった。

ビスマルクは、二人の痴態と組み敷かれた少年を見て一瞬固まった。

「あなた達、機密物件で遊んでもいいと思つているの？」

風呂上がりの油断した姿であっても、保全責任者としての責任を忘れず、駆逐艦たちに説教をし始めた。

しばらくたち、ビスマルクが座ろうと椅子のそばに歩こうとした瞬間、ビスマルクのバスタオルがひらりと舞い落ちた。

そこには、マックス達が使った総統の玩具よりはるかに巨大なデイルドーがビスマルクの布の小さなショーツから怒張を主張していた。

(完)

少女のくぐもった吐息が、部屋に響く。布に顔を押し付け、腰を持ち上げて手を動かして、時折顔を上げては息を深く吸い込む。普段は結っている銀髪がそれに合わせうねるようにうごめく。その視線の先には、男の写真がある。

「提督さん……」

うわごとのような言葉。普段は白い手袋に包まれている指が握り締めているものは、その娘の手の白さとは浮き上がるほどにおぞましい色をしている。童女のような小さな手。そしてそれが包む『少女』にはついていないであろう赤黒く、脈打つ肉茎。

では、このベッドをぎし、ぎし、と軋ませている『少女』はどちらなのか。そう問われれば、答えに困るであろう。滑らかな肌、膨らんだ胸、鍛えられてはいるが、ふっくらとした肉で覆われた腹、男のように子種を受け入れ、子を為すことのかなわぬ者には備わっていない、大きな腰。

しかし、その腰の前、恥骨の下には、赤黒い肉棒が醜くも伸びあがっている。その娘の小さな手が、二つほどで覆えそうな小さなもの。小さくはあるが、女性にはまずついていないだろう。

ぐちゅり、という水音がする。

「……脱がないと……」

そういって、布団をはだけながら煩わしげに少女はショーツとパジャマを脚から払い、腰を上げ、ふうう、ともう一度息を布に押し付けながら、吐く。

ショーツは湿りきり、女陰から滴り落ちる蜜の糸を引き、月明りがきらきらとその糸を照らす。人差し指を突き入れ、蜜を肉棒にまわりつかせ、ぐちゅぐちゅという音を響かせる。

もう、彼女は何も気にしていない。

「提督さん、提督さんっ！」

うわごとのようだった言葉は、もはや叫びに近い。枕に顔を押しつけ、腰を高く上げ、声を何とか殺してはいるが、いるつもりなのだ。快楽に鈍麻しきった脳髄にはそれはもう届かない。

「ああ、あああ……！」

顔を上げる。悲鳴に近い声が細いのでから発せられ。

同じように、精液がぶちまけられた。白いはずの精液には子種はなく、透明な粘液がほとぼしり、ショーツを汚す。写真にそれがわかり、はあ、はあ、と天井を仰ぎながら、少女は頭が冷えるのを感じた。腰を脚の間におとし、べたん、と座り込みながら、男の写真にまわりついた粘りを見て、はあ、とため息をつく。

「……また、やっちゃった」

精液をぶちまけてしまわないために置いておいたティッシュの箱を見て、もう……とうめき声を発する。ティッシュをとり、切りそろえられた銀の陰毛の下にある女にしかないはずの赤黒い女陰のぬめりを拭い、赤黒い男にしかないはずの男のぬめりを拭い、はあ、とため息をついた。

そして、我に返り、右を見た。ドアを、閉じていたはずだ。

「鹿島さん？」

ひっ、という悲鳴が、のどからほとぼしるのが、聞こえた。

そこにいる二人の少女の指には、彼女が望んでも手に入れられなかった指輪がはまっている。精で汚してもらいたい。めちゃくちゃに犯したい、犯してほしい、受け入れてもらいたい、そう思っている相手が、既に「受け入れている」相手の姿が見えた。

「たのしいおもちゃ」

ケッコンカッコカリ、というものがある。正式な婚姻ではないし、何らの法的根拠も持たない。ただ、よく訓練された者が渡される者である、とされている。部隊内での非公式の褒賞のようなもの『だった』のだ。指輪だったのは、単純に初めて渡された側だったのが法的な婚約関係にあった者同士だったからである。ごくごく私的な関係であり、別段公費を用いたものでもなかった。

それを渡された者が、当初性能以上の多大な戦果を挙げなければ、公的なものではなく、私的なもので終わったのだ。

当然、反発もあった。そんな私的な領域に踏み込むのは不道德だ。という批判があったのも確かである。第一セクシユアルハラスメントであろう、と言われればその通りでもある。ただ、戦果がそれを無視させた。

よく訓練された艦娘は、ケッコンカッコカリをすれば『さらに強くなる』のである。だから、別にお互いに男女の仲ではなくても渡されるようになった。一般的にはそうである。

だが、この空間において、交わる三つの影はそうではなかった。長い髪の娘、短い髪の娘。そして鹿島に精で汚されていた写真の男。

緑色のスカート、赤いスカーフ。男のうめき声。短い髪の娘が、喜びの声を上げた。

「あはっ、いっぱい出たにゃ……」

そういって、んふふ、と笑いながら、白い服の上から腹をなで、満足げに男のものを引き抜き、ショーツを上げる。

「きれいきれいにしましょーねー」

「睦月……?」

そう言いながら、男のものを赤みがかったショートヘアの少女はしなびてしまった男のものをなめあげ、加え、しごき。再び膨らませてんふふ、と鼻にかかった声で上機嫌に笑って見せる。

「えへへ、提督、元気ですね」

「もう、睦月ちゃんったら……私の番よお?」

「もー、如月ちゃんはせっかちなあ」

再び水音が響く。男のものは娘達には大きすぎ、くわえ込んでおくまで押し込んでまだ余る。男はそれを拒みもせず、上で踊る如月の腰をつかみ、だーめ、とばかりに指を交わす。

この夜、何度目かの雌の音が響いた。精を放たれ、それに満ち足りた顔をしている娘二人。搾り取られ、疲れ切った男。

「提督う、だらしない」

びーん、と擬音を口にしながら、男のものを指でびん、と睦月ははしく。ひくひくとうごめく女そのものの口を精液にまみれさせたままショーツを履いた如月は、うふふ、と笑って、言う。

「もう、私たち二人なんだから、ね。睦月ちゃん」

そう言って、二人は立ち上がる。男はベッドの上で上体を起こし、どうしたんだ、と問うて来た。

「もー、制服のまま寝たらだめでしょう?」

「そうよお。戻らないといけないでしょ、て、い、と、く。明日もお仕事なんだもの」  
ああ、うん、そうだな。と男は言う。それに納得したように、また明日、と声に出した。だが。

扉を閉めたとき、外に置いてあった鞆をよいしょ、と睦月が持ち上げているのには、気づかなかった。

「……どういうつもり？」

開口一番、そう鹿島に問われた二人は顔を見合わせている。提督の執務室には月明かりが降り注ぎ、時折作業の音が聞こえてきていた。白いガラスのシェードがついたデスクのライトだけが人工的な明かりとして自己主張をする。

「ちゃんと着てきたんですね。鹿島さん」

「もうちょっと抵抗とかするかと思ってたのにい」

そう、鹿島は白い肩紐に水色の競泳水着、俗に競泳型のスクール水着に身を包んでいる。大きすぎる胸は脇の下に漏れ出てしまうほどである。そして、本来あるはずの下半身のふくらみがなく、あれ、という声を睦月が漏らした。

「おちんちん、ついてなかったっけ、如月ちゃん」

鹿島は下唇をかむ、いつもと同じようにスイムショーツのクロッチに切れ込みを入れ、陰茎を隠し、その上にもう一枚、というやり方で潰しているのだが、それが気に入らなかつたらしい。

「鹿島さん。見せてください」

そう、如月はくすくすと笑って言った。何か言葉を返そう。そう思っていた鹿島は言葉の代わりに溜息をつき、肩紐を外す。ぶるん、と自分の乳房が揺れる。ゆさり、と揺らしながら、水着を脱ぎ捨てて机の上に置き、スイムショーツの一枚目を脱ぎ、そして物をとりだし、二枚目を脱ぎ捨てた。

「わあ……かわいい」

そういいながら、睦月が駆け寄り、ぐりぐりと掌で弄ぶ。腰が引ける。もー、という声とともに、机に寝かされ、しなびていたものの先端を弄り回した。

「もう、睦月ちゃんたら。あ、鹿島さん、ちゃんと録画してますからね？」

立てられた三脚と、時折モニター音が耳に入るカメラ。録画している。血の気が引いていくのを、感じる。手の中でぐんぐんと下半身に血が集まる一方、唇はわなわなと震え、恐怖心が募る。

「如月ちゃん。鹿島さん、録画してるって聞いたらコーフンしちゃってるにゃしい」

「ほんとう？あ、いろいろ持ってきてるから大丈夫よ、鹿島さん」  
くすくすという笑い声。這い回る舌。浮き上がる腰、漏れる声。声を聴くたびに、か

わいとおちんちん、と言われながらなぶられる。二つの舌がうごめく度、反応しないよう、反応しないようにするが、難しい。

「ふううっ……！」

ぬるり、としたものが鹿島のものを覆った。如月が口の中でいじめ、そして。

「わあ……先走り、出てきちゃってますよ。鹿島さん」

赤い舌を亀頭の下側の傘をチロチロと這い回らせる。睦月は、と言うと鹿島の乳房を両の掌で転がしながら、笑う。

「あー、硬くしちゃってる。えっちなんだ」

そう糾弾するように耳元に寄って言う。うめき声とやだ、やだ、という声が鹿島の喉から漏れ、そして。

「んっ……んん……」

緊張。脱力。びく、びく、と腰を震わせている鹿島に見せつけるように、如月は精を掌に吐き出し、笑う。

「いっぱい……出しちゃいましたね」

そういって、ず、ず、とそれをすすり上げる。脱力している銀髪の少女の体を睦月は持ち上げて、そして。

如月は鹿島の鼻をつまみあげ、唇を合わせ、そしてつい先ほど放った精をねじ込んだ。せきこみ、吐き出そうとする鹿島に、睦月は言う。

「ゼーんぶ飲んでね。掃除、嫌だよ？」

眉間にしわを寄せ、う、とうめき、肩を震わせ、鹿島は自分の精を飲み下していく。喉につかえ、からみ、げふ、げふ、と鼻に息が漏れた。

「わあ、鹿島さん、全部飲んじゃった。……どう？」

「……なんでこんなことをするんです。睦月さん、如月さん」

「なんでって……」

そう、二人は顔を見合わせた。

「提督のおちんちん、欲しいんでしょ？」

「え……あ……」

「でもだーめ。私たち二人のなの。ほら、水着だけ着てね」

のろのろと体を机から離し、水着をつかみ、足を通し、胸の下あたりまで引き上げ、肩紐を持ちながら押し込んでいく。こり、と腫れ上がった乳首が擦れ、ん、と言う声を漏らしてしまった。

くすくすという笑い声が耳に届く。視線の意味は分かる。精を吐き出して縮んだ陽物を下ではなく上にそらせて着ているために、体をくねらせることに水着の内側でこすれ、うめき声を口から漏らしてしまう。

思っていることは裏腹に、血が集まり、ふたたび腫上がり、鈴口から漏れ続ける液体が水着にシミを作った。下の口がひくひくとうごめき、別のシミをつくるのと同じように。

「してみてほしいなー」

「なに、を」

そう言う睦月はくすくすと笑いながら、とことこと近寄り、鹿島の首筋に腕をまわし、耳に口を寄せる。耳をくすぐる熱っぽい声とともに、水着の青とは違う青い上着を着た彼女の腕が、腹を伝い、へそをなで、下腹をさすりあげる。

「おちんちん、しこしこするの得意なんでしょ？ 鹿島さん」

「う、ちが」

「違わない。この間なんかお猿さんみたいに鹿島さん、お、な、にー。してたよう」

やだ、おっきくなってる。そう言いながら、指先で水着の上から鹿島の陰茎をなでさすり、へんたいさん。と耳元でささやいた。

「鹿島さん。ほら、よく見えるようにして」

「え……」

「出して。もー、さっき如月ちゃんにお口でされた時みたいに脱がなくていいから。ずらして、出して」

ばちん、ばちん、と足の付け根を覆う水着の端をつまみながら、睦月はんふふ、と笑う。鹿島は昼間の彼女の姿からは想像もできない声の湿度に、躊躇する。

力で言えば、はねのけてしまえばいい。ビデオなんかデータを取ってしまえばいい。そう考えて、そして。

「あ、悪いこと考えてる顔だあ。……大丈夫、鹿島さんの恥ずかしいトコ、ゼーんぶちゃんと……えっと？」

「オンラインストレージにアップロードされてるから大丈夫、よ、睦月ちゃん。駆逐艦におくちまんで射精したトコも、これからしこしこするところも、ゼーんぶ」

「う、あ……」

うめき声。そして下の自分を見て、如月の顔を見て、睦月の顔を見る。睦月の指先は、染み出した粘液がまとわりつきにち、にち、と音を立てている。

「もー、じれったいにゃー」

そういいながら、鹿島の右手を、濡れた手でつかみ、鹿島の指を使って、水着の中からも取り出した。

ぶるん、とはじけるように飛び出したそれは夜気に触れ、ひやりとした感触を生む。

「ね、鹿島さん。こう言って」

「な、何……？」

「鹿島のおちんぽオナニー、いっばいみてください、って」

「いえ、言えるわけ」

「大丈夫だよ。言ってくれたら流したりしないから」

ふふ、と睦月は笑う。目は、じっと鹿島を見つめている。口元は左の端が若干上がり、そして目は。

笑っていない。本当にこの子はやる。そう思えた。

「あ、信用してない？ 大丈夫だよ。言ってくれたらお手伝い、してあげるから」

叱責の言葉を吐き出そうとする。怒鳴らなくてはダメだ。こんなことはおかしい。違う、私は。そう思って口を開く。

「か……鹿島の、おち……おちんぽオナニー、い……いっばい、みてください」

口から吐き出されたのは、別の言葉。びくん、と自分の陰茎が震えるのが、分かった。言わなくては、だめだ。そう、睦月の視線は語っている。

「んんー、声がちっちゃいなー。聞こえたり？ 如月ちゃん」

「ダメね、全然聞こえない。……ちょっと、映ったら睦月ちゃんも困るでしょ？」

「んー、だって睦月が映ってないと鹿島さん、言ってくれないでしょ。怖いもんね。ねー？」

「……ほらあ……鹿島のおちんぼオナニー、いっぱいみてください。ね？」  
もう一回。そう睦月はささやく。

「鹿島の、おちんぼオナニー、いっぱい……いっぱい、見てください！」

はああ、と息を吐ききる。睦月は、んふふ、とまた笑った。

「上手だね、鹿島さん」

ほら、しこしこしないと。そう睦月のささやき声とする。睦月のあついちいさな指が、鹿島の冷たい指を導き、覆わせる。

「ほーら、しこしこしちゃいませよ」

明るい声。熱い指、ぐちぐちという粘着質な音。唇を噛み、声をこらえるが、体の奥底が熱くなるのを感じる。

「う、ひ……あ……」

体が、跳ねる。いやだ、だめだ。違う。そのうめきとも悲鳴とも取れない声の間に、嬌声が混じる。違う、違う、そう自分に言い聞かせるように言うが、しかし。

声が大きくなる。頭が白くなる。歯をかみしめて、声を出さないように努める。だが。

「イッちゃえ」

そのささやかれた一言で、決壊した。

どくん、どくん。そう下腹で音がする。睦月は、鹿島の先端を手を使ってつかませ、下にぶちまけないようにしていたが、しかし。

指の間から、吹き出した彼女の欲望が漏れ、絞り出される。白い指を、粘液が汚し切り、体に力が入らなくなった。指先から、床に、垂れ落ちる。

「んもー……。鹿島さんが妊娠させていいのはティッシュだけなんだよ？」

掃除だって大変なんだもん。そういうながら、睦月は何か黒いもので床を、鹿島の手を、そして先端を拭う。

「あ……？」

「鹿島さん、これを履いて明日一日がんばってね」

それは、鹿島のシューズだった。そうして。

「うあ……」

もう一度、残ったものが、吐き出された。

「なんか……変なおい、しない？」

「そうかー？……うわ、栗の花咲いてるよ。窓閉めよ、窓。くせー。栗の花ってなんでこんなにイカ臭いんだらうな？」

第30駆逐隊の弥生と望月は如月と睦月が顔を見合わせてくつくつと笑っていることに気づかない。そして、教壇に立つ鹿島はというと、目を泳がせている。

「あんまり変わってない……？」

「しょうがないじゃん……うえー……」

べろり、と望月は舌をだし、鼻をつまんでくちやい、などと悪ふざけをしている。それを見て、鹿島はなおさら顔を赤くした。

「遠征任務についてこれより説明します。手元の資料を……」

いつものブリーフィング。いつもの通りプロジェクトでスライドを見せ、作戦図を表し。いつものように終わった。違うのは。

「鹿島さん」

話し合いが終わって、弥生と望月が退出する。そう、違うのは。如月と、睦月が、にょいこの正体を知っていて、鹿島はばりばりに乾いた精液まみれのシューズを履いているという事だった。

「せーえきまみれのおばんつ、本当にしてきたんですね。鹿島さん」

如月はスカートの上からすう、と息を吸い。そして。

「くさあい。うふふ、鹿島さん、わかってる子にはザーメン臭いって言われちゃいそうですね」

「あ、ほんとだあ。くっさあい。ね、如月ちゃん。自分でさーめん？えっと、せーえきまみれにしちゃったんだもんね。ね、鹿島さん」

「そうね、睦月ちゃん。ああ、おまたがくさいくさい鹿島さんにね、プレゼントがあるの」プロジェクトから、映像が出力される。そして、そこには。

「鹿島の、おちんぼオナニー、いっぱい……いっぱい、見てください！」

そう叫ぶ、鹿島の姿。青いスクール水着から、赤黒い陰茎を出し、そして。拒んでいると思い込んでいた鹿島の意志とは裏腹の、雌の媚を帯びた、懇願の表情が映し出されていた。

「ひっ……」

走り出し、プロジェクタの電源ケーブルを抜く。はあ、はあ、と口の間から息が漏れた。

「きこ、聞こえたら」

「鹿島さんは大変なことになっちゃいますね。ザーメンまみれのおぼんつを履いて、睦月ちゃんと私に対して提督の執務室で始めたオナニーショーの上映会、やってるんですから」

「あなたたちだって」

「今日も来てくださいね」

そういって、如月は微笑む。鹿島は、目を見開いた。

さからえない。

「う……も、もう勘弁してくれ……」

「あー、私たちにせつくす教えた人が、だらしないんだー」

睦月は笑う。精を膣内に二度も放たせた後とは思えない様子だ。そして。如月も。

「もー、赤ちゃん出来たらあ、責任取ってくださいいね？」

下腹を、撫でさする。搾り取った粘液の温かみをもう一度かみしめるようにぞくり、と震えた。

「そりゃ……もちろん取る……。すまん、だめだ……。も、もう限界……」

男は、倒れ込み、うう、とうめいている。素裸になっている二人はくすくすと笑う。一人相手ならともかく、二人に挑みかかるのは難しいみたいだね、と笑いあい。そして。

「じゃあ、明日また」

「ああ……」

そういって、二人は服を着る。そして。

「ね、睦月ちゃん」

「なあに、如月ちゃん」

お互いに、お互いの下腹をなでる。あったかい。そう口の端から言葉が漏れた。

「じゃ、行きましょ」

「うん」

提督の執務室に向かうため、常緑樹が植えられた庭を通っていく。ひんやりとした夜気。スカートの繊維から抜けてくる風が、濡れそぼった女陰が濡れきったシューズを冷やす。だが。

「今日は鹿島さんになにさせちゃおっか？」

「うーん、そうねえ」

そういって、靴を脱ぎ。そして。

「あ、ちゃんと来てくれたんですね、鹿島さん」

睦月と如月は笑っていた。鹿島は小さくソファに座り、下腹を腫上がらせた青い水着に包んだ体と、素肌を晒した足を居心地悪げに動かしている。

「……はい」

そうしているうちに、手際よく如月が三脚を広げ、カメラを据え付ける。そして。

「鹿島さん。ソファに仰向けに寝てください」

革張りのソファから、鹿島が腰を浮かべる。湿った水着が張り付き、剥がれ、そして。仰向けに寝た彼女は、カメラを見て、はあ、と再び溜息をついた。

鹿島は、目を閉じた。衣擦れの音がする。びちゃり、と板張りの床に、布が落とされる音がする。何をされるのか。何をするのか。カメラのモーターの音、床の軋む音がする。

「また、撮るんですね」

「そうですね。だって、鹿島さん、きれいだから」

「……如月さん。やめま……うっ」

そう言った鹿島は目を見開いた。そこには、やわらかな栗色の陰毛が生え、そして、未成熟な女性器があった。スカートをたくし上げ、鹿島の唇と、睦月の未成熟な唇が、触れ合った。そこからは、濃密な精のにおいがする。んしょっと、などと言いながらスカートのすそを腰に手挟み、ぐい、と両の指で押し開く。

「う……なに……うっ」

「えっちな事をする前に」

楽しそうな、睦月の声。そして。

「おそーじ、してください。鹿島さんが毎晩しこしこしちゃうくらいだあいすきな提督のせーえき、二発分もはいっちゃってるんですから」

今、この娘はなんと。なんと言ったのか。鹿島は声もない。だが。

「あ、精液、飲まなかったら睦月、怒っちゃいますよ？」

震える唇。そして。そこに白いものが垂れ落ちてくる。唇を開き、そして。

「う……あっ、鹿島さん、すごい。えっちな……」

睦月は腰を鹿島に押し付け、はああ、と深く息を吐く。呼吸が、できない。精が垂れ

落ちる。んん、んん、と抗議の声を上げると、あ、ごめんなさい、と腰を離した。だが。

「わあ、鹿島さん。顔がべったべた……」

げほん、げほん、とむせかえる。提督の精液。こんな状況でなければ、この娘達に注がれたものでなければ、欲しい、欲しい、と子宮を疼かせ続けていたものだったのに、喉はそれを受け付けられない。手に、精液と、睦月の愛液と、自分の唾液の混濁物を吐き出した。

「はあ、う……はあ……」

「飲んで」

「いや……いやです……」

「うそつき」

そう、睦月は言った。ぐい、と鹿島の足を押し広げ、そして。

ぶるん。と震える。布をずらし、夜気にさらされたものは。

「鹿島さんは提督の精液って聞いただけでんばんにしてる変態のくせに」

ぐに、と睦月はものをにぎり。そして。

「あはっ……ちっちゃあい」

まだ、女になり切っていないかと思っていた。まだ、幼いと思っていた。それなのに。鹿島は、腰を震わせ、混濁液を水着の上にぶちまけてしまう。

「きれい」

そういって、鹿島をくわえ込んだ睦月は、小さな指で、ぬらぬらと輝く三者の欲望を押し広げた。水着にしみこみ、月光がそれを輝かせる。醜怪極まりない臭気とは裏腹に、膨れ上がったにもかかわらず形のよい乳房、ほどよく筋肉がつき、すらりとした腹を浮かび上がらせる。綺麗は穢い、穢いは綺麗。そう述べたものがいたという。

そんな感じだ。睦月はそう、考えた。鹿島さん、きたないのに、きれい。そう、睦月は考えた。

「如月ちゃん、しょ？」

そういって、如月をいざなう。如月は、ショーツを既に脱ぎ捨て。そして。

「おそーじ、してね」

「……はい」



鹿島の顔に、またがった。そこからは、男の精が垂れ落ち、彼女自身の欲も漏れ出ている。それを、鹿島は丹念になめとる。きれいに、しなきや。きれいに。そうとしか考えられない。

「う……ああ……」

三つの声がある。ショートヘアの童女がばんと腰を叩きつけ、そのたびに上げるよがり声、なめ上げられるごとに腰をはねさせ、ショートヘアの童女に抱きつく、豊かな黒髪の童女の上る雌の声。そして。

銀髪の少女の、童女の膣内という快楽に狂乱し、腰を振りみだし。好きな男のものをくわえ込んでいた娘の掃除をさせられる屈辱感すべてがないまぜになった悲鳴。

「かしま……さん！提督の、入ってた、おまんこ、気持ちいいんだね！」

「ちがう、ちがう、ちがう……！あああ！違う！いい、いい……」

「ちよっとお、舌が止まってる！」

「んんんん！んあっ……すごい……ていとくのせいえき、おいしい……すごい……くさいの……」

顔じゅうを、体中を精液にまみれさせた鹿島。それなのに。窓からの光は、どうしてこんなにもこの娘達を照らし出すのだろうか。三人ともが、腰を叩きつけるようにして汚しているにもかかわらず。

「いっ……あっ……」

うめき声が、聞こえた。そして。

悲鳴。全身の緊張。

「だしていいよ、鹿島さんっ！イッチャえー！」

「ああ、ああ……はいーうあっ……！」

その睦月の声に。鹿島は精を放った。放ち続けた。悲鳴ともつかない声が、聞こえる。三人とも喉から、ほとばしったものだった。

「……あつ、ゴムつけてなかった……どうしよう。提督のあかちゃんだったらいいけど、鹿島さんのは嫌だな……」

「あの……私……玉……ついてないから……できてないから……できない、んです……」  
鹿島は、そういって睦月の中から抜け落ちた瞬間に喘ぎ声を発する。しおれきったも

のが、びく、びく、と震え、吐き出しきれなかった精液を水着の上に発していた。如月は、床の上ではあ、はあ、と呼吸を落ち着けている。

「へー。それじゃあ」

「ね、睦月ちゃん」

「鹿島さん」

はい、と自分の喉が言葉を発するのを、鹿島は感ずる。

「私たちのオナニー道具になれるね。ね？」

「はい……」

力なく、言葉を吐き出したと思っていた。だが。

「うれしそう……やっぱり、えっちなんですわね、鹿島さん」

自分の耳に届く声は、喜びに満ちた犬のそれだった。

「じゃ、如月ちゃん。交代だね。ふふふ、楽しみ」

「もう、睦月ちゃんったら。壊れちゃうよ？」

そう笑いあう二人の声。その声を聞いて、感じて。鹿島は、自分の下腹の奥底。子宮がきゆう、と締め付けられるのを、感じた。

「はい、今日の訓練は終わり。みんな、ちゃんと体を休めてね！」

鹿島はいつものように過ごしている。いつものように訓練を行っている。だが。

「鹿島さん」

「なあに、睦月ちゃん、如月ちゃん」

二人の声を聞いて、そして。

「……今夜、いつものところで」

「……はい！」

隠しているはずのものに、血が通い。膨れ上がるのを、感じた。

# 「夜汽車にて」

# 作画：ちよこらーた 絵：ヒダカメダカH型

煙をたなびかせた夜行列車は闇を切り裂いてレールの上を走っていく。  
蚊絆と袴の少年は退屈そうに互いの下駄をコツッとぶつけて己を慰めた。

「舞鶴鎮守府からお呼びが掛かるとは何と名譽なの。私も立派な義弟を持って鼻が高いわ。御国のために頑張ってきてね」

義姉の言葉が脳裏に浮かぶ。父も母も早くに亡くした身としては、いつまでも兄に厄介になっているわけにはいかなかった。無駄飯食いを送り出す義姉のワザとらしい声援は業腹だったが、自分を見送る兄の顔を思い出して我慢した。

呉海軍裁判所の書記官である兄はただ一言「舞鶴か……」と悲しげに呟いていたのが妙に気にさわった。そんなに提督候補生となる自分が妬ましいのか。

一度ため息を吐くと頭をかきながら自分を鼓舞した。

「せいぜい御国の為に頑張りますよ、義姉上の為にも」

「偉いわ、なんて素敵な御言葉」

「誰だ、君は！」

思わず叫んでから顔を上げると、そこには袴の少女がいた。彼女は小さな肢軀とは不似合いな大きなトランクを携えていた。

——いつの間にか？

深紅の着物とそれを引き立てる薄桃色の袴、そして夜行列車の車内灯で薄赤色にも見える彼女の長い髪とそれをまとめる大きな黄色のリボン。

——美しい。

声を上げること出来なかったのは恥ずかしさのためではなく、少女の整った顔に見惚れてしまったからだだった。

意志の強そうな大きな瞳と細い顎、しかし優しさと可憐さを秘めた品を身に纏っている。

その高貴さに気圧されたが、何とか少女と接点を持ちたいという気持ちの方が勝った

「あ……。き、君は？」

ようやく絞り出した誰何の声に少女は笑顔で応えた

「うふっ、私、神風。はじめまして、提督さん。あなたみたいな提督で良かった」

——この子はいきなり何をいうのだ。なぜ僕の事を。まさか鎮守府からの出迎え

そんな少年の煩悶を知ってか知らずか袴の少女は続けた。

「あら、知りませんか？ 今、私たち女の子の間で提督さんごっこって流行ってるんですよ」

「へ、へえ、そうなんだ」

——ちくしょう、もっと気の利いた返しが出来ないのか、自分は。

「貴方はこの列車でどこに行かれますの？」

「あ、ああ」

自分が舞鶴に行くことは家族以外誰も知らない。この少女は何者なのか。

「私はこの列車で駆け落ちをしていますの」

「駆け落ち？ 駆け落ちって言っても、その相手は……」

少女は大きな鞆を持っているだけだった。他の車両に駆け落ち相手が居るのだろうか。

「ええ、いますよ、今も一緒に。ね、羽黒ねえさん」

ゴトリ。

トランクの中から音がした……。

車内灯が不安げに明滅した。視界がぐにやりと歪んだ。

「そうだ、もし良かったら私と提督さんごっこをしませんか 私が艦娘であなたが提督さん」

少年は唾をゴクリと飲み込んだ。

「提督さんごっこって、いったい何をやるんだ」

「じゃ、始めますね」

少年の返しを無視して少女は突如敬礼をしながら叫んだ。その姿はまるで本職そのものだった。

「提督！ 申し訳ありません！ わが隊の羽黒は、あろうことか敵と通じていました。羽黒は僭越ながらこの神風が捕縛済みですので、只今より処罰致します。願わくば寛大な処置をお願い致します」

「なに？」

「こちらが捕らえております羽黒です」

少女はしゃがむと靴を横倒しにし、錠前を外して蓋を開いた。提督と呼ばれた少年は息を飲んだ。

靴の中に居たのは一糸纏わぬ姿の黒髪の美少女だった。そして少女は肛門に棒状のものを挿入されていた。時折少女の肢骸が小刻みに痙攣をしている。

少女が靴の中に詰められてからずっと逝き続けていたのだろうか。口元から溢れたであろう唾液が美しい貌や髪にまわりついている。散々に泣きはらした目元は今もなお濡れていた。

少年はいきり立つ股間を袴で隠して叫んだ。

「これはいったい何だ！ 君は正気じゃない！」

生唾を飲んでようやく声を絞り出す。

「あら提督。提督は椅子に座って、私たちを見てくださってればいいんです。この神風を裏切って、敵と誼を結んだ羽黒ねえさまに罰を与えるところを」

神風は羽黒の左手首を引き上げると、その薬指にはめられた指輪を忌々しげに見つめた。

「さあ、提督には私たちの結婚式の立会人をお願いしましょう」

そう言うのと神風は羽黒の指輪を筆り取ろうとした。

その途端、虚ろだった羽黒の瞳が揺らいで意識が戻ってきた。

羽黒は生まれたままの姿で異性の前にいる事に気づいた。

「いやああああっ！ み、見ないで、見ないでええええっ」

胸元を隠して哭き叫ぶ少女は学校で飼っていた兎を思わせた。

恥ずかしながら彼女の絹を裂くような叫びを聞いて嗜虐欲が沸き上がり、股間の膨らみは最大になった。

そんな少年の情欲に應えるように神風が胸元を隠す羽黒の腕を奪った。

「あれだけ犯したのに。どうして羽黒ねえ様はまだ忘れられないんですか」

「提督、提督はどこ。おうちに、おうちに返してええええっ！」

幼児に帰った羽黒が泣きわめく。

「やめろ おおっ！」

少女を救いたい思いで少年は神風に殴りかかった。

だが次の瞬間少年の身体は宙を舞い、したたかに背中が座席に叩きつけられた。

「ぐはっ」  
「艦娘の腕力は人間を凌駕してるのよ。そんなことも知らないのね、貴方は。だから深海の奴らにも勝てない無能なのよ。あなたはそこでおとなしくしてなさい」

「ぐはっ、な、なにを、訳の分からないことを。な、なんだそれは」

呼吸を整えている隙に、首筋に冷たい針が当てられると同時に肢骸の力が抜けた。

「貴様……」

精一杯の虚勢を張って睨みつける。

「ふふ、尋問用のお薬。わたしも深海の捕虜にもよく使ったわ」

頭がくらくらして、少年はただ座るだけの人形になった。情けない。

「じゃあねえ様、始めますわ」

錠剤を口に含むと神風はまだしくしくと泣いている羽黒の頸を掴むと互いの唇を繋いだ。

百五十センチ程の裸の少女はより小柄な袴の少女のキスで薬を嚥下した。

羽黒は多少の抵抗をしたがしばらくすると大人しくなった。

袴の少女は羽黒の体を靴から引きずり出すと、羽黒のお尻に埋め込まれていた「栓」を引き抜いた。

「ひううっ」

勢いよく「栓」を引き抜いたことでびゅるると腸液が飛び散った。

栓はちょうど砲弾の形をしていた。

こんな物を直腸に入れられて少女を苛んでいた事に少年は身震いした。

神風は抜いた栓を舌先で舐めると、彼女の左手指が羽黒の裸の胸を驚掴みにした。柔

らかい胸は神風の指を難なく飲み込んだ。肌色のマシエマロを神風は楽しそうに揉んで

いく。

羽黒の呼吸がより甘い吐息へと変わっていく。

「おねえ様、羽黒おねえ様 おねえ様、ずっと側にいて。羽黒おねえさま」

しかし黒髪のおかっぱの人形の瞳は宙をさまよっていた。

靴に詰められる前にさんさんに肛虐をされたのだろう。羽黒の肛門粘膜はすっかり捲

れあがって内粘膜の赤く肉々しい盛り上がりを出していた。

神風が羽黒の胸を揉みながら、空いた手を己の内股に伸ばし秘所をまさぐっていた。びちゅっ、ずちゅっ、くちゅっ、官能的な水音が少年の耳を打つ。

「さあ、見なさい。私たちの結婚式を」

少女が袴をめくりあげると少年は女性の内股にあってはならないものを見た。

皮を被ってはいるが、その皮の下に雁首を思わせるくびれを持ち、水平よりも上を向いた女を犯すための肉棒。

それが神風の腿の奥から生えていた。びくびくと揺れる先端部からカウパーが石清水の様に湧き出ていた。

「さあ、誓いのキスをお願いします、おねえ様」

神風はおかっぱの少女の口もとに震える肉幹を持っていったが、彼女は今まで喘いでいた可憐な唇を閉じて拒む。

「うふふ、ねえ様ったら恥ずかしがって」と、神風は羽黒の鼻をつまんだ。しばらくは我慢していたが、呼吸のために唇を微かに開いた時を見計らって、神風は皮被りのソーセージを割り入れた。

「んむっ！」

紅の頬が膨らみ、羽黒は肉の飴をむさぼった。だが少年にはそれが単なる反射にしか見えなかった。

羽黒の口腔への陵辱が一通り終わった頃、神風は羽黒の背中から脇下に腕を通して胸の下に手を添えて引き起こした。夜気に晒されたピンクの乳頭がぶるんと揺れた。

「さあ、見なさい。私がねえ様の初めてを貰うところを」

神風は羽黒の下腹に手を添えて僅かに持ち上げた。淫水塗れになった淡い繁みがぐっしりと濡れている。

「いや、やめて！ 見ないで！」

必死でいやいやをする羽黒を無視して神風がささやく。

「どう、羽黒ねえ様。自分の大事なところが見ず知らずの男の視線で犯される気持ちには」  
神風の言葉の通り、少年の目は羽黒の大事なところにくぎ付けになってしまった。

なだらかなカーブを描く恥丘を覆う繁みが男の物を受け入れるスリットのあたりになるとだんだんと産毛程度の濃度になる。それゆえ淫水でふやけ切った小陰唇が実に淫ら

に花開いていた。膣口からはクリームのように愛液が泡立って半ば固形化している。本物の女性器を入浴時に覗き見た義姉の物しか知らない年は思わず喉を鳴らしてしまった。

「どう、もっと見てあげなさい。今から私が入れる場所もね」

「いや、そこだけは、そこだけは見ないで！」

羽黒の絹を裂くような可憐な悲鳴が少年の中の嗜虐欲を刺激して股間の強張りが張り裂けそうなほど痛かった。

神風が一度膝の上に羽黒の臀部を載せてから両腕を彼女の膝の裏に入れて強制M字開脚の形を取った。これによって秘所のスリットがピンクの粘膜どころか膣口の奥までよく見えた。だが神風が良く見せたいのはその後ろだった。

「どう、きれいでしょ。今から私のチ×ポが犯す場所だもの」

愛液が垂れていく開き切った薄桃色の秘孔から半透明のわずかに黄色がかかった液体がこぼれていた。内臓粘膜の色は性具に犯され続けたせい、実に健康的な鮮紅色をしていた。

羽黒が今から起こる事におびえてカタカタと歯を震わせている。

菊薮のすぐ真下にはびくびくと脈動するカウパーまみれの肉槍が挿入の時を待っていたからだ。肉の傘が異様に張った龟头は車内灯の光を反射するほどに張りつめていく。

そそり立った逸物は何の前触れも見せず羽黒の肛洞に吸い込まれた。

ずぶっ、ぬぶぶぶっ。

「ひぐうううっ、おひりっ、おひりいっ」

性具の出し入れによる拡張が済んでいるとはいえ、男の物を受け入れたことがない場所に、排せつ物とは逆の方向にミチミチと肉の杭が埋め込まれていく。

「ひんじゃうっ おひりの粘膜がけずられてるううっ」

「どう、お薬の効果は。直腸粘膜の感度が三千倍よ。これからはうんちの時だって感じるようになるわ」

「そんな、ひどいっ！ 羽黒、うん……ちの時になんか感じたくないっ！」  
理性をわずかに取り戻した羽黒の腸道を神風の抽挿が快感に引き戻す。



「やらああっ！ おひりて逝かされちゃうのおおおっ」

肛悦に耐えきれない羽黒は舌と唾液を唇から溢しながら叫ぶ。

アナルレイプをしやすくするため、神風が右足を羽黒の右の腿の下に差し込みイスの手すりの上に置いた。羽黒の首筋を噛みながら少女の胸の水蜜桃を神風は揉みし抱く。ゆさゆさと揺さぶりながら直腸粘膜が犯されていく。

「どう、ねえ様。この不浄の穴を犯されてヨがる気分は！ 私のオムンチンで感じてるっ  
ていいなさい、言いなさいよっ」

「か、かみかぜちゃんのオムンチン、気持ちいいっ」

「でしょ、羽黒ねえ様っ。提督の腐れチ×ポなんかよりよほいいでしょうっ！」

神風は羽黒の肢軀を持ち上げてわざと肉棒を一度抜いた。じゅぽんと腸液をまとったペニスが夜気に震えて湯気を立てている。そして神風が羽黒を掴んでいた両の手は外された。重力に従って落ちた羽黒の後ろの淫門は肉槍で串刺しにされた。

「おぶうっ！ あ、あがあああっ！」

「どう、直腸の奥までチ×ポに犯される気分は！」

衝撃で何も差し込まれていないはずの羽黒の前の方の花びらから、ブシヤッと愛液の滴が飛び出した。神風が羽黒の両の手を奪うと押し車の要領で腕を後ろにねじって掴む。そしてより腸奥へと抽挿を行う。

赤い突起をつけた乳肉の円錐が汽車の進行とピストンで揺れ動く。

ぶちゅっ、ずびゅっ、と肛肉が肉棒の出し入れによって空気と精液をかき出され、また押し込まれていく。結合部からは血が混じったであるう薄桃色の腸液が泡立って糸を引いて落ちていく。

その狂った性宴を目の当たりにした少年はついに淫欲を暴発させてしまった。

「ぐっ、で、出るっ」

声を押し殺して射精の快楽に耐えるが、袴越しに白い液体が飛び出した。栗の花の臭いが周囲に漂った。

宙を向いていた羽黒がぼそりとつぶやいた。

「提督のオムンチンだ……」

「え？」

そのとき、カーブを通った汽車が激しく揺れて、肉棒で肛門と繋がった神風ごと羽黒が少年に倒れ込んだ。

「きやああっ」

悲鳴を上げた神風がバランスを崩して座席の角で額を打った。それきり神風は動かなくなった。おそらく失神したのだろう。

「お、おい、大丈夫か」

少年は神風と羽黒を心配して声を掛けたが起きる様子はない。

神風の執念か、尻肉と陰茎とは繋がったままだ。

だがそれに構わず羽黒が叫んだ。今度は聞き違えようがなかった。

「ああああっ、提督、提督のおち×ぼの匂いだ。羽黒は、羽黒は提督のおち×ぼが欲しいです」

可憐なおかっぱの少女は場末の娼婦でも恥じらう言葉を口にした。

「ちんぽお、提督のおちんぽお！ 提督のおちんぽが欲しいのおおっ」

「おい、正気を取り戻せっ！」

神風の支配を逃れた羽黒は少年の袴を捲りあげた。露わになった射精直後の肉芋がふるふる震えながら鈴口からカウパーをこぼしていた。

「うわぁ、美味しそう」

羽黒が涎を溢しながらハイエナのようにペニスにかぶりついた。

「おいひいっ。久しぶりの提督チ×ポ、とてもステキで羽黒はうれいす」

陰茎に纏わりついた残り汁を舌先で削げとる巧みな技に少年は二度目の暴発をしないようにするだけで精一杯だった。

「やめろ、君はいつたい何がしたいんだ」

「羽黒、代わり、の提督が来てくれてとても嬉しいです」

空気が歪んだ。代わり？ 提督候補生？

「代わり？ まさか」

「ええ、せっかくケッコンした提督さんを私が潰しちゃったから、新しい提督さんを私たちは探してたの」

「っ、潰したって、なにを」

「ニブいわねえ、使い物にならなくなって干からびて死んだのよ、羽黒ねえ様たちに精液を吸い尽くされてね」

陰茎をさらけ出した袴の少女がゼンマイ人形のように起きあがった。

「でもその点貴方なら大丈夫。弱いのに私のために艦娘に立ち向かう元気と精気があるものね」

「ホント、向こう見ずな所は私も気に入ったわ」

神風が股間のものを漲らせて立ち上がった。

「合格よ、あなた」

「ようこそ、舞鶴鎮守府へ」

神風が袴を外国の淑女のように持ち上げて挨拶をする。頭を下げたことでそそり立った肉棒に額が着いてしまったが、笑えなかった。

「ふざけるな！ よくも僕を騙してくれたなあ。家に帰らせて貰う！」

薬のせいで脚に力が入らないが、それでも必死で立ち上がるうと両膝に力を入れようとする。しかし羽黒は陰茎を掴んで離さない。神風が唇の端を歪めて嗤う。

「帰る家もないの？ 貴方、売られたのよ」

ぐにやりと視界が揺れた。そうか、兄の済まなそうな顔はそういうことだったのか。

「かみかぜちゃん、それは黙ってる約束でしょう」

「いいじゃない。この子はどうせ行き場がないんだから。せめて立派な提督になってもらいましょよ」

神風の口角が上がった。今まで見たことがない程邪悪に。いや、見た覚えがある、近所の野良猫がネズミをいたぶるときのとおり口と同じなんだ。

己の身に降り懸かった不幸を噛み潰して必死で耐えるが、頬を濡らす熱いものが止まらない。

「可哀想に」

頭を一度撫でると、羽黒が少年の顎を掴んで口中に貯めた精液と唾液を無理矢理少年に飲ませた。

「ぐほっ、うぶっ」

せき込んで目を剥く少年とは逆に羽黒は微笑んだ。

「提督、みんなで仲良くひとつの家族になりましょう。かみかぜちゃん、お手柔らかにね」

「ええ、おねえ様」

羽黒が少年のペニスを無造作に掴むと膣肉にぐいっと押し込んだ。温かい。裏切りと絶望で凍てついた少年の心が解けそうになるほど気持ちよい。だが歯を食いしばって耐えた。

その少年の肩と背中を手で押さえつけて、白磁のような両足が腰を押さえ込んだ。

「よおくローションを塗って上げてね」

腰を浮かせた羽黒の美菊からこぼると白濁液がこぼれた。

羽黒のぽっかりと開いた肛洞からこぼれる精液と腸液を神風が両手に塗った。

「な、何をするつもりだ！」

「何も知らずに家族に売られたバカは黙ってなさいよ」

「かみかぜちゃん、そんなことを言ったらだめですよ。とても気持ちいいことですよ、提督」

ローションが塗られた神風の両の指が少年の尻穴にずぶりと差し込まれた。

ねじり込む指の回転は少年の悲鳴を招いた。

「うぐわあああつ や、お尻がっ！ ひぐううっ！」

ちゅくちゅくちゅくと、マッサージとはほど遠い感じがかき回される。前立腺が爪先で突かれても快感を開発してないため、苦痛でしかない。

「や、やめっ！ 助けっ！」

少年の苦悶を膣内の陰茎が反映してぶるぶると震えた。

「提督、最初は何事も我慢ですよ。御国の為なんですから」

苦悶を案じた羽黒が義姉と同じ言葉を口にした。少年の身体から抵抗する力が消えた。

「ちくしょう……」

「いまよ、かみかぜちゃん。全部入れちゃいなさい」

「はいっ、おねえ様」

ズブッ、じゅるるるぶちゅっ。ぽぶっ。

雁首が肛門管を突き抜けてメリメリと尻肉を割り開いていく。痛みで叫ぶよりも早く、問拔けな音を残して竿が根本まで飲み込まれた。

「あ、あがあああつ」

泡を噴きながら少年が呻くが、羽黒は腕でがっしりと少年の肩を掴んでいる。

そのうえ腰は蜘蛛のようにつま先の尖った尖った細い脚によって絡め取られている。

しかも残る片腕で少年の尻たぶを指がめり込むほど力を入れて持ち上げている。

広げられた未開の少年肛肉を血管の浮いた灼熱の塊が割り進むと幾筋もの赤い血が肉の合わせ目からこぼれた。

ごりゅごりゅと雁首が肛門管の粘膜を削り取り、毛細血管が切れているのが少年にもわかった。もしかしたら肛門管自体が裂けてているのかもしれない。

「おがあああざんっ、たすっ、助けてっ！ 母さんっ！」

「あらあ、羽黒が提督のお母さんですよ。そして貴方はパパでありママになるのよ」

「助けてっ！ 父さん、母さんっ！ 兄さんっ！ ああ、あがあああつ」

「はあああつ 素敵っ 提督のオ×ンボがまた私の中で震えてるっ」

泣き叫ぶ少年の頭を撫でながら羽黒が飲みの声を上げる。

「あああつ、て、提督、あなたナマイキだけど、いいアナルしてるじゃない。私のオチ×ボ、溶けちゃいそうよ。あああつ、オチ×ボがきもちいいっ！」

内臓に異物が押し込まれる腹圧で呼吸さえも少年には苦痛に感じる。歯を噛みしめて苦痛に耐えるとかえって圧が強くなる。鼻ではなく口で間断的に呼吸を行って凌ごうとしたとき、腸内に飲み込まれた肉ドリルが蠕動を始めた。

ごりゅっ、ぐぼっ、じゅぶぶぶっ。

神風は全く動かしてはいなかったが、微かな前後運動でさえ少年には耐え難かった。

「だめええつ、動かさないでええつ！ 犯される！」

後背位で犯される少年は知らず女言葉を泣き叫んで逃れようとする。だが羽黒と神風の拘束はそれを許さなかった。

「だあいじょうぶですよ、提督。これは提督と神風とのケッコンでもあるんですから。すごいわ羽黒ねえ様、神風は今日二人とケッコンしちゃいました」

「いい子ね、かみかぜちゃん。じゃあご褒美にキスして上げる」

少年の頭越しにおかっぱの少女とロングの少女が唇を交わした。

「ちゅぐ、んちゅ、んむっ、じゅるっ、ぶはああつ。相変わらず羽黒ねえ様のキスはと

ろけそう」

「かみかぜちゃん、私ばかりじゃ提督に悪いわ。そろそろ可愛がってあげないと」

「ええ、おねえ様」

自然体でもペニスの脈動で少年の直腸は犯されている。それが本格的な挿挿になると――。

「じゃあ、動かしませよ、提督」

「や、やめっ、死ぬっ、死んじやう」

「はい、私と一緒に逝きましょう！」

雁首が腸粘膜を削り取って一気に引き抜かれた。引き抜かれた神風の肉の花は血に染まっていた。肉の花を納めていた少年の菊壺はぼっかりと開ききり、粘膜の洞からは腸水を溢れさせていた。

「あがあああつ、ぐぼおおつ、おぶっ」

内臓を一気に抉られた少年は耐えきれず、遂に吐き出そうとした

少年の嘔吐を押さえるべく羽黒が彼の唇を奪った。

「むぐううっ」

「へいほふのものは、へんぶ私がいまふ」

その言葉と共にずぶつと肉の花が再突入を果たした。元のすぼまりに戻ろうとしていた茶褐色の花瓶は再び入り口を引っ張られていく。その様はひび割れた唇を無理矢理引っ張るが如くだった。

「むおっ、うぶぐうっッッッ！」

叫びをあげたくても口を塞がれているため鼻でしか呼吸できず、内臓を圧迫する淫棒に耐えきれず、ついに少年は胃の内容物を吐き出した。

だがそれさえも羽黒は掃除機のように飲み込んでいく。すべてを美味そうに飲んでから羽黒が口を開いた。

「これからは提督の出すものはすべて私に下さいね」

吐しゃ物を舌で舐めながら言い放つその曇りのない瞳を見た少年の背中を恐怖が走った。恐怖の悲鳴を上げようとしたが、肛姦ピストンの苦しみによる嘆願が勝った。

「あがあああつッッッ！ やめて、お腹が苦しい。お願い、やめてっ！ 出ちゃう、お

腹の中のものが出ちゃうからやめてっ！ おねがいっ！ 助けて、義姉さんっ！」  
 思わず嫌っていたはずの義姉に助けを求めてしまったが意味を考える余裕なんてなかった。

「ああああっ、あはあああ、提督のケツマ×コ、なんて良さなのよ 羽黒ねえ様以上よ。いいわ、提督、これからは私のチ×ポ奴隷におなりなさい。あなたのケツマ×コ、私専用のオ○コホールにしてあげる。もっと、もっと開発して上げるわ。もう離さないわ」  
 自分の魂の願いがまるで聞こえない神風に絶望して、自分が逃げられない地獄にいることを悟った少年は恐怖と諦めで歯を鳴らして静かに涙をこぼした。

「あら、かみかぜちゃん、そんなに提督のケツマ×コが具合良いの」

「もう最っ高！ ねえ様も味わうべきよ。もうとろっところでも射精しそう」

「よかったわね、神風。提督のケツマ×コが気に入って。私のお×んこも提督のオチ×ポが気持ちよくなって喜んでるわ」

パン、パンと少年の腎丘を己の下腹で叩きつけながら神風が亀頭の快感で目を細める。  
 「ああ、なんて気持ちがいいの。ねえ様、私逝っちゃいそうよ」

ピストン運動により少年の直腸と肛門管の粘膜はえぐられ続けるが、神風の言葉を聞いて終わりが近いことを悟った少年はわずかながら安堵した。

「じゃあいくわよ。今度はS字結腸にまで入れるわね」

恐るべき言葉を神風が発した。

かりそめの終焉を期待した少年の目が見開かれて慌てて暴れた。

「いやだっ、やめてっ！ 助けてっ！ お願いっ！」

「提督、私も味わいましたけど、S字結腸を犯されると新しい世界が開けますわ。そこそ人や世界が変わるほどに」

「ダメえええっ、神風のチ×ポでぼくを犯さないでええええっ！」

少し引き抜かれた位置で抽挿が止まった。少年は自分が「3」階段の最上段に登ったことを悟った。

しかし、肛瘻は起きなかった。

冷たい汗の玉が少年の背中を伝った。

それでも神風は動かなかった。目を閉じて来るべき時に備えて耐え忍ぼうとしたが、

一向に挿入はなかった。体のかすかな振動で超粘膜が犯されていく。自分の呼吸で直腸がひくひくと陰茎を排泄しようとして試みるが圧倒的な質量の前には無駄な行為だった。

それでも神風は動かなかった。冷たい汗が額を伝い、口の中に吸い込まれていった。神風も羽黒もずっと黙ったまま。呉の実家で寝小便をした時に母の冷たい瞳が自分を見たときの居たたまれなさが何故か思い出された。

沈黙に耐えきれずに少年は叫んだ。

「ひ、ひと思いに犯れええええっ！」

「はい、提督。喜んで」

人は行為そのものには耐えられるが、沈黙と不安には耐えられない。その畏に掛けられたことを少年は悔んだが後の祭りだった。少年の直腸破瓜出血に染まった陰茎が粘膜の表面から溢れる腸液を押し退けて腸内を突き進む。

「うぼくばおっ」

そして直腸の最終コーナーの角を肉の槍が小突いて入り口を割り開いた。

肛瘻によりS字結腸閉口部を強制的にこじ開けられて、前立腺も擦り上げられて少年はケツマゾ奴隷へになったことを嬌声で示した。

「んひいひいっっ！ んほおおおっ」

結腸の周囲にある腎臓と尿管が一時的にS字結腸内の陰茎によって粘膜越しに叩きつけられた。

日常生活ならば決して味わうことのない体内からの衝撃で少年は射精と前立腺經由の空撃ちを何度も行った。その間も羽黒の淫肉が少年の肉棒をもみゆもみゆとたべては締め上げて離さない。

「だ、ダメっ。チ×ポを食べないでっ！ ああああ、神風っ！ 激しく出し入れしないでっ。お腹の中がおかしくなるっ！ チ×ポ、チ×ポ、チ×ポ、奴隷、奴隷っ ああああ、あはははははっ」

脳内回路が焼き付き、男性が味わう快楽の限界を越えた少年は言葉にならない単語だけを叫んだ。

「はあ、提督さん。なんて素敵なケツマ×コなの。おねえ様のは陸を感じたけど、提督さんの牝ケツマ×コは、うねうねとうねってほんとにマ×コみたい。オスなのにメス

みたいっ ダメっ、また出ちゃうっ ザーメンがとまりやないいいいいっ

「出していいわよ、かみかぜちゃん。提督にも至上の快感を感じさせてみんなと一緒に姉妹になりましょう」

「おねえっ、様っ」

「かみっ、かぜっ、ちゃんっ」

「牝っ 牝っ メスっ、チ×ボおおっ」

緋をはだけた少年の乳首は羽黒の歯で千切れるほどに引っ張られて女性並みに伸びきっている。

羽黒と神風が少年の頭越しに互いにキスをして口腔で体液を交換しあう。アヌスによるメス逝きを我慢できない少年は羽黒の首筋を噛んで耐える。

「あらん、提督、素敵なキス」

少年の腸と神風の射精管を通じて神風と少年が繋がり、少年の精液が羽黒の子宮に吐き出されていく。すべてが繋がる精液と愛液の循環だった。

射精しながら己の内臓に射精された少年の思考はブラックアウトした。

呉の空を流星が駆けていく。

「あっ、流れ星！」

流れ星を見つけた志津子は流れ星に向かって祈った。

「どうかあの子が立派な提督になれますように」

「こんなところにいたのか、志津子」

良人が声をかけた。

「あなた、あの子は元気でやっていますか」

志津子の良人は目を下に向けた。

「あ、ああ。元気だとも」

「良かった。私、あの子には好かれてなかったけど、あの子が提督様になって呉に帰ってきたら抱きしめてあげようと思ってますの」

「そうだな、その時はそうしてやるといい」

志津子の良人はそれが叶わない夢だと知りながらそう答えた。



目を覚ました少年は自分がマホガニー製の高価な机に座っていることに気がついた。そして陰茎が射精後の快感の余韻に包まれていることも。

「夢？」

少年は頭を振るとため息をついた。

——なんて夢よ。いくら欲求不満でもほどがあるわよ。

立ち上がるうとした瞬間、ズンッと内臓から快感が昇ってきた。

「あ、ああっ」

びゅくっ、びゅくくっ。

内臓の最奥から快感が這い出てきた。この快感は開発された前立腺と直腸が反応した快感だと少年、いやかつて少年だった少女は気付いた。

「い、逝くっ、ケツマ×コで逝くっ」

牝アナル調教された者が上げる牝叫びで少女は思いだした。自分は少年ではなく提督という存在だという事を。

年若い提督はわき腹から伸びてくる白くて細い手を見たとき、小袖の手と呼ばれる妖怪の話の思い出した。

「ていとくう。ダメですよ、いくら気持ちがいいからって失神しちゃうなんて」

背中から顔を覗かせた神風が粘っこい声を出す。イスに座った神風のペニスで尻穴を犯されているうちに気を失ったらしい。

「かみかぜちゃん、どうやら昔の夢を見ていたみたいね」

「夢えく？ せっかく私が精液を提督のお腹に送ってるのにな？」

そう言いながら神風が提督の膨らんだ胸を揉みしだく。

「うん、私がここに来る前の、まだ男の子だった頃の夢。すっこくリアルだったわ。初めて神風ちゃんにお尻とS字結腸を犯された時をね。んああっ」

神風に乳首をいじられて提督の前立腺とS字結腸がずくと疼いてまた射精した。

「んもう提督、逝くときは逝くって言うってください。ふんぶん」

机の下から胸をさらけ出したボンデーシ衣装の羽黒が顔を出した。その顔は精液まみれになっていて実に色っぽい。

「羽黒ねえ様、後で交代してくださいね。私も提督の精液を飲みたくなくなってきました。」

「ええ、いいわよ。でもその前に」

羽黒が机から這い出てきた。

股間の膨みからは陰茎がそそり立っていた。

「提督も汗をかいたから喉が渴いてらっしゃるでしょう？」

羽黒が子供の腕くらいある肉棒を掴むと提督の開いた口に照準を合わせた。

「んっ」

ちよろちよろと出始めた聖水が勢いを増して提督の舌を打つ。

「もっと、もっとちょうだい」

顔を聖水塗れにしながらベニスを掴むと小便を直飲みする。

喉をごきゅごきゅと鳴らしながら飲み干していく。

それに反応して提督の高射砲が角度を上げると提督はそれを自らしごき上げた。とたんに白い液体が勢いよく発射された。その先に一航戦の性格のキツイ方が立っていた。

びちゃっとその端正な頬にザーメンが掛かった。頬を伝うそれを舌を出して舐めとる。

「羽黒さんに神風。いいかげん私にも提督の精液を飲ませていただけます？ いくら嫁艦でも独占はさすがに頭に來ます。」

顔についた精液を舐めると加賀はうっとりとした。

「ああ、このかくわしさとコクの深い味わい、たまらないです」

提督に竿に残った小便を飲ませながら羽黒が振り向いた。

「ええ、だからこんなにも美味しい精液、そうやすやすとお裾分け出来ないわよね、かみかぜちゃん」

提督の胸の赤いつぼみをいじりながら神風が返す。

「ですわね、ねえ様。提督は希に見る適合者だけど、嫁と義妹は大事にして欲しいですわ。」

ああ、提督のケツマ×コ、いいわっ

「かみかぜちゃん、もうケツマ×コじゃないでしょ。肉体改造で提督の肛門は立派な牝マ×コに仕上がったんだから」

「そうでしたわ。牝アナルマ×コでした」

羽黒の言葉を聞きながら、かつて少年だった提督は腰まで伸びた自分の黒髪で鈴口を

いじる。肉体を改造されてからはもう排泄もしていないし、羽黒の小便やほかの排泄物しか口にしていないが空腹は感じない。今の自分は快楽の追求と精液の排泄しかなく幸せだと思う。不適合だった前の提督が不幸だっただけなのだ。

その間も腰を小刻みに動かして神風がS字結腸を攻めてくる。腸粘膜から逆摂取する神風の精液を受け止めた自分が精液を排泄する、それが提督の役目だ。御国のためにお役に立てと言っていた、何故か母上と顔の似ている義姉上の言葉を自分は果たせている。それだけで満足だった。

ボーリングの球ほどの大きさに肥大化した陰囊を持つ自分は、羽黒や神風の助けなくして自由に移動することは出来ないが、艦娘を戦場に送るのだから、せめて自分はこれくらいの不自由は甘受すべきだ。

羽黒の小便を嚥下すると涎と小便塗れの口元を舌で舐めながら声を掛けた。

「羽黒、神風。そう意地悪したら可哀想よ。加賀さん、他の空母の娘たちを呼んできて貰えますか？ 今日のMVPの娘にはバケツいっぱい精液をプレゼントしますよ」

破顔する加賀の顔を見た瞬間、神風の放つ精液がS字結腸に注がれた。

精液を艦娘に与える、それが御国のために役立つ提督の仕事なのだ。

「義姉さん、自分は御国の為に頑張っています」

提督は誰に言うともなくひとり呟いた。

——でも、私は松風さんにもいつか素敵な方が現れると思っっているから。その言葉が、浴びるほど酒を呑んでも、僕の脳裏から離れなかった。

「お姐さんお酒おかわり、冷二合！」

僕の前に無言で、まるで透き通るように白い、冷たく無表情な徳利が置かれる。卓に置かれた猪口に零れんばかりの勢いでそれを注ぐと、一気にあおった。味など到底分かったものではない——それでも、今の僕は吞まずにいられなかった。

——まあ、私なんて、松風さんには似合わない女だから。

精一杯の勇気を奮って彼女と出かけた先で、言葉をやり取りしている内に彼女から出てきた言葉。

結局、彼女に対する僕の想いなどただのひとり相撲だった。

彼女は僕など眼中にないのだ。その時、はっきりと分かったその事實は、まるで崖から突き飛ばされて真っ暗な水面へと落ちていくような、あまりにも強烈な衝撃を与えた。

その言葉を聞いたその後も僕は、表面上は彼女と何事もなかったように楽しくお話をしていた。

だが、その裏では突然目の前が真っ暗になったような、二度と立ち上がれないのではないのか、そう思えるくらいに自分に対する嫌悪感と絶望が、僕をじわじわと蝕みはじめていた。

思春期に、同性をもしかしたら好きなのかもしれない、と思ってしまったことはないだろうか。おっと、それを否定するわけではないので安心してほしい、なにしろ僕もその一人だ。

元々僕は、趣味程度の球技以外には読書と観劇が趣味という、あまり社交的とは言えない——路傍の石、とまでは言わなくても、その辺に生えている雑草程度には存在感のない——人間だった。

そんな僕が、艦娘になり、しかも「松風」という、傍から見るとあんな居るだけで格好良くて、おまけに頼もしい男装の麗人じみた艦娘になってしまおうとは思わなかった。

この僕が、他の「松風」のようになり、そして「松風」として振る舞うためには、自分で言うのは何だけれども、並々ならぬ苦勞（努力ではない）が必要だった。

人を「キミ」と呼んで背中を預けさせてみたり、「姉貴」をからかってみたり——口だけではいけないのだ、本当にそうさせるためには行動や思考と行った裏付けが必要となる。

そして、知らず知らずのうちに僕は本当に「そう」なってしまった。

求められるがまま「松風」を演じるために、場に飲み込まれてしまわないために。

気付いた時には、自分自身でさえ偽らなければお天道様の下を歩くことさえままならなくなっていたのだ。

どういうことかって？ そんなものは、言葉では説明できない。キミにはないかな？ そういううまくできない心の疼き、心の痛み。いつの間にか僕は演じている「松風」、それ自身に飲み込まれてしまっていた。

このままではいけない。そう思っていた僕の目の前に、突然現れたあの娘。

僕がいつの間にか心苦しくなるほど好きになってしまったあの娘。

彼女は、いや僕が好き——だと思っていた彼女は、さっきまで僕が本当の「僕」に戻るための、唯一の道しるべだったのに。

なのに。

どうして。

どうしてなんだろう。

僕じゃダメなんだろうか。

「死んじやおうかなあ……」

居酒屋を追い出され、夜道を酔っぱらったままふらふらと歩く僕の口から、そんな最終手段がふっと口を突いて出た。そんな陳腐な思考に、僕は心の中で苦笑する。

曾根崎心中だとか太宰だとか、そういう有名な恋の悩みによる死と、こんな艦娘としての補正が為されているとはいえ、小娘に毛が生えた程度の人間がすぐ思いつくそれが結局一緒だなんて。結局、個々人の *ultima ratio* が生み出すものなど、この程度のものなのだ。

——「その程度のもの」、なんだよな……

フラれたから死ぬなんて。そんな馬鹿げたものを。大体、それで一人寂しく首でも吊る位だったら、腹いせに誰かを半殺しにする程度のことではしてからでないと到底釣り合わない。

そんな馬鹿馬鹿しく、あさましいことを考える僕をあざ笑うかのように、街路灯に照らされた道端の草むらで僕と似た名前の虫がピリリッ、ピリリッという声を上げて鳴いていた。

「……おい、松風……松の字……」

僕の頭の上から誰かが呼びかけていた。

「松の字ー、何してんだ、風邪ひくぞー」

気が付くと、僕は鎮守府の見慣れた建物、その脇で蹲って座り込んでいた。その僕を、月明かりを背にした僕の司令官が覗き込んでいる。

「一体どうしたんだよそんな所にうずくまって、ってうわ酒臭っ」

「なあんだ、司令官じゃないか……ひえっく」

「おい、大丈夫かよ、寮の部屋まで送るぞ」

「あっは、大丈夫だよお、一人で自分の部屋まで戻れるさ」

「だめだって、いいから付いてこい」

そう言う司令官は、あつと言う間に僕を背中に負ぶってしまった。

「放せえ、はなしてよお」

酔った勢いでじたばたと暴れるが、司令官の腕はがっしりと僕の足を抱え込んで放そうとしない。

「このおっ」

「いてえっ！」

僕は目の前にあった耳たぶ、その柔らかそうな肉に噛じりついて勢いよく歯を立てた。司令官は齧られた耳をかばおうとして身をかがめた。僕はその隙を突いて司令官の背から、転がるように逃げ降りようとして——できなかった。

もう片方の腕が、未だに僕の太腿をがっちりとホルドしていた。いや、理由はそれだけではなかった。

こちらを振り返った、その表情。

すぐく痛かったはずなのに、無理して何とか微笑を欠片でも保とうとする、とても痛ましい努力の痕跡。

泣き出しそうな、怒っているような、あるいは懇願するような顔。

その顔を見た瞬間、僕の内臓の中で何かに火がついたような、そんな熱い感覚がふっと湧いて出てきた。それっきり僕は固まって、そこから動けなくなってしまった。

「わかった、わかったから、大人しくしてくれ」

「……うん」

司令官は気づいていないかもしれないが、たまに僕は司令官の前で素の自分を見せている。あのキザっぽい台詞を吐いたり、気取ってみたりするそのすぐ後でふっと大人しくなる自分。何が好きという訳でもないのに、ただ何かを求めて佇み物思いにふける自分。

「へえ、松風もそんなことを思うんだな」

「違うよ、これが本当の僕なんだよ……」

『そいつは意外だった。——でも俺は好きだぞ、そういう松風の本当の素顔、っていうか、そういうもの』

ふと前に言われたそんな台詞を思い出した。

まだどこかに僕とよく似た少年っぽさを残した司令官。

今、何かたぎるものをぶつけてしまっても、彼は僕を許してくれるかもしれない。そんな思いが頭の中をよぎった。

——その時は、まさかそれが取り返しのつかない過ちを犯すことへと繋がるとは、思いもしなかった。

「とりあえずちょっとここで休んでろよ。今夜ばかりはさすがに面倒みてやらんとまずそうだし」

連れてこられた部屋、司令部の仮眠室、というのがあることは知っていたが実際に入るのは初めてだ。どうやらあまり使われていないらしく、ずっと締め切っていた部屋のよう（というか本当にそうなのだろう）若干蒸し暑く、空気が淀んでいる。

「よし、下ろすぞー」

「らいじょぶ、らいじょぶ、自分で降りられるから……ってあああつー」

「おおうっ、ちょ、まつか」

まるで赤ん坊のようにベッドに下ろされそうになって、そんなみっともないマネをしたくなかった僕は、自分からさっさと降りようとして——そこでバランスを崩した。

慌てて僕を支えようとする司令官。

なおも抵抗する僕。

結果、僕は頭からベッドに落ちそうになって、必死に体勢を立て直そうとする。

——どすん。

「いてて……」

「ちょ、しれいか……ッ」

気付くと、僕は馬乗りになるような恰好で司令官をベッドに押し付けていた。やめる。

なんで、そんな顔をするんだ。

司令官が少年の様な若々しく活気あふれる顔——そう見える顔に何かを恐れるような何かに必死で耐えようとするようなそんな表情を浮かべていた。

慌てて僕は司令官の上から飛びのいた。

「あ、あの、その、ごめん！」

「ああ、いや、大丈夫か？」

「ぼ、ぼ、僕は平気さ！うん、大丈夫、ははは！」

「ああ、それならよかった。松風に何かあったら話にならないし」

そう言うと、司令官は部屋の隅に置いてあった小型の冷蔵庫を開けると、ミネラルウォーターのボトルを手に戻ってきて、それを僕に渡した。僕は先ほどのことなど、何もなかったかのように平静に務めてそれを受け取る。

よく冷えた水を喉に流し込んでひと心地つくくと、自分の理性というモノがようやく僕の中へ戻ってきた。

「しかし、松風がそんなに飲んで帰ってくるなんて……何か嫌なことでもあったのか？」

ああ、聞かれると思った。本当はほとんどの人には、というか誰にも話したくない。

だが彼は僕の司令官だから、部下のメンタルをチェックする必要がある。こんな状況ではやはり、話さざるをえないのだろう。

それに僕は、たまになら彼に素の自分を見せてもいい、とさえ思っているのだ。もしかしたら笑わずに僕の話聞いて、そして——本当に虫のいい話だが——もしかしたら何らかの解決方法さえ、教示してくれるかもしれない。

「なあ、その、……誰にも言わないでくれるかい？」

「当然だよ」

「じゃあさ、うまく説明できないかもしれないけど、なんとか順を追って説明してみるよ……」

「——これが、さっきまでの事の顛末、ってわけさ」

「……その、なんだ、いわゆる……百合ってやつか？」

「通り話した僕に、司令官が聞いてきた。」

「少し違うなあ、僕は普通に異性愛者だと思うよ。……でも、どうしても、どう考えても、今の僕はその子が好きなんだ。いや、だったというべきなのかな……」

「そう言う僕はおかしいのかなあ……」

「……いや、僕はおかしいのかなあ……」

「……いや、そういうのは普通にあると思う、なんか言われてみたら、自分にもそういう時期というか、出来事があった気がするなあ」

「なに、司令官が男を？ぶふっ、あんまり想像がつかないよ」

「なんだとこの、お前なんか中性的でどっからでもモテそうな風貌しやがって」

「——またそれか。」

「普通にモテそうなのに、なんで相手いないの？」というお定まりの台詞。

そんな褒めているようで、実の所はこれっぽっちも褒める気のない、そんな突き放すような評価は、反吐が出る程聞き飽きている。

「俺が言うのもなんだけど、松風はいいやつだよ、何で彼氏だとか彼女だとかができないの不思議だな」

「——ふーん、本当にそう言っちゃうんだ。」

ああ、キミはもうちょっとマシなことを言ってくれろと思っただけだな。

「あ……、その子以外にそういう浮ついた話ないのか？なんなら過去の話でもいいぞ」

「残念ながらないねえ」

「意外だなあ」

「たまにはさ、ぼくも考えるんだよ、そういうコト。……でも、なんかさ……そういうことを、いざ口にしたたり実行したりしたら、あっさり断られてしまう……違うな、その、怖いんだ。相手に『松風』じゃない、素の自分自身を見せて、それを断られてしまうことが」

僕は、彼自身の発言にとても失望しながら、自分の抱えた問題をどうにかしたくて、なおも必死で言葉を紡ぎ出している。自分を理解しているようで、本当はしていない者にさえ縋ろうとする、万策尽きかけているからこそその行動。

「決意を実行に移したら最後、やんわりと本当の僕を全て否定されるんじゃないか……なんというか、そんな想像がずーっと頭の中を何度もよぎるんだ」

僕はため息を付いた。

「……いや、ほんと、ごめん」

「……いや、ほんと、ごめん」

「……いや、ほんと、ごめん」

「つらい、というより僕そのものが嫌になるよ」

「どこか疲れて自信を失っているのかな……」

「うーん……確かに疲れてると、割とネガティブな方向に気分が向きがちだけどな……」

まあ、ここの話のどっかに吐き出すか、それとも気をまぎらわせられないと、つらい……ああ、俺ならいつでも聞くぞ」

「……ああ、俺ならいつでも聞くぞ」

「……ああ、俺ならいつでも聞くぞ」

「……ああ、俺ならいつでも聞くぞ」

今の自分にとってのデリカシー、というか思いやりのなさに満ちた司令官の言葉は、酔いの醒めた身体を急速に苛立たせ始めている。一方で未だに酒が抜けきらない身体は、暴力的ともいえるべきか、奇妙な欲求を求めて身体の中をうねうねと蠢き始めていた。

「——フラれたからひとり死ねくらいだったら、せめて腹いせに誰かを半殺しにする程度のことはしてやる——」

先ほど夜道をふらつきながら考えた、そんな暴力的な欲求が僕の中で鎌首をもたげる。

もう、こうなったら、そうなくても、そうしても構わない。

「ねえ、司令官は今回、何がいけなかったと思う……？やっぱり話しかけたタイミングがいけなかったのかなあ……それともやっぱり、僕は人間として魅力がないのかなあ……」

「そんなことないだろ、考えすぎだよ」

「どうしようか。」

「こんな因果な仕事をやっているんだ、そら色恋にうつつを抜かしたくもなるさ」  
どうしてやろうか、こいつを黙らせるために。

いらだつ中で、彼をどう罵るか考える。その思考が脳から腹部にかけての神経を高ぶらせはじめている。

「まあでも松風は、なんていうか、こう、いつもはちょっとキザだしな、あれじゃないか、もっと女の子っぽい側面も見た方がモテたりするんじゃないの？」

「黙れッ」  
それが臨界点だった。

気付けば僕はベッドから立ち上がり、司令官を怒鳴りつけていた。

「……え、あ、いや、ごめん。なんか、……気に障ったか？」

僕の逆鱗に触れたくせに、馬鹿馬鹿しいほど間拔けな言葉。間の抜けた表情。

そうか、キミは全く気付いていなかったんだな。

まるで僕の味方であるかのようなふりをして。

「いや、その、なんというか、申し訳ないとは——」

それ以上は聞けなかった。いや、聞きたくなかった。

気づけば僕は、司令官の肩を掴んでベッドに押し付けていた。

「……バカにしてんのか、僕を」

「や、ち、がう、やめろ、まつか」

「憐れんでるんだらう、僕を！ キミはこの僕が傷つかないとも思ってるのか？ そんなに僕がみじめか！」

「それは、ち、違うんだ、お願いだ、やめ、」

「うるさい！」

僕の中で、何か弾け飛んでしまった。

かっ、となって振った僕の拳が、司令官の鼻っ柱を直撃した。

赤と黒が絶妙なバランスで混ざった綺麗な血が、つーっ……と鼻腔から流れ出した。

「ああそうだろうさ、キミには分からないだろうよ！ 笑いたきゃ晒うがいいさ！ その分たっぷりお返ししてもらおうけどな！」

僕は司令官の首根っこを掴んで、思い切りベッドに押し付けた。もちろん、彼も抵抗

しようと思死で僕の腕を掴み返してくる。だが、僕はついさっき、知ってしまった。

こうして僕が彼に対して暴力を振るうと、とても気持ちがいいことを。

僕の中でなにか弾け飛び、臍の下あたりがじんわりと熱を帯びて、たちまち自分を女にさせてしまうことを。

おかしな心が鎌首をもたげ、体中を駆け廻り始めるということ。

「げほっ！ ま、まつ、かせ……きょうの、おまえ、おかし……」

僕は司令官をベッドに押さえつけたまま、衣服をびりびりと破いた。制服のボタンが宙

を飛び、白いシャツが音を立てて千切れる。

「わるかった、俺がわるかった……、だから……」

黙れ。それ以上口を開くな。

僕は彼の頤を掴み、思い切り力を入れた。

「あがっ……うあっ……」

司令官の顔が歪んだ。少女の姿をしているとはいえ、艦娘の馬鹿力。人間の頸を割るこ

とぐらいはとでも簡単だ。それを理解しているからこそ、彼の目は恐怖の色に彩られ、

口は恐れでひくひくと痙攣している。

脳裏に、いつかの戦闘で雷撃処分された敵の駆逐艦、まるで生まれたての子猫のように

弱弱しく、命乞いをする顔が蘇った。それを見た僕のお腹の奥がじんわりと、熱を帯び

ていく。

「なんだ、キミもそんな顔ができるんだな」

そう吐き捨てるように言うと、僕は彼の乳首に歯を立てた。引きちぎるように、歯で勢

いよく引っ張りながら舌先で弄んでやる。

「んっ……うっ……やめ……」

いつもなら、百戦錬磨の将校という言葉に相応しい自身に満ち溢れた司令官。今の彼に

その面影はなく、ただ弱々しく、か細い声で僕に命乞いをしている。

「……やめ……やめて……」

そう弱弱しく訴える声が、僕をますます興奮させる。

もっと司令官の弱弱しい顔が見たい。彼をいたぶってやりたい。

彼の純粹を、僕のこの手で汚してやりたい。傷物にしてやりたい。

僕は顎を引っ張り、無理矢理彼を引き起こした。

「がはっ、はあっ……はあっ……」

自身の身体を、優男の側面を持つ少女でしかない部下に、怒りをぶつけられ罵られること。それが突如として止められたことに戸惑いと安堵を感じたのだろうか、彼の表情が少し和らいだ苦痛とまだ残る恐怖に彩られたそれへと変わった。そのことが妙に腹立たしく、僕は袴の紐を引きちぎるように外すとそれを一気にずり下ろした。

「えっ」

それを見た司令官の顔が混乱と恐怖に彩られた。その強烈で、歪な美しさがますますそれを大きくさせる。

僕は両手で彼の頭を掴むと、股間を彼の顔に押し付けた。

「んぐっ、んんっ、んぶっ！」

司令官の理解が追い付いていないであろう頭が、押し付けられた物の違和感と恐怖に苦悶の表情を浮かべさせる。

「んぐっ、んぶっ、んんんっ、んっ！」

「ほら、その調子でしゃぶってよ」

そう言うと、僕は彼の頭を激しく前後に揺さぶる。表情はほとんど見えなくなったが、今度は彼の舌と唇が抵抗しながらも僕の入口を擦り上げていく感覚が伝わってくる。その上にある突起——興奮のあまり露出し、必死に自己主張している——に僕は彼の顔を擦りつける。

鼻、唇、わずかに剃り残した髭。それらが僕の大事な所を擦り上げていく。今このときだけのオナベツト、いや即席仕立ての生パイヴとでもいうべきか。それはとても暖かくて、そして悲鳴をあげていて、狂いそうなほど気持ちよかった。

「んんっ、がはっ、んぐっ、んっ」

もっと、もっとだ。いつもは見た目に見合わない力強ささえ感じさせる彼が、これほどまでに苦痛に歪んでいる。この、狂おしいほど惹かれる恐怖の表情をもっと見たい。僕と彼の人生を狂わせてでも。

いや、僕はさっきあんな言葉を聞かされて、あんな屈辱を受けて、ついに我慢の限界を超えたのだ。部下の不手際は上司の不始末。だとするなら、せめてそれだけでも責任を

取ってもらわなければいけない。

——身勝手だって？そう、僕はとても身勝手な人間だ。その何が悪い。

僕は司令官の後頭部を勢いよく押し付けると左右に振って、そして今度は突き飛ばした。「……がはっ……はあっ、はあっ、はあっ……」

司令官の身体が再びベッドへと押し付けられる。僕は彼に馬乗りになると、彼のストラップを破るようにこじ開け——

「うわっ！」

目の前に飛び込んできたものに、思わず僕はおののいた。

なんというか、知識としては知っていたけど、まさか、性的欲求を感じとった男のあれが、こんなにも暴力的な姿形を見せるだなんて。

「な、なんだ！キミの、ここだって、ほら、もうこんな……ことに、なってるじゃないか！」僕はいきりたったその根本をむんず、と掴んだ。

ごつごつして、とても熱い。こんなもので貫かれたら、僕は一体どうなってしまおうんだろう。

その思いを振り払うように、もう片方の指先でその剥けた皮をつまみあげ——思い切りつねった。

「~~~~~！！！」

司令官が苦悶の表情を見せて、必死で悲鳴を堪えて悶絶する。だめだ。

その苦しそうな表情を見るたびに、僕のお腹の中で内臓がぐっぐっ煮えたりするような感触がする。

もっと見たい。もっと自分で味わいたい。

——もう、こうなったらどうなってもいい。構うものか。

僕はほんのわずかに湿り気を感じるショーツを、ぐっとずらした。僅かに生えた黒い毛が刈り揃えられた、二枚貝のような形をした僕の大事な部分が姿を現す。

「おい、まさか……」

どう考えても、これから僕がしようとする位は容易に検討が付くだろう。刑法で言う強姦罪、それが犯罪として成立する一つの行為。

「お、おい！やめろ！そ、それは、それだけは……！」

僕は司令官の肩を掴み、そして一発、右手を再び彼の頬の手前で殴るふりをした。

ただ、それだけで彼は抵抗を止めた。そんな態度が僕の被虐心をますます煽り立てる。

これだ。これで彼の心に負い目、部下の女に暴力を振るわれ、そして辱めを受けたという完璧な傷、一生残るであろう傷を付けてやれる。

「……いいから、黙って、僕の言う通りに……！」

僕は彼の最大限に勃起したペニスを、十分に濡れていない自分のヴァギナへと無理矢理入り込ませようとして――

「……あれ……あれ……？」

挿入しようとしても、亀頭が滑って上手く入らない。僕の中に焦りが生じる。

そのせいでまた、つるつ、と滑った赤黒い先端が明後日の方向を向く。

そんな僕の様子に気付いた司令官の表情が、僅かに和らいだ。挿入できないことに対する安堵か、それとも嘲笑か。そこで頭に血が上った僕は再び彼を殴りつけた。

「ぐっ」

僕は彼の逸物、その根本を思いっきり握ると、自分の割れ目を指で開く。そして勢いよく腰を落として……

ぶちいっ、という音が本当に聞こえたような気がした。

激痛という言葉では言い表せないほどの、失神しそうな痛覚が僕の中を、まるで骨が砕かれていくような痛覚を感じさせながら、頭の方へと光の速さで突き抜ける。

「いだっ！いたいっ！……畜生ッ」

「っ……くっ……」

膨れ上がった司令官の怒張は、僕の割れ目から根本近くまで飲み込まれてやっとならなくなった。

「あっ！ううっ！」

「やめろ……もう、やめてくれ……」

司令官は一気に体重を掛けられた苦しさ、部下に逆レイプされているということへの屈辱に顔を歪ませている。

とても嗜虐的で、もっと美しい顔だった。

これまでになく苦痛に歪んだ――最高に美しい顔。

「どう、だい？僕にレイプ……くうっ、……されてっ、僕を、傷物に、した気分は……っ？」

「や、めろ、よ……」

弱弱しく訴える顔。その顔は一生忘れることはできないだろう。

僕を狂わせたあの子の微笑みよりも、強烈で、その歪な、虐げられた人間が見せる顔。

花卉が落ち、地面に叩き付けられ、踏みつけられ、腐り果てていく。その直前に見せられる、ほんの瞬間の奇妙な美しさを思わせる表情だった。

「やめるもんか、ほらっ！」

その美しさに、自分の内なる凶暴性が、さらに牙をむき出しにさせる。僕は彼に全体重をかけると、勢いよくさらに自分の奥深く怒張を入り込ませる。勢いよく引き抜き、そしてまた叩き付ける。

肉と肉がぶつかりあう音、それが狭い部屋の中に木霊する。

「ひぐっ、んあっ、やめろっ、こんな、こんな……」

司令官は、僕の股から流れる血に腰のあたりを赤く染め続けられながら、完全に虐げられる存在になっていた。眼からは鋭さが失われ、目尻には涙さえ浮かんでいる。

歪み、散りかけている、美しい顔。

だが何か、まだ何かが足らない。

「……もうやめろ、もう十分だろ！」

――ならば。

僕は彼の胸板にぐぐつと体重をかけた。

「……まっ、か……くうっ」

その喉首に手を伸ばした。そして指を少しずつ曲げていく。

「ちょっと黙ってるよ」

何かを言おうとした彼を無理矢理抑え込むように、今度は手首に全体重を加えていく。彼の呼吸が苦しくなって、喉の筋肉が必至に酸素を求めて収縮しているのが分かった。

「かはっ……あ……あ……」

「あ……はあっ、んくうっ……」

もう、止まらない。

痛くて、痛くてたまらないはずなのに、雌としての僕は自分の意志とは関係なく自分の腰を押さえつけた彼のそれに打ち付けている。

ぼん、ぼん、ぼん、と肉同士が叩き付けられる音。

何とか呼吸しようとする喉の動き。

そして必死にこの行為を止めさせようとしている彼の苦悶に満ちた表情。

それらがいっしょくたになって僕をさらに興奮させる。

「……………」

やめてくれ。

そう言いたげに、司令官は必死に目で僕に懇願する。命乞いをする。必死に首を横に振ろうと努力する。

けれど、僕の体重を乗せた手首は万力のように彼の首を絞めていく。腰を振るスピードが速くなっていく。それに合わせるように、手首にかかる力は自分の痛覚や意思と関係なくますます強くなっていく。

「君はこんなことしたくなかった、って思ってるかもしれないなあ！でも残念、レイブっていうのはそういうものなんだよ！」

彼は何も答えない。ぼん、ぼん、ぼんという音とベッドが軋む音だけが、部屋の中に響く。

「誰が悪いか？当然君だよ！僕の心の傷に塩を塗るような真似をしてくれたんだ、だからこのまま君を完全な悪者にしてあげるよ！僕の身も心も傷物にした極悪非道の司令官としてねッ」

自分の欲望とは関係なく妙に醒めた内なる意思が、口から罵詈雑言を吐き出させる。そんな自分を見つめる内なるもう一つの自分が、実に救えない人間だな、とひどく冷静に僕を見ている。

そうしている間にも、彼の股間がびくびくと自分の腹の中で痙攣を始めていた。初めての僕にだって分かる、彼の逸物は限界を迎えようとしているのだ。

——いいさ、これで終わりだ。どうなっても、知ったことか。

「いきなよ、ほら、何とか言いなよ、ほら、いけっ！」

途端に彼のモノの中で、精液が尿道を駆け上がっていくのがはっきりと感じられた。

次の瞬間、僕の中で爆発した股間は、生物の生殖本能通りに精液を子宮の入り口から内臓の奥へと注ぎこんでいく。

「あぐうっ、ひはあっ……ううっ、すっ、すごいっ、どんだん、僕のナカに……あああっ！」

その瞬間、僕の身体の中で高圧電流でも走ったかのような衝撃が光の速さで駆け巡った。目の前が真っ白になり、頭の中で火花が散る。薄れゆく意識の中で、僕の膀胱が緊張を失い、股間から黄色い液体を漏らし始めた。

——何秒か、それとも何十秒経っただろうか。

ぼんやりと回復してきた視界の端では、失禁によって漏れ出た黄色い液体と、脳内麻薬がメルトダウンを起こしたことで漏れ出た透明な液体、そして割れ目から漏れ出した白い液体の三種が混ざりあっていた。太ももから滴ったそれはベッドに大きな染みを作り始めている。

「はあっ、はあっ、ああっ、キミ……司令官？……」

——ぐったりとうなだれたまま、動かなくなった司令官。

「キミ……ちよっど！」

僕は彼の口元に手をやった。——息をしていない。

僕の中を支配していた酔いと興奮が、急速に身体の外へと足音高く逃げ出していく。

——僕は、死なせてしまった。あんなに信頼していた司令官を。

——違う。

——僕は殺した、あんなに信頼してくれていたこの人を。

目の前が真っ暗になり、血の気がざざあっと音を立てて引いていくのが感じられた。

「……がはっ！はあっ、はあっ、はあっ……」

司令官が苦しげな息と共に飛び起きた。

「司令官！よかった……ああっ、うあっ……」

何回目か分からない心臓マッサージと、人工呼吸を繰り返してようやく彼は僕の前に還ってきた。

「すまない……！まさか、こんなことをしてしまっなんて、僕は……僕は……」



自責の念に駆られる、なんてものでは表せない。

僕は最低の人間だ。

泥酔した上での売り言葉に買い言葉だったとはいえ、上司を強姦しておまけに殺そうとした。いや、もう一步間違えていたら、本当に死んでいたのだ。

こうして、苦しい呼吸をしながらも、彼が目の前に起き上がったことは、地獄に落ちた極悪人の前に垂らされた蜘蛛の糸も同じ、いやそれ以上の奇跡としか言いようがない。

「もういい……警務隊に連絡してくれ……いや、してください。……いや、すぐ解体してほしい……それで君の気が済むなら、今すぐ、僕をこの場で撃ち殺してほしい……」  
僕の口からは、うわ言のようにそんな言葉が出ていた。

「いいんだ、……俺だって、松風にひどいこと、言ったし……」

「そんな、そんな、だって、僕は……僕は……」

それ以上は言葉にならない。

薄暗い部屋の中で鈍い光を放つシート、まるで霊安室のそれみたい見えるものをぎりぎり握りしめる。眼の端にじわつ、と湧き出した液体が、青白いシートにひとつ、ふたつ、と黒い染みを作り出す。

大粒の涙をこぼしてぼろぼろ泣く僕を、司令官がぎゅっと抱きしめてくれた。僕のとほ違う、どこか力強さを感じるほんものの男の腕と、まるで幼き日の母の胸の中を思い起こすかのような人のぬくもり。

——このまま泣き疲れて、司令官の胸の中で眠りについて、そして目が覚めたら営倉にいればいい。僕はそう思いながら、彼の温かい腕に包まれて、声にならない嗚咽をもらすだけだった。

(終)

小さな部屋の一角で、私は、提督と呼ばれる男の背中を眺めていた。

「……さて、こんなもんかな」

男は、首に引掛けた手ぬぐいで流れ落ちる汗を拭っていた。空調が効いた部屋ではあるが、それでも窓から差し込んでくる夏の日光は、痛いくらいに鋭く熱い。部屋の中で掃除や荷造りで動き回っていると、汗が吹き出てくる。

「荒潮、手伝わってもらって悪いな。本当なら、俺一人で片付けるべきだったんだが」

男は汗を拭き終わると、私に詫びながら、首を回して部屋の中を見回す。それに習って、私も部屋を見回した。視界に入るのは、ほとんど全ての家具が片付けられ、床も掃き清められて、がらんどろになった部屋だった。

まだ部屋に残っているのは、せいぜいが年季の入った棚と、そこに乗った小さい仏壇くらいものだ。仏壇には、弱々しく笑っている女性の遺影が飾られていた。その女性も、提督がかつて妻としていた人だった。

ここは、元は司令室とされ、今は残務整理事務室と呼ばれている部屋と、直結している小部屋だった。男が一人、何とか寝起きができる程度の小さな部屋で、本来は、資料を詰め込む物置などの用途を考えて作られたらしい。最初、提督もありがたく資料を保管するために用いていたが、戦いは長引き、それに比例して書類も雪だるま式に増えていって、一年と経たずに収まりきらなくなった。結局、山と積まれた書類は他の部屋へと移し、空き部屋となったここは、いつの間にか、彼が休息や仮眠をとる部屋に変わった。寝具や本棚、書き物机などが持ち込まれ、狭い部屋がさらに狭くなっていった。

そんな光景も、無くなるうとしていた。

「別に、構わないわ。秘書艦として、雑務を手伝うのは当然のことよ。それにしても……毎年、年末の大掃除のたびに大騒ぎしていた散らかり放題の部屋でも、こうして綺麗にしちゃうと、少し寂しくなるわね」

「……そうだな」

この鎮守府ができて、十年。当時は小なりとは言え、鎮守府を一つ預かるには、まだまだ若輩者と見られた提督も、今や頭に白いものが混じり始めた。それくらい長い間、必死になって戦ってきたお陰なのか、それとも他の理由なのかは分からないが、近年は深海棲艦の襲撃も随分と減ってきて、戦時体制も解かれつつあった。そうなれば、金穀

の使い道も戦事から平時のものへと移り変わっていく。小さな鎮守府がいくつ閉鎖され、統合されるのも自然の流れだ。

半年ほど前、大本営からの通達で、この鎮守府の廃止が正式に決まった。もともと、学校を接収して作られた鎮守府は、軍事的観点から見れば立地も設備も不便な点が多く、当然とも言える合理的な決定だ。あまりに当然過ぎて、私たちも、決定に全く異を唱えられなかった。

この鎮守府は、地元自治体に引き渡した後、元の学校へと生まれ変わる予定だ。今や鎮守府の中は、ほとんどが片付けられている。そして、全くの私室扱いだったこの部屋も、片付けなければならなくなったというわけだ。

「提督、そろそろ休憩したらどうかしら？」

我ながら、どこか甘ったるく、こそばゆいと思う声をかけると、提督は振り返った。指先まで汗にまみれたその手に、冷たい麦茶をいれた湯呑みを押し付ける。その湯呑みを持つ左手の薬指には、鈍い光を放つ指輪がはめられていた。それを私はじっと見つめるが、提督はこちらの視線になど気づかず、差し出された湯呑みの中身を一息に空けた。

「……ふう。ありがとう。美味かったよ」

「どういたしまして」  
こんな、他愛もないやり取りも、あと少しできなくなる。ここに勤めていた職員や艦娘たちも、既に転属先の任地へ移り、鎮守府はかつての賑わいが嘘のように静まり返っていた。今、ここにいる艦娘は、秘書艦だった私くらいだ。

「それにしても……もう一週間もすれば、ここを出払わないといけないなんて、嘘みたい」  
私の言葉に、提督も頷いた。

十年。

言葉にすれば一息だけど、その間に、嫌なことも楽しいことも山ほどあった。それが、あと僅かで全てが単なる美しい思い出となり、自分たちは全く新しい場所で生活を始める事となる。提督は本土の艦政本部、私は北方海域の最前線鎮守府行きだ。

「……」

嫌だな。それが、率直な感想だ。ここを引き払うのは、つまり戦況が改善している結果なのだから、喜ばしいことのはずだ。しかし、全く嬉しくない。

提督のそばを離れるのが嫌だった。

いや、単純に離れることが嫌なのではない。

私は、柵の遺影を見つめる。当然、提督はこの遺影を持ち帰る。私物なのだから、当然だ。そして、私と離れた後も、新たな住居で、この遺影を毎朝拝んで出勤するのだから。そして、この世にいるのに、私は提督に少しづつ忘れられていくのだ。

「……そんなの、考えたくないわね」

うん、考えたくない。私と離れても、この人は多分、一年もしないうちに、私がいな生活に慣れる。それで、この遺影と、薬指の本物の結婚指輪を眺めながら、昔の思い出に浸って過ごすんだ。私のことを思い出すこともあるだろうけど、それは多分、既に死んでしまった妻より遥かに少ないに違いない。

そして、忘れられていく。年賀状や暑中見舞いをやり取りするだけの間柄となっていく。そう思うと、とても悲しくて、悔しくて、何とかして引き止めたいと思った。だから、体が無意識のうちに動いていた。

いや……本当に無意識だったんだろうか。随分と前から、用意周到に準備をしてこなかったか。数日前、荷造りのための縄で人の体を縛った場合、きちんと抜け出せないように縛ることができるのか、自分の体で試したのを思い出す。それは、何のためだったのだろう。

それも、今はどうでも良い。今は、この人を逃さないことが重要だった。

せめて、付いてきてくれと一言でも言ってくれたなら、ここまで私も思いつめなかったかもしれない。

「えっ」

私は提督に抱きつき、どこか間の抜けた男の声を聞きながら、そのまま寝台に押し倒す。その拍子に、提督は手に持っていた遺影を取り落とす。私は、それに構わず、荷を縛るための縄で、彼の腕や足を一息に縛り上げた。艦娘たる者、普通の体格の男を放り投げるくらいの腕力はある。さらに、海に生きる者の嗜みとして、漁師にも負けないくらい縄の結び方も知っている。もやい結びも巻き結びも、自由自在だ。あっさりと、提督は寝台の上で、大の字に縛り上げられた。

「お、おい……荒潮？ お前、何を……？」

提督は、声を上げる。しかし、その声に驚きはあっても、恐れなどは見られない。提督は、これが単なる悪ふざけとでも思っているらしい。それは、私に対する信頼の証だ。だけど、私はこれから、その信頼を根本から壊しつくそうとしている。その事実、奇妙な笑いが漏れてしまった。

「……あ、は……ふふ、ふ……」

己の笑い声、異様に聞こえる。この笑いが、後悔から来たものなのか、それとも喜びから来たものなのか、自分でも分からない。分からないまま、提督を縛っている組の状態を確かめる。揺すったり引っ張ったりした感触から、艦娘ならともかく、ただの人なら絶対に解けないほど固く結わえられている事を確認した。

縛り上げられた提督は、未だに事態が飲み込めていないのか、目を白黒させている。その顔が、凄く苛々する。自分がなぜ、こんな行動を取るのか、心当たりが無いとでも言うのか。

「何をするつもりか……ですか？ 私、貴方の事が好きなの。それくらい、気づいてい込んでしよう。いいえ、気づかなかったなんて、言わせないわ」

好意は伝わっていたはずだ。何度も何度も好きだと口にしたし、思わせぶりの誘惑もしたことがある。この提督は、鈍くはあったが、それでも十年も苦楽を共にしている女の感情が分からないほど愚かではない。

それでも、この人は、私を単なる子供としか見なかった。亡くなった妻に心底惚れていて、私の事など眼中になく、単なるおませなお子様としか思ってた。私がどれだけ本気でぶつかっても、提督が返してくれたのは、ホワイトデーのお菓子やクリスマスのおもちゃなど、子供じみた贈り物だけだ。何とかカッコカリという、ふざけた名前の儀式で使われる指輪すら、寄越してくれなかった。

だけど、いつも側にいられたから耐えられた。それが、鎮守府の統廃合で、自分は離れてしまうのに、ずっと前に死んでしまった女の写真は、これからも一緒なのだという。そんな事、許せるはずがない。

我ながら、理不尽に過ぎて、卑しすぎる怒りだと思ふ。それでも、本音だ。その怒りに任せて、荷造りのために用意していた小刀を使い、提督の服を剥ぎ取っていく。

「お、おい。やめろ！」

刃物まで持ち出されて、提督は、さすがに冗談ではないと気づいたのだろう。驚いてこちらを静止しようとするが、当然、縄はびくともしない。ただ寝台が揺れるだけで、全く抵抗にならなかった。私は、肌を傷つけないよう慎重に、しかし手早く衣服を切り刻んだ。提督は、あつという間に、上半身も下半身も丸裸になった。

暑さでうっすらと汗をかけた胸板、年に似合わず引き締まった腹筋、そして少しだけ垂れ下がっている性器が露わになる。手足を縛られているせいで、大の字になって股間をさらけ出している提督の姿は、何となく滑稽であった。

ごくり。

思わず、生唾を飲み込んでしまったのは、室内の暑さのためではない。大袈裟ではなく、夢にまで見た提督の裸が目の前にある。これに、興奮しない方がどうかしている。

鎮守府内で、時折出回るポルノを興味本位で見たことはあるし、風呂場でわざと提督と遭遇して、裸を盗み見た事もある。一回だけだけど、彼の自慰まで覗き見たことだ。である。それでも、これほど近くで、男性器をさらけ出す男の裸を見たのは初めてだった。深海棲艦とはまた違ったグロテスクな性器だけど、怖いとは思わない。そう、私は子供じゃない。男の裸を見ても、恐怖よりも興奮を覚えるくらいには、大人だった。少なくとも、提督が思うほど子供ではない。目の前の男に、その事を骨の髄まで教え込む必要があった。

できることなら、この人と結ばれる時は、このように強引な手段ではなく、甘い恋人同士として迎えたかった。優しく、服を脱がしてもらいたかった。髪をすいてもらいたかった。だけど、こんな事をしてしまった以上、もうその夢は叶わない。

だから、このまま進むだけだ。捕らえた獲物を逃す駆逐艦など存在しない。どんな手を使ってでも、自分という存在を忘れさせない。もう死んでしまった人より、私の事を記憶に深く刻んであげる。

そう心に決めると、次から次へと、そのための手練手管が浮かんでくる。

「ふふ」

私は、一旦寝台から離れて、さっき彼が取り落とした遺影を手を取った。写真の中では、どこにでもいる、優しそうで素朴な女性が微笑みを浮かべている。提督が、心底か

ら惚れていた女性の写真だ。彼が、優しい眼差しでこの写真を見るたびに、どれだけ破いてやりたいと思ったか分からない。

だけど、ただ破くだけでは飽き足らない。写真など、いくらでも焼き増しが可能だ。だから、こうする。

「さて、と……」

まだ勃起には程遠い男性器の上に、写真を掲げる。そのまま、勃起して精液が飛び出したら、間違いなく写真は精液まみれになる。そんな位置だ。

「お前、何を考えて……！」

「さあ、何でしょうね」

私がしようとしている事に気づいたのか、提督はさらに暴れ、寝台の揺れ方も大きくなる。だけど、やはり縄は全くほどける気配がない。全く意味のない提督の抵抗を尻目に、私は無造作に彼の男性器をつまんだ。

初めて触ったその感触は、思った以上に柔らかくて、少しだけ驚く。そこは、触れた瞬間、刺激に反応したのか、僅かに頭が持ち上がる。

艦娘は兵器だ。兵器として生まれたこの体は、生まれながらに武芸百般が仕込まれている。つまり、人体の構造はそれなりに把握しているということだ。男の生理現象にも、それなりに知識はある。

その知識が、教えてくれる。男性器というのは厄介だ。例え性的に興奮していなくても、緊張や怒り、外的な刺激であっさりと勃起してしまう。

さらに刺激を増すために、私は髪の毛を提督のそこに巻きつけてみる。そして、右手は写真を持っていたので、もう片方の左手で少ししごいてあげた。それだけで、むくむくと膨張が始まった。

「お、おい！ 誰か、誰かいないか！」

服を引き裂かれて裸にされたせいで、助けを呼ぶことに躊躇していたようにけど、それどころでは無いと気づいたらしい。提督は、外に向かって声を張り上げる。叩き上げの軍人らしい、凄まじい声量だ。

でも、無駄だ。ただでさえ職員は少なくなっているし、さらに元が学校であるこの建物は、災害時の避難場所であったので、壁は分厚い。軍事施設である司令室の一角とい

うことで、防音処理も加えられている。ちょっと大声を出したところで、誰にも聞こえない。

そこは提督も承知しているはずだが、それでも叫ばずにはいられたのだから。なぜなら、提督の股間には、私の髪の毛が刷り込むように巻き付いていて、その刺激で、どんだんと血が集まってきている。あっという間に、固く天に向かってそそり立つ。先ほどの柔らかさが嘘のようだった。その鈴口の向き先は、彼の妻の遺影だった。

それにしても、体の一部が僅かな時間で倍以上の大きさに膨らむというのは不思議な光景だ。それが何だか面白くて、私は手の動き手加減抜きで速めた。皮が裂けるのではと思うくらい早く手を動かす。

「ちょ、荒潮、やめ……は、う、やめ、やめろ……はうっ！」

提督の声にはすぐに変化が現れた。根っこから引っこ抜けるのではと不安になるくらい強さだったけど、提督は抗議の声を上げつつも、痛がる様子は無い。むしろ、声には熱が帯び始める。

「気持ちよくなっていることは、すぐに分かった。だから、昔、覗き見た自慰を参考に、さらに強く遠慮なくしごく。一回、上下をこするごとに、そこは面白いように跳ね上がる。」

「……見た目だけなら、自分の半分にも満たないような年の子供に、おちんちんを触られて、うめいている姿を天国の奥さんに見てもらいましょうよ」

「は……くっ、は、ぐ……」

提督は、もう抗議の声を上げることせず、ただ何かを否定するかのようになり、目をきつく瞑り、首を激しく左右に振り続けていた。可能な限り、内股になって射精感をこらえようとしているらしい。だけど、意味のない努力だ。どうやったって、勃起したそこを素早くしごかれれば、射精してしまう。男の体とは、そういうものだ。

「ほら。我慢しないで速く行きなさいな。今さら……照れることなんて無いでしょう。この人の前で、何度も何度も裸になって、この人を抱いていたんでしょから。さ、写真に向かっ、いっぱい……いっぱい、出しちゃいましょうよ」

提督は、それなりに年を取っているとはいえ、まだ干からびるような年ではない。少し刺激してやるだけで、そこはさらに固くなり、先走りの汁が溢れ出てくる。

「やめ……！ 荒潮、やめてくれ……俺、あいつにぶっかけた事なん、て無く……て

……ほんと、もう、無理……出て……！」

そして、やがて限界が来たのか、声から全く余裕が消えた。もう、いつ暴発してもおかしくないらしい。

当然、私はそんな懇願なんて聞く耳を持たない。さらに手の動きを速くする。

先端から流れ出る粘り気のある汁も溢れ出てきて、私の唾と混ざり合って、ぐちゃぐちゃと愉快的音がする。

くびれている所をこすってみたり、皮を引き伸ばしたり、先端の穴を髪の毛でくすぐってみたりしてみる。そこはとにかく敏感になっているようで、提督の体は、いじるたびに、まるで痙攣しているかのように震えた。そして、こすり続けると、その震えもどんどんと大きくなっていく。

「嫌……やめ……！ あら、荒潮、せめて写真……どけ……どけて……あ、うあ！」

震え続けていた提督の身体が、一際大きく震えた。同時に、私が握っていた男性器は、先端から白い粘液を大量に吐き出した。その粘液は、狙っていたかのように写真に当たって、こびりつく。

「うわ……」

思わず、私は声を上げてしまった。それくらい、驚く光景だった。

最初の一発から凄まじい量だったけど、腰が震えるたび、さらに塊のような白い粘液が先端から飛び出して、音を立てて写真に張り付く。写真の中の穏やかな笑みが、白いもので満遍なく塗りつぶされていく。

「凄。かつて覗き見た提督の自慰では、遠すぎてどれくらい精液を吐き出したのか、いまい見えなかった。これくらい出るのかと、変な感動すら湧き出してくる。」

その間も、私は手の動きを止めなかった。何度も何度も吐き出すと、やがて出るものもなくなったように、提督の男性器は少し萎える。写真だけでなく、彼のそこを握っていた私の手や、巻きついていた髪の毛まで、白い粘液まみれになっていた。

先ほどまで必死で体をくねらせていた提督は、全身の力が抜けたように体を大の字にしていた。ただ、静かな部屋の中で、提督の荒い息遣いだけが響く。やがて、提督は固く瞑っていた目を見開いた。その視線の先には、当然、精液にまみれた写真がある。

彼の亡くなった妻の写真だ。最愛の人の写真が、自分の吐き出した精液にまみれてい

る。

その光景を見て、提督はうつむく。何かを呟いたようだった。あまりに小さい声で、良く聞こえなかったけど、ごめんと言ったような気がする。そして、再び顔を上げた彼は、凄まじい形相でこちらを睨みつけてくる。

「……てめえ……」

思わず、こちらの背筋が震えるほどの鋭い視線は、実際に肌が切り裂かれそうなほどだった。

それを見て、嬉しくなった。

長年、築き上げてきた提督と秘書艦の信頼関係を根こそぎ捨ててまで、襲いかかって弄んだのだ。これくらい憎んでもらわないと、割に合わない。提督が、私を憎めば憎むほど、提督の心の中で、妻が占める割合は少なくなる。死んだ妻との甘やかな思い出よりも、荒潮という憎い女を思い出すことが多くなる。

どうせ、愛してはもらえないのだ。私との思い出は、写真よりも劣るのだ。ならば、憎まれて忘れられない方が、よほど嬉しいというものだ。船へ積み込める荷の量には限りがあるように、人の心が抱え込める感情の量にも上限がある。荒潮という艦への憎しみが増えれば増えるほど、かつての妻への想いは減っていく。

私は、精液まみれの写真を見せつけるように掲げてみせる。

「びっちゃびちゃ……結構、粘り気がある……写真が、凄く重くなってるわ。凄い匂い……奥さん、穢れちゃったわね」

「……き、さま……」

提督は、この遺影を見るたびに、自分がしてしまった……されてしまった事を思い出して、悶えるだろう。無理やりとはいえ、妻の遺影に、自分の精液を大量にぶちまけたのだ。そんな醜態、忘れられるわけがない。この遺影を目にするたびに、提督は私が出た事を絶対に忘れない。墓参りをする時ですら、私の事を思い出さずだ。

それが、堪らなく愉快だ。

「ふふ、こんなに出して。随分と気持ち良かったみたいですね」

「……何が！ てめえの腐った手なんぞ、気色悪さしか感じなかったわ」

「嘘は……いけないわねえ」

男というのは不便だ。女なら、達したかどうか外見で判別するのは難しい。気持ち良くないと強姦魔に強がることだってできるだろう。一方、精液を吐き出してしまふ男は、誤魔化しが効かない。どれだけ気持ち良くなかったと強がっても、腹と写真、そして私の手にこびりついた白い粘液が、嘘と証明している。

「秘書艦に、嘘をつくなんて、いけない提督だわ。そんなの……うふふっ、駄目よねえ。お仕置き、しないと」

提督は、お仕置きという言葉に、明らかな恐怖を見せた。もちろん、彼もこれで終わるはずがないと予想はしていたのだろうけど、言葉ではっきりと宣言されて、僅かに残っていた希望も打ち砕かれたらしい。

私は股間を強くしごいて、この人を射精させただけだ。私自身は、全く満足なんてしていない。当然、最後の最後まで相手をしてもらう。

「……てめえ、終わったら許さねえぞ」

せめてもの強がりの言葉なのだろうけども、私には効かない。むしろ、それは望むところだ。

許してもらわない限り、この人はずっと自分のことを忘れない。ずっと、自分のことを見る。写真の中にしかない死んだ女の思い出よりも、私のことを考える時間のほうが長くなる。

その事実には、幸福を感じる自分の事が、少しだけ嫌だった。こんな嫌な気分は、とつとと流してしまうに限る。この人に抱いてもらええれば、嫌な気分も吹き飛ばさよう。

私は、精液まみれの写真を放り捨てる。提督は、何とか受け止めようとしたのか、手足の自由もままならない以上、無駄な動きだ。縄に引っ張られて、寝台が大きく揺れるが、もちろん、写真は提督の手には届かない。そのまま、提督の顔のすぐ横に落ちる。

提督は、悔しそうに、すぐ側に落ちてきた写真を見つめる。

私は、そんな提督を見ながら、次に進むために制服を脱ぎます。敵の砲撃で半裸になった姿を見られたことは数え切れないほどあるけど、こうして提督の目の前で、制服を脱ぐのは初めてだ。少し緊張して、ボタンを外す手が震える。十年間、毎日のように着用していたはずの制服が、上手く脱げない。

苦勞して、ようやく上着のボタンをいくつか外す事ができた。ただ、上着の首元のボ

タンだけは留めたままにしている。上着を着用したまま、胸元のボタンだけ外す形で、胸をさらけ出す。

ふと、提督から突き刺さってくる視線の鋭さが和らいだ気がした。ちらりと、彼の様子を見やる。

提督は、私を睨みつけていることは間違いないけれど、一方でその視線がどこか熱っぽくなっている。特に、胸の先を熱心に見つめているようだった。

どれだけ強がっても、男としての性は無視できないらしい。無意識のうちに、女の裸を凝視している。もっとも、それも一瞬だ。提督は、自分がどこを見ているのか気づいたらしく、すぐに視線をそらす。それが、何だかおかしかった。

「男の人って……単純よねえ。女の子の裸があると、すぐに目をやってしまう」

提督の横顔が、屈辱に歪む。

秘書艦に襲われ、裸に剥かれて、射精する所をつぶさに観察されるような異常な状況だ。おそらくは混乱しきっており、本人ですら、自分の感情などまともに理解できてはいないはず。だから、自分を襲っている女の裸に見惚れるという、場違いな反応を示す。

私は、彼が立ち直る前に、どんどんと攻め込んでいく。

「提督、確か女の子が自慰する姿が好きでしたよね……？」

「え？」

一瞬だけど、確かに提督は呆けた声を出した。否定しない。それは、私の言葉が正しいという証拠だった。

「何年、貴方の秘書艦を務めたと思っているの？ 貴方の性癖くらい、お見通しよ」

この人は、女の子が自分で自分を慰めるという話が大好きらしい。

もちろん、提督と露骨にそんな会話をしたわけではない。だけど、小さな鎮守府だ。人の口に戸は立てられず、彼が酒の席などでふと口にした話題が、たまに漏れ出てくる。そんな情報の中に、こういった性癖の話もあるわけだ。他に、彼の持ち物と思われるそういった写真や映像などを見つけた事がある。

私が上着を完全に脱がないのも、それが理由だ。彼の持ち物から判断するに、どうもこの人は、全裸より、一部の衣服を身に着けた格好の方が好みらしいからだ。

軽蔑はしない。どんな人になって、他人に言えない性癖くらいあるものだ。そして、

聖人君子など、この世にはいない。妻を失って悲しんでいても、全く他人に性欲を抱かずに過ごすなど不可能だ。

「ねえ。私が、自分を慰める姿を想像したことくらい、あったんでしょう？ 私じゃなくても、姉さんとか、戦艦のお姉様とかの恥ずかしい姿、頭に思い浮かべて、おちんちんを大きくした事くらい、いくらでも……あるはずよね」

さすがに覗きや盗撮まではしなかっただろうけど、艦娘たちで、そういう妄想を一切しなかったというのはあり得ない。性欲や性癖というのは、理屈じゃない。私や姉さんたちが自慰している姿を想像して、自分を慰めたことが全く無いとは言わせない。

「……して……ない」

「ふうん？」

提督は、否定する。だけど、目が泳いでしまっていて、嘘をついていることが丸わかりだ。十年も秘書艦を務めた私を騙すには、あまりに彼は素直すぎる。

だけど、提督の言葉を秘書艦が根拠なく、嘘と判断するのも考えものだ。だから、私はそれが嘘かどうかを確認する必要性に迫られた……という事しておく。

「なら……私が、こういう事をして、問題ないはずよね」

何をするつもりだと言いたげな提督の目を見返しながら、私は、寝台の場で立ち上がる。寝転がっている提督からも、私の姿がよく見えるように。

そうして、スカートをたくし上げる。提督は、慌てて目を逸らしたけど、関係ないとはばかりに私は下着に手をかける。既に、そこは興奮しすぎて、溢れんばかりに湿っている。思わず、私は濡れている中心に指を当ててみる。普段よりも柔らかくなっていたそこに触れた瞬間、少しだけ痺れるような感覚が背筋を走った。

「あ、あふ……」

恐ろしいほど敏感になっていて、思わず膝から崩れ落ちそうになった。普段、自慰をする時は、ここまでではない。私は感じにくい体質なのか、それとも艦娘という肉体がそう出来ているのか、普段はかなり温めてやらないと、気持ち良くなってくれない。

それが軽くつついただけで、この有様だ。でも、当然かもしれない。見下ろせば、衣服を切り裂かれた愛しい男が縛られて、惜しみなく股間をさらけ出している。この光景に、興奮しない艦娘はいないと思う。

「ふう、あは……さて……と」

私は、不安定な寝台の上で、片足を上げて下着も脱ぎ捨てて。そして、そのまま提督に見せつけるように、自慰を続ける。剥き出しになった秘所は、まるで涎を垂らしたかのように、潤っていた。容赦なく、指を差し入れて自慰を始める。

「あ、す……こ……、こんなに濡れて……垂れちゃって……んっ」

提督は、目を逸らしたままだ。だけど、縛られているために、耳をふさぐことは出来ない。私の喘ぎ声は、彼の耳朶を容赦なく震わせる。それに提督本人は全く自覚がないだろうけど、目を逸らしていると言っても、ちらちらと横目で見ているのが分かる。

提督が、ずっと想像だけで満足していた光景が、今、目の前にあるのだから、当然かもしれない。僅かな、でも痛いぐらいの視線が、痴態をさらけ出している自分に注がれているのが分かる。

提督は無言だけど、彼の体は正直だ。一度は射精して萎えていた性器が、徐々に大きく膨らんでいく。

「あ、ふう……あ、大きくなってきた……うふふ、体は、正直です……ね。ほら、もっと……しっかり、うあ、はあ……見ても、良いのよ。ほら、こうして……指を出し入れて……ね？」

むくり、むくりと大きく天を仰いでいるそれを凝視しながら、私は自らを慰める。いつも、この人と交わる場面を妄想しながら触っていた。交わる方法は色々で、恋人同士のように甘い言葉をささやきながらの時もあれば、私の魅力に抗えずに乱暴に犯されることもあった。

だけど、自分が襲いかかる側というのは、想像すらしていなかった。だからだろうか。異様なほどに興奮する。洪水のように濡れているそこに触れるだけで、達してしまいうになる。

何だか、凄い。いつもの自慰とは、興奮度がまるで違う。

「あ、駄目……何か、もう行きそ……あ、あ……」

結局、そのまま一気に気をやってしまった。膝が震えて、思わずへたり込みそうになる。体温も急上昇している。冷房の風すら焦がするような太陽の熱と、自分の体内から溢れ出る熱が相まって、耐えられないほどだった。私は、残っていたスカートも上着も全て

を脱ぎ去って、素っ裸になる。

大破や整備、改装の時など、整備兵や技官に全裸を見られた経験は豊富だ。だけど、これから一人の男に愛してもらうために、裸になるのは初めてだ。だから、今更ながら心底から緊張する。例え、その相手が縄に縛られて、衣服を切り裂かれて、自分を憎しみの目で見つめている状態であっても。

私は、自慰を見て、思いつき勃起している提督の男性器を握りしめた。さっき、射精させた時よりも、より大きく、熱くなっている気がする。

入るんだろうか。そんな疑問がよぎったけれど、当然、止めるという選択肢はない。私は、潤って液体が溢れている秘所に押し当てて。初めてだけれど、ここに挿入するの正しいはずだ。

「……」

提督は横を向き、黙ったままだ。もう、抵抗はしない心積もりらしい。抗っても、無駄に悶られる時間が長くなるだけだと思って、無抵抗になることで、ただ早く終わってくれと願っているのだろう。

その判断は、間違いだ。ただ黙って人形のようにじっとしていられても、私は満足できない。

私は、一気に腰を落とす。

「う、痛……」

思わず、小さい呻き声が出てしまう。先ほどの自慰で、随分とほぐしたはずだけど、やはり痛い。ここまで濡れていても、痛いものなのかと驚く。初めて男を受け入れるのは、月のものと同じで、人によってかなり苦痛に差があるとは聞くが、想像以上だ。

それでも、時には戦艦の砲撃や、空母の爆撃にすら身を晒してきた私たちだ。この程度の苦痛は、当然ながら耐えられる。どんどんと腰を落とし、提督の腰と、私の腰が合わさる。私の中は、完全に提督で埋まりきった。

「ふう……ん……んっ……あ……ん」

体の中身が押し上げられるようで、吐き気すら感じるけれど、それ以上に嬉しきで満たされる。

「ふふ……ね、提督……んう……私の中、どう……？」

提督は、答えない。見下ろす提督の顔は、目をつぶったまま、耐えるように眉間に皺を寄せていた。

やはり、何も反応しないことで、ただただ今の異様な状況が終わるのを待っているんだらう。当然の反応だと思ふ。だけど、私は許さない。ここまで来たのなら、私をきちんと愛してほしい。理不尽に過ぎる願いではあるが、本音でもあった。

「ね、提督……自分でも動いてみせてよ」

「……」

提督は、無言を貫く。その目は閉じられているけれど、それでも長年の秘書艦の経験に照らして、彼がどう思っているのかは手を取るように分かる。

好きにすれば良い、しかし自分からは絶対に動かないという強い意志を感じる。けど、関係ない。ここまでした私に、怖いものなど無いし、遠慮する理由もない。

私は、彼の耳元に口を寄せて言った。

「貴方が動かなくても、別に良いんだけどね。こうして貴方と繋がったまま、ずっと一緒にいても良いんだから……あ、あふう」

私の言葉に、提督はつぶつぶしていた目を見開く。その拍子に、私の体に埋まっている提督の性器も跳ねたらし、思わぬ刺激に喘ぎ声が出ってしまった。

「あふ……ふう……何を驚いているの？ 艦娘の体力を侮ってはいけないわ。いつまでも、何日でも、私はこのまま貴方と繋がっていられるんだから。もう、引き渡しに備えて出撃もないから、秘書艦である私から、体調不良でお休みとでも言っちゃえば、誰も不審に思わないし、探しにこない……貴方が何も動かないなら、この状態がずっと続くの。それだけよ。その間、ずっと貴方は私に好き勝手されるし、その様子を写真に見られることになるけど……ね」

私は、提督の横に落とした写真を見やる。まだ精液がこびりついた、彼の妻の遺影だ。もちろん、写真に魂が宿るなんて迷信でしかない。だけど、妻の遺影の前で、艦娘にずっと弄ばれ続けるなんて、受け入れがたいだろう。

「それが嫌なら、私の言うことを聞いて。腰を思いっきり振って、私を突いて、満足させてくださいな。そうしたなら……解放して、写真も返してあげます」

「……」

ぎりっという歯ぎしりの音すら聞こえそうなほど、彼は歯を強く食いしばった。何とかして拘束を脱しようと、また腕に力を込めて引っ張ろうとする。だけど、現実には甘くない。ただ、寝台が揺れるだけで、縄は一向に解ける気配すらない。

提督は、ようやく観念したらしい。暴れるのを止めて、ゆっくりと、腰を持ち上げる。硬い男性器が、自分の腹の中をえぐるように突き進んでくるのが分かる。

「……っ」

少しだけ、鈍痛が走る。だけど、やはり耐えられないほどじゃない。無理やりだろうと何だろうと、望むものを手に入れた今、痛みよりも嬉しさの方が先に立つ。

「あは……ははは、っ……は、ふう……」

提督の腰の動きに合わせて、自分も一気に腰を落として奥まで受け入れる。奥の奥、これまで自分では触ったこともないほどのところまで、提督で一杯になる。

「ふふ……提督、奥……まで、入ったわ、よ……どう？ 自分の半分にも満たない、よう、な……はっ、年頃の姿をした娘に、突っ込んだ気分は……？」

「……最悪……だ」

提督は、本気で吐き気がする家のように顔を歪ませて、呪詛を吐く。苦痛に満ちた顔のまま、提督は腰を引いて、また突き上げてくる。ギシギシと、寝台も音を立てて揺れる。

それを繰り返す。最初はゆっくりだったのが、どんどんと速度が上がっていく。提督の早く終わらせたいという気持ちが強いためだろうか。突き上げられるたびに、痛みを感じたが、同時に快感も走る。腰の動きが繰り返されるごとに、快感の方が徐々に強くなっていった。

「ああ……はあ……もつと、くださいな……あっ……あああっ」

私は、遠慮せずに快楽のまま声を上げる。私の懇願に反応したわけでもないだろうけど、提督はさらに強く腰を振ってきた。こちらの腰が浮き上がりそうになる。痛みと快感が同時に襲い掛かってきて、壊れそうなくらいの衝撃が全身を襲う。上半身が上手く支えられず、私は提督に抱きつくように倒れ込んだ。

「ふっ、ふうっ……あっ、あっ！」

倒れ込んだと同時に、提督の横に放り出した遺影が目に入る。精液のこびりついた写

真の中には、相変わらず微笑みを浮かべた女性がいた。だけど、今はその人を見ても、心が痛まない。悔しいとも思わない。

写真の奥さん。今、提督は私に夢中よ。貴方じゃなくて、私にね。

例え、脅された結果であり、早くこの異常な場所から開放されたいという願いが原動力であっても、私の事だけを考えて腰を振っている事に違いはない。

「ねえ、提督……は、はあ……奥さんが、うあ、うああ、見てるわ……私たちの交尾、奥さんっ……に見られ、てるわよ！」

敢えて、写真の事に気づかせろ。提督は、ぎくりとした様子で、自分の横に落ちていく写真を見る。一瞬でも、忘れていたのかもしれない。だけど、腰の動きは止まらない。もう、遺影の写真程度では、止める理由にならないらしい。理由はともかくとして、その事実がとても嬉しくて、一気に痛みが引いて、頭の中が快楽一色となった。

「あは、もっと……もっと、突いて！ 奥さんの目の前で、私の中に出して！ ほら！」  
その一言がきっかけになったのか、提督の体が一際大きく震えた。そして、どくりと  
いう感触が、お腹の中から響いた。提督は、射精したらしい。さらに、二度、三度と提督の体は震え、そのたびに精液を出される感触が伝わってくる。中に出されたから確認できないけど、ひょっとしたら、さっき手で出した時よりも多いかもしれない。

私は、そのまま腰を振る。少し遅れて、私も達した。今まで、経験したことがないほど、体が痙攣する。

「はあ……はあ……」

私と提督、両方の荒い息遣いが室内に響く。提督の性器は、二度の射精で萎えたのか、いつの間にか私の中から出ていた。

「……ふふ」

私は、上半身を伸ばして、提督の顔を覗き込む。目が合う。彼の瞳は、もちろん憎悪や困惑の色が強かったけど、確実に快楽や興奮もあった。目は逸らされない。提督は、横の写真を見ない。ただ、私と見つめ合っている。

「ねえ、提督」

私は、それを見て、最後の望みを呟いた。

「舌を出して」

その言葉が意味するところに、提督が気づかなかったとは思えない。いくら襲われて振り回されて、精神が疲弊してしようと、舌を出せという命令がどういう意味かなんて、子供でも分かる。だけど、提督はあっさり従った。拒む言葉も嫌悪に満ちた呪詛もなく、ただあっさり口を開いて、桃色の舌を差し出してくる。

「ふふ……」

私は、遠慮なくその舌にむしゃぶりつく。舌を絡ませ、唾を交換して、唇を合わせる。口内も、余すところなく舌でねぶる。歯の裏、下の裏、喉の奥まで、可能な限り。

提督の口づけは、ひょっとしたら性交よりも遙かに夢に見たかもしれない。それが今、実現した。

「あ……」

視界がぼやける。嬉しくて、涙が出てしまったらしい。たかが口づけでも、それはとても重要な事だ。結婚式で最も重要な儀式は、今も昔も口づけだ。その儀式を提督と交わせたことに、嬉しさで、胸が張り裂けそうになる。

もちろん、提督が私に心を許したなんてありえない。ただ、異様な状況に心が折れそうになっていたところに、性交の疲れが仕上げをして、一時的に抵抗する気力が失せてしまっただけ。

「んむ……はあ、美味し……んちゅっ……ちゅ」

良く見ると、提督も泣いていた。私とは真逆の理由ではあったらうけれど。

それでも、一緒に涙を流していることが嬉しかった。私は、感情の赴くまま、口内だけでなく、顔全体を舐め始めた。鼻先、耳、顎から喉、額まで、様々な場所に口づけをした。彼の流した涙を舌で掬い取ってみると、しょっぱかった。

さらに、胸から腹へと、口づけの場所を移す。

提督の全身を余すところなく、自分が口づけしたことにする。亡くなった妻が舐めたかもしれない場所を上書きしていく。隙があれば付け込み、徹底的に叩いて、海域から叩き出すのが朝潮型駆逐艦の流儀だ。彼の体から、妻という痕跡を完全に消し去ってやる。

全身を舐め上げるには、背中などをこちらに向ける必要もある。つまり、きつく縛ってある手足の縄を緩めなければならぬが、この時ですら、提督は抵抗はしなかった。

ただ、早く終わってほしいと懇願し、そして妻への詫びを口にするだけだった。

提督の精液や、私の愛液、そして両者の汗が混ざり合う提督の体を舐めあげていく。足の裏から手の指、尻の穴まで、本当に余すところなく舐めとる。なぶっている間に、提督の萎えた股間がまた大きくなったら、そこも舐めて、しごいて、胸で挟んで射精させる。止めてと弱々しく言ってきたけど、無視した。

結局、交わった後も三回、つまりは合わせて五回も射精させた。発射される精液は、わざと自らの身体で受けて、頭も顔も胸も精液まみれになった。

全身を舐め終わると同時に、提督の寝息が聞こえてきた。見ると、提督は苦しそうな顔で本当に眠っていた。どうやら、あまりに異様な状況に、精神が耐えられなかったのかも知れない。

その姿を見て、今まで感じたことのない満足感が胸を満たす。

考えられる限り、私の体、私の匂い、私の声、全部を提督に刻みつけた。もう、提督は妻の事を考えた瞬間、私の事を思い出すはずだ。どうあがいたって、私のことを忘れるなんて、できるはずがない。

そして、まだ開放するつもりもない。私は、全然、満足なんてしていない。これまでに十年間、秘書艦として気を揉んできたんだから、もっと愛してもらわないと気が収まらない。二、三日は、このまま私を抱き続けるべきだ。

まずは明日、どうやって提督に愛してもらおうか、そういえば、今回は大丈夫だったけれど、身動きが取れない時に、提督が催した時は、下の世話をどうすれば良いだろう。

私は色々な課題と解決策を脳裏に思い浮かべながら、提督の身動きを封じるために、緩めた縄をまたきつく縛り直した。そして、添い寝をするように彼の横で寝転がる。

すると、私も存外に、疲れていたのだろう。提督の心音や、室内の空調の音を聞いていると、すぐに眠くなっていく。

明日は、どんな行為で、提督に私という存在を刻み込んでやろうか。今日は、自分で腰を動かして愛した貰ったのだから、明日は服を脱がしてもらおうか。それとも、髪をすいてもらおうか。

楽しみにしながら、私は眠りに落ちていった。

# 「駆逐艦皇月の告白」

作…高坂流  
絵…結城私心

ぎし、ぎし、ぎし。

鈍く低く、机が軋む音が響き渡った。鎮守府の提督執務室であの人たちが何をやっているのかなんて。

——知るべきじゃなかった。

こんな関係も、こんな醜い感情も知るべきじゃなかった。きっと知ってはならなかった。ボクは、あの瞬間にきっと誰のせいでもなく汚されてしまった。

何も見ておらず、何も聞いておらず、何にも気付かなかった数瞬間に戻ることができたなら、ボクは喜んでそうしているだろう。そして、この場からすぐに立ち去っているに違いない。それくらいには、知りたくないことをボクは知ってしまった。

『——っ、ああっ、ていと、くっ、ダメっ、まっ、だ——』

鹿島さんの声。けれど、その声音はとても艶っぽい。今まさしく行為をしているのだから、それも当然だろう。半ばまで下衣を下ろして、臀部を晒しているのが司令官だ。

なぜ鹿島さんかというのが分かったのは、ずっと鹿島、鹿島、と、彼女の名前を司令官が呼んでいるからだ。

強くなったつもりだった。強くなったってボク自身でも確信していた。練度を上げて、司令官の役にたつためにがんばってきたつもりだった。けれど、こんなことでそれが全部できなくなりそうな状態になるとはボクだって思わない。

こんなに弱いままだったなんて、ボクも分からなかった。どこかで沈んだとしても今のボクならむいいかもしれない。何かに頑張ろうなんて気持ちも、もうボクのなかから全部抜け落ちて消えてしまった。

『やっ、だあっ、声、出っ……ふああっ、——っうっ、やあっ！？』

悲鳴のような嬌声が高く聞こえて来る。普段の落ち着いた鹿島さんでは絶対に聞こえないような声が。

頭を抱えて泣きじゃくって、そのまま何もかも忘れてしまえばいいのに。見たくなかったものの記憶なんて、頭に焼き付かせても仕方がないものなのに。

『らめえ、いっ、ふああっ、いっちゃ、あああ————————っ！』

ボクは、こんなことを知りたくてこうしているんじゃない。

ボクは、あんなことをしたくてここにいるんじゃない。

『……ていとくう、しゅきい……らい、しゅきい……っ』

でも、ボクの中には怨念と憎悪のような感情がずっと渦巻いている。

二人がきっとそんな関係にあるのを知っていたなら、ボクはもっと好意的に受け止められたんだろうか？

でも、ボクは悪くない。きっとボクにこうさせた、あの二人が悪いんだ。ああ、だから、これは——。

きっと、ボクの復讐の道行きなのだろう。

「鹿島さんと昨日、何してたのかな」

夜の帳が落ちた後、ボクは司令官に問いかけた。夜更けに目を瞬かせた司令官は、何も無かったかのように「鹿島が疲れていたから執務室で休ませてやっただけだ」と嘯く。休ませてやった、という言葉の割には随分と鹿島さんを疲れさせたようだけれど。

やることやっていたものね、仕方ないよね。ごまかし方も下手。どんな間抜けだって、今の司令官よりはマシな答えを返すと思う。情けないと思うと同時に、それでも心のどこかで未練に感じているボク自身を自覚している。

あんなものを見た今であっても、まだ司令官のことが好きなのだろう。ボクはそのことを知っている。嫌でも気付いている。だから、きっと謝られたらボクは許してしまうかもしれない。

だから、幸いだった。司令官がしらばっくしてくれような、人間らしい人で良かった。それが当然の反応だと思う。もし他人とのセックスを見られていたら、ボクだったらそのまま艦装をつけずに海に飛び込みたいと思うからだ。

ぎし、ぎし、と鈍く響く、地獄のような音色が脳裏にフラッシュバックする。机の揺れる音がする。忘れられない地獄のような音がする。

「司令官。これ何だと思う？」

ボクは持ち歩いてきたスマホで録ったボイスレコーダーのスイッチを入れる。途端に響く、鹿島さんの嬌声。それとぼん、ぼん、という肉のぶつかり合う乾いた音。司令官が血相を変えた。いつだ、それをどうして録った、消せ、と、必死の表情でこちらに飛びかろうとしてくる。ひよい、とボクは跳ねるように避けて、精一杯の笑みを浮かべ

てこう司令官に言った。

「もちろん、消してあげるよ。だけど——言いたいことは分かるよね、司令官」

ボクは、ボク自身の恋を汚そうとしている。

けれど、ボクはそれしか道がきつとないんだろう。

ボクはこれしか、方法を知らないから。真似ることしかできないから。

だからボクは——。

「ボクに、犯されてくれないかな」

「寝ていいよ、んしょっと……」

どうしたらいいのかわからない、といった様子の司令官に、言い捨てるように声をかけて、ボクは上着を脱ぎ捨てて。本当にするのか、と戸惑った様子の司令官は、この先何が起きるかの想像が決して良いものではないみたいだ。

スカートもわずらわしくなって、脱ぎ捨てて。どのみち、最後には裸になってしまうのだから必要がない。ボクは司令官と一つになる。なりたいたい。だから、こうした。ボクのやるの間違っているかはわからないけれど、ボクはこうしたかった。

下着一枚。捲り上げ、脱ぎ捨てた。鹿島さんの声が脳裏に響く。風呂場で鹿島さんと遭遇したことがある。

きっと人間が生まれたままの姿になって、ボクはじっと司令官を見つめる。司令官は司令官で、不安そうなの、そして何よりもどうしてこんなことをするのかわからない、と言った様子だ。

司令官はホントに鈍感で、ボクが好いていることもわからないんだろう。けれど、ボクはそんなことはきつとどうでも良い。

パンツも脱ぎ捨てて、裸一つ。ベッドに寝そべっている司令官の身体にのしかかるようにして覆い被さった。司令官はこう言う。「本当に消してくれるのか、鹿島には言わないでくれるのか」と。

信用がないのは仕方がないけれど、ボクは実際にそうやって司令官の信頼まで失いたくはない。わがままだけれども、それくらいはボクだって弁えていた。

上衣、下袴——司令官を丸裸にしていく。一枚ずつ脱がして、司令官の男物の下着を見やる。すると、半ばまで屹立しているのが服の上からでも見て取れる。

「緊張してるんだ、可愛いね？」

ボクだって結局、こんなことに慣れてるわけじゃない。ホントのこと言えば、司令官の方が経験豊富だし慣れているだろう。けれど、司令官だって一方的にされることについてはきつと慣れてないはずだ。

下着の上から、司令官のモノをそつとなぞるように撫でる。こんな状態でも男の象徴ってのは大きくなるんだ、ってことにボクは気付いた。本当に可愛い。

司令官は司令官で羞恥に耐えているようで、「こんなことされてるのに気持ちいいん

だ？」って尋ねると、「うるさい」と視線をそらす。その隙に下着の中からペニスを露出させ、手のひらでその堅さを確認する。まだもう少し——手のひらに包んだまま上下させると、司令官が変な声を上げた。可愛い声だった。

そう、それならばボクもやりようがある。ごしごしと掌で擦り上げ、ぐにぐにと竿を弄ってみる。まだもう少し堅くなるまでには時間がかかりそうだった。ならばもういっせ、こうしてしまった方が早い。

ボクは司令官のペニスを思い切り口を含む。微かな塩味と、それを遙かに上回るむわつとした臭いが鼻について思わず顔を顰めた。

臆月、待て、おい、やめろ。叫ぶような声が司令官から聞こえてくる。けれど、口の中で肉棒が暴れる行き場のないような形でびくびくと擦撃している。やめろと言っても、この可愛い子がとても許してくれないんじゃないかな。

歯の内側で鈴口を擦りつけるようにすると、歯を司令官が噛みしめる音が聞こえて来た。舌先でカリ周りを舐めていくと、司令官の表情が紅潮しているように見える。

興奮しているのかな。それならこのまま最後までしてあげればいいんじゃないか——そう開き直り、一気に司令官のモノを強く吸い上げる。じゅるる、と溢れたよだれと共に肉棒から出て来る何かが混じる。何か、とても変な気持ちを感じる。

決してこんなことをしていいわけがないのに、それでもボクがしたいからこういうことをしているのだ。そして、司令官も感じているの分かる。

頭を滑らせるようにして、喉の方までペニスを誘導する。吐き気がするのを一瞬だけ堪えた。なんせ、大きくなったものがボクの口の中をかなりの割合で占領してしまっているのだ。啞えたまま、頭を上下させると司令官がシートを掴んで必死に堪えようと表情を歪めさせる。本当に、本当に、可愛い顔を見せてくれる。ボクの喉奥でイって欲しい——その言葉の代わりに、じゅる、じゅぼ、とペニスをひたすらに何度も吸い上げ、頭を動かし、竿を口元で刺激する。

と、司令官が表情を硬直させて、出——と叫びそうになる。必死に堪えているのは可愛いけれど、我慢せずに達してしまえばいい。そう思いながら、がっ、と軽く亀頭に歯を当てる。——刹那、口に啞えた司令官のモノが一際大きく膨れたかと思うと、粘っこい液体をそのまま口の中に吐き出して来る。臭いと味があまりにきつくて、ついでに司

令官のモノが大きいものだから吐き出しそうになるのを必死に堪えて、司令官を上目遣いに見上げた。

荒い吐息、紅潮した顔——萎え始めるモノを一度吐き出して、外気に触れさせる。ボクの唾液と司令官の精液に塗れ、睾丸の方まで白い液体が垂れていく。ボクの口の中には、まだ司令官の精液がひたすら存在を主張している。

「まだダメだよ、司令官。そのまま動かないで、寝ててね」

今にも逃げ出したそうな司令官の表情が、とてもそえられる。これだけぐちゃぐちゃになっていけば、あと一度勃たせればボクの中に受け入れても大丈夫だろう。司令官に飛びつくようにして、口にキスをする。口の中の精鋭を司令官に送り込み、吞ませるかのように荒く、激しく。

ぐちゃぐちゃになっていくモノを、ボクの太腿の間で擦りあげる。びしゃびしゃに汚れていく太腿とともに、熱く硬さを取り戻していくペニス。ボクはそっと司令官の首元に手を当てて、緩く手に力を加える。ぐえ、と間抜けな鈍い声を司令官が上げる。けれど、モノがその瞬間にビクンと跳ねるのを見て、それで気持ちよくなったのだと確信した。

「……ね、司令官、もっと頑張れる、よね？」

はー、はー、と、荒い息を誤魔化すこともボクはできなくなっていた。大きくなっていた司令官のモノが、常夜灯の暗い灯りに照らされてぬらぬらと光る。準備は万全になっている。ボクはそれに向かって、陰裂を広げ、一気に腰を落とす——。

激痛。息を呑み、ばくばくと口を動かすことができなくなって、ボクはそのまま硬直した。痛いなんてもんじゃない、体の中が焼かれているような感覚すら覚え、必死で口元を笑みの形に持っていこうとする。

「し、しれいかん、かお、かわい、かお、してる、よ」

けれど、これが序の口だということはボクにも分かっている。そのままぐりぐりと腰を回すように動かすと、まるで下半身が麻痺してても通じるかのような、絶対的な熱さが身体を焼く。ふよん、と睾丸が触れるのがどこか冗談みたいに感じられた。司令官は司令官で、抜け、とか、無理するな、やめろ、とか言っているけれど、ボクにとっては司令官のその言葉は動きを止めるだけの効力を発揮しない。腰を持ちあげ、もう一度落とすと、司令官のモノはボクのおへその高さくらいまでを一気に貫く。



苦しい、痛い、つらい、逃げ出したい。けれどそれももうできる状態じゃない。このまま最後までやってしまおうしかない。膝をばねのようにして上下させると、ごりゅ、ぐりゅ、とモノが卓月の中を蹂躪する。

「これで、感じてるんだ！ ねえ、本当に！ かわいい！ ねっ……！」

口元から涎を垂らして、司令官は天井を見つめて喘ぎを上げている。痺れるような痛みがずっとボクの中を刺激して貫き続けているけれど、司令官は司令官で感じ続けているらしい。ボクの痛みも知らないで。

そう、考えてみれば、司令官はボクの心の痛みにも気を止めようとしなかった、なんでもこんなことをしているのか、ボク自身も分かっている。ボクは司令官が好きだから、抱かれない、キスされたい、そしてこういうことをしたい。

けれども、ボクの心はずっと悲鳴を上げ続けている。どうしてこんなバカなことをしているんだろう、どこかで止めるべきだったはずなのに、なんで最後までやっているんだろう。

ボクの心の傷は、司令官に腰を打ち付けるたびに傷口を大きく広げていく。こんなことを早くやめたい、けれどこんなことをもっとしてきたい。無理やり司令官を犯して、それで満たされたい。

奪いたい、この人を奪いたいからこうしているんだ。なのに、絶対に奪えないことが分かっている。憎くてたまらない、あの時抱かれていた鹿島さんも、司令官も！

——ぐ、とおもむろに司令官の首元に手を伸ばし、そのままきつく握りしめる。恨めしい、羨ましい、憎い、愛してる——好きなのに、どうしてこうなってしまったんだろう。司令官の口元がばくばくと動く。首を絞められ、気道が圧迫されて苦痛を感じているはずだ。けれど、その間も腰を動かしていると、だんだんと司令官のモノが大きくなっていくように感じられた。

そういえば、男の人は自分の命が危険に晒されると子孫を残そうとして性欲を覚えやすく、そして感じやすくなるとかいう話をちらりと聞いたことがある。もしかしなくても今回のそれはそれだろう。

もっと強く絞めれば、司令官はもっと気持ちよくなるのかもしれない。何よりも——司令官を蹂躪しているようで、ボクの身体の中が疼いて止まらなくなってくる。

腰をもっと早く、そしてもっと強く締められるように。司令官の呼吸が絶え絶えになっていく。最後まで達するのにもう少し——。

もう少しボクも中を濡らしておけば、こんなに苦しくなかったのかもしれない。けれど、それももうあとの祭りだった。司令官の首元に手を当て、腰を思い切り打ち付ける。利那、ボクの中で司令官のモノが一際大きく跳ね上がった。

そして、何かが溢れるようにボクの身体の中を犯していく。司令官の身体が大きく跳ね、更なる呼吸を求めようとして呻くような声が聞こえてくる。

そっと首元から手を放し、ボクは司令官の身体の上で余裕ぶったような笑みを必死で浮かべた。全然気持ちよくなつてなかった。ただ痛いだけだった。

「……司令官、お願いだよ。今日のこと、忘れて欲しいな……」

まだ辛うじて意識は飛んでいないらしい。今まで犯していた相手にそう言葉を投げかけて、ボクは身体を持ちあげる。萎えかけた司令官のペニスと、ボクの身体の一部が粘液の糸を引くようにして離れた。

倒れたままの司令官を放っておいて、裸のまま、ボイスレコーダーのアプリを起動。司令官と鹿島さんの情事のファイルを消し去る。途端にボクの心の中にあつた熱情や感情がすっと引いていって、逆に罪悪感と自己嫌悪だけが加速するように増して来る。

手早く服を着なおし、司令官の顔を覗き、ボクは司令官の部屋の扉を開けて後ろ手に閉め、走り去る。もう何も見たくなかった。もう全部忘れられると思った。寝てしまえば、互いに悪いユメだったと思えるはずだ。

そう、だからお互いに忘れておこう、ボクはそう思ったんだ。

——それから一週間後。鹿島さんと何か喧嘩しているらしき司令官の姿が遠征から帰って来ると見られた。

きつとボクのせいだろう。あんなことをしたからだ。だから、ボクが責めを負うべきだ。けれど、そんなことを言い出す勇氣はボクには無かった。

だけど、その次の晩。ボクが夜の見回り担当になって、周囲を見回している間、ふと不審者の姿が見えて懐中電灯を向けた。誰何しても答えはなかったからだ。

司令官だった。寝れなかったのか、髪をボサボサにして、目を血走らせている。何が

あつたのかもわからなかった、

けれど、その近くに注射針が転がっているのを見て、ボクは一步後ずさる。それが、除倦剤と言われている代物だということに気付いたからだ。

口元からよだれを垂らし、まるで獣のような様子で司令官がボクの身体を強く引き寄せる。口元を押さえられ、服を引きちぎられる。下着まで取り去られて、あの時受け入れた司令官のモノを何の潤滑剤もないままに身体に突き込まれた。

やめて、止めて、そうお願いしても司令官は止まってくれない。ボクの身体を後ろから、樹に手を突かせて突き続ける司令官の表情にもう正気の欠片なんて見られなかった。あの時よりも痛くて、辛い。

「何をやっているの、そこ！」

懐中電灯が向けられ、ボクを犯している司令官の姿が電灯に照らされる。それでも止まらない司令官の身体——何度かの射精を経て、ボクの身体から引き抜かれたペニスは未だ力強さを失っていないかった。

もう、司令官は元通りの司令官でいられなかった。そしてボクも、結局元通りのまま居られなかったんだ。司令官が駆逐艦娘を強姦する、という事件が広まり、司令官は法務部に連行され、裁判を受けることになり、ボクがしでかしたことも明るみになることとなった。司令官はきつとこのままだと十中八九重い刑罰を処されるだろう。そして、ボクも。

もう、ボクは艦娘を続けることはできない。この記憶も、この想いもきつと彼方に消えてしまうだろう。その後はボクもどうなるのか分からない。少なくとも、艦娘をしていた誰かが市井に出ている姿をボクは一度も見ることがないからだ。けれど、もう誰もボクのことを知らない場所で、きつとボクの知らない形で生きることになるのだろう。今のボクは、もう居なくなる。だから、ボクはここにメッセージを残すんだ。同じようなことになった誰かが、同じような目に合わないように。

どうか、ボクのようにならないで欲しい、キミがどんな艦娘なのかは知らないし、どんな形で他の誰かを好きになるのかも知らない。けれど、ボクのようにだけは絶対にならないで欲しい。絶対に、誰も幸せに出来ないのだから。

せめて、キミが幸福である道を選びたい。ボクはきつとそうではなかったか

ら。

誰かを犯し、誰かに犯される。因果応報以外の何物でもない、ボクの生きた航跡を、どうか誰も辿らないで欲しい。悲惨な目に合う誰かを、ボクは決して見たくないし、聞きたくもないから。誰かひとりでもそうやってしまうのが嫌だから。

……でも、ボクはきつと司令官が好きだったんだ。

どうしてこんなことになってしまったのか分からない、ねえ、どうして！？ どうしてボクだけがこんな目に合わなきゃならなかったの？

教えてよ、ねえ、誰か！ 誰も教えてくれない誰か！ ねえ、ボクは嫌だよ！ こんな末路、ボクが良かったなんて思えるわけじゃないか！ どうして誰かを好きをなりたいかっただけなのにこんなことになっちゃったんだよ！

ボクの馬鹿！ ああ、本当に馬鹿だよ！ こんなボクは死んでしまえ！ いっそのまま死んでしまうのが一番だよ！ あはは、そうだよ、そうしてしまえば良かったんだよ！ ねえ、分かるだろう！？

……ごめんね、ボクの姉妹たち。お姉ちゃん、悪い妹でごめんなさい、妹たち、良い姉になれなくてごめんなさい。ボクは……ボクのことなんて、どうか忘れて欲しい。

あはははは、もう、疲れたよ。ボク、もうここにこうしているのも辛いんだ。あははははは、もういやだ、生きていくことももういやだ……誰か、ボクを捨て去って。

あっ、そうだね、ボクはそうすれば良かったんだね！ そうだね、それで良かったんだ！ あははははは、もうボクは他に選択肢はないんだから！ 良かった、まだやるべきことがあったよ！

じゃあね、みんな、ありがとうね！

「……」

顔を蒼白にさせて、弥生が口元を震わせていた。皐月のスマホに遺されたボイスレコーダーの音声は、そこで止まっていた。

こんなことが、まさか着任する前にあったなんて、思わなかったのだ。司令官も驚愕した顔をして、黙りこくっている。

「……しれい、かん。この後の、皐月の記録は……？」

「収監されていた場所から脱獄。その後鎮守府庁舎の屋上から海に飛び降りて自殺した——らしい。……なんだ、これは……」

前任者にそのような出来事があったなど、彼も想像ができなかったのだろう。そう言った都合が悪い方向に向かうものは隠蔽される。

「……皐月に、お花、あげに……いい、です、か」

「俺も付き合おうよ」

このままの弥生を放っておけない、司令官もそう感じたのだろう。泣き出しそうな表情で、弥生が大きく頷いた。皐月の風が、磯の匂いを運び、そして消えていった。



# しむしゆの ものしり

ハローエブリワン、占守っす！海防艦は駆逐艦じゃないから逆レイブしなくてもオッケーっしゅ！  
駆逐艦に襲われる被レイブ願望をお持ちな夢見がちな司令、今日もちむちむしゅっしゅしているっすか？  
レイブ（強姦）は感じたら和姦なので司令も駆逐艦逆レイブで感じたらいけないっしゅよ！

時は大駆逐艦  
逆レイブ時代！



駆逐艦による逆レイブ  
被害は150%！

一度襲われて



その駆逐艦も  
襲われる確率が  
150%の意味



なんてこと…

このままでは鎮守府が  
崩壊してしまうわ！



くちくかんじゃない  
**夕張**

かわいいくちくかん  
**島風**

駆逐艦全員を張り倒すのも  
説得するのムリ！

島風は  
どう思う？

速ければ  
なんでもいい

その意気や  
よし！

時をかける  
駆逐艦逆レイブ

かいたひと 結麻心

★富、名声、力、駆逐艦強姦罪の男、駆逐艦逆レイブ王、  
『ちっちゃがう！俺はイヤだって言ったのに春雨がムリヤリ…！』男達はグランドラインを目指し夢を追いつける世はまさに駆逐艦逆レイブ時代！  
彼の死に際に放った一言は人々を海へ駆り立てた  
（後編済み）



# しむしゆの ものしり

タイムトラベル：起きてしまった駆逐艦逆レイブという事象をなかったことにすることはできないっしゅたとえ司令が夢だ夢だと言っても夢ではないし夏への扉を開け閉めしながら時震を起こしたりラベンダーの香りを嗅ぎながら踏み切りに突入しようが好きじゃない駆逐艦のまんこに射精した事実は消えない



ちなみに駆逐艦逆レイブという手段に出なければならぬこと自体、いくつかのコミュニケーションステップの失敗を意味している。まあしかし「目前で進行中の駆逐艦逆レイブをやめさせるには、説教ではなく力が必要で、それもレイブ後ではなく事前に」だろうか。悲しいね……バナージ



# しむしゆの ものしり

首絞めセックス：首を絞めることで脳に酸素が行き渡らなくなり、低酸素症になり幻覚症状が引き起こされ快感と間違っって認識され、コカインを摂取した時と同じレベルの快感を得ることができると言われています。もちろん死ぬリスクがあるけど駆逐艦コカイン逆レイブ合同よりなんだかさわやかに感じる



それにお前の  
お互いに気持ちよく  
なぞぞつて辛いんだよ！



お前が逆レイブするのと  
駆逐艦逆レイブ合同が  
始まっちゃうんだよ！  
そんなん言ったら表紙の時点で  
始まっちゃうだろう！



私は提督が好きなんだよ！  
お前は邪魔すんのか！  
私は別に好きじゃねえよ！  
逆レイブをやめなさいよ！



逆レイブ事象以外は再現  
しておいた方がよさそうだし…

えっ



でも首は絞めといた  
ほうがいいのか

えっ



落ち着いたわね…  
ちんぽをまんこに入れても  
別に想いは通じ合わないのは  
もはや型闘士には常識！



ムッ  
何ヤツ

までーっ



ヤダーツ

書き忘れてたし…  
さっ キュツと



# しむしゆの ものしり

二度あることは三度ある：『同じようなことが二度も起きると、さらにもう一度繰り返されることもあるものだから、悪いことがまた起こらないように注意せよということ。』駆逐艦逆レイブは吉事か凶事か、そんなことは誰にもわからないでも三週目のしまかぜが出るなら……これが最後の駆逐艦逆レイブとは思えないっしょ……



# 後書さ



TwitterID:@nikusyo

PixivID:182524

提督帽は提督自身で  
ありつまりは提督帽  
の中はそれは大変な  
ことに!

ペンネーム

にくしよ



TwitterID:@washizutan

PixivID:

初参加です。どうぞ  
よしなに。

ペンネーム

wa



TwitterID:@lunalto

PixivID:341964

春風ちゃんに色々と暴  
走してもらいました。  
意外に動いてくれやす  
かったのですが形にす  
るのがかなり難し  
かったです(汗)でもまた  
描きたいですね…。

ペンネーム

月猫



TwitterID:@KOOLKNIGHTS

PixivID:3663

白露型はセーフ!

セーフ  
です!

ペンネーム

クールナイツ



TwitterID:@mak\_tak\_A2

PixivID:134759

膜人間に逆レ  
イプって難し  
すぎます

ペンネーム

mak\_tak



TwitterID:@ViSiONeGATiVe

PixivID:435

叢雲の隙間に  
指入れたら叢  
雲がムラム  
ラしたんです  
(迫真)

ペンネーム

ゆのか雅愁



TwitterID:@si\_syamoji

PixivID:84684

Z3の「ふー  
ん」は喜怒哀  
楽全部あるん  
だ!

ペンネーム

ししゃもじろう



TwitterID:@kinosi\_tuyuki

PixivID:809652

艦装を描くか描かないか、完成する直前まで悩んでおりました。

ペンネーム

木ノ下ツユキ



TwitterID:@rariatoo

PixivID:794658

二人がシヨタ  
提督の竿穴ガ  
ン攻め、初参  
加よろしくお  
願いします

ペンネーム

リアット



TwitterID:@tsukasago\_

PixivID:261282

今回の漫画の前日譚として1ページ目の内容、詳しくは後日、個人誌という形で出すかも……?なので、出たら是非宜しくです~。

ペンネーム

つかさすすむ



TwitterID:@kbr\_310hei

PixivID:

神風!  
春風!  
まぐわい!  
!!

ペンネーム

安田かつのり



TwitterID:@rara\_toybox

PixivID:565736

素で逆しかましそうな春  
雨ちゃんが大好きです。  
逆レ騎乗位は浪漫、

白露型は  
えっち。

ペンネーム

瑠璃ららこ



ペンネーム  
**丑**

TwitterID:@uccow

PixivID:5143532

無理矢理  
パパにさ  
れたい



ペンネーム  
**しなま**

TwitterID:@shinamachitonda

PixivID:17567

提督（と戦艦）  
のおち○ちん  
は駆逐艦の遊  
園地！！



ペンネーム  
**リリスラウダ**

mastodonID:@lithia

PixivID:

響ちゃんは  
クールかわ  
いい



ペンネーム  
めんてい  
やくな

TwitterID:@mentei897

PixivID:

10月末に生まれ  
てくる我が子へ。  
無邪気な元気な  
無ちっちゃん子  
の種まになりた  
いです。ゆるし  
て。ゆるして。



ペンネーム  
**浜原義雄**

TwitterID:@hammer\_108

PixivID:8874

初参加です  
よろしくお願  
いします



ペンネーム  
**イエクオ**

TwitterID:@TrampleRigger

PixivID:27863

“教えてくれ曙 オレは  
間違っていないんだと  
逆レは一つじゃあないと  
オレは大事なモノを見  
失っていない——と”



ペンネーム  
**ヒダカメダカH型**

TwitterID:@HIDAKA\_Medaka

PixivID:434435

痴女い格好の子が スケ  
ベとは限らない。でも、  
やっぱり見た目通りに  
スケベかもしれないぞ！  
島風は艦これのセックス  
シンボルです！



ペンネーム  
**零狸**

TwitterID:@reiji\_tanukian

PixivID:417029

陽炎型手袋コ  
キとか、夕雲  
型ストッキン  
グコキとかも  
いいよね



ペンネーム  
**まゆら。**

TwitterID:@\_mayura

PixivID:3402138

我が子へ。ママは  
こんなものを描い  
ていますが許して  
ください。



ペンネーム  
**しゅま**

TwitterID:@9289schmaisen

PixivID:780320

5月病を患ってまし  
た…。  
精神のケアは大切に。



ペンネーム  
**とわみん**

TwitterID:@towamin

PixivID:

ヤンデレ吹雪ちゃ  
んの逆し描きた  
かったので参加出  
来てうれしいで  
す！ありがとうございます  
ございます！



ペンネーム  
**白海山**

TwitterID:@hakkai8

PixivID:73534

ノム◎) スパッツニスマ  
タのみ…なんという消化  
不良←



ペンネーム

まてつ

TwitterID:@mate\_tsu

PixivID:1208597

DC並の性欲モンスター吹雪型概念で射精



ペンネーム

一条和城

TwitterID:@ichijou\_kazuki

PixivID:

前はやけに重苦しいのになってしまったので頭空っぽな感じにしました。  
**ロリアナル!**



ペンネーム

ておどーる

TwitterID:@TDitheod

PixivID:1018352

ひびきちゃんにころされたい



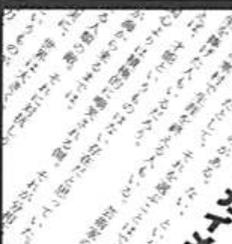
ペンネーム

シミヤ

TwitterID:MI8kai

PixivID:

ドスケベな朝潮ちゃんに限界まで搾り取られたい。



ペンネーム

烏丸 蒼一

TwitterID:karasumasouichi

PixivID:134759

駆逐艦と少年提督で逆し。違法性のかけらもないな!



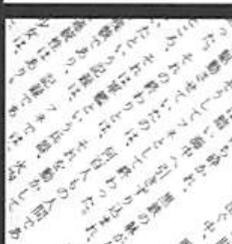
ペンネーム

初瀬川みそら

TwitterID:@HS\_Misora

PixivID:7271334

今回も死にネタになりました。申し訳ありません



ペンネーム

灰鉄蝸

TwitterID:@kaigoat

PixivID:

初参加です。性癖の複雑骨折が明らかになりました。

とてもつらい。



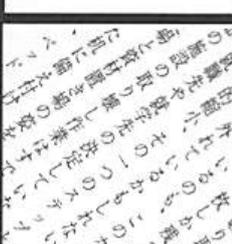
ペンネーム

伊川清三

TwitterID:@s\_igawa

PixivID:12771792

初参加です。神風ちゃんによる純愛逆しでした。



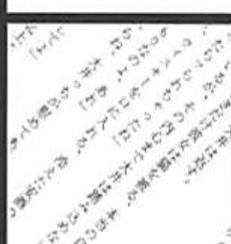
ペンネーム

ターレット  
ファイター

TwitterID:BoultonpaulP92

PixivID:5872196

スケベな話は書くのも読むのも好きですが、いかんせん難しい。五月雨はいろいろと確信犯だと思えるとはかどる。あと入れ歯外せる女の子はいいぞ。



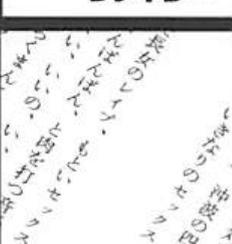
ペンネーム

白金桜花

TwitterID:@YamanekoOuka

PixivID:

陽炎ちゃん  
のNLえっ  
ちもっと増  
えて。



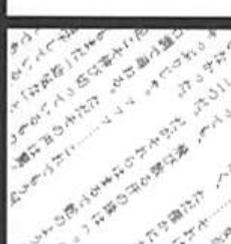
ペンネーム

かさぎ修羅

TwitterID:@kasagishura

PixivID:

マフィア YGM に提督を取られた陽炎組はチャカだヤッパだと突撃をかける。一進一退の攻防、泥沼の戦線に決着が着くのか。次回「吹雪団、参戦」なおキヨちゃんは戦艦になれませんでした。(えー



ペンネーム

大渡鴉

TwitterID:@oowatarikarasu

PixivID:817674

主催に寿司屋で「今度やったら……わかつてるの？」って目が笑ってない笑顔で釘を刺されたので初号機並にガッチガチに拘束したらこうなったんですが……なんだろう！皆暴走してるじゃん!!!ずるい!!!

補注:君は守ってくれてよかったけど

TwitterID:@ikutana  
PixivID:279510

男の娘が尻を犯されるのはロマンだ。メスイキするのは神の奇跡。

ペンネーム  
いくた☆なお

TwitterID:@MIBkai  
PixivID:262812

駆逐艦逆レイブ……  
いったい誰が  
主宰なんだ……。

ペンネーム  
小銃讓二 / MIB

※主宰です

TwitterID:@tyokorata  
PixivID:886152

二回目参加です。  
神風による羽黒レイブです

ペンネーム  
ちよこらーた

TwitterID:@boneofjellyfish  
PixivID:15940569

松風と首絞  
めックスの  
会々員募集  
中です。

ペンネーム  
奇くらげ

TwitterID:@silverflower  
PixivID:84684

第二弾にも参加させていただきました。荒潮さんは、何ともいえない不思議な魅力があると思います。その魅力が出せていければ嬉しいです。

ペンネーム  
辰田 信彦

TwitterID:@takasaka393  
PixivID:

安心のこじらせ

ペンネーム  
高坂流

編注：やってくれた暗……

TwitterID:@yuukisisin  
PixivID:84684

ああ…  
セカンドレイ  
プって…  
そういう…

ペンネーム  
結城私心



ペンネーム  
結城私心

TwitterID:@yuukisisin  
PixivID:84684

ああ…  
セカンドレイ  
プって…  
そういう…

ペンネーム  
結城私心

駆逐艦逆レイプ合同2 再犯

発行日 二〇一七年〇八月十一日 初版発行

発行 駆逐艦逆レ被害者同友会

合同主催 駆逐艦逆レ被害者同友会会長

編集 小藪護治 / MIB

連絡先 anubisu\_ex@hotmail.com

表紙 にくしよ

印刷 有限会社ねこのしっぽ

原作 艦隊これくしょん 艦これ

DMM.com / KADOKAWA GAMES

本書は右記原作の二次的創作物です。

本書の無断複製・複写・転載等を固く禁じます。

**執筆者一覧(掲載順・敬称略)**

**にくしよ(表紙)**

**白海山**

**wa**

**\*つかさすすむ**

**月猫**

**まてつ**

**クールナイツ**

**\*安田かつのり**

**maktak**

**\*ししやもじろう**

**ゆのか雅愁**

**一条和城**

**ししやもじろう**

**ておどーる**

**木ノ下ツユキ**

**シミヤ**

**ラリアット**

**烏丸蒼一**

**つかさすすむ**

**初瀬川みそら**

**安田かつのり**

**灰鉄蝸**

**琉璃ららこ**

**伊川清三**

**丑**

**ターレットファイター**

**しなま**

**白金桜花**

**リリスラウダ**

**かさぎ修羅**

**めんていやくな**

**大渡鴉**

**浜原義雄**

**いくた☆なお**

**\*ゆのか雅愁**

**小薮讓治/MIB**

**\*月猫**

**ちよこらーた**

**イエクオ**

**奇くらげ**

**ヒダカメダカH型**

**辰田信彦**

**零狸**

**高坂流**

**\*ラリアット**

**結城私心**

**まゆら。**

**しゅま**

**とわみん**